

博士学位請求論文

「つける」とその関連語の語彙ネットワークに関する研究
——中国語母語話者の日本語多義語習得支援に役立つ分析を目指して

2018年 6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

李 淼

目次

第1章 序章

1.1 研究動機と研究目的	7
1.2 研究内容と研究課題	8
1.3 研究方法	9
1.4 本研究の内容と構成	10

第2章 予備調査—中国語母語話者上級学習者の多義語習得の現状

2.1 調査の目的および調査対象	11
2.2 調査内容と方法	11
2.3 調査結果	12
2.3.1 質問 [1] の結果	12
2.3.2 質問 [2] の結果	14
2.3.3 質問 [3] の結果	16
2.4 考察	20
2.4.1 質問 [1] の結果に対する考察	20
2.4.2 質問 [2] の結果に対する考察	23
2.4.3 質問 [3] の結果に対する考察	25
2.4.4 まとめ	27

第3章 先行研究の概観と本研究の位置付け

3.1 日本語の多義語研究	29
3.1.1 国広哲弥の多義語研究	29
3.1.1.1 多義語とは	29
3.1.1.2 意義素と意義素論における多義の派生	30
3.1.1.3 現象素と現象素論における多義の派生	32
3.1.2 森田良行の多義語研究	34
3.1.3 田中茂範の多義語研究	35
3.1.4 認知意味論的な多義語研究	37
3.1.4.1 プロトタイプ理論	38
3.1.4.2 個別義の派生	39
3.1.4.3 多義語の多義構造	44
3.2 第二言語習得論における多義語習得	46
3.2.1 多義語を対象とした語彙習得研究の課題	46
3.2.2 多義語の習得研究	47

3.2.2.1 多義語習得におけるプロトタイプ、スキーマとネットワークモデルの応用	47
3.2.2.2 多義語習得におけるコアの応用	49
3.2.2.3 多義語習得におけるコロケーションの応用	51
3.3 本研究の位置付け	53
第4章 「つける」の習得過程に対する縦断的調査	
4.1 調査の概要説明	56
4.2 研究課題	57
4.3 調査方法と調査内容	58
4.4 予備調査としての教科書調査	59
4.5 「つける」の習得過程に対する縦断的調査	62
4.5.1 授業観察	62
4.5.1.1 時間順での授業記録	63
4.5.1.2 まとめ	69
4.5.2 小テスト調査	69
4.5.2.1 小テストⅠ	70
4.5.2.2 小テストⅡ	74
4.5.3 総合テスト調査	76
4.5.3.1 総合テスト調査Ⅰ	76
4.5.3.1.1 調査の目的と内容	76
4.5.3.1.2 調査結果および考察	77
4.5.3.1.3 まとめ	82
4.5.3.2 総合テスト調査Ⅱ	83
4.5.3.2.1 調査の目的と内容	83
4.5.3.2.2 調査結果および考察	83
4.5.3.2.3 まとめ	89
4.5.3.3 総合テスト調査Ⅲ	90
4.5.3.3.1 調査の目的と内容	90
4.5.3.3.2 調査結果および考察	90
4.5.3.3.3 まとめ	97
4.5.3.4 総合テスト調査のまとめ	97
4.5.4 調査協力者別の結果	98
4.5.4.1 Aの場合	99
4.5.4.2 Bの場合	101
4.5.4.3 Cの場合	104

4.5.4.4	Dの場合	106
4.5.4.5	Eの場合	108
4.5.4.6	Fの場合	110
4.5.4.7	まとめ	112
4.6	まとめ	113
第5章 「つける」とその関連語の意味分析		
――語彙習得支援に役立つ多義語分析を目指して		117
5.1	はじめに	117
5.2	辞典・辞書・コーパスにおける「つける」の記述	119
5.2.1	各辞典の多義語の扱いと語義項目数、配列の特色、記述の問題点	119
5.2.2	国立国語研究所の『基本動詞ハンドブック』の記述について	123
5.2.3	「つける」の表記	124
5.2.4	学習者のニーズに答えられる記述の方針	125
5.3	コロケーション研究による文型「BにAをつける」の認定	126
5.3.1	コロケーション研究の必要性と可能性	126
5.3.2	「Aをつける」の使用実態	127
5.3.3	「Bにつける」の使用実態	134
5.3.4	総合考察とコーパスの限界	141
5.3.4.1	総合考察	141
5.3.4.2	コーパスの限界	142
5.4	「つける」の意味分析	143
5.4.1	「つける」のプロトタイプ	143
5.4.2	「つける」の多義派生	148
5.5	「つける」の関連語の意味分析	175
5.5.1	「つける」の生産性グループ	177
5.5.1.1	複合動詞の概説	177
5.5.1.2	語彙的複合動詞「つけ～」	178
5.5.1.3	統語的複合動詞「つけ～」	181
5.5.1.4	語彙的複合動詞「～つける」	183
5.5.1.5	統語的複合動詞「～つける」	192
5.5.1.6	「接頭辞+つける」の語例	197
5.5.1.7	一語化した語例	198
5.5.1.8	「名詞/形容詞/形容動詞+づける」の語例	200
5.5.1.9	複合動詞のまとめ	203
5.5.1.10	複合名詞	204

5.5.1.10.1	複合名詞の分類.....	206
5.5.1.10.2	複合名詞のまとめ.....	210
5.5.2	異質性グループ.....	211
5.5.2.1	「つける」の類義語.....	211
5.5.2.1.1	「つける」と「かぶる」「きる」「はく」.....	214
5.5.2.1.2	「つける」と「かく」「しるす」.....	217
5.5.2.1.3	「つける」と「もやす」「ともす」.....	218
5.5.2.1.4	「つける」と「かける」.....	220
5.5.2.2	「つける」の反義語.....	221
5.5.2.2.1	「つける」と「外す」.....	222
5.5.2.2.2	「つける」と「落とす」.....	223
5.5.2.2.3	「つける」と「消す」.....	224
5.5.2.3	「つける」と「つく」.....	226
5.5.3	「つける」の関連語のまとめ.....	228
5.6	「BにAをつける」の日中対照.....	229
5.7	学習者に提示する多義語「つける」の語彙ネットワーク.....	232
第6章 終章 本研究の要約と今後の課題		
6.1	各章のまとめ.....	247
6.2	総合的考察.....	252
6.3	本研究の限界と今後の課題.....	253
	注.....	255
	参考文献.....	259
	辞書.....	259
付録		
資料1	予備調査としてのアンケート調査.....	264
資料2	予備調査の結果.....	265
資料3	授業記録.....	273
資料4	小テスト（Ⅰ）のテスト用紙.....	288
資料5	小テスト（Ⅱ）のテスト用紙.....	289
資料6	総合テスト（Ⅰ）の調査用紙.....	290
資料7	総合テスト（Ⅰ）のフォローアップインタビューのデータ.....	291
資料8	総合テスト（Ⅱ）の調査用紙.....	294
資料9	総合テスト（Ⅱ）の結果（「だす」、「かける」、「とる」）.....	296
資料10	総合テスト（Ⅲ）の調査用紙.....	297
資料11	総合テスト（Ⅲ）の結果.....	299

資料 12 辞書・辞典による「つける」の記述.....	301
-----------------------------	-----

図目次

図 2-1 多義語が難しいかどうかに対する回答.....	12
図 2-2 多義語が難しいと感じる理由.....	14
図 2-3 多義語の学習方法.....	16
図 2-4 学習困難な語の分布図.....	17
図 3-1 「はいる」の現象素(国広(1997: 182)による).....	32
図 3-2 語意味論のカテゴリー／イグゼンプラー・モデル(田中(1987: 127)による).....	35
図 3-3 拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル.....	45
図 3-4 コア抽出のイメージ図(田中(2004:5)による).....	50
図 4-1 総合テスト調査ⅡにおけるEの回答.....	87
図 5-1 「付着」の「つける」の図式.....	144
図 5-2 「接合」の「つける」の図式.....	145
図 5-3 「浸透」の「つける」の図式.....	145
図 5-4 「付着」「接合」「浸透」の「つける」の関係図.....	147
図 5-5 「付着」と「接触スキーマ」に基づく拡張義ネットワーク.....	148
図 5-6 「一時付着」の「つける」の図式.....	164
図 5-7 「接合」と「付着」の「つける」のネットワーク図.....	166
図 5-8 「浸透」と「付着」の「つける」のネットワーク図.....	167
図 5-9 「付着」と「接近スキーマ」に基づく拡張義ネットワーク.....	169
図 5-10 「つける」の多義ネットワーク図.....	174
図 5-11 学習者に提示する「つける」のネットワーク図.....	233

表目次

表 2-1 質問 [3] の (1) の結果.....	16
表 2-2 「上がる」を選んだ理由とその調査協力者.....	18
表 2-3 「付ける」を選んだ理由とその調査協力者.....	18
表 2-4 質問 [3] の (2) の結果.....	19
表 3-1 メタファーとメトニミーの相違点.....	43
表 4-1 縦断的研究の調査協力者.....	56
表 4-2 調査協力者が利用する教科書に出現した「つける」とその関連語.....	60
表 4-3 教科書に出現する用法と出現数.....	61
表 4-4 慣用表現とその出現数.....	61
表 4-5 各小テストの形式と内容.....	69
表 4-6 調査協力者 6 名の「つける」に対する回答.....	71

表 4-7	調査協力者の小テストⅡの回答の一部	74
表 4-8	総合テスト調査Ⅰの結果(問題①-③)	77
表 4-9	総合テスト調査Ⅰの結果(問題5)	79
表 4-10	総合テスト調査ⅡにおけるAの回答	84
表 4-11	総合テスト調査ⅡにおけるBの回答	85
表 4-12	総合テスト調査ⅡにおけるCの回答	85
表 4-13	総合テスト調査ⅡにおけるDの回答	86
表 4-14	総合テスト調査ⅡにおけるFの回答	88
表 4-15	総合テスト調査Ⅲの「空所補充」の「つける」に関わる項目	90
表 4-16	総合テスト調査Ⅲにおける「空所補充」の結果の一部	91
表 4-17	「つける」を間違えた問題	91
表 4-18	総合テスト調査Ⅲにおける問題2の「つける」に関わる項目	93
表 4-19	総合テスト調査Ⅲ 問題3の「つける」に関わる項目	95
表 4-20	調査協力者の回答の正誤	95
表 4-21	Aの調査結果のまとめ	99
表 4-22	Bの調査結果のまとめ	101
表 4-23	Cの調査結果のまとめ	104
表 4-24	Dの調査結果のまとめ	106
表 4-25	Eの調査結果のまとめ	108
表 4-26	Fの調査結果のまとめ	110
表 5-1	国語辞典における「つける」の見出し語と意味区分	118
表 5-2	NLBによる「Aをつける」の使用実態	127
表 5-3	NLBによる「Aをつける」の共起語についての分類	129
表 5-4	NLBによる「Bにつける」の使用実態	133
表 5-5	NLBによる「Bにつける」の共起語についての分類	135
表 5-6	(11)の「つける」	146
表 5-7	「名詞/形容詞/形容動詞+づける」の語例	200
表 5-8	「つける」に関わる複合名詞の型とその語例	206
表 5-9	『類語』による「つける」の意味分野とその類義語	212
表 5-10	「つける」の類義語	213
表 5-11	「つける」と「かく」「しるす」の比較	216
表 5-12	「つける」の反義語	220
表 5-13	(11)における「つける」コロケーションの中国語訳	228

第1章 序章

1.1 研究動機と研究目的

「言語研究の究極の目標は意味である」（国広 1982: 3）と言われるように、言語研究においては、意味ほど重要なものはないと言えよう。他方、「言葉の意味の研究は、音韻・形態・文法を中心とする言葉の形式的な側面の研究と比べて明示的な分析が困難である」（山梨 2012: iv）と指摘されているとおり、意味研究はかなり難しいものである。とはいえ、語彙の意味に対する検討は絶えず続けられている。その語彙の意味研究の中でも、多義語の分析は大きな問題であり、多くの研究が行われてきた。

日本語の基礎語彙である基本動詞を多義の事例として挙げ、意味分析を行う先行研究が多数ある（国広（1982、1997、2006）、国広編（1982）、柴田編（1976、1979）、森田（1989）、宮島（1972）など）。多義語の意味用法に関する詳細な記述の中には、認知意味論の枠組みにおいて、具体的な多義語の語彙項目を記述し、その意味構造を示した研究も少なくない（森山（2006、2011）、松田（2004）、田中（1996）、鈴木（2003）、高橋（2003）、白石・松田（2007、2014）など）。

また、第二言語習得の立場から多義語の習得は困難であることについても、多くの研究者が論じている（田中（2004）、文（2013）、杉村・赤堀・楠（1998）、松田（2000）など）。それゆえ、第二言語学習者の多義語習得をいかに支援するかは日本語教育に関わる1つの課題である。しかしながら、日本語教育の現状から言えば、いかに詳しい説明をし、用例を通して多義語の意味用法を教えたとしても、第二言語学習者はこれらの多義語の意味がなかなか身に付かない。これまで行われてきた詳細な意味記述は、母語話者、あるいは熟達した学習者にとっては分かりやすいものであっても、多くの学習者にとってはこれらの意味を暗記しなければならないので、習得に多くの時間と労力が必要である。

では、学習者に理解しやすく、かつ容易に覚えられて、かつ産出の支援ができる意味記述とはどのようなものだろうか。この点を考えるには、学習者はどのように多義語を学習し、意味を推測・理解しようとしているか、また、どのような側面に習得困難を感じているかを考慮する必要がある。筆者は自分の教室での指導体験を振り返って、また、学習者の日本語の多義語の習得が進まないことなどから、多義語の指導の改善を考えるようになった。

そこで、本研究では、中国語を母語とした学習者が日本語の多義語をどのように習得していくのか、多義語の個々の意味を習得するとき、どのように扱っているのかなどを究明したうえで、教育現場に生かせる多義語分析のあり方を探ることにする。本研究における実証的な知見は、多義語の学習法、指導法を検討する一助となるだろう。

1.2 研究内容と研究課題

本研究は、中国語母語話者学習者の日本語多義語の習得とその意味記述に関する研究であり、それらの研究を踏まえ、多義語の習得支援に役立つ記述の手法と多義語の語彙ネットワークを提案しようとするものである。本研究で取り上げる「つける」は、中国語母語話者上級学習者を対象としたニーズ調査によって認定された語であり、その多義性ゆえに、学習者から習得が困難であると報告された語である。

学習者は多義語「つける」をどのように学習しているか、学習者のこの多義語に対する理解の発展はどうなっているか、どのような学習ストラテジーを選択して運用しているか、母語転移が生じるかなどを究明するには、学習者に対する妥当性の高い習得研究が不可欠である。したがって、本研究では「つける」の習得過程に対する縦断的な研究を実施する。学習者のニーズが分かり、習得研究の成果に基づいてこそ、学習者の習得支援に役立つ多義語分析ができると考えるからである。

習得研究の結果を踏まえ、多義語「つける」を記述する方針を定め、それに応じて「つける」の意味分析を行う。くわえて、カテゴリー化のメカニズムを応用し、初級、中級の段階で多義語の存在および語義間の連続性を意識させる必要がある。そして、日本語を学習していくにつれて、学習者が自律的に多義語の各意味をカテゴリー化する学習への支援も必要とされる。そこで、本研究では、拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデルを用いて分析を行うことにする。そして、多義語の意味ネットワークは、その関連語の分析にも使えるので、多義語とその関連語の意味を記述し、その裏付けを得たうえで、学習者（教育現場）のニーズに応じて意味用法を抽出し、学習者がそれらを使えるようになるための道標を示す。

要約すれば、本研究では、学習者の多義語学習・習得に対する調査を行ったうえで、「つける」とその関連語に着目し、それらの意味を明確に記述する。それによって、学習者のニーズに応えた多義語の語彙ネットワークモデルを作り出す。本研究では、学習者のニーズに応えられ、中国語母語話者学習者の学習を支援できる多義語分析を試みる。本研究は、中国語母語話者学習者の多義語の習得研究であり、その支援への提案をするための多義語の意味研究でもある。具体的な研究課題は、以下の5つである。

- ①中国語を母語とする学習者に対する意識調査（ニーズ調査）を行い、多義語学習の現状や問題点、学習困難な語とその理由などを調査する。事例研究の語を定める。
- ②学習者に対して縦断的な調査を行い、特定の多義語の学習・習得プロセスを考察し、多義語を記述する方針を定める。
- ③学習者のための多義語分析を行う。新しい意味を発見するのではなく、既存の意味をどう構造化していき、意味関係を明確に示すのかを目的とする。そして、語の意味を「どのような文脈でどう使うのか」へと記述の重点を転換していく。また、語の機能を分かるには、それを支える多様な共起表現が必要となるため、それらも併せて示す。このようにして、表現の理解と産出を助ける多義語記述を目指す。

④多義語とそのさまざまな関連語との連続性を体系的に示す。

⑤学習者の母語を十分に考慮・利用し、活用させる分析を行う。中国語母語話者学習者の学習・習得を支援できる多義語の語彙ネットワークを構築する。

1.3 研究方法

本研究では、中国語母語話者学習者の多義語の習得状況を把握するために、まず 89 名の日本語上級学習者に対し、アンケート調査の形で意識調査を実施する。調査参加者は、中国の某大学で日本語・日本文化、日中翻訳通訳を専攻する中国人大学院生である。日本語の熟達度の高い上級学習者でも、多義語習得の難関に直面しており、これを突破しようとしているものと想定する。この調査を通して、多義語の学習・習得の状況と学習者のニーズを究明する。また、学習困難な語を学習者自身に判断させ、縦断的な習得調査と意味記述の事例研究の対象（最終的に「つける」に決定）を選出する。

意識調査の結果を踏まえ、学習者の「つける」の習得プロセスを把握するために縦断的な習得調査を行う。縦断的調査では、日本語を学習し始めたばかりの中国人大学生 6 名を対象とし、約 2 年間の調査を行う。この 2 年間においては、筆者は授業実践者でありつつ、教科書調査、授業観察、インタビュー、テスト調査など多くの調査方法を統合して利用し、学習者の「つける」の学習と習得状況を検討する。縦断的調査を行うことで、当該語「つける」の習得の実態が精密に考察できると考える。

「つける」とその関連語の意味分析は、辞書・辞典に対する調査から始める。学習者の立場からそれぞれの欠点を述べる。その次に、意味研究におけるコーパスとコロケーションを利用する可能性と有効性を述べ、「つける」の共起語情報をコーパス検索のデータに基づいて検討する。コーパスには限界がありつつも、コーパスから得たコロケーションの出現頻度についての情報は、語彙の記述を変えることができると考える。

続いて、「つける」の意味記述を行う。「つける」の意味記述は認知意味論の枠組みで行い、コロケーションの定型文「B に A をつける」と実例を用いて分析する。「つける」のプロトタイプ的な意味を認定したうえで、メタファーやメトニミーなどの意味拡張の種類に基づいて派生義を詳しく検討し、「つける」の意味間の連続性を記述の重点に置き、「つける」の多義ネットワークを構築する。

ネットワークモデルは、多義語の意味構造の構築だけではなく、その関連語の記述にも援用できる。中国語母語話者学習者のための多義語研究を目指し、「つける」の語彙ネットワークに必要とされる複合動詞、複合名詞、類義語、反義語、自動詞「つく」などの関連語についても記述する。また、コロケーション「B に A をつける」と中国語との対照も加え、考察を深める。「つける」の関連語を記述する際は、「つける」との意味上の連続性を手がかりにする。最後に、学習者のための「つける」とその関連語の語彙ネットワークを構築する。この語彙ネットワークは、学習者のニーズのもとに定めた記述方針に従うものであり、学習者の「つける」の習得支援に役立つモデルであることが期待される。

1.4 本研究の内容と構成

本研究には、主に中国語を母語とする学習者に対する多義語についての習得調査、「つける」とその関連語の語彙ネットワークの構築という2つの内容があり、具体的には6章で構成されている。

序章では、本研究の動機、目的、研究内容、研究課題と研究方法を述べる。第2章は、研究の予備調査としての意識調査である。中国の某大学で日本語・日本文化、日中翻訳通訳を専攻する中国人民大学院生89名を対象としたアンケートを行う。調査では、多義語学習の困難度、学習の方略、多義動詞に対する認識についての項目を設けて、学習者の多義語の学習・習得現状を把握しようとする。また、調査結果に基づいて、事例研究の研究対象を定める。

続いて、第3章では、まず先行研究をまとめ、多義語の定義を述べる。また、多義語の分析方法をめぐって、これまでになされた様々な提案の中、国広哲弥、森田良行、田中茂範の研究を代表例として挙げ、比較を試みる。また、認知言語学における多義語研究の課題と研究方法を列挙し、本研究に関係する理論について述べる。さらに、第二言語習得論の先行研究についての検討では、多義語を対象とした語彙習得研究の課題を示した上で、多義語の習得研究におけるプロトタイプ・スキーマとネットワークモデル、コア、コロケーションの応用について考察した。最後に先行研究における本研究の位置づけを明示する。

第4章では、縦断的な調査方法を用いて、中国語母語話者学習者の「つける」の習得過程を観察し、考察を試みる。まず、調査協力者の使っている日本語の教科書調査を行う。その結果を踏まえ、6名の大学生日本語学習者を対象とし、縦断的な調査を進める。具体的には、全体の調査期間は約2年間（2014年9月～2016年6月）で、授業の追跡調査、テスト調査、学習意識調査、インタビュー調査といった多様なアプローチによる質的調査を組み合わせ、学習者の「つける」の習得プロセスを調べる。この縦断的な習得調査を通して、学習者の多義語「つける」に対する理解の発展、認知プロセス、学習ストラテジーの選択と運用、母語転移のプロセスなどを確認できるものと考ええる。

第4章の調査結果を踏まえ、それらについての考察を根拠に、第5章では、「つける」とその関連語の意味記述を行い、語彙習得支援の役に立つ多義語分析を目指す。認知言語学の理論の枠組みで、コーパスによるコロケーションや実例などを抽出し、「つける」の多義ネットワークを作り出す。また、「つける」の関連語に属する複合動詞、複合名詞、類義語、反義語、自動詞「つく」などについて、「つける」の意味と関連付けつつ、記述を試みる。さらに、中国語母語話者独特な学習ニーズに応じて、定型文「BにAをつける」と中国語との対照も検討する。最後に、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築する。

終章では、習得調査と意味分析の結果をまとめ、総合的な考察を行う。また、本研究の調査や分析などについての反省や今後の課題を示す。

第2章 予備調査——中国語母語話者上級学習者の多義語習得の現状

2.1 調査の目的および調査対象

中国語母語話者学習者を調査協力者とし、多義語の習得についてアンケート調査を行うことにする¹。調査の目的は、中国語を母語とする日本語学習者の多義語習得、特に多義動詞の習得状況を把握することと、学習のストラテジーを調査し、その問題点を発見すること、および多義語意味記述の事例研究の語を選出することである。今回は、中国の某大学で日本語・日本文化、日中翻訳通訳を専攻する中国人大学院生 89 名を対象にして調査を行う。調査協力者の日本語学習歴は、4 年以上 5 年未満が 59 名であり、5 年以上が 24 名である。また、4 年以下が 2 名である。残った 4 名は学習歴を記入していない。そして、調査協力者は、ほとんど日本語能力試験 N1 合格者である。

2.2 調査内容と方法

調査対象にアンケート用紙を配布し、調査を行う²。本調査においては、次のような質問を設けた。

- [1] 多義語の学習が難しいかどうか、多義語のどのような側面が難しいと感じているのか。
- [2] 多義語をどうやって勉強してきたのか。
- [3] (1) 例示した基本動詞のうち、どれがもっとも困難だと思うのか、そしてその理由は何か。
(2) どんな動詞が難しいと考えているか。

ニーズ調査でもあるこの調査は、上記のとおり、質問 [1] は、多義語の学習に対するイメージ調査であり、学習者の多義語学習の難易度を把握するための項目である。質問 [2] は、多義語の学習法方略を聞く項目である。質問 [3] の (1) は、基本動詞をいくつか示し、学習困難な語を抽出させる項目である。これらを通して、多義語の習得研究と意味記述の事例研究の対象を決める。また、質問 [3] の (2) では、日本語の動詞を調査の目標に絞り、動詞学習の難点を探る。

アンケートの項目の回答については、日本語での記入を求めた。しかし、回収したアンケート用紙の中には、中国語、または若干不自然な日本語で書いた回答がある。それらは、筆者が簡潔な日本語でまとめ、添付資料 2 に示す。なお、調査協力者の回答を引用する場合は、訳文を引用することにする。

2.3 調査結果

この節では、アンケート調査の結果をまとめる。まず、調査協力者の [1] と [2] に対する回答を観察すると、多義語とはどのようなものなのかははっきりと分からない学習者が認められた。同音異義語と区別せずに考えている調査協力者 (CS29・40・66・73・74・75) もいれば、多義語を類義語だと考えている調査協力者 (CS21・27) もいた。また、多義語ではなく、複合動詞の難しい理由を書いた学習者 (CS63) もいた。こういった結果自体も、興味深いことであり、その具体的な考察は次節に譲る。質問 [1] と [2] の結果をまとめる際には、上記の 9 名の学習者の回答を無効にし、統計から外すこととする。一方、質問 [3] についての回答は、調査協力者全員が有効な回答をしたので、89 名の調査協力者の回答をすべて統計に入れることとした。

2.3.1 質問 [1] の結果

質問 [1] の「多義語が難しいかどうか」という問いに対する回答を示す。まず、「難しい」という答えが圧倒的に多く、73 名もいて、全体 (80 名) の 91.2% に達している。そのうち、明確に「難しい」と答えた者が 65 名で、約 65.8% を占めている。また、多義語のことを「曖昧語」と名づけて、「難しい」と答えた者が 1 名 (CS51) いた。さらに、「困る」と答えた者が 2 名 (CS10・25)、「理解しにくい」と答えた者が 2 名 (CS15・56)、「少し難しい」と答えた者が 4 名 (CS33・45・46・65) であった。

一方、「難しくない」と答えたのは 4 名 (CS12・23・35・42) いたが、調査協力者全体のわずか 4.5% である。そのほか、「最初は難しかったが、慣れてくると、難しくなくなる」と答えたのが 1 名いた。残った 3 名は記入しなかった (CS30・44・47)。このように、多くの上級学習者でも多義語が困難だ考えていることがデータから明らかになった。回答の対比図を図 2-1 で示す。

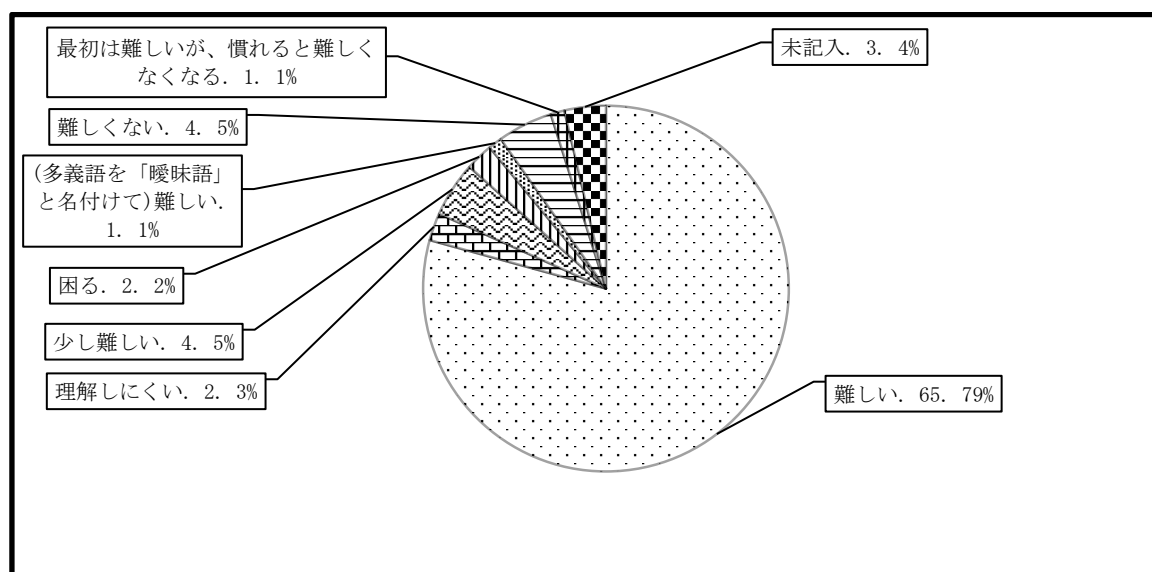


図 2-1 多義語が難しいかどうかに対する回答

次に、73名の、難しいと回答した調査協力者の挙げた理由を整理する。73名のうち、1名の調査協力者は、多義語が難しいと感じる理由を記入しなかった（CS20）。また、理由を1つのみ書いた学習者もいれば、いくつか書いた学習者もいた。それらの理由を要約すると、おおむね以下の7点にまとめられる。

- (1) ①意味が多い（派生義が多い）ので、すべて覚えるのは難しい。
- ②コンテキストによって意味が異なるので、使い方が分からない上に、理解できないこともある。
- ③意味間の関連性が分からず（意味間に関連性がないと思っている学習者もいる）、意味同士の区別も分からない。
- ④母語の影響で、多義語の表記にこだわり、中国語と同じ表記の語の意味で判断していいのかが分からない。また、翻訳の仕方に困難を感じる。
- ⑤あまり使わない意味は忘れやすい。
- ⑥コロケーションや慣用句などの使用法に困難を感じる。
- ⑦基本義は分かるものの、派生義は分からず、意味推測もできない。

続いて、それぞれの理由を書いた学習者数を示す。まず、多義語は意味が複数あり、覚えきれない、覚えられないという意味で、数のことで多義語が難しいと答えた調査協力者は37名いて、50.7%³を占めている。また、語義間の関係性、多義の構造に目を向け、意味間の関連性が分からない、また、各意味の区別が分からないので、学習の負担になると回答した調査協力者が18名いて、全体の24.7%である。

また、意味の使用頻度に焦点を当て、学習困難な理由を挙げた調査協力者がいた。4名の学習者が、普段よく使う意味は簡単であるのに対し、あまり使わない意味は身につけにくいという理由で多義語が難しいと述べた（CS13・52・60・85）。また、多義語の意味の典型度の度合いを意識し、基本義は習得しやすいのに対し、派生義は習得しにくいと述べた学習者が1名いる（CS28）。これらの学習者は多義語の基本義あるいは常用の意味は習得できるのに対し、ほかの意味は使いこなせないと考えている。さらに、多義語の生産性を意識し、コロケーションや慣用句などの習得が困難だと感じる学習者が3名いた（CS6・50・54）。

さらに、多義語の使う文脈・コンテキストに配慮し、どの場面でどの意味を使うか戸惑うと書いた調査協力者が合わせて21名もいて、全体の28.8%を占めている。また、母国語との比較という第二言語学習者の学習ストラテジーを多義語の学習に運用し、中国語の意味との比較や、表記、翻訳の仕方などを言及した調査協力者も7名いて（CS26・32・41・46・59・65・84）、全体の9.6%を占めている。これらの学習者は、多義語を学習する際、母語の知識をどう活かすかが分からない、あるいは、うまく活かさないことで難しく感じると述べた。調査協力者の多義語が難しいと感じる理由は図2-2で示す（縦軸は人

数である)。

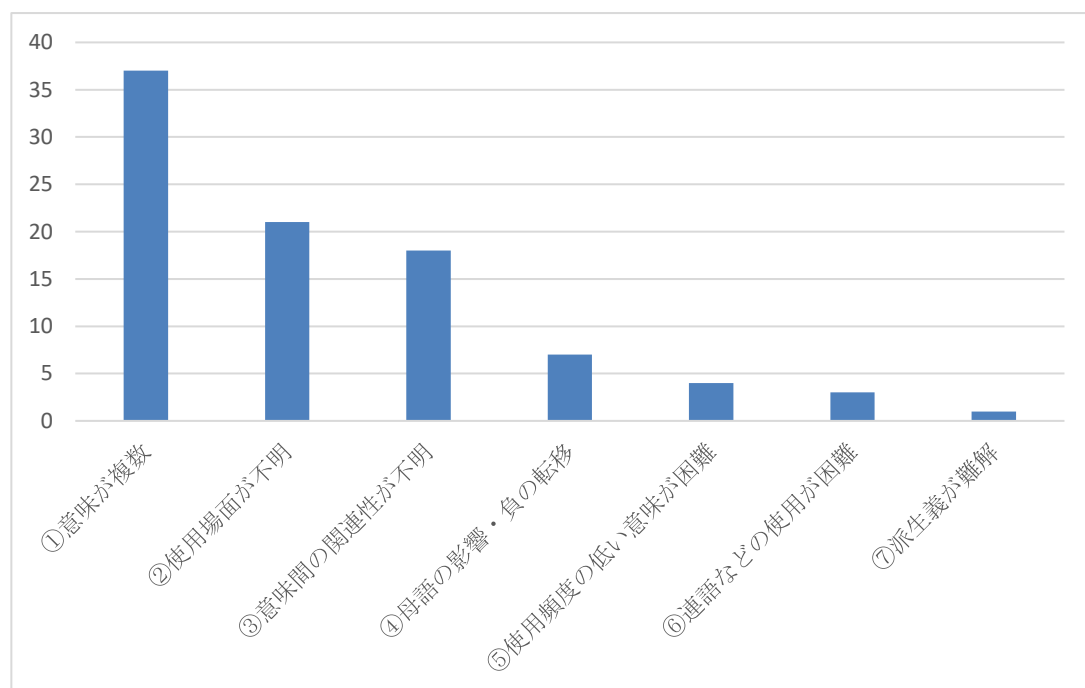


図 2-2 多義語が難しいと感じる理由

2.3.2 質問 [2] の結果

続いて、質問 [2] の結果をまとめる。前にも触れたように、質問 [2] は、中国語母語話者学習者の多義語の学習ストラテジーを調査する項目である。1 つの学習方法を挙げた学習者もいれば、いくつかの方法を列挙した学習者もいた⁴。では、具体的にそれぞれの学習方法の占める比率を示す。

まず、多義語を学習する媒介物から見ると、80 名のうち、22 名の調査協力者が明確に辞書を利用していると回答した。この学習方法が一番多く、全体の 27.5% を占めている。一方、参考書・試験問題集などを利用する調査協力者は 1 名しかおらず、わずか 1.3% である。また、日本のドラマ・映画や歌、新聞などを通して多義語の学習をしているのが 4 名いて、全員の 5% である。

また、複数の意味に対して、1 つ 1 つ覚えていく、または少しずつ積み重ねていくという調査協力者がそれぞれ 6 名と 1 名いて、合わせて全体の 8.8% である。他方、同時に 1 つの多義語の意味を辞書ですべて調べ出して整理し、できるだけすべて（多く）覚えてしまおうとする学習者が 9 名いて、11.3% を占めている。

さらに、基本義を先に覚えて、その次に派生義などを覚えていくという調査協力者が 4 名いた。重要な意味、または常用の意味を抽出し、それらを学習の重点に置くという学習者がそれぞれ 1 名いた。このように、多義語の意味の構造を認識し、多義語の意味の重要

度の度合いを意識しつつ、多義語の学習を進めるという調査協力者は合わせて6名いて、7.5%を占めている。また、ごくわずかであるものの、3名の学習者が多義語の諸意味を比較し、意味間の共通点・関連性を見出そうとするストラテジーをとっている(全体の3.8%)。

語彙学習の一般的な手段として、例文を通して多義語を学習するのが一番多く、20名もいて、25%である。その次に、文脈やコンテクストを通しての学習に言及したのが16名で、ドラマ・映画、新聞などの場面で覚えていく4名を加えて、同じく25%を占めている。その他、9名の学習者がコロケーションで学習するという方法を利用して、これが11.3%も占めている。また、多義語の関連語と考えられる反義語、上位語などを利用して覚えると答えた者が2名いて、2.5%である。

続いて、「見る・書く・聞く・読む・話す」活動の面から、多義語の学習法を述べた調査協力者の回答を統計する。映画やドラマなどを見る方法で多義語を学習する者が3名いて、3.8%である。また、語の意味をノートに書いたり、メモしたり、箇条書きに整理したりする方法や、自分で文を作る練習をして、産出を通して覚えることなどの書く方法を用いる学習者が合わせて8名いて、10%である。さらに、ニュースを聞く、文章を読む、実際にコミュニケーションして話すといった方法で学習している調査協力者がそれぞれ3名いて、それぞれ3.8%を占めている。

また、調査協力者の回答から、多義語の学習は学習者の負担になっていると見られた。暗記の方法で学習していると明確に述べた者が10名もいて、12.5%である。また、5名の学習者が繰り返して覚えていかなければならないと答え、これが6.3%を占めている。しかし、多義語の学習はそれほど大きな負担ではなくて、多くの単語を覚えているうちに、意味が自然に分かってきたと回答した者、多く使っているうちに、上手になったと答えた者も、それぞれ1名いた。この2名の学習者は、いずれも多義語を無意識のうちに習得できたと考え、母語話者の自然習得に類似している。

さらに、ごく少数でありながら、基本的な文法を通して学習する学習者が1名、また、中国語を通して学習するというのが1名いた。さらに、調査協力者のCS50は、意味の通時的な派生義に留意しながら学ぶ方法と、多義語の「文化背景」⁵に気を付けながら学習すると書いた。回答の分布図は、図2-3で示す(縦軸は人数である)。

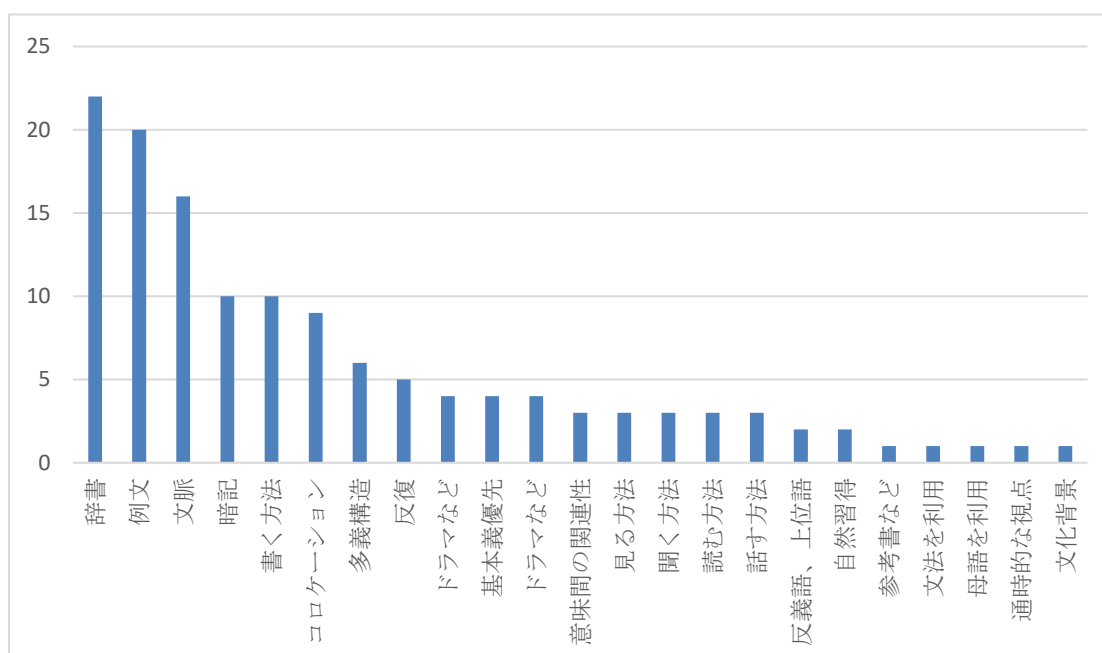


図 2-3 多義語の学習方法

以上で挙げた多義語の学習方法を見ると、その合理性はともかくとして、学習者が多義語の習得は難しいと思っていつつも、積極的に多義語の学習に取り組んでいることが分かった。一方、多義語の学習に戸惑い、いい方法が分からないという調査協力者、多義語の学習に取り組んだことがない、あるいは学習方法を考えていないという調査協力者、意味を1つ1つ覚える方法よりほかないと漠然とした回答をした調査協力者もいて、それぞれ1名、1名、2名であった。

2.3.3 質問 [3] の結果

学習者の学習困難な語を調査すると同時に、記述する価値のある語を選定するために、質問 [3] を設けた。質問 [3] の (1) の結果を表 2-1 にまとめる。なお、複数の語を選択した調査協力者がいたので、1名の調査協力者を2回以上挙げることもある。

表 2-1 質問 [3] の (1) の結果

学習困難な語	調査協力者数	調査協力者（合計 89 名）
上がる	47 名	CS2・3・4・8・9・10・11・13・14・18・19・22・29・30・32・33・36・37・38・40・41・42・43・44・46・48・49・50・53・58・59・60・62・65・66・67・68・69・72・73・74・76・77・86・87・88・89
付ける	42 名	CS1・8・12・15・17・20・21・23・24・25・26・27・28・34・35・36・37・38・39・43・44・48・53・54・55・56・57・60・66・68・70・71・73・74・75・77・80・82・83・85・88・89
取る	10 名	CS36・51・60・61・63・64・73・74・77・80
切る	10 名	CS24・33・36・38・46・68・73・77・78・83

込む	9 名	CS6・7・31・36・38・66・71・77・78
ある	7 名	CS16・37・52・69・79・81・84
できる	4 名	CS24・33・45・48
打つ	3 名	CS5・33・38
行く	2 名	CS11・47
走る	2 名	CS33・69
上げる	1 名	CS9
かける	1 名	CS15

また、選出された語の分布は、図 2-4 のようである（縦軸は人数である）。

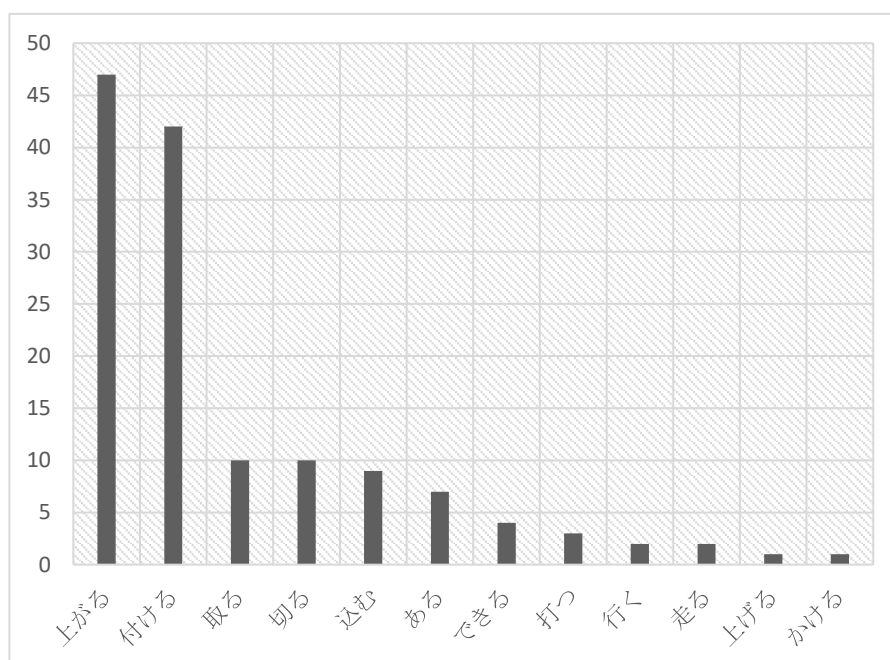


図 2-4 学習困難な語の分布図

このように、アンケートに 12 語を挙げたが、調査協力者は「飲む」と「思う」以外の 10 語を選択した。一方、「上げる」と「かける」は選択肢として設定されていなかったものの、その 2 語を書いた調査協力者がいるので、それらもまとめておいた。結果を見れば分かるように、「上がる」と「付ける」を選んだ学習者が圧倒的に多く、それぞれ全体の 52.8%と 47.2%を占めている。次に、この 2 語に絞って、それぞれを選択した理由をまとめる。

まず、「上がる」を選んだ 47 名の調査協力者の書いた理由を、表 2-2 に整理する。

表 2-2 「上がる」を選んだ理由とその調査協力者

理由	調査協力者数	調査協力者（合計 47 名）
意味が複数ある	27 名	CS3・4・8・13・18・22・33・36・38・41・42・44・46・49・53・58・62・62・67・68・69・74・76・77・87・88・89
用法が多くて、混乱する	6 名	CS14・42・44・49・53・62
複合動詞などの複合語の一部となれる	5 名	CS13・14・22・43・69
自他動詞の使い分けや用法が分からない	4 名	CS9・14・29・42
敬語の用法がある	3 名	CS13・14・50
連語や慣用句、共起表現は身につけにくい	3 名	CS29・49・60
意味間の関連性が分からない	2 名	CS18・72
抽象的な意味が多くある	2 名	CS13・86
派生義が覚えにくい	2 名	CS58・59
使われる場面が多く、把握できない	2 名	CS68・76
表現が複数ある	1 名	CS2
辞書に載っていない表現がある	1 名	CS 66
構造が複雑である	1 名	CS 3
分かりにくい意味がある	1 名	CS 19
基本義がよく分からない	1 名	CS 89
慣用表現が多い	1 名	CS 76
文脈によって意味が異なる	1 名	CS 29
状態が表わせる	1 名	CS 14
日常に使わない語、見慣れない語に属する	1 名	CS 32
訳すのが難しい	1 名	CS 46
使うのが難しい	1 名	CS 50
どんな意味があるか分からない	1 名	CS 48
類義語がある	1 名	CS 67
表記が多い	1 名	CS 73
同音異義語が多い	1 名	CS 73

続いて、「付ける」を選んだ理由とその調査協力者を表 2-3 に示す。

表 2-3 「付ける」を選んだ理由とその調査協力者

理由	調査協力者数	調査協力者（合計 42 名）
意味が複数ある	26 名	CS1・8・12・23・24・25・26・28・34・35・36・38・44・53・54・56・57・66・68・70・71・74・77・80・88・89
複合動詞などの複合語の一部となれる	11 名	CS17・21・27・35・43・55・66・70・71・83・85
用法が多くて、複雑である	6 名	CS 23・24・28・44・53・75
使う場面が多くて、よく分からない	5 名	CS 15・25・26・34・68
連語や共起表現がよく分からない	2 名	CS 15、60

表記が多い	2 名	CS 28、73
基本義が分かるが、時々使えない	1 名	CS 39
基本義がよく分からない	1 名	CS 89
抽象義が分からない	1 名	CS 56
意味間の関連性を見つけるのが難しい	1 名	CS 54
どんな意味があるか分からない	1 名	CS 48
意味が変化する	1 名	CS 55
同音異義語が多い	1 名	CS 73

表 2-2 と表 2-3 のとおり、「上がる」に 25 種の理由、「付ける」に 13 種の理由が挙げられている。この 2 語を選んだ理由にはもっとも多いのが「意味が多数ある」ことである。これは質問 [1] の結果と同様である。また、意味構造、使用場面、複合語、共起表現なども 2 語の難しい理由として述べられている。一方、「上がる」が「付ける」より多く挙げられた理由の中には、自他動詞に関わること、敬語として用いられること、翻訳の方法に戸惑うことなどがある。

問題 [3] の (2) のどんな動詞が難しいかという質問に対し、「多義動詞」と答えたのは 24 名⁶である。また、多義語でありながら、複合動詞の前項、あるいは後項にもなる動詞がもっとも難しいと答えたのは 4 名である。「複合動詞」と明確に答えたのは 24 名である。その次に、自他動詞、もしくは自動詞・他動詞のいずれかと答えたのは合わせて 17 名である。また、母語の影響を受けるために、あるいは、母語を生かせないために難しいと回答したのは、3 名 (CS8・28・31) である。さらに、授受動詞、動詞の使役形・受身形・使役受身形、瞬間動詞、自発動詞、動作動詞などの答えも少数あった。表 2-4 は質問 [3] の (2) の結果である

表 2-4 質問 [3] の (2) の結果

動詞の類	調査協力者数	調査協力者 (合計 89 名)
多義 (意味が多くある) 動詞	24 名	CS1・3・4・10・27・33・36・40・42・45・47・48・53・54・55・56・60・68・69・73・76・81・83・87
多義でありながら、意味同士に関連性がない (はっきりとしない・微妙な) 動詞	4 名	CS34・56・62・67
多義でありながら、諸意味にはそれぞれ異なる類義語がある動詞	1 名	CS21
多義でありながら、複合動詞 (の後項) にもなる動詞	2 名	CS39・71
複合動詞	21 名	CS7・13・19・22・30・38・41・51・54・57・58・59・61・65・69・70・74・75・79・83・86
複合動詞の前項、あるいは後項にもなる動詞、または両方ともなれる動詞	5 名	CS3・16・54・66・72
他動詞	2 名	CS2・11
自動詞	5 名	CS6・20・43・54・56

自他用法を兼ねて有する動詞	2 名	CS44・49
有対自他動詞	11 名	CS9・12・42・46・49・50・51・63・80・82・84
母語干渉が生じる動詞	3 名	CS8・28・31
動詞の使役受身形	2 名	CS32・50
使役と授受表現を組み合わせた動詞	1 名	CS 50
授受動詞	1 名	CS 5
一段・五段動詞	1 名	CS 28
一段動詞の特徴を持っている五段動詞	1 名	CS 72
類義の動詞	2 名	CS 29・55
瞬間動詞	1 名	CS 52
持続動詞と瞬間動詞	1 名	CS 64
使用範囲の広い動詞	1 名	CS 55
漢字が同じで、読み方が異なる動詞	1 名	CS 35
自発動詞	1 名	CS 54
動作動詞	1 名	CS 85
理解しにくい動詞	1 名	CS 88
抽象的な意味を持つ動詞	1 名	CS 89
読み方が覚えにくい動詞	2 名	CS 60・73
動詞の敬語表現	1 名	CS 43
特性の多い動詞	1 名	CS 14 ⁷
特別な動詞	1 名	CS 49
「つける」と「かける」のような動詞	1 名	CS 15
「つける」	1 名	CS 23
「切る」「する」「できる」など	1 名	CS 24
「行く」	1 名	CS 25
「付ける」「取る」	1 名	CS 26
形容動詞	2 名	CS 18・78
すべて難しい	2 名	CS 17・37

以上、アンケート調査の結果を項目別にまとめてきた。次節では、それぞれの項目の結果に対して考察を行う。

2.4 考察

この調査は、多義語の学習・習得についての意識調査である。質問 [1] と [2] は多義語という概念そのものを理解できてこそ答えられる問いである。しかしながら、多義語を同音異義語や類義語、そして複合動詞だと考えている調査協力者が 9 名もいた。このように多義語についての概念的な理解ができていない学習者もいたことから、一部の学習者は多義語の存在を完全に意識していない、または軽視、もしくは無視する傾向があると見られた。また、教科書における多義語の提示法、教師の指導法などにも問題があるかと想定する。続いて、各項目の結果に対して、考察を試みる。

2.4.1 質問 [1] の結果に対する考察

質問 [1] は、多義語の学習に対する意識を調査する項目であり、学習者の多義語の難易度に対する認識を調べる問いである。この問いに対して、調査協力者の回答は大きく 2 種類に分けられる。多義語が難しいと答えた調査協力者が圧倒的に多かったのに対し、難

しくないと答えた学習者も、少ないながら、4名いた。ここでは、まず、この4名の調査協力者の書いた「難しくない理由」を検討する。

「多義語はそんなに難しくない」と答えたCS42は、その理由として、「多義語は日本語学習の中にあまり触れられていないし、学習の中心でもない」と挙げた。実際には、多くの単語は多義語であり、学習の日々に触れていると言っても過言ではない。学習の中心ではないと回答したのは、多義語そのものに対する理解が不十分だからである。また、CS12は「難しくない」と答えたものの、「使うときはよく間違える」と書き加えた。よく間違えるのに、難しくないと思っているのは、多義語を重視していないためと考えられる。確かに、限られた授業の時間では、語彙より文法が重視されている。学習者のレベルに合わせた文法の指導はやりやすいのに対し、多義語の意味には典型度、重要度、常用度、難易度などの度合いの差があり、同時にすべての意味を学習者に提出するのは困難である。それで、語彙の学習、そして、多義語の学習を軽視する学習者が存在しているわけである。

他方、多くの調査協力者は多義語学習・習得の困難さを感じている。学習者の挙げた多義語の難しい理由から、学習者の多義語習得状況がある程度把握でき、学習の問題点が見られた。その理由について2.3.1では(1)の7点にまとめておいた。ここでは、これらの理由について考察を行う。

- (1) ①意味が多い（派生義が多い）ので、すべて覚えるのは難しい。
- ②コンテキストによって意味が異なるので、使い方が分からない上に、理解できないこともある。
- ③意味間の関連性が分からず（意味間に関連性がないと思っている学習者もいる）、意味同士の区別も分からない。
- ④母語の影響で、多義語の表記にこだわり、中国語と同じ表記の語の意味で判断していいのかが分からない。また、翻訳の仕方に困難を感じる。
- ⑤あまり使わない意味は忘れやすい。
- ⑥コロケーションや慣用句などの使用法に困難を感じる。
- ⑦基本義は分かるものの、派生義は分からず、意味推測もできない。

(2.3.1 (1) の再掲)

過半数の調査協力者は、意味が多くあることを多義語が学習困難な理由として挙げた。意味の多いことが学習の負担となったのは、学習者が多義語の意味間の関連性が分からないからである。(1)の①と③は因果関係にあり、切り離して考えてはいけない。意味間の関連性・連続性が分からないことで、多くの多義語が不完全な習得のままなのである。多義語の学習は無関係な意味の積み重ねではなく、関係のある意味を徐々に構造化していくプロセスであることが、学習者には意識されていない。あるいは、意識はしているものの、多数の意味を構造化していく方法が分からないという可能性もある。「多義語の意味間の区

別が分からない」(CS49)、「意味同士の関係は理解できない」(CS56)という回答、さらには、「多義語の意味同士は関連しない」(CS18)という回答すらあった。多義語は、意味が多くても、語義間の関連性が分かれば、1 つずつ覚えていかなくても習得できる。逆に言うと、関連性が分からなければ、意味を1 つずつ覚えていくほかないため、学習の負担となる。

また、(1) の⑦も、上記の①と③に関係する。多義語の意味には、典型度の度合いに差がある。基本的な意味もあれば、派生的な意味もある。そして、基本的な意味に近い派生義もあれば、一見あまり関係しない意味同士もある。すべての学習者がこれらを意識しているわけではない。または、授業で教わったことがないかもしれない。学習者は、基本義と派生義の関係、そして多義語の意味構造を十分に把握していないのが現状である。基本的な意味に基づき、派生義に対する推測を成功させるために、あるいは、せめてその成功率を高めさせるために、多義語の多義構造を提示するなど学習者への支援が必要とされる。

さらに、(1) の②と⑤は、使用の面から挙げられた理由である。学習者の立場からいうと、多義語を理解するのが難関であると同時に、産出はもっと難しく感じるとのことである。多義語を正確に用いることは、語の多数の意味から適切な意味を取り出し、ほかの語と共起させてコロケーションなどを成し、正しい形式で文あるいはコンテキストに入れて運用するプロセスである。これは多義語の意味を正しく理解したうえでの操作であり、学習者が避けられない受容から産出への段階でもある。

(1) の⑥のように、コロケーションや慣用句などの使用が困難だと述べた調査協力者もいる。多くの語は、ほかの語と共起関係を築いてはじめて、意味が明確になる。言ってみれば、多くの場合、語の意味は共起語に依存し、共起語によるものなのである。そこで、単語レベルの指導ではなく、文脈の中での意味推測を重視しつつ、共起語に焦点を当てる連語指導を取り入れるべきである。学習者が連語や慣用句の習得が難しいと考える理由にはいくつかあると考えられる。例えば、動詞が名詞と連語を成す場合、共起する名詞の性格によってその連語の使用範囲がどう決まるか、名詞に続く助詞は何を選択すべきか、出来上がった連語において動詞の意味に縮小・拡大・特定化が生じるがそのプロセスはどうなっているのかなどがすべて不明確であることがその理由として考えられる。慣用句はさらに難しい。特に、基本義から離れ、常用の意味から推測しにくい慣用表現は、学習者には習得しにくい。

(1) の④の母語の影響に関しては、ここでは2名の調査協力者の回答に絞って議論する。まずは、多義語の表記についての回答である。CS46は、「かける」の例を挙げている。「かける」には「欠ける」、「架ける」、「懸ける」、「賭ける」、「駆ける」などの表記がある。同協力者によれば、これらの語には相違点と共通点がどこにあるのかが分からず、そのため、理解と使用の際に、どのように区別するかを迷ってしまうという。また、「日本語の意味が中国語のそれと同じ形の語の意味とは同じかどうか分からない」(CS41)という回答からも分かるように、中国も漢字を使う国であるため、中国語母語話者学習者は日本語の漢字に

対して敏感であるために、日本語の漢字と中国語のと意味が近い場合は習得されやすい一方、漢字表記は同じものの、意味が異なる場合は習得の障害になる可能性が高い。同じ発音で多くの表記を持っている多義語の意味を、表記された漢字の意味で区別したいという気持ちは、中国語の漢字の影響を受けている中国語母語話者学習者には少なからずある。それゆえ、日本語と母国語の漢字のずれをどう埋めていくかは、中国語母語話者学習者にとっての難関である。そこに、負の転移が生じる可能性もあるので、母語からの負の転移を減らす対策を考えるべきである。

2.4.2 質問 [2] の結果に対する考察

前にも述べたように、質問 [2] は、中国語母語話者学習者の多義語学習のストラテジーを調査する項目である。この問いに対して、調査協力者は多くの面から回答をした。まず、多義語をどのルートを通して学習してきたかについては、「辞書を通して」という回答が圧倒的に多かった。また、「参考書、あるいはテレビや新聞のようなマスメディアを通して」と回答した調査協力者もいる。しかし、「教室で教科書を用いて」、または「教室で教師に教わって」のような回答はまったくなかった。教科書や教師などに言及した調査協力者が一人もいないところから見て、教室では多義語指導が行われていない、または少ないと想定される。

確かに、多くの教科書における語彙の提示は、その課の新出語に限られる。教師も、それに応じて新出語の意味を説明する。その語が多義を持っているにしても、その場ですべての意味を教えるわけにはいかない。もし、学習者が自力で辞書で調べての多義語学習がうまくできなければ、多義語習得には困難さを感じるに違いない。しかし、教室で多義語を学習できないのか、教師が多義語指導ができないのかは疑問である。とにかく、教材、教師からの支援が求められるであろう。

また、調査結果から分かるように、一部の学習者は、多義語の意味間には重要度または常用度の差があると認識している。そこで、基本的な意味から学習したり (CS4、70)、よく使う意味を先に覚えたり (CS72) するなどの方法を利用して多義語の学習を進めている。一方、多義語のすべての意味を区別せずに覚えなければならないと考える学習者も少なくない。そのため、辞書で語を調べ、例文を 1 つずつ確認し、できればすべて暗記していくといった学習法をとる学習者もいる。この点から、学習者は、多義語の意味を無差別にすべて覚えることを学習の目的にしていることが分かった。しかし、意味の重要度と常用度を考えずに、すべての意味を一律に扱う学習は必要なのだろうかと考え直すべきである。意味をすべて覚えるのではなく、むしろ常用の意味が使いこなせるような工夫をすべきであろう。

さらに、調査協力者の回答からは、辞書で多義語の意味を調べ、いったいどのような意味があるのか、意味の全体像を把握したいという学習意欲が伝わってきた。今回の調査結果によれば、辞書で調べて多義語を学ぶ方法で学習を進めている学習者は、かなり多くい

る。一般の辞書では、個別の意味用法は列挙されているものの、それらの意味の関連性などは示されていない。これでは、意味間の関連性を無視して学習を進めていくこととなり、学習者の負担となる学習法である。換言すれば、多義語の意味構造、基本義と派生義とのつながり、スキーマの存在を意識しながら学習していくべきである。

また、コロケーションや例文など、いわゆる「文脈」を利用して学習するという学習者が多いので、多義語の意味用法を把握するには、それを支える多様な共起表現が必要であるということは学習者も意識しているものと言える。学習者は、表現の産出を外国語学習の最終的な目標としていることが調査から分かった。また、多くの上級レベルの学習者は、多義語の意味そのものより、「どんな文脈でどう使うのか」へと学習の重点を移しつつあると見られた。さらに、産出できるように、意味を身に付ける方法として、コロケーションや例文で覚えることに、自分で文を作る練習などを加えて、産出を通して覚えるという学習者もいた。したがって、表現の産出を助けるような多義語の記述が必要とされる。

そのほか、日本語と中国語との関連性を見つけ、母語を通して学習を進めている学習者もいる (CS6)。母語と目標言語の共通点を見つけ、母語を生かして学習するのは望ましい。しかし、負の転移が生じる可能性もあるので、注意しなければならない。換言すれば、学習者がどのように母語の知識を利用すればいいかが問題なのである。

興味深いことに、多義語は自然に習得してきたと述べた学習者もいる (CS19)。確かに、母語話者にとって、多くの場合、語の意味は自然に習得できる。しかし、これが第二言語学習者にも通用するかどうかはさらなる立証をしなければならない。こういった検討は、本研究の目的と異なるので、別稿に譲る。ここでは、このような回答もあったことのみ示しておく。

他方、多義語を学習する方法が分からず、あるいは、いい方法が見つからずに、漠然とした方法、消極的な方法を取っている学習者もいる (CS76、78)。また、多義語が難しいと分かりつつ、出会った意味を覚えるのみで、多義語の学習には注意を払っていないという回答もあった (CS39)。意味を1つ1つ覚えていく (CS1、5) のは、学習法がないのに等しい。これに対して、すべての意味を同時に確認したり、整理したりして覚えようとする学習者もいる。このようなやり方は、積極的に対応したいという気持ちは伝わるものの、非常に学習の負担となる学習法である。

以上、調査協力者の多義語学習方法について検討してきた。上記の考察から見られるように、多くの学習者は、辞書を調べたり、文脈を利用したり、母語を通して学習したりして、積極的に多義語の学習に努力している。しかし、どの方法も万全とは言えず、それぞれ長所がある一方、短所もある。学習者の習得を支援するために、現行の辞書・辞典とは異なった多義語の提示法、学習者の理解と産出に役立つ文脈の選出、母語の正の転移を生かし、負の転移を防ぐ対策などを深く検討すべきである。また、教師が教室でやれる多義語指導は、語のすべての意味を提示することではなく、新出の意味と既習の意味の関連性を学習者に明示することであり、学習者が自力で意味の推測と多義構造の構築を行えるよ

うにすることへの支援である。したがって、学習者の多義語学習のメカニズムをもっと深く調査したうえで、学習の障害となる要素を洗い出し、学習者の習得に役立つ多義語の提示法と学習方法を示すべきである。

2.4.3 質問 [3] の結果に対する考察

質問 [3] は、多義語習得研究の事例研究の語を選出するために設定した問いである。学習困難な語であればこそ、検討する意義があると考ええる。質問 [3] の (1) に対して、「付ける」と答えた人数は 42 名⁸である。また、「上がる」を選んだのは 47 名であり、「付ける」を少し上回った。難しい語を選んだ理由は、まさに学習者の学習・習得の問題点であり、学習者のニーズでもある。質問 [2] の学習ストラテジーに対する調査結果からも分かったように、学習者は多くの方法で多義語の学習に取り組んでいるものの、まだ万全な学習方法が見つからず、多義語の学習に戸惑うところが多いと見られた。

では、質問 [3] の (1) の結果について、考察を試みる。まず、「上がる」を選んだ理由として、「意味が複数ある」、「抽象義が多い」、「敬語表現でもある」、「自動詞なので難しい」などが挙げられた。また、意味間の関連性が分からないことも理由として挙げられた。中国語では、自他動詞という分類がされていないので、中国語母語話者学習者にとって、自動詞が馴染みのない概念である。また、日本語教育の立場から言うと、敬語も学習者にとっての習得の難関である。このように、「上がる」には、意味に関わるさまざまな要素が含まれていることも学習困難な要因となる。

他方、「付ける」を選んだ理由には、「意味用法が多数ある」、「複合動詞の一部である」のほか、「表記が多種多様」、「基本義が分からない」などがある。ここで注目したいのは基本義が分からないという理由である。一般的には、動作動詞の場合、日本語と中国語においては、対応関係が見つかる。例えば、「打つ」と“打”、「行く」と“去”、「取る」と“取”、「食べる」と“吃”などが挙げられる。こうした対応関係が見つければ、学習者は安心する。反対に、見つからなければ、習得の糸口が見つからないに等しいので、不安になる。特に、初級段階の学習者には、このような傾向が強いと見られる。しかし、「付ける」は派生義どころか、基本義でさえ、中国語母語話者に理解が共有されていないようである。「付ける」の基本義と対応する中国語の動詞は、コロケーションごとに異なるほど多い。そうした共有されていない部分をどう埋めるかが課題であろう。

学習者にとって「付ける」、「上がる」のような動詞には、習得の難関となる理由がまだいくつかあると考えられる。一般的には、多義語の意味ネットワークの中の各語義は緊密につながっていると言えよう。しかし、その緊密さの度合いは、語ごとに異なる。また語義間の関連性がつかみやすいか、つかみにくいかにも差がある。中国語母語話者学習者から見て、「付ける」と「上がる」は語義の緊密さが弱く、語義間の関連性がつかみにくい方なのである。

その上に、両語の用法には、文法的な要素も絡んでいる。例えば、「付ける」がヲ格と

二格の併用を要求するなどということは、中国語母語話者にとっては親しみのない用法である。「エアコンを壁につける」という表現を中国語に訳すと“把空调安在墙上”となる。一般的には、日本語の他動詞の場合、動詞に目的語のようなパターンで訳せる。しかし、「付ける」はそうはできず、中国語の“把”構文を用いて翻訳しなければならない場合も多い。

また、興味深いことに、「切る」と「取る」は、意味数が「上がる」と「付ける」より多いものの、それらがもっとも難しいと答えたのはそれぞれ 10 名しかいなかった。その理由には、まず、中国語母語話者学習者にとっては、「切る」、「取る」の表記から語の基本義（基本的な用法）を身につけることは、「付ける」、「上がる」と比べ、さほど困難ではないということがある。しかも、中国語の基本動詞は、一字漢語で表現するものが多い。前にも触れたように、「切る」と“切”、「取る」と“取”のような動詞は、日本語との対応関係がすぐ見つかる。しかし、「付ける」、「上がる」に対応する“付”と“上”は、特定の目的語がなければ、意味が不明確である。また、「切る」、「取る」のように、動詞の前に目的語が来ればコロケーションが作れるというパターンは、中国語母語話者学習にとって身につけやすい。まじめに学習すれば、派生義は 1 つずつ突破していけそうなイメージである。その一方、学習者は「付ける」と「上がる」に対して、学習の最初の段階から戸惑いがある。

問題 [3] の (2) の「どんな動詞が難しいか」は、かなり漠然とした質問であると思われる一方、開放的な問いでもあり、学習者は自由に答えられる。ただし、語例ではなく、調査者が上位概念での回答を希望していた。動詞を分類する基準によって、語の属する類が異なるので、この質問を通して、調査協力者の日本語の動詞に対する認識が見られた。多義語習得から動詞習得へ調査の視点が変わったのではなく、学習者のニーズをもっと深く探求するために、この項目を設定した。想定していたとおり、調査協力者が多種多様な回答をし、さまざまな動詞の種類に言及した。

明確に「多義動詞」と答えた者は、24 名もいた。その前の [1] と [2] の質問項目の影響を受け、そう書いた可能性もある。とはいえ、多義語の意味の習得に困難さを感じるのは確かである。また、各語義の関連性の緊密さに焦点を当て、緊密さが弱い多義動詞が難しいと述べて、習得の難点をはっきりと示してる。確かに、多義語によっては、語義間の関連性の緊密さが異なる。緊密さの強い語は、それが弱いものより習得されやすく、それゆえ、語のすべての意味が習得され得ると考えられる。

また、複合動詞に関わる回答も目立っている。学習者にとって複合動詞が難しいということは、多くの先行研究で指摘されている。今回の調査も、これを立証できたと言えよう。複合動詞は語の生産性に関係しているために、単純動詞を習得してはじめて複合動詞の習得ができるようになる。複合動詞の前項と後項の組み立てを理解するには、意味に関わる知識も必要である。文法的な知識も要求される。複合動詞と多義動詞を関連付けて言うと、複合動詞は多義語の延長線に位置しているので、多義動詞とその関連語としての複合動詞の記述が統一的にできれば、学習者への支援になるものと考えられる。

さらに、動詞の自他性に関する回答も、かなりの数が集中して現れている。前にも触れたように、中国語では、自他動詞という分類がないのが、多義語の習得困難な理由の1つである。また、有対自他動詞は、意味上、類似しているところがありつつ、用法の異なる部分があるので、学習者にとっての難関である。さらに、自動詞と他動詞のそれぞれが自動詞が持っていて、その有対他動詞が持っていない、あるいは他動詞が持っていて、その有対自動詞が持っていない意味も存在する。それゆえ、有対自他動詞においては、どの意味が同じで、どの意味が特有なのかについて、学習者は容易に身につけられない。

この3点のほか、表2-4のように、学習者は多種多様な回答をした。多くの調査協力者が難しいと感じる動詞が上記で挙げた多義動詞、複合動詞、自他性に関わる動詞の類に属する。学習者の習得に対する支援として、この3つの動詞の類をまとめて究明できないかと考えるようになった。そこで、これから予定する縦断的習得調査と意味分析の目的に合わせ、教科書、とくに初級の教科書に意味用法が比較的多く出ることや、プロトタイプ義がつかみにくいこと、中国語母語話者にとって自動詞より他動詞の方が馴染みがあること、また、語の生産性、共起語の豊かさなどを考慮し、事例研究の対象を「付ける」に定めた。

「付ける」は学習者の身につけにくい多義も持ちつつ、関連する複合動詞も多く存在している。また、自動詞「付く」も学習者にとって習得困難な語である。「付ける」を習得するメカニズム、ストラテジーなどを詳細に調査すれば、学習者の習得上の問題点とニーズがはっきり把握できる。そして、学習者のニーズに応じて「付ける」の意味記述を行えば、学習者のための多義語習得の支援に貢献できると思う。

2.4.4 まとめ

ここまでの考察を通して、本調査の目的に照らし合わせてみると、下記のようなことが明らかになった。まず、学習者の習得状況を(2)のようにまとめる。

- (2) ①上級学習者にとっても、多義語の学習・習得はたいへん難しく感じられる。
- ②多義語の難しい理由は多々あり、語の受容と産出の両方に関わっている。
- ③学習者は、多くの方法で多義語学習を行っているが、有効な方法がなかなか見つからず、戸惑うことが多い。
- ④多義語のうち、多義動詞習得の困難さがもっとも目立つが、それには動詞の生産性、意味構造などが関係している。
- ⑤初級の段階から学習した基本動詞が上級になっても、習得できたとは思えない。
- ⑥中国語母語話者学習者は、母語の影響を受けるが、そこには、正の転移がある一方、負の転移も発生し、それが多義語学習の障害となる。

また、多義語の学習方法とその問題点は(3)のとおりである。

- (3) ①多義語学習のルートが辞書中心になり、教科書・教室・教師からの支援が少なすぎる。
- ②意味が派生するメカニズムや意味構造に対する学習が少なく、それらに対する工夫が不足している。
- ③例文や文脈などによる学習が多くある中で、暗記や反復のみで覚えていくのは効率が悪く、学習者の負担ともなる。
- ④「見る・読む・聞く・書く・話す」といった活動を通して、多義語の学習を進める中で、「考える」ことで意味間の関連性を抽出したり、多義を構造化していくなどの努力が少ない。
- ⑤多義語の生産性、多義語の関連語の学習に対する工夫が足りない。
- ⑥母語を用いての学習に不適切なところがあり、負の転移を防ぐ対策が見られない。

以上を踏まえ、多義語学習における中国語母語話者学習者のニーズは、(4) のようにまとめられる。

- (4) ①多義語の意味を構造化していき、意味関係を明確に、かつ体系的に示す。
- ②類義語や複合語などの関連語との関連づけを示す。
- ③表現の受容と産出を助ける多義語記述を目指し、それを支える多様な共起表現、語の意味を「どんな文脈でどう使うのか」などの記述を重点に置いて示す。
- ④学習者の負担を減らし、使用度の低い意味を削り、使用度の比較的高い意味の記述を重点に置いて示す。
- ⑤日本語と中国語のずれを埋めていき、学習者の母語を十分に考慮・利用し、活用させる分析を行う。

この調査は、中国語母語話者学習者の多義語の習得現状のあらゆる問題点を網羅しているとは言えないものの、ここから洗い出した問題点を解決するための工夫は必要とされるであろう。教育現場のニーズに応える多義語研究を行い、学習困難な多義語の分析を試み、学習者がその語を正しく理解でき、かつ正確に使えるようになるための道しるべを示すのが望ましいことであると考えます。

第3章 先行研究の概観と本研究の位置付け

3.1 日本語の多義語研究

この節では、まず、多義語の分析方法をめぐって、これまでになされた様々な提案の中から、国広哲弥、森田良行、田中茂範の研究を代表例として挙げ、検討・比較を試みる。また、認知意味論的な多義語分析のプロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係の明示、複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明という3つの課題をめぐり、認知言語学における多義語研究の方法を列挙しつつ、本研究に関係する理論について述べる。

3.1.1 国広哲弥の多義語研究

国広哲弥は、長年にわたり、辞書学との関連で語の多義分析を行い、効率的な語義記述法を提案し続けている。国広の多義語に対する研究は、伝統的な意味論（言語構造主義の意義素の分析）から始まり、認知言語学の観点を取り入れつつ、「現象素」という新たな概念を提唱した。ここでは、まず多義語の概念を述べる。その次に、意義素の概念と意義素論における多義の派生を挙げる。最後に、現象素の概念への発展と、現象素論での多義の派生を検討する。

3.1.1.1 多義語とは

伝統的な意味論では、多義語の定義は、単義や同音異義語との区別の観点からなされた。国広（1982）は次のように定義している。「多義語とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つ2つ以上の意味が結び付いている語を言う」（p.97）。これに対して、「同音異義語とは、同一の音形に、意味的に関連性を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである」（p.97）。つまり、同じ音形と結び付いた複数の意味間に関連性があるか否かの問題である。

多義語の諸意味間には、何らかの関係が存在する。語義間の類似性や隣接性などに基き、具体から抽象へ、行為から行為の方法あるいは結果への応用などの一般原理が働いている。それゆえ、母語話者にとっては、多義語の多様な意味をいちいち覚えなくても、意味間の関連性を把握したうえで、意味への理解が実現できる。一方、児玉（2002）によれば、「同音異義語間の意味は歴史的に偶然同じ語形に結合した、個別言語固有の現象であり、しばしば統語上のふるまいも大きく異なる」（p.27）という。しかし、多義語と同音異義語を分けて考えていいだろうか。国広（1982）は「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことである」（p.108）と述べている。このように、多義語と同音異義語の区別はまだ不明確なところがあり、両方の境界線ははっきり引けないのが事実である。

では、多義か同音異義か紛らわしい場合、どのように判断すればいいだろうか。国広（1997）は同音異義か多義かの判断基準は「現時点で意味的関連が在るか否か、というこ

とであるが、かなり判定者の主観に左右される面がある」(p. 189)と述べている。また、単義語と多義語を分ける共通の意味成分の有無という基準も、多義語と同音異義語を分ける意味的関連性の有無という基準も抽象的であって、実際には分析者の直観に任されているのが現状である。

その後は、国広(1997)が多義語の定義に現象素の考え方を取り入れて、「複数の意味が意味的関連を持っているか、あるいは同一の現象素に基づいているとみられる場合には、全体で一つが多義語を構成する」(pp. 175-176)とした。この定義では、「現象素」という概念を新しく導入しているものの、国広自身も意味的関連性に反省は加えていなかったと述べ、国広(2006: 5)では、「同一の現象素に基づいているか、同一の抽象概念に基づいている場合に多義を構成する」と定義し直した。外界に知覚の対象となる具体物がある場合、人間がそれをどのように認知するかによって異なった意味になる。このように、現象素は、多義語の諸意味に適合する抽象的な特性表示であり、諸意味を関連付けた存在である。こういった見解は認知言語学における多義語に対する定義に類似している。

認知言語学的な見解においては、多義語の意味は、「カテゴリー」である。カテゴリーのメンバーはプロトタイプを中心とした放射状カテゴリー構造を持っている。そして、カテゴリーは静止的ではなく、拡張していくものである。また、単純なカテゴリー構造を持っている語もあり、豊かで複雑な構造を持っている語もある。認知言語学においては、ある表現がいくつもの意味を持つ状態、つまり、多義性の存在が重視される。というのは、場面に応じて捉え方を変えたり、新しく経験する対象についてカテゴリー化を行うのは、人の認知プロセスの創造性の現れだからである(大堀 2002: 44)。認知言語学では、多義語の各意義が有機的につながり、放射状にネットワークを成す様子を示す方法で意味記述が行われる。

以上で、「多義語とは何か」という問いに対して、国広の説を中心にして、同音異義語との区別に触れながら、伝統的な意味論の定義から、認知言語学の見方までまとめてきた。続いて、「多義語をどう記述すべきか」という問題について、国広の知見を整理する。

3.1.1.2 意義素と意義素論における多義の派生

国広の初期の意味研究は、意義素の概念を用いて意味の分析を行った。構造主義言語学の意味論においては、音素が音韻論における基本的な単位であるように、「意義素」が意味論における基本的な単位であるという見立てができる。つまり、意義素とは、単語の意味である。また、国広(1982)によれば、「意義素は抽象的な単位である」(p. 40)という。そして、「意義素を構成している意味内容は、さらに小さい意味的な要素である「意義特徴」に分析できる」(p. 48)。意義特徴は、意味成分、あるいは意味素性ともいう。この文献では、意義素の見解を用いて、親族用語などの分析には成功できたものの、意義特徴の間の関係を考えなかったこと、意義特徴の認定基準が明確でなく、何が基本的な意義特徴であるかが定まらなかったことなどの欠点がある。

また、多義派生の型については、国広（1982）では「(1) 心的視点の相違によるもの、(2) 転移、(3) 部分転用、(4) 推論的意味、(5) 比喩的転用、(6) 提喩的転用、(7) 換喩的転用、(8) 具象化転用、(9) 上下関係的意味、(10) 特殊化転用、(11) 集合化」(pp. 111-128) の 11 種類が挙げられている。以下、国広の 11 種の多義派生の型を検討する。

国広（1982）によると、同一の事物を異なった心的視点から見るときに、意味の差が生じることがある。心的視点が動かずに、同一事物に対する焦点の合わせ方を少しずらせると、生じる意味の差は「転移」という。例えば、「この箸は竹でできている」(p. 114) という、植物の竹の全姿ではなく、その材質に焦点が合わされている。これは「竹」の転移的意味である。

「部分転用」は、「語義特徴の一部のみが用いられ、他は抑圧される場合である」(国広 1982: 114)。「顔色を読む」の「読む」はその典型例である。また、「転用」グループに属する「比喩的転用」は 2 つの事物の形状・位置関係・習性・機能などの共通点に基づき、多義派生が生じる。国広は、「比喩的転用」を 2 種類に分けて論じている。まず、「道」の「人が物理的に進行するのを助ける空間」という意味から、無形の目に見えない「人が何かをするのを助ける方法」の意味が出てくる場合が「基本的比喩」に相当する。「人の進行を助ける」という点が共通であり、「物」と「抽象物」という上位の特徴が入れ替わっている。この「基本的比喩」は基本的意義素を構成する意義特徴のうち、上位の者が入れ替えられる場合である。

一方、「周辺の比喩」と呼ぶ例には、「釘の頭」の「頭」がある。「頭」の基本的な意義特徴を取り上げたものではなく、逆に下位の周辺の特徴を取り上げて、それに新しく意義特徴を付け加えて作るものを、「周辺の比喩」という (pp. 118-119)。いずれの現象も、「比喩的転用」といい、その結果生じた意味を「比喩的転義」と呼ぶ。このように、「部分転用」も「比喩的転用」も、認知言語学の用語でいえば、「メタファー的な拡張」である。

国広の言う「提喩」は、「物の一部を指す語でそのもの全体を指したり、その逆に物全体を指す語を用いてその一部を指す場合」(p. 125) である。「車」で「自動車」、「警察」で「警官」を指すのが「提喩的転用」の例である。「換喩的転用」は、空間的・時間的に近接関係にも基づくものである。「永田町」から日本の政界やその担い手への転用は過程そのものが換喩的である。「提喩」と「換喩」はそれぞれ「シネクドキー」と「メトニミー」に類似している。また、「特殊化転用」は、ある特殊な場面では詳しく表現しなくても、簡略化した表現で十分に表わすことができるという場合である。「あととり」は「あとを継ぐこと」であることから、「あとを継ぐ人」を指すことになるというのがこの類の転用である。

以上で、国広の一部の研究例を引用しつつ、意義素の定義と国広の意義素論における多義の派生についての研究をまとめてきた。国広は、上記の多義的分岐の仕方を用いて、多義語の意味構造をなるべく明晰化することを意味分析の究極の目的とした。意味研究が進んでくるにつれて、国広は意義素による分析方法に限界を感じ、そこで、現象素を新しく提案した。次節では、現象素の概念と国広の現象素論における多義の派生の研究について

検討する。

3.1.1.3 現象素と現象素論における多義の派生

国広（1995）では、現象素を「ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えることができるものである」（p. 40）と定義している。また、国広（1997）では、現象素の定義を「語の用法と結び付いた外界の現象・出来事・物・動作など、感覚で捉えることができるもので、言語外に人間の認知の対象として認められるものである」（p. 176）とされている。言葉遣いを少し変えたものの、現象素に対する認識の本質は変わらなかった。

現象素と指示物の関係について、国広は、次のように述べている。指示物とは、言語とは関係のない外界の存在物であるときに、言語によって指し示される物である。現象素は言語の用法から帰納された、言語と関連をもった外界の一部と捉えるものであり、現象素は言語以前の存在物であり、それを人間の立場からどのように認知するかによって異なった意味が脳中に生じるものである。つまり、現象素は人間の認知したものである（国広 1994： 25、1995： 40、2006： 4）。これらの記述によって、現象素の本質はいつそう明晰になった。

多義語の意味分析においては、現象素分析のほうが意義素分析より優れている。意義素分析は、語の中心部分と使用範囲を理解するのを目標とするときに応用できる（国広 2010： 8）。「意義素分析が有効なのは外界との関連をもたない機能語の場合であり、外界に知覚の対象となる具体物がある語の場合はまったく異なる分析法を用いる必要がある」（2006： 3）と述べた。語の多義性を分析すると、単一の意義素にたどり着くこともあり、単一の意義素にまとめられないこともある。しかも、「同一の現象に基づく認知的多義が認められるならば、意義素はふたつ以上になり得る」（1994： 25）。換言すれば、多義語の場合、1 つの現象素に 2 つ以上の意義素が対応している可能性がある。

意義素分析は図示できず、意味の拡張過程を明示的に示すことができない。一方、国広の現象素は図で表わすことができる。例えば、「はいる」の現象素は図 3-1 のようである。「この図は、ある移動主体が囲まれた空間（平面あるいは立体）の内部に移動することを示している」（国広 1997： 182）。物理的な移動は、時間内での移動、抽象的な空間内での移動に用いられることにより、多義を派生させる。このように、多義語は「現象素から認知された複数の意義素の集合体」であり、それらの意義素から生まれるのが派生義である。

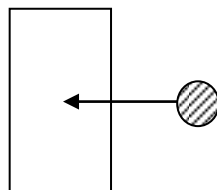


図 3-1 「はいる」の現象素（国広（1997： 182）による）

このように、現象素の観点を取り入れ、多義派生の型を見直して論じたのは国広（2006：12-25）である。国広（2006）の論によれば、現象素に基づく型として 10 種類、現象素に基づかない型として 3 種類があるという。すなわち、1) 心的視点の位置、2) アスペクト多義、3) 焦点化、4) 具象化転用、5) 比喩的転用、6) 提喩（シネクドキー）、7) 換喩（メトニミー）、8) 時空間推義、9) 推論的派生義：(a) プラス値派生義 (b) マイナス値派生義 (c) 適切値派生、10) 意味格多義、11) 時空間転用、12) 拡大義・縮小義の並存、13) 語形省略による場面的多義、という 13 点である。

ここでは、国広を引用しつつ、語例や解釈を加え、国広が提案した 13 の多義派生の型を検討する。まず、「心的視点の位置」は 3.1.1.2 の「心的視点の相違によるもの」に類似しており、視点の位置が空間的なものである。「アスペクト多義」の視点の位置は、時間に関するものである。「焦点化」は、国広（1982）の転移・部分転移の考え方である。「具象化転用」は、動詞の連用形が名詞として用いられることで、動きを指す場合と、具体物や人を指す場合とがある。「比喩的転用」は、具象への転用に対し、逆に具象から抽象への転移は比喩的転用の一種として扱われる。この捉え方も、焦点化の一種という。

「提喩（シネクドキー）」と「換喩（メトニミー）」は、国広（1982）が提案した「提喩的転用」と「換喩的転用」と同様であるが、「転用」という言葉を使わずに、それぞれ「シネクドキー」と「メトニミー」に相当すると明確に示した。また、「時空間推義」は「本来時間的単位を表わす語であったものが、時間を表わしながら同時にその時の空間にも意味の範囲を広げる場合をいう」（国広 2006：17）。

「推論的派生義」は、意味派生には世界知識に基づく推論という過程が入っている点で他の型と異なる。この派生の概念は、国広（1982）の「推論的意味」の観点から出発し、「実力」が「平均以上の実力」を意味するような「プラス値派生義」、「問題」の派生義に「問題視する」、「問題児」の用法があるような「マイナス値派生義」、「いい加減にしなさい。量っていうものがある」の「量」が「適切な程度」という意味であるという「適切値派生」の 3 種類に下位分類される。「意味格多義」は、動詞の多義を記述するときに適用する。動詞の現象素には、動作の場所、動作の対象物、時に動作に必要な道具が伴うことがある。そのどれに焦点を当てるかによって、選ばれる意味格が異なる。また、意味格が異なれば、動詞の表面的な意味が異なって現れる（国広 2006：21）。

以上の 10 種類は、現象素に基づく多義派生の型であり、以下の 3 種は現象素に基づかない型である。「時空間転用」は「時空間推義」に類似しているものの、意味的性質が異なっている。「時空間推義」は、同じ現象素に基づき、認知の対象が時空間の両方にまたがっているに対し、「時空間転用」は、時間と空間の相互の間で比喩的に転用を行うものである。「拡大義・縮小義の並存」は「語義の歴史的変化によって語義の指す範囲が拡大したり、縮小したりした場合、元になった語義が消えないで残っていると、両義が多義として現れることになる」（国広 2006：23）。「語形省略による場面的多義」とは、「事務部」を指すのに「事務」と言うことや、「消防署・消防車・消防隊」の代わりに「消防」と言うことによ

うな場合である。「場面的」というのは、「事務」や「消防」の意味解釈が聞き手の語用論的推論に依拠しているからである。

以上で、国広（2006）に沿い、国広の現象素論による多義の型を概説した。現象素概念の提出で、国広の意味記述はいっそう豊かになり、多義語の意味関係をより細密に分析できるようになり、多義派生のメカニズムが明らかになった。また、今の13種類の派生の型は、相互に少し重なっている項目もありつつ、多義構造全体を究明するには示唆に富み、多義構造の構築に有益な理論的根拠を提供している。

3.1.2 森田良行の多義語研究

森田の語義研究の成果の集大成は、『基礎日本語辞典』（1989）である。『基礎日本語辞典』では、従来の辞典と異なり、語の基本的意味から周辺の意味へという配列上の配慮も見られ、またある意味から他の意味へのつながりも部分的には説明されていて、全体としての構造がかなり見て取れるようになっている。

森田の意味分析・意味記述の立場と方法は森田（1991、1996）では詳しく論じられている。「語の意味は、その語が運用されることによって初めて光を放つ」（森田1996：15）のように、森田は語の中心的意味、派生的意味を判定するのは、語義を表現・理解という運用行為から切り離して、対象として客体化した学問であると述べ、運用的視点に立てばこそ、表現や理解の折々の意味、つまり文脈の意味が捉えられると主張している。それに、文脈は静止的なものではなく、動いているように考えている。

また、森田（1996：13-14）によれば、文脈の動きには大きく見て2つあるという。1つは通時的なものである。表現・理解している語の意味は、歴史というときの流れの中での意味の変化の1点として運用されているので、その流れを無視して語義の基本的意味を設定することは事実と反する。もう1つは、共時的な面である。これは文脈や文型などとのかわりによる相互作用である。その語の位置する文（時には文章・談話もあり得る）との相関関係は、意味と文法との深いつながりを示唆する。このように、森田は、語源や意味の変化・発展を手掛かりとし、該当語に伴うニュアンス・語感・評価などの特徴を考慮し、文章・文といった枠組みで意味分析を行っている。

森田（2008：96）では、多義語の語義には、具体性から抽象性への段階に応じた文型の姿というものが見て取れると指摘されている。例えば、「持つ」、「たつ」、「進む」などのような語は文型と意味との関わりの多様性が、述語動詞を多義化へと導く。また、多義語に近いが、文型を異にするものもある（p.97）。「溢れる」、「誘う」、「突く」、「取る」などがこの種の語である。さらに、基本義に差はないものの、文型面で差を持つ多義語もある（p.98）。語例として、「選ぶ」、「教える」、「欠ける」、「飾る」などが挙げられている。

意味分析で取り上げるべきことについて、森田（1989：7-12）では次のようなものが挙げられている。それは、①主体、②対象や相手、③用いられる文型、④文型と意味との関係、⑤有情と非情、意志的と無意志的のどちらか、⑥瞬間動作と継続動作のどちらか、⑦

部分的か全体的か、⑧行為・作用の方向や道筋、という8点である。森田は、語の意味を分析する際に、語そのものの性質、使う文型・場面を記述するのを重点に置くべきであると主張している。

森田の意味分析の立場および方法から分かるように、森田は語そのものの多義性と多義構造より、ほかの語（類義語）との関連性を分析の重点に置く。また、語の中心義・派生義などはあまり問題にせず、語の使用する文脈や場面を記述の中心としている。このような記述法は、日本語教育の視点から見れば、学習者の実際の運用に役に立つものとなる一方、こうした記述を見るだけで多義語の全体像を把握することはできないと考える。学習者のニーズからいうと、語の全体像を把握したうえで、運用に繋がられるような多義語の記述が必要である。

3.1.3 田中茂範の多義語研究

田中茂範は、英語を研究対象にして多義語を研究している。とはいえ、田中の研究方法を日本語の多義語研究に応用する研究は多々ある。この節では、田中茂範の多義語研究を取り上げて、考察を試みる。

田中（1990）では、コア、プロトタイプ、ネットワークといった理論の枠組みで多義語の意味研究が行われている。そして、この3つの概念を統合した意味論の枠組みを探ろうとする。田中の言うプロトタイプ、ネットワークは、認知意味論の概念と関連するので、次節で詳しく検討することにする。ここでは、田中が提案したコア理論を中心に、その多義語研究をまとめる。田中（1987: 126）によれば、単語はn個のイグゼンプラーからなるカテゴリーと見なされ、その関係は図3-2のようである。

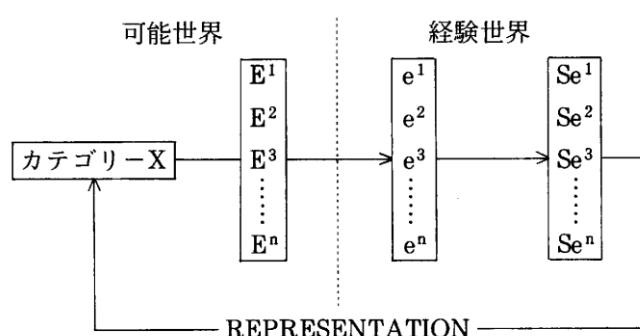


図3-2 語意味論のカテゴリー／イグゼンプラー・モデル（田中（1987: 127）による）

田中は、図3-2によって多義語を定義する。カテゴリーXが1つのEタイプをもつケースと複数のEタイプをもつケースが考えられる。前者は単義語であり、後者は多義語である。また、n個のEの背後に最大公約数的な意味が潜んでいる。それをコアという。さらに、「コア理論では、多義語である基本動詞の意味は抽象的であり、具体的な語義はコンテ

クスト・パラメータが設定されることによって定まる」(田中 1987: 153) という認識を示している。こうしたコア理論では、多義語の複数の意味の接点を探ると一方で、コンテキスト情報は除こうとする。

田中(1987、1990)は、数多くの英語の基本動詞を取り上げ、コア分析をし、「異種の集合と見える現象の中に一般規則を見出そうとする点において、コア理論は極めて魅力的なアプローチである」(1987: 139)と評価している。他方、コアの問題点について、田中(1987)では、(1) 基本動詞のコアは、それぞれの語の意味構造を十分にとらえているか、(2) コアは、心理的妥当性をもっているかという2点からこれが検討された。結論から言うと、まず、(1) のコアの記述力については、「意味的編入の数が増えれば、それだけコア理論の記述力も低下する」(p. 141)、(2) のコアの心理的妥当性に関しては、「コンテキスト情報を取り除くコア理論は心理的妥当性の高い語意味論として不十分ではないだろうか」(1987: 142)と指摘している。こうしたコアの問題点を克服するには、つまり、説明的妥当性のより高い心理語彙論構築のためには、コアとプロトタイプ理論を統合していかなければならないと指摘している(田中 1987: 154)。

靱山(2001)は、田中のコアと、ラネカーのスキーマ、および国広の現象素との関係について検討し、「田中の提案する多義語のコアは、ラネカーのスキーマと国広の現象素という明確に異なる2つの概念に対応するものである」(p. 52)と指摘している。田中(1990: 22)では、コアは用例の最大公約数的な意味であり、また、語の意味範囲の全体をとらえる概念であるという2つの特徴が示されている。靱山(2001)によれば、用例の最大公約数的な意味としてのコアは、ラネカーのスキーマに相当し、語の意味範囲の全体をとらえる概念としてのコアは国広の現象素に相当する(p. 50)という。また、遠藤(2011)も、「コアは、一定の操作で抽出されるスキーマにも、認知された外界の存在物である現象素にも、広く対応する概念であるようだ」(p. 113)と指摘している。

コアは、図式化することができる。それに、コア図式は動的に捉えなければならない。というのは、コアのイメージ画には、焦点化や変形・回転などの操作が加えられるからである。イメージ画の利点は、同じ図式がさまざまな用法の背後にあることを示すことができるということである(田中2004: 12)。また、イメージ画の中心に位置づけられるコア・ミーニングは、多義語の持つ語義、および語義の中の細分化された意味をすべて1つにまとめる、文脈に依存しない中心的な意味である。

このように、複数の用法のそれぞれの意味・概念を1つに取りまとめた包括概念のコアを用いた研究には、白石・松田(2007、2014)がある。白石・松田(2007)は、コア図式を用い、多義動詞「かける」の意味を記述している。また、白石・松田(2014)は、多義動詞「ぬく」を後項とする複合動詞「V-ぬく」を取り上げ、コア理論を援用してその意味を記述している。

田中や白石・松田の研究に見るようなコアの考え方は、語彙学習の観点からは役に立っているが、適用できる語が少ない。田中自身も、「動詞の意味記述において、コアをとらえ

るだけでは、不十分である。動詞の意味空間の内部構造に、何らかの体系を与えていくという作業が残されているからである」(1990: 3) と述べている。また、町田 (2002) と谷口 (2003) が指摘しているように、多義語の意味拡張のプロセスではプロトタイプとしての中心的な意味から周辺的な意味への拡張の背景には、メタファー、メトニミーなどの認知作用が働いている。コア・ミーニングを用いただけでは、メタファーなどによっての意味拡張は十分に説明されることができない。

以上で挙げた国広、森田、田中のほか、多くの研究者が多義語の意味研究に関心を傾け、研究の手法およびその有効性を論じている。例えば、宮島 (1972) は、多数の動詞を取り上げ、膨大な例文を挙げつつ、意味の記述を行い、語の意味を用例から帰納することの重要性を論じている。また、姫野 (1999) の複合動詞の研究においては、語の意味特徴を考えるには、さまざまな方法が考えられると述べ、例えば、場面的機能、文脈的機能という規定があると提示されている。それに、文脈機能を広く捉え、「語の意味は、また、どのような複合語を作れるかによっても規定されている。これも、広い意味で文脈的機能と考えられる」(1999: 236) と述べている。いずれの研究においても、語彙の意味記述について、有益な事例研究が提供されている。

3.1.4 認知意味論的な多義語研究

認知意味論とは、意味の問題を人の外界認識を反映したカテゴリー化の問題として考えるアプローチである (松本 2003: 3)。認知意味論は、人間が持つ一般的な認知能力の反映として言語を捉えることであり、多義語研究にも応用される。多義語研究の認知意味論的アプローチの可能性については、松本 (2010a) が述べている。これをまとめると、多義語の問題というものは、人が比較認知能力やカテゴリー化能力などを用いてさまざまな事象を処理することに等しい。換言すれば、こういった能力は、多義語の意味間の類似性と関連性を取り扱うときに役立つ。したがって、認知意味論のアプローチは、多義性に関して興味深い考察が可能なのである (p: 24)。

認知意味論では、多義語という1つのカテゴリーの中心には、多くの場合、プロトタイプの意味 (基本義) が存在し、そこからメタファーやメトニミーなどの認知的原理 (動機づけ) によって複数の方向へと意味拡張が展開すると考える。認知意味論的な多義語分析の課題として、靱山・深田 (2003b: 140-141) では、「①プロトタイプの意味の認定、②複数の意味の相互関係の明示、③複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明」の3つが挙げられている。そこで、ここでは、靱山・深田 (2003b) の3つの課題に沿い、先行研究を整理しつつ、問題点を探る。

3.1.4.1 プロトタイプ理論

前にも触れたように、認知意味論においては、「意味はカテゴリーである」とされている。「ヒトの認知活動を支える柱の1つとして、受け取った情報をもとに有意味なまとまりを作り出す能力がある。このまとまりをカテゴリーという」(大堀 2002: 29)。また、「カテゴリーを作り上げ、ある対象がそこに属するかどうかについて判断を行うことをカテゴリー化という」(大堀 2002: 29)。古典的カテゴリー観では、カテゴリーは必要十分条件によって定義され、明確な境界を有するものと考えられていた。しかし、現実の世界には明確な境界を引けないものも多く、カテゴリーのメンバーはその帰属度に差が見られる。言い換えれば、カテゴリー化によって構成された集合には、代表的なメンバーから、周辺的なメンバーまで、典型性の度合いの異なるメンバーが含まれる。あるカテゴリーの中での典型的なメンバーがプロトタイプである。

カテゴリーの内部構造は、プロトタイプメンバーと非プロトタイプメンバーによって構成されている。カテゴリーの成員間には、共通性がある場合がある一方で、まったく共通性が見いだせない場合もある。カテゴリー内は、プロトタイプメンバーを中心に放射状の構造をなすと想定され、このような現象は「プロトタイプ効果」と呼ばれている。また、そのようにして作られたカテゴリーを「放射状カテゴリー」と呼ぶ(レイコフ 1993)。語の多義性が生じるメカニズムにも、これに類似したような展開がある。

プロトタイプ意味論は、こうしたプロトタイプ理論に基づき、語の意味を記述する。プロトタイプは、当該言語の用いられる社会文化的文脈に依存するため、言語普遍的ではない。また、同じ言語社会に属するものでも、その事物に関する百科事典的知識の相違があるため、典型性が異なる場合もある。プロトタイプ意味論では、複数の語義の中で心理的に典型的なものがプロトタイプとして認められ、非典型的ケースと区別される。

こうして、多義語研究においては、どのようにプロトタイプの意味を認定するかが課題になる。認定の仕方についても、異なる視点が提出されている。鈴木(2003)では、プロトタイプを3つに分けて分類している。すなわち、「理論的なプロトタイプ度」、「心理的なプロトタイプ度」、そして、「いわゆる“原型度”」(p. 60)の3つである。異なる判断の基準に従って分析を行えば、ずれが生じる可能性がある。

また、Langacker(1987)が提案する多義語のネットワーク・モデルを語のプロトタイプとスキーマの観点から検討するモデルにおけるプロトタイプは、「もっとも確立されていて、認知的際立ちが高く、また、最初に習得され、中立的なコンテキストでもっと活性化されやすいといった特徴を有するもの」(靱山 2001: 39)である。それゆえ、多義語の複数の意味の中で、もっとも重要であり、習慣化の程度が高く、認知的際立ちが高いといった特徴を備えたものを「プロトタイプの意味」と認定することになる(靱山 2001: 33)。多義語のネットワークでは、プロトタイプ義はカテゴリーの中核として機能する。本稿では、Langacker(1987)が提案するネットワーク・モデルを用いて多義語の意味を記述するので、それに基づいた語のプロトタイプの認定法に従うことにする。

以上、プロトタイプの定義、プロトタイプ理論、カテゴリーの内部構造を概説したうえで、本研究に用いる多義語のプロトタイプ義の認定について述べてきた。プロトタイプ的な意味が何か、意味のカテゴリーがどのように表象されているかといった問いは、多義語の分析においても、第二言語習得研究においても示唆に富む課題である。

3.1.4.2 個別義の派生

多義語は、プロトタイプ義を軸に、意味が拡張していく。テイラー（2008：195）は意味間の関連性、そして異なる意味がどのようにして結び付くようになるかを究明するのが多義語研究の主たる課題であると述べており、意味拡張のもっとも重要な2つの要素として、メタファーとメトニミーを挙げている。また、シネクドキーも、意味拡張の要因の1つとして挙げられている。しかし、「多くの学者にとってシネクドキーとは部分全体関係に基づくメトニミーを指す」（松本 2010a：32）。そこで、ここでは、メタファーとメトニミーおよびそれらによる意味拡張についての認知意味論的な研究を挙げつつ、国広などの研究と比較しながら、多義語の意味拡張のメカニズムを述べる。

①メタファーとそれによる意味拡張

まず、理論の発展に沿って、多義語の意味拡張としてのメタファーを述べる。伝統的には、メタファーは類似性に基づいたものであるとされる。国広（1982）が言う「比喩的転用」は、主に具体物と抽象物との相互転用に焦点を当てている。山の麓を指すのに「山すそ」といえるのは、具体物のすそからの転用と考えられるからである。国広の「比喩的転用」では、2つの事物の形状・位置・関係・機能・評価などの共通点に基づき、多義派生が生じる。また、国広（1982）の「部分的転用」（「意義特徴の抑圧」とも呼ばれる）も、メタファーに近いものである。

また、瀬戸（1997）によれば、メタファーは、「意味が特定の領域（domain）を超えて別な領域に「飛ぶ」（p.95）ことである。この定義から、瀬戸のメタファーも2つの領域に跨ることを強調する。定義の中の「飛ぶ」は、まさにレイコフとジョンソン（1986）の概念メタファーの「写像する」に相当する。

認知言語学的なメタファー研究においては、レイコフとジョンソン（1986）の指摘が示唆的であり、その後のメタファー研究の引き金とされている。その中心の論点は、メタファーはただ言語の問題ではなく、人間の思考過程の大部分がそれによって成り立っているということである（p.7）。つまり、言語表現におけるメタファーとは、我々の経験に基づいているもので、そこから切り離したら理解できないものであり、メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することなのである（p.6、94）。このように、メタファーは、異なる両領域の架け橋のような存在であり、メタファーの存在理由は我々の経験的基盤にある。

レイコフとジョンソン（1986）は、この2つの領域間の対応関係を「概念メタファー」

と命名している。そして、その異なる領域をそれぞれ「起点領域」と「目標領域」という。概念メタファーの提出により、メタファーは修辞学の枠を飛び越え、人間の認識や思考を支える骨格であることが明らかになった。また、認知科学の発展とともに、メタファーは人間の思考や概念構造といった観点から論じられるようになってきた。そして、メタファーは、認知意味論における重要な概念に転じた。

松本（2010a: 28）によれば、認知意味論におけるメタファー研究においては、「異なる概念領域にまたがる」という側面が重視されることが多いという。この異なる概念領域（「源領域」と「目標領域」）の対応関係には方向性があることが知られている。源領域となりやすいのはより具体的、身体的経験とより密接に結びついたものである（松本 2010b: 90）。また、この考え方においては、「類似性は決定的な要素ではない」（松本 2010a: 29）という。場合によっては、類似性に基づかない写像関係を用いる表現があることと、同じ概念領域内で類似性に基づく拡張が起こるケースがあるとのことで、それによってメタファーと見なされる例に相違が生じる。

多義語の意味拡張の中では、メタファーが多義語研究の一側面として重要視されている。メタファーは人間の思考の型であり、日常言語にもそれが反映しているとの立場から、意味変化、多義語、文法化などにおいてメタファーが果たす役割が研究されてきている（辻 2013: 20）。ある対象が直接把握しにくい場合、あるいはある対象をよく理解しようとする場合に、別のよく分かっている物事を通して理解するという認知の仕組みがメタファーなのである（靱山 2014: 98）。つまり、「メタファーは多義化のもっとも一般的な要因となっている」（前田 2012: 127）。それゆえ、メタファーが我々の経験に基づくものであるという見解は、多義語の意味拡張のメカニズムとなり、派生義の拡張を考えるとときには、これを取り入れなければならない。

松本（2010a: 29）は、日本語における概念メタファーとその具体的な表現例を挙げている。

- (1) a. 時間関係は空間関係: 2時から開始する
- b. 因果関係は空間関係: 危機感からそうする; 寒さから身を守る
- c. コミュニケーションは物体の操作: 内容がつかみにくい
- d. 心は容器: 悲しみに溢れる; 喜びでいっぱい
- e. 状態は位置: 眠りに入る; 危機から抜け出す
- f. 関係は連結: 2つの事件のつながり

このような傾向に基づけば、どちらが基本的意味であるかを比較的容易に認めることができるため、概念メタファーは、多義語の意味拡張のメカニズムを究明するにはたいへん有効な理論を提供している。日本語においては、動詞の意味拡張にもメタファーに基づいたものが多くある。靱山（2010）は、「飛び出す」⁹を挙げ、メタファーによる意味拡張を

示している。

- (2) a. このびっくり箱は、ふたを開けるとボールが飛び出す仕組みになっている。
b. 子どもが道路に飛び出した。
c. 昨日の会議で、思いもよらぬ意見が飛び出した。

梶山 (2010) は、(2) のそれぞれの「飛び出す」の意味を示し、メタファーにより、意味間の関連性を述べる。(2a) は「飛び出す」の基本的な意味であり、＜物が内部から外に向かって空中を勢いよく移動する＞意味である。(2b) の「飛び出す」は＜人間が相対的に狭い領域から広い領域に突然勢いよく移動する＞ことを意味する。これは、基本義の＜勢いよく移動する＞点で共通している。(2c) の「飛び出す」は、＜予期しない意見・提案などが突然（誰かの口から）発せられる＞意味である。(2b) の「飛び出す」とは、＜予期しないことが突然生じる＞という共通点が見出せる。このように、(2a) の「飛び出す」の意味から (2b) の意味へ拡張し、さらに、(2c) の意味へと拡張する。「飛び出す」は、このようにして、物理的な行為から、メタファーに基づき抽象的な意味へ拡張するのである (p. 37)。

以上で、認知言語学におけるメタファー研究の発展を述べたうえで、多義語の意味拡張におけるメタファーの重要性を議論した。次に、メトニミーについて検討する。

②メトニミーとそれによる意味拡張

メトニミーは、また「換喩」ともいう。3.1.1.2 でまとめたように、国広 (1982) の「換喩的転用」は、空間的・時間的に近接関係に基づくものである。瀬戸 (1997) は、「世界の中で指示対象が「横すべりする」」(p. 95) と、メトニミーを定義している。伝統的なメトニミーでは、メトニミーの特徴を「通常その言葉で支持される対象そのものではなく、それと近接の関係にある対象を指す」(西村・野矢 2013: 142) とされる。そのメトニミーの典型例として、「赤ずきん」が挙げられる。本来赤い頭巾を意味する「赤ずきん」という言葉が、赤い頭巾をかぶっている女の子を指すことができるようになった。

メトニミーは、「伝統的には近接性あるいは関連性に基づく意味拡張とされる」(松本 2010a: 30)。「近接性」または「関連性」は、認知言語学的にはラネカーが提唱する「参照点能力」の発現によって、捕らえている。認知意味論におけるメトニミーとは、「そのような特定のものに関する知識の総体の中で、ある要素を別の要素と結び付けること」(松本 2010a: 30) である。すなわち、「認知的に際立ったものを参照点として言語化し、それと関連する要素の集合である支配域の中から述語ともっとも直接的に関連する要素を目標として選び出し、それに注意の焦点を向けるようにするのが換喩というわけである」(辻 2013: 47)。つまり、メトニミーは、対象と同一の認知領域における卓立した要素を参照点とし、それによって対象を捉える手段とされる。参照点理論を用いてメトニミーをとらえ

る利点は、伝統的な「近接性」のメトニミーと比べ、「近接性」を明確に規定できることである。

松本（2010a）では、日本語の実例を用いて、メトニミーを生み出す関連性には（3）のようなものがあると述べている。なお、これらは関連性の種類であって、メトニミー表現の分類ではない。1つのメトニミー表現には、複数の関連性にかかわる場合があるからである。また、空間的近接性によるとされる例も、空間的接近性のみの考察では、不十分な場合が多い。そのときは、特定のフレームにおける接近性を考察しなければならない。

- （3）A. 空間的関連性：空間的近接性、空間的部分全体関係、場所と機関、場所と出来事、場所での活動
- B. 時間的関連性：時間的近接性（継起性）、時間的共起性、日付で出来事、出来事で時間帯
- C. 因果的関連性：生産者で生産品、作者で作品、統率者で被統率者、道具で使用者、音で音源、原因で結果、感情でそれを誘発する状況、外的兆候で内面心理
- D. 目的・機能的関連性：身体部位でその機能、機能で物体

（pp. 30-31）

メトニミーの実例を見たところ、名詞の例が多いように思われるが、動詞のメトニミーの例もある。西村・野矢（2013）では「歯がしみる」が挙げられ、議論されている（pp. 149-152）。「歯がしみる」は、何かが歯にしみた結果、痛みが生じたという意味である。そのしみたものが何であるかは重要ではなくて、結果としての歯が痛くなったということに焦点を当てるので、メトニミー表現と言える。ここでの「しみる」は、「典型的には「冷たいものが作用して歯に痛みが生じる」のように、作用と結果を合わせた意味をもっている」。また、動詞のメトニミーとしては、「部屋が散らかる」、「パイプが詰まる」、「トイレを流す」（p. 152）などが挙げられる。メトニミーは、意味拡張に関してもっとも基本的なプロセスの1つである。また、メタファーよりも基本的だという（テイラー2008：197）。このように、多義語の意味拡張においては、メトニミーも重要な役割を果たしている。

続いて、メタファーとメトニミーの共通点と相違点について検討する。「このような知識の総体はフレームあるいは認知モデルと呼ばれ、概念領域とも同一視される。（中略）メタファーが異なる概念領域間の関係であったのに対し、メトニミーは同じ概念領域内の関係ということになる」（松本 2010a：30）。つまり、メトニミーとメタファーは、より分かりやすいものを用いて対象を捉えるという点では共通している。しかし、関わる認知領域に関しては、メタファーは2つであるのに対して、メトニミーは1つであるという点では大きく異なる。また、メタファーは、人の比較能力に基づき、異なる領域に属するAとBの類義関係を示すのに対し、メトニミーは、参照点能力に基づき、1つの領域に属するAとB

の近接関係を表わす。とはいえ、メトニミーは、メタファーと同様、人間の概念構造を構成する際の重要な手段であり、「語の多義性を生み出す原動力である」（前田 2012: 129）。メタファーとメトニミーの相違点については、表 3-1 のようにまとめる。

表 3-1 メタファーとメトニミーの相違点

	メタファー	メトニミー
所属する領域	2つの異なる領域	1つの領域
A と B の関係	類義関係	近接関係 (シネクドキーは包摂関係)
認知的基盤	比較能力	参照点能力

続いて、シネクドキーについて少し議論する。一般的には、シネクドキーはメトニミーの下位範疇にあると思われる。国広（1982）は、シネクドキーを「提喩的転用」と名付けている。前にも述べたように、国広（1982）は、物の一部でその物全体を指すことと、物全体を指す語でその一部を指す場合を合わせて「提喩的転用」という。また、辻（2013: 238）では、「提喩またはシネクドキーは、包含関係（類と種の関係）に基づいて転義（意味のズレ）が起こる比喻で、上位概念で下位概念を指したり、下位概念で上位概念を指すものを言う」と述べている。さらに、初山（2014）によれば、「ある語（などの表現）が、本来の意味より狭い意味あるいは広い意味を表わすこと（およびその仕組み）をシネクドキー（提喩）」という説明している（p. 45）。このように、概念についての記述はやや異なるものの、シネクドキーの、意味の一般化と特殊化を指す本質は認められている。一般化は、下位概念から上位概念への意味拡張である。一方、特殊化は、上位概念から下位概念への意味拡張である。

では、実例を用いてシネクドキーについて説明する。上位概念が下位概念を表わす例として、「花見」がよく挙げられる。「花見」という言葉においては、上位概念としての「花」は下位概念の「桜」を指するのが普通である。下位概念で上位概念を表わす例には「一緒にお茶でも飲もう」がある。「お茶」は上位概念の「飲み物」を指している。いずれにしても、この一般化・特殊化は、同じ概念領域内における意味の派生である。シネクドキーは、メトニミーと同様、同一の概念領域に含まれる項同士の関係であるので、メトニミーの一種とも考えられる。

以上をもって、語の多義派生のメカニズムについて、メタファーとメトニミーを中心に論じてきた。伝統的な観点から認知意味論的な見方に至る過程で、メタファーとメトニミーに対する定義や理論の記述などが変化していくとともに、多義語の意味拡張に関する理解も深まり、それに対する記述も明確になってきている。多義語の語義関係を明確に記述するには、メタファーとメトニミーが重要な役割を果たすことは言うまでもない。また、第二言語学習者にとっては、多義語の意味を学習するために、メタファーとメトニミーの

働きを無視してはいけない。異文化の持ち主は、目標文化の持ち主とメタファーとメトニミーに対してつねに同じ認識を持っているわけではないので、語義間に働くメタファーとメトニミーをどのように学習者に理解させればいいのかは、外国語教育上の課題である。

3.1.4.3 多義語の多義構造

多義語を記述する究極的な目標は、語の多義構造を構成することである。認知意味論では、語の多義について人間の認知構造からその多義の構図を解き明かそうとする。プロトタイプ、フレーム、メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマといった理論上の道具立てが一体となって、複雑な多義性ネットワークの全体像を描き出すことを可能とする(大堀 2002: 88)。多義語の複数の意味すべてを統括するモデルを解明する、つまり、多義語の全体的構造をどのように構成するか、という課題に対し、靱山・深田 (2003b) は、(4)の5種類のモデルをまとめている。

(4) a. 集合体モデル

b. イメージスキーマに基づくネットワーク・モデル

c. 拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル

d. 現象素に基づく認知的多義

e. 「ネットワーク・モデルと現象素に基づく認知的多義の統合」を目指す統合的モデル

(靱山・深田 2003b: 146)

この5つの多義構造モデルはそれぞれ特徴を持っている。また、記述する多義語の性質によって、適用できるモデルも異なる。本研究では、(4c)のネットワーク・モデルを援用して多義語の分析を行うことにするので、ここではこのモデルについて検討する。

(4c)のネットワーク・モデルは、プロトタイプからスキーマを介して意味が拡張するモデルを最小単位とし、それがつながってネットワークを構成するというのが基本的な考え方である。このモデルは Langacker (1987) が提唱し、「プロトタイプとスキーマに基づくネットワーク・モデル」ともいう。

認知言語学においては、スキーマは、あるカテゴリーのすべてのメンバーに共通した抽象的な意味とされる。そして、カテゴリーのすべてのメンバーから共通する特徴を抽出することで、スキーマが得られるプロセスを「スキーマ化」という。大堀 (2002: 21) によれば、「ヒトは経験を通じて知識を常に更新し、組み直している。(中略) 多くの場合には、知識はいくつもの具体例の比較を通じて、一般化・抽象化された形で獲得される」という。ここでいう抽象的な知識がスキーマである。そして、松本 (2010a) によれば、「もっとも上位の、すべてを包括するスキーマはスーパースキーマ」(p. 35) と呼ばれる。ただし、スーパースキーマは「すべての語において、すべての意味にまたがる形で設定できるわけではない」(p. 37)。

スキーマは、知覚・言語理解・記憶の想起などの過程におけるトップダウン型処理の進行の説明に中心的な役割を果たす。「拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル」は、意味認識が中心的なモデルから、徐々に周辺的なモデルへと派生、拡張が行われ、それが多義を形成するという考え方である。認知意味論で共通して取られる語の多義性に関する立場は、語の認識には成員間にメンバーとしての帰属度の高低と、中心・周辺の区別があり、カテゴリーには明確な境界線は存在しないというものである。「ネットワーク・モデル」(図 3-3)の適用は、語の意味研究に対して、文中における語とそこで生成される語の多義性を有効に説明づける。

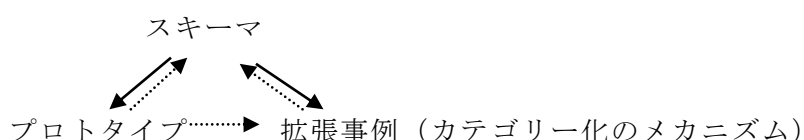


図 3-3 拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル

Langacker (1987) は、プロトタイプからの拡張とスキーマによるカテゴリー化を総合したモデルで、多義語のさまざまな意義を関係付けて示している。例えば、英語の RING のプロトタイプ的な意味は、＜指につける輪状の装飾品＞である。＜鼻につける輪状の装飾品＞という意味はプロトタイプからの拡張として関係付けられる。また、両者の共通性は、＜輪状の装飾品＞というスキーマとして抽出されうる。スキーマもプロトタイプも多義語記述にとって不可欠なものとなり、語義ネットワークの構築に働く。

前にも触れたように、多義語は、プロトタイプ義を軸に、意味が拡張していく。つまり、多義語の各意義がプロトタイプ義を中心にして有機的につながり、放射状にネットワークを成す。拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデルは、多義語の中心義から各意義へ放射状に広がるネットワークを成す様子を示す方法で意味記述を行うものである。多義ネットワークを形成する複数の節点を結び付けるリンクに関しては、メタファー、メトニミーなどに基づいて記述ができる。

このように、このネットワーク・モデルは、多義語の様相を適切に、かつ詳細に捉えられるものであり、多義語の全体像を記述する方法として極めて有効であることが分かった。多義語の分析を行う際に、どのモデルを用いて多義構造を示すかは、語の性質に従うものである。語ごとに適切なモデルがあるとは言えるものの、どの語にも統一的に適応できるモデルがあるかどうかについては、まだ研究の余地があると考えられる。

以上で、述べたプロトタイプ理論、メタファー・メトニミーおよび多義語のモデルを用いて、多義語研究の有効性を論じた研究には、田中 (1987、1990)、杉村・赤堀・楠 (1998)、遠藤 (2005)、靱山 (2001)、靱山・深田 (2003a) などがある。また、多くの研究者が認知意味論の枠組みにおいて、具体的な多義語の語彙項目を記述し、その意味構造を示した。

例えば、鈴木（2003）の「ツク」、高橋（2003）の「しる」と「わかる」、田中（1996）の「みる」、今井等（2010）の「小さい」、李（2008）の「ダブる」と「重なる」、梶川（2008）の「散歩」、森山（2011）の「出す」など多く挙げられる。これらの事例研究についての詳しい検討はここでは省き、後の考察では、必要に応じて言及することにする。

ここまでは、多義語に関する意味分析、多義構造のモデルに関する議論について述べた¹⁰。次節では、応用的な意味研究、すなわち、実用的な目的を持つ日本語教育における多義語研究はどのようなされてきたかについて検討する。

3.2 第二言語習得論における多義語習得

語彙習得は、第二言語習得において重要とされる課題の1つである。また、語彙には多義語が重要な位置を占めていることはいうまでもない。この節では、第二言語習得における多義語習得を概観し、その学習方法、特に日本語学習者の多義語学習法に関わる研究をまとめる。

3.2.1 多義語を対象とした語彙習得研究の課題

外国語・第二言語を学ぶ際に、多義語の習得が困難であることについて、多くの研究者が論じている。田中（2004：3）によると、「基本語は多義的であり、外国語における基本語の運用能力を身につけようとすると、たいへん困難である」という。また、文（2013：53）では、多義語は外国語教育においては、重要な意義を持っているにもかかわらず、長い間重要視されていないため、教育効果もよくないと指摘されている。さらに、杉村・赤堀・楠（1998）と松田（2000）では、日本語学習者にとって、多義語の習得は難しく、学習者は拡張義の意味理解や使用が不十分であることが指摘されている。

学習者にとって、多義動詞に含まれる多くの意味を明確に定義することは難しい。前章の予備調査からも分かったように、多くの多義語は、意味が多い上に、諸意味間の関連性が容易に把握できないなどの理由で、学習者にとって完全に習得することが困難である。学習者は、多義語の一部の意味は習得できたものの、ほかの意味を知らないままの状態でることが多い。それゆえ、多義語の全体像は把握できず、中途半端な学習になってしまいがちである。

また、「一定レベルまでいった学習者が、困難性を感じるのは特に多義語や類義語であると思われる」（岡 2007：467）のように、多義語だけではなく、多義語の意味に関連する類義語との使い分けも学習者にとっての難関である。予備調査からも同じような結論が得られた。これまでの教育の難点として、多義語（や類義語）の意味や用法を列挙するだけであるために学習が効果的ではないこと、類義語との違いが習得できないことなどが挙げられる。それゆえ、多義語を統一的に説明し、類義語との違いを明らかにすることが必要である。

さらに、多義語の延長線にある複合語も習得しにくいと報告される。前章の調査では、

学習者が「つける」を難しいと感じる理由の1つとして、「多くの複合動詞の一部となれる」ということが挙げられた。森田（1978）によると、複合動詞については、学習の機会があまりないので、複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階に進んでしまう。単純動詞が既習語であっても、それらが合成する意味が理解できるとは限らない（p. 79）。学習者にとって複合動詞の習得は容易ではない。「単独で使われる場合の意味（本義）がどのような形で複合動詞の中に生かされているのか、その面から考察するのは、たとえば、外国人学習者の日本語習得の場合には教育的効率に関わる重要な問題だからである」（姫野 1999: 19-20）のように、複合動詞の学習は単純動詞の習得も促進できる。したがって、効率的な学習のためには、多義語をその意味の延長線にある複合動詞などと切り離してはいけない。

外国語・第二言語習得では、学習者の母語と既習のものの重要性が認められている。新しい語を学習するときは、語形、音韻、意味の3つを結びつけることから始まることが多いと考えられるが、その際は、まず、母語を通して初出の語の意味を捉え、ある概念を形成させる。そして、それと目標言語の形式を対連合させるのである。また、多義語の習得は、母語から得た概念ばかりではなく、既習の目標言語の意味とも連合させ、新たな意味を追加するという形で行われていくと考えている。したがって、学習者の多義語習得を考察する際には、学習者の母語に配慮しつつ、既習のものと比較しながら、学習者の中の多義語意味体系の形成を動的に考えなければならない。

以上、先行研究を引用しつつ、多義語の習得が難しいという現状を述べた。また、多義語を対象とした語彙習得研究の課題として、多義派生と意味間の関連性、当該語に関連する類義語と複合語、学習者の母語に対する配慮などのキーワードを挙げた。多義語の中心義（プロトタイプの意味）は、習得されやすいのに対して、派生義（非プロトタイプの意味）は習得されにくいことが先行研究で示された。しかし、なぜ派生義が習得されにくいのか、また、どのような派生義が習得されにくいのか、多義語の未知の意味はどのようにすれば記憶に定着させることができるかは、いまだ研究が十分ではない。さらに、多義語を習得させるにはどのような多義語の記述法が要求されるか、関連語をどう処理するか、学習者の母語にどう配慮すべきか、などのさまざまな具体的な課題が挙げられる。多義語習得の過程で出現したこれらの問題点を解決するには、教材と教師の工夫が必要とされる一方、学習者がどのように多義語を習得していくのかも課題となる。そこで、次節から、多義語の習得について考察する。

3.2.2 多義語の習得研究

3.2.2.1 多義語習得におけるプロトタイプ、スキーマとネットワークモデルの応用

認知言語学的な理論を言語習得に生かすことができるという指摘には山梨（2001: 16）がある。

日常言語は、プロトタイプの中心的な事例から、段階的なグレイディエンスを経て周

辺的事例、非典型的な事例へと分布する動的ネットワークとして把握することが可能となる。この事実は、言語習得や外国語の習得の過程とも密接している。一般に、プロトタイプの典型的な事例は（周辺的、非典型的な事例にくらべて）実際の伝達の場合において使用頻度が高く、理解と記憶の観点からみて情報処理が容易であり、言語主体にとって比較的初期の段階から習得が可能な事例である。

これを、多義語の学習について適用して言えば、初級の段階から、プロトタイプの意味を習得できる可能性が十分あるということになる。それに、多義語の習得においては、プロトタイプ義から派生義への習得順序が合理的であると考えられる。森山(2006、2008)は、格助詞の習得がプロトタイプの用法から拡張的用法へと進むことを明らかにした。

また、遠藤(2005: 35)は、多義語をプロトタイプ型とスキーマ型などに分け、多義語の語彙教育においては、「その多義語を公式化したり（プロトタイプ型・スキーマ型）、語義全体（または複数の語義）にかかわる抽象化・概念化した意味を図などで示す（主としてスキーマ型）」ことが効果的な指導方法であると述べている。前にも触れたように、語の概念が把握できないのが多義語の習得されにくい原因の1つである。学習者にスキーマを提示するのは、その解決策となると考えられる。

プロトタイプとスキーマの有効性を用いた研究成果を辞書にまとめた先行研究がある。荒川(2011)、今井(2011)、森山(2012)は、多義語に関する認知言語学の理論を用いて、学習者にとって真に重要な基本語のみを厳選し、そのうえで、中心義は何か、派生義にはどのようなものがあるか、語義の派生はどのような理由で展開したかを明示することで、複雑な多義語の意味を「意味のネットワーク」として一まとめに記述した(森山 2012: 3)。

また、松田の一連の研究は、プロトタイプとスキーマなどの認知言語学の理論の枠組みを用いて、ある特定の語彙に着目し、その意味構造を明らかにしたうえで、横断的手法を用いて学習者の習得過程を研究した。松田(2000)は、動詞「割る」を対象語にし、「学習者が「割る」をどのように理解しているか」という問いについて、調査を行った。調査の課題は、次の3点である。①意味的に関連した類義語の使い分けができるか、②多義語的な意味用法が十分に使えるか、③「割る」に対する典型概念（プロトタイプ）が獲得されているかという3つである。3つの調査から、松田(2000)は、プロトタイプ的な概念を獲得したとしても、それは母語話者とは異なるものであり、類義語との差異化能力や用法の一般化能力と結びつくことはない指摘した。また、プロトタイプ的な概念自体が学習者の母語を通じて形成されている可能性は否定できず、学習者の意味知識を豊かにするためには、学習者のプロトタイプ的な概念を修正し、隣接語との差異化や用法の一般化を促すような支援が必要であると述べた。

ここまでの先行研究に対する検討から分かるように、学習者にとって、多義語学習においては、プロトタイプ的な概念を用いるのは有効であることが、多々のプロトタイプとスキ

ーマを用いた研究成果で証明された。しかし、学習者はいつでも語のプロトタイプ義を自力で獲得できるとは言えない。その1つの要因として、学習者のプロトタイプは母語話者のものとは違うということが挙げられる。そのうえ、スキーマは抽象的なものであり、学習者が多義語の多くの意味からそれを抽出するのも容易ではない。こういった点に注目し、学習者の母語を研究の視野に入れたのは、言語転移理論とプロトタイプ理論をともに用いた次のような研究である。

加藤（2005）は、中国語母語話者を対象に、第一言語（以下 L1）としての中国語における多義語“开「開ける」”、“看「見る」”のプロトタイプの意味と派生的意味が第二言語としての日本語を習得していくうえで、どのような影響を与えるかを言語転移の可能性に焦点を当てて、中国語母語話者の日本語の語彙習得の受容と産出の両面から調査したものである。そして、正誤判断テストと発話テストを実施し、中国語の転移率と母語話者が判断する当該意味の典型性順位との相関を分析した。その結果、正誤判断テストでは、転移率と典型度の間には有意な相関がなかったものの、発話テスト、すなわち、産出面については有意な相関が見られたという。

加藤（2005）は、用法の典型度と正答率を考察することで、L1 の典型度が高い用法は、受容面と産出面とは関係なく、転移可能性が高いのに対し、L1 の典型度が低い用法は、産出面は転移の抑制が働くものの、受容面に関しては、L1 の知識に依存する傾向があり、正の転移や過剰拡張が起こりやすいと結論を出した。これは学習者の母語に関わる認知基盤を明らかにするための研究でもある。

以上のように、学習者の多義語学習においては、プロトタイプ、スキーマとネットワークモデルを用いた学習法が有効ではありながらも、語のプロトタイプ義とスキーマを学習者がいつでも自力で獲得できるとは限らない。そこで、学習者の母語に配慮し、多義語のプロトタイプ、スキーマを獲得させるための支援が必要である。

3.2.2.2 多義語習得におけるコアの応用

前にも触れたように、コア、プロトタイプ、ネットワークといった理論の枠組みで、多義語の意味研究を行うことが可能である。コアは、語の最大公約数的な意味であり、多義語の意味範囲の全体をとらえる概念である。こうしたコアの考え方は、語彙学習の観点からも役に立つと考えられる。以下では、先行研究を挙げつつ、多義語習得におけるコアの応用について述べる。

ここではまず、松田（2001）の研究を挙げる。松田（2001）は、田中のコア図式を日本語の複合動詞後項「～こむ」の分析に応用し、日本語教育への応用を示唆している。松田は日本語学習者の「～こむ」の習得困難点について次のように指摘する。①「V1+こむ」と「V1+入れる」の意味的差異が分からない（例：「呼び込む」、「呼び入れる」）、②単純動詞（V1）と複合動詞（V1+こむ）の意味的差異が分からない（例：「埋める」と「埋め込む」）、③移動先が喚起されない「～こむ」の意味づけができない（例：「台本を読み込む」）。こ

のような習得困難点を克服するために、松田は「～こむ」のコア図式を仮設した。

次に、松田（2004）は、松田（2000、2001）を踏まえ、語彙項目の意味知識を豊かにする支援への可能性を探り、日本語教育の視点から複合動詞研究を概観したものである。松田（2004）は、コア図式に基づく意味記述を用い、多義的複合動詞「～こむ」を対象語彙として分析を行った。また、「～こむ」について、学習者が持つ意味知識について、受容および産出の面から調査を行った。調査の結果、上級学習者であってもその習得は不安定であり、使用を避ける傾向があることが分かった。さらに、「～こむ」の多様性を学習者が自力で学ぶことは困難であるとも述べた。松田（2004）は、習得研究およびその習得支援に認知意味論による意味論的考察を利用した試行的な実証研究である。

図 3-4 が示すように、コアは学習の産物であり、文脈を捨象した場合の意味のあり方である（田中 2004：5）。田中のコア理論は、コアを図式としてとらえ、図式の認知的操作を通して多様な意味を説明しようとするところにある。これはカテゴリーとプロトタイプの理論を多義語の語彙学習に実際に応用した研究である。コア理論は、語が複数の意味を持つことからくる習得・学習上の問題点を踏まえたうえで、複数の語義を羅列することを避ける。コア理論では、多義語の複数の語義において共通する部分を抽出し、その部分の抽象化を繰り返して中核的な意味を作り上げていく。

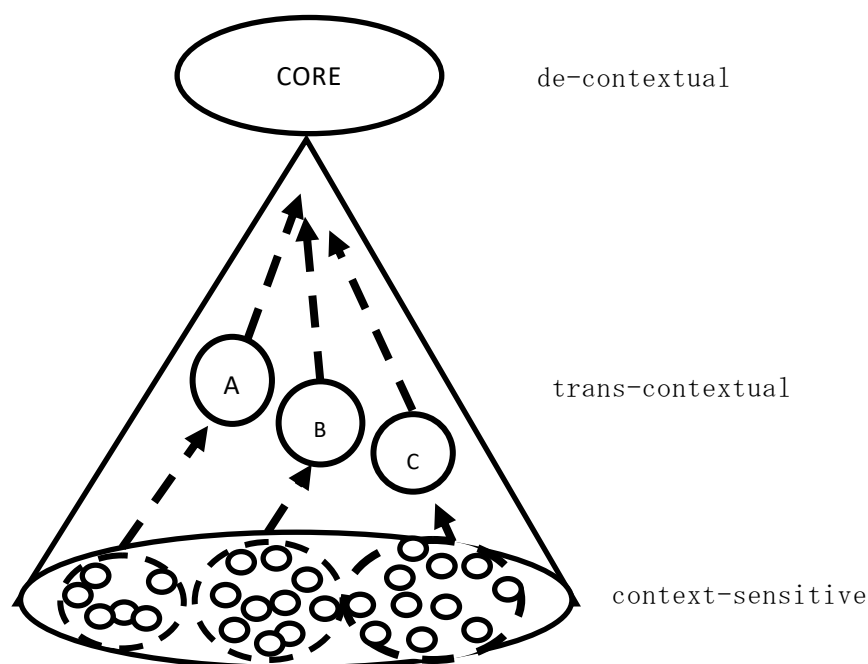


図 3-4 コア抽出のイメージ図（田中（2004：5）による）

横山・三ッ木（2014：280）が示しているように、コアを多義語の語彙学習に応用することの目的は、「多義語の持つすべての語義を統一的に説明することができる一つの中核的な意味、すなわち、コア・ミーニングを学習者に提示するということ」である。田中（2004）

の考察から、コア・ミーニングは英語教育における多義語指導にその概念を役立てることが効果的であり、コア・ミーニングを応用したコア図式を用いて指導することにより、多義語に対する学習者の記憶の負担を軽減させることが可能であると分かった。

また、白石・松田（2014）は、第二言語学習者にとって納得のいく説明を求めて、本動詞の意味から複合動詞の意味推測が可能となることを目指し、多義動詞「ぬく」を後項とする複合動詞「V-ぬく」を取り上げて、コア理論を援用してその意味を記述したものである。「コア図式」に関しては、無秩序に列記されているように感じる多義語の語義の抽象化によって、その語義のスキーマを作り上げ、文脈に依存せずにその語が持つすべての用例に対応できる1つの意味、すなわちコア・ミーニングを作り出すことができるというのがその利点であると言える。

しかし、松田他の研究では、学習者の母語の影響に対する考察が不十分である。町田（2002）と谷口（2003）が指摘しているように、多義語の意味拡張のプロセスでは、プロトタイプとしての中心的な意味から周辺的な意味への拡張の背景には、メタファー、メトニミーなどの認知作用が働いている。コア・ミーニングを用いただけでは、メタファーなどによっての意味拡張が十分に説明されることはない。コア・ミーニングを文脈に埋め込み、実際の運用に応用するといった認知作業は、学習者に委ねることになってしまう。学習者は、目標言語の話者とは異なる認知背景を持っているので、独力で出会った意味にコア・ミーニングといった結果を用いて埋め込めるか、また、文脈に応じた意味を導き出せるかが問題である。それに、コアは抽象的なものなので、学習者がそれをどこまで理解でき、そして、多義語に出会うたびに活用できるのかについて検証した研究は少ない。

3.2.2.3 多義語習得におけるコロケーションの応用

日本語のコロケーションの分類について、国広（1985）は、連結の固定度と意味の固定度の視点からコロケーションを「語連結」、「連語」、「慣用句」の3つに分けている。また、この三者はそれぞれ独立したものではなく、「連続体を成している」（p.6）という。この分類を踏まえて、靱山（2002）は、意味拡張の面から「普通の句」、「連語」と「慣用句」の3種類に分けている。普通の句は、「美しい花」のような、「それぞれの句を構成している各語の意味を足し合わせることによって、句全体の意味を導けるもの」（p.121）である。また、「風邪をひく」などのような、「句を構成している各語の意味から句全体の意味を導くことはできるが、語動詞の結びつきが（ある程度）固定しているもの」（p.122）を連語という。さらに、慣用句とは「語同士の結びつきが固定していることに加えて、構成要素である各語の意味（各語が慣用句の一部ではなく、普通に使われるときの意味）から、句全体の意味が導けない句」（p.123）である。

靱山の定義から、コロケーションについての研究は、多義語の分析のみならず、多義語の習得支援にも援用できると考える。語学学習という観点から見ると、目標言語を用いて適切に表現するには、連語を数多く習得することが不可欠になる。また、麻生・志水（2011）

が指摘しているように、「意味拡張経路を明確にできる靱山の定義は、多義語の多義構造を明らかにできるものと考えられる」(p. 125)。語彙を学習するということは、単語が文中でどのような語と組み合わせて使えるかを理解するということを含む。つまり、単語を文レベルで使いこなせるようにするには、コロケーションの知識が必要だと考える。

上記のように、言語使用におけるコロケーションの重要性が認められてくるにつれて、第二言語習得研究でもコロケーション学習の役割が重要視されつつある。それに、語彙学習においては、コロケーション学習法の必要性和重要性について、多くの議論がなされている。ネーション(2005: 371-372)は、「言語知識はコロケーション的知識である。すべての流暢で適切な言語使用はコロケーション的知識を必要とする。多くの単語は、コロケーションの制限された組み合わせで使用され、これらを知ることは、単語を知ることに関する一部である」と、言語学習におけるコロケーション知識の役割を示している。

また、三好(2007)により、「語彙指導において連語で覚えるように指導することが、語の適切な使用のために効果的である」(p. 87)ことが明らかになった。その有効性の要因としては、連語という塊で覚えることの効果や、記憶の促進、助詞の正確性についての効果、共起関係の知識の獲得についての効果などが挙げられている。また、「連語による語彙指導は、日本語能力の低い学習者に、より有効である」(p. 87)ことが示唆されている。初級レベルの学習者に限らず、中・上級の学習者にとっても、コロケーションを用いた学習が重要、かつ必要であることは、本論2章の予備調査からも分かっている。

また、麻生・志水(2011)は、多義語の、コロケーション体系における位置づけを示したうえで、日本語における多義語コロケーションの特徴について記述し、その特徴から第二言語学習への応用を検討している。近藤・松谷(2013)は、コーパスの調査を用いて、外国語学習におけるコーパス活用の有効性を論じつつ、コロケーションを知ることが語彙学習において重要であることを示している。前川(2015: 73)では、「日本語を学ぶ学習者は語彙を単独で覚えるのではなく、連語の形で用法を学ぶことが重要である」と指摘されている。また、コロケーションを利用することで、学習者の負担を減らすこともできる。「コロケーションに関する研究は、パターンがあることを示している。これらのパターンを意識することで、ある種の単語の学習負担を減らすことができる」という(ネーション2005: 64)。

そして、多義語習得におけるコロケーション研究の成果を生かし、日本語教育に応用した代表的な研究には、姫野(2012)と小野・小林・長谷川(2009、2010)がある。姫野(2012)は、一般の国語辞典では引くことができないコロケーションの収録にも着眼し、動詞、形容詞、形容動詞を見出し語にした辞典である。学習者が「正しい日本語」を用いるための手本になることを目指し、数多くの生きた例文を集めているのが特徴である。学習者にコロケーションに関わる情報を数多く提供している。

また、小野・小林・長谷川(2009、2010)は、日本語学習者向けの参考書であり、多くの語例を挙げている。ここでは、「つく・つける」(pp. 21-24)を一例として挙げ、同書の

構成を述べる。まず、見出し語の漢字表記を明示し、意味を分類する。次に、意味同士のつながりを意味拡張の面から感じさせるために、コロケーションを例示し、それと該当する意味を選択させる練習を設定する。さらに、コロケーションと大きくかかわりのある助詞や見出し語の活用形・複合語などの穴埋め練習を設け、その次は、選択問題となる。また、複合語、慣用句なども幅広く出してある。ここまでの産出練習に対し、その次は、「読んで内容を確認しよう」があつて、長文をもってコロケーションを学ぶ練習問題になっている。最後の「調べてみよう」は、日本語の知識を深めるための課題であり、見出し語の関連する表現を提示し、学習者の自学を促す。小野・小林・長谷川（2009、2010）は、多義語学習におけるコロケーション学習法の有効性を立証しつつ、学習者自身の積極的な学習態度を培っていると言えよう。

以上で、多義語習得におけるコロケーションの有効性と必要性、そしてその応用について議論してきた。コロケーションの検討を通して、単語を実際に産出する道を示すと同時に、類義語との使い分けの情報も与えられる。難しい文法項目が含まれていたとしても、それを大きなフレーズとして覚えているので、コロケーションの使用は、学習者の言語運用を実際の能力以上にうまく見せるストラテジーでもある。また、単語の典型的なコロケーションを知ることは、語彙知識の1つの重要な側面である。よって、多義語を指導する際、日本語を用いての語釈より、適切なコロケーションを使った方が分かりやすくなり、学習者の習得に役立つ方法だと思われる。

コロケーションを用いた外国語・第二言語教育の効果が認められる一方、いくつかの疑問点も残っている。例えば、教育現場では、どのコロケーション項目を教えればいいのか、それらをどのように効果的に教えればいいのか、といった問題が明確に示されているとは言えない。次に、どこまでのコロケーションを教えるのかも問題になる。つまり、一部のコロケーションを教えることで、ほかの要素が無視される可能性があるということである。また、指導すべきコロケーションの提出順序も問題となる。さらに、大神（2017: 57）が指摘しているように、学習者が多義語の共起語として使用できる語の範囲は、広がり欠けている。では、習得の支援として、どのように共起語の範囲を広げていくかも課題となる。それゆえ、コロケーション学習の役割を見直し、適切なコロケーション学習法と指導法を考えるべきである。

3.3 本研究の位置付け

3.1 から分かったように、多義語の諸意味をすべて統括できる分析が行われてきた。3.2 では、プロトタイプ、スキーマ、意味ネットワーク、コア、コロケーションなどをキーワードにして、多義語習得におけるそれらの応用、そしてそれらを用いた多義語の学習法をまとめた。どの学習法にも長所と短所があり、すべての多義語学習に適用することはできない。このように、多義語についての研究成果は、日本語教育の現場には十分に反映されているとは言えない。また、日本語教育における多義語習得・指導の面からも検討の余地

があると考える。

初級・中級レベルの学習者ばかりではなく、上級レベルまで到達した学習者も、多義語習得の難しさを感じている。多義語を学習するには、ある語に関して、さまざまな意味や用法を調べていく方法があるものの、それだけでは、その語の持つ意味の共通性を理解し、獲得することは難しい。自由に産出することは、いっそう難しい。授業実践者としても、同時に多義語のすべての意味を学習者に提示するわけにはいかず、多義語の指導法に戸惑うことがある。多義語に関わる複合語や連語、慣用句などを習得するのであれば、その類義語との意味の違いを区別するのであれば、それぞれの構成要素の多義性が関係してくる。これらの、多義語の関連語と思われる語も、記述の対象にするのが学習者の語彙を増やす方法であると同時に、学習者の学習負担を減らす方法でもある。そこで、本研究では、語彙習得支援の立場に立ち、1つの多義語に対する単なる意味の究極的な記述ではなく、多義語を語彙ネットワークの中心に置き、それに関連する語彙をカテゴリー化して、多義語とその関連語を統括できる記述を試みる。

また、目標言語と第一言語は、同時に学習者の頭の中に存在し、両者を切り離してはいけないので、学習者の母語に配慮した多義語の意味記述を試みる。中国語母語話者日本語学習者にとっては、日本語を学習する際、母語からの影響を排除しようとしても容易にできるものではない。中国語と日本語は、表記上共通しているところが多いために、かえって混乱がもたらされることはいうまでもない。白井・松田（2014：112）によれば、「第1言語習得と第2言語習得ともに同じ知覚・記憶・カテゴリー化・一般化のプロセスを利用する。異なるのは、学習環境と学習者が言語と言うものに関して既に知っていることとその既存知識が新しい言語の近くをどう形作っていくかなどである」。つまり、第二言語習得の場合、学習環境が一定だとしたら、既存知識（母語とすでに学習した目標言語の知識）をどう活かすか、（母語の場合は負の転移と正の転移がどう生じるか）によって、学習者の習得に影響を与える。言い換えれば、学習者の母語を考慮し、その正の転移を促進すればするほど、習得が進んでいくのである。

さらに、白井（2008：11）では、母語の影響について、「母語と第二言語の距離が近いほど、（1）転移が起こりやすく、（2）転移は正の転移となり、全体として学習が容易になるが、（3）母語と第二言語が違っている部分については間違いがなくなりにくい」と指摘している。しかし、これまでの多義語習得研究は、母語の影響を認めているにしても、学習者の母語に対する配慮は足りない。そこで、本研究では、学習者の母語に十分に配慮したうえで、中国語母語話者日本語学習者に適応する多義語の分析方法と提示方法を探ることにする。

学習者に理解しやすい、かつ覚えられうる、産出できる意味記述とはどのようなものだろうかを考えるには、学習者がどのように多義語を学習し、意味を推測・理解しようとしているかを検討する必要がある。そこで、本研究では、予備調査の結果に基づき、「つける」を事例研究の対象として決めておき、中国語母語話者学習者の多義語習得に役立つ分析を

行うための縦断的な習得調査を実行する。この調査では、学習者の習得過程を観察し、その様子をありのままに記録する。そのうえで、テストやインタビューを通して、学習者の多義語理解に関するメカニズムを究明する。このように、学習・習得のプロセスを把握したうえで、綿密な分析を行うことによって、語の多義記述とその指導研究のためのデータが獲得できると考える。

授業中でも、直接的な語彙指導ができ、そして、行うべきであることを保証するためには、カテゴリー化のメカニズムを応用し、初級、中級の段階で多義語の存在および語義間の連続性を意識させ、日本語学習の進展につれて、多義語の各意味をカテゴリー化させるような工夫が必要とされる。そこで、本研究では、拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデルを用いて分析を行う。ネットワーク・モデルは、該当の多義語のみならず、その関連語の分析にも使えるので、多義語とその関連語の意味を記述し、その裏付けを得たうえで、学習者（教育現場）のニーズに応じて意味用法を抽出し、学習者がそれらを使えるようになるための道標を示すことができる。

本研究では、多義語のプロトタイプとスキーマを提示したうえで、中国語母語話者学習者の持つ、母語知識と比較・対照する独特の認知機能を活かし、母語の負の転移による誤用を防ぎ、彼らに理解しやすい文脈でスキーマに対する理解を深めつつ、意味の習得を実現させうる多義語分析を試みる。また、第二言語習得におけるコロケーションの必要性を生かし、それを用いて派生義に関する学習法、有効な学習活動例を示すこととする。

この研究は、中国語母語話者の日本語習得という観点から、多義語とその関連語を統括できる語彙ネットワークを作り、学習者の日本語多義語習得に役立つ多義語記述を目標にして、学習者のニーズに応じた多義語分析の可能性を探ることになっている。そこで、本研究を、多義語の意味分析に関する理論研究からスタートし、学習者の多義語習得支援を目標とする実用的な目的を持つ、応用研究への橋渡しの手法を探る研究であるというように位置付けた。

第4章 「つける」の習得過程に対する縦断的調査

第2章の調査から、「つける」は学習者にとって学習困難な語であることが分かった。一方、第3章の先行研究から、学習者のニーズに応えられる多義語記述、特に、学習者の母語に配慮した多義語の意味分析には、まだ検討する余地があると分かった。また、筆者が調べた限りでは縦断的な調査を用いて、ある多義語の習得の実態に迫った研究は、まだない。そこで、本章では、縦断的な調査方法を用いて、中国語母語話者学習者の「つける」の習得過程を考察する。

4.1 調査の概要説明

学習者の習得を支援できる意味記述とはどのようなものだろうかを考えるには、まず学習者の多義語習得のプロセスを考慮する必要がある。そこで、今回の調査を大きく2つの部分に分けて行う。縦断的調査にあたり、まず、調査協力者が調査期間中に使用している日本語教科書を対象として予備調査を行う。教科書においては、「つける」がどこでどのように提出されるかを調査し、その箇所における「つける」の例文をまとめて分析を行う。

次に、教科書分析から得られた知見を踏まえ、調査協力者の「つける」の習得過程に対する縦断的調査を実施する¹¹。全体の調査期間は約2年間（2014年9月～2016年6月）である。この調査は、中国の某大学で日本語を学習する中国語母語話者6名を対象にしたものである。調査協力者の選出にあたっては、成績の良し悪しを問わず、話すのが上手でよく協力してくれそうな学生を選んだ。調査協力者に調査の目的や内容などを説明したうえで、調査を始めた。調査協力者の属性を表4-1に示す。

表4-1 縦断的研究の調査協力者

調査協力者	性別	調査開始時の日本語レベル
A	男性	五十音図が少し読める
B	女性	日本語学習経験なし
C	女性	日本語学習経験なし
D	女性	日本語学習経験なし
E	女性	日常生活の中の挨拶用語がすこし分かる
F	女性	日本語学習経験なし

表4-1から分かるように、調査協力者の6名は誰も体系的に日本語を学習したことがなく、ほとんどはゼロから学習し始める学習者である。調査期間の約2年間において、授業観察とテストをそれぞれ数回にわたって行い、そこから得た一連の調査結果をまとめたうえで、「つける」の習得現状の分析を行う。習得のプロセスを把握したうえで、学習者の多義語理解に関するメカニズムなどを究明すれば、今後の多義語記述とその指導研究に信憑性のあるデータが得られると考える。この調査から得た結果を「つける」の意味記述分析

の根拠とする。

4.2 研究課題

第二言語習得において明らかにすべき研究課題の中でもっとも重要な研究課題として、鈴木・白畑（2012：115）は、次の3点を挙げている。

- (1) ①母語からの転移がある。それはどのような場合になぜ生じるのか。
- ②普遍的な習得順序・発達段階がある。なぜそのような習得順序・発達段階になるのか。
- ③学習者によって習得の最終的到達度に差がある。なぜ学習者間で最終的到達度に差が生じるのか。

本研究では、学習者の「つける」の習得過程を究明するために、(1)を踏まえ、本研究の目的に合わせて、調査の中心課題を(2)のようにまとめる。(2)の①と②は学習者の習得についての調査結果に関わる課題である。また、③～⑤はその結果をもたらす要因に関する課題である。

- (2) ①学習者の習得順序と教科書の提出順序は、一致しているか。教科書に出ている用法を無理なく習得できたか。また、学習の困難点はどこにあるのか。
- ②「つける」の意味の中には、習得しやすいものと習得しにくいものがあると想定されるが、それらは、それぞれどのような意味なのか、そして、その理由は何か。
- ③学習者は具体的にどのような方法で「つける」を学習するのか、いかに意味を推測・理解しようとしているのか。習得困難な語に出会ったとき、それを乗り越える工夫はどのようにしているのか。自らの方略がうまくいかない場合は、意味の習得が困難であると想定するであろうが、その結果はどうなるのか。
- ④学習者の中の「つける」のプロトタイプの形成、スキーマの形成、意味のネットワークモデルの形成は、それぞれどのようなになっているのか。形成されている意味構造と形成されていない意味構造は、それぞれどのようなものか。
- ⑤母語の転移（影響）があるか。あるとすれば、どのような転移か。

以上のような調査課題を明らかにするには、学習者の習得過程を観察し、その様子をありのままに記録して考察を行うと同時に、さまざまなテストやインタビューを実施する必要がある。この一連の調査を通して、学習者の多義語習得に関するメカニズムが究明できると考える。また、これらの調査課題を究明したことで、学習者のニーズが分かり、中国語母語話者学習者のための多義語の提示方法の改善案が提出できると考える。

4.3 調査方法と調査内容

続いて、(2) の調査課題を明らかにするための具体的な調査方法と内容を述べる。まず、(2) の①に答えるには、調査協力者が使用する教科書における「つける」の提出順序を調査する必要がある。そこで、予備調査として教科書調査を実施する。

次に、全体の調査期間は約 2 年間（2014 年 9 月～2016 年 6 月）で、その間、教科書における「つける」の提出する時期に合わせて学習者の学習する様子を授業記録の形で書き留める。授業記録に対する考察を通して、(2) の①から⑤までのすべて調査課題にある程度答えられると考える。

また、授業を進めると同時に、さまざまなテスト調査を行う。これらの不定期的に行うテスト調査から、調査協力者の習得状況や出来具合などが観察できる。テスト調査の後、必要に応じてインタビューを実施し、学習者の「つける」に対する理解（イメージ）やテストの回答について不明な点などを話させる。テスト調査終了後、調査協力者の回答をそのまま書き写して、整理する。これらの小テストを実施し、検討することから、(2) の①、②、⑤に対する回答が得られる。

さらに、3 回にわたって、総合テスト調査を実施する。定期的に行う総合テスト調査は、2 つ目の学期から学期ごとに、学期末に実施する。また、調査協力者の事前準備を回避するために、「つける」が調査目標の多義語であることを調査協力者に意識されないように心掛けて、調査を行っていく。総合テスト調査の時期は、次に示すとおりである。

- (3) 第一回 2015 年 6 月 （日本語学習期間約 10 ヶ月）
- 第二回 2015 年 12 月 （日本語学習期間約 16 ヶ月）
- 第三回 2016 年 6 月 （日本語学習期間約 22 ヶ月）

総合テスト調査Ⅰは、調査協力者の多義語の学習方法を調査したうえで、「つける」などの多義語の意味を自力で産出できるか、そして、「つける」のプロトタイプとスキーマに関して、どのように認識しているか、また、「つける」の典型的な意味を獲得しているかを調査するものである。総合テスト調査Ⅰを通じて、(2) の③-⑤に対する回答が出てくると考える。

また、総合テスト調査Ⅱでは「つける」のコロケーションを分類させることで、学習者が「つける」の意味間の関連性をどのように意識し、その関連性を見つけられるかどうか、それらをカテゴリー化することができるかどうか、また、提示された意味用法をどのようにネットワーク化するかを調査する。さらに、意味的に関連した類義語との使い分けができるかどうかについても調査する。このように、総合テスト調査Ⅱを行うことで、(2) の①-⑤のすべての課題に対する回答を求める。

さらに、総合テスト調査Ⅲでは、まず「空所補充」で適切な動詞を産出できるかどうかを試験する。また、与えられた文を読み、指定された動詞の反義語が思いつくかどうかを

チェックする。最後は翻訳テストである。これらを通して、関連語の習得がどれぐらいできているかなどを調査する。総合テスト調査Ⅲを実施することで、(2)の①、②、⑤の回答が得られる。

教科書調査、授業観察、インタビュー、テスト調査といった一連の調査の結果をまとめたうえで、多義語習得の現状を分析し、考察を行う。「つける」の縦断的な習得調査を通して、「つける」の意味別の習得順序およびそれと教科書の提出順序のずれ、習得困難な意味、学習者が形成している多義構造、学習者の学習方法、母語の転移などが究明できると考える。なお、今回の調査においては、文を完成させるテストが多いので、ほかの語彙、文型の誤用なども観察される。しかし、「つける」が習得研究の対象であるため、「つける」以外の誤用を考察しないことにする。

4.4 予備調査としての教科書調査

この教科書調査では、提出課と例文を調べ、教科書における「つける」の扱いをまとめることにする。ここでは、調査協力者が「基礎日本語」の授業で使用した日本語教科書を調査対象とした。教科書は(4)のとおりである¹²。

(4)『新経典日本語 基礎教程』(全三冊)(以下、『基礎教程』という)

『新経典日本語 基礎教程第三冊同步練習冊』(以下、『第三冊練習冊』という)

『日本語能力テスト 2級語法対策』(以下、『2級語法』という)

同じ初級の総合教科書といっても、語彙項目によっては、ある意味用法が提出されていなかったり、提出順序が大きく異なったりしているのが現況である。しかし、今回の教科書調査は、「つける」の習得過程に対する縦断的調査のためのものであるものであるので、提出順序が妥当であるかどうかなどについては問題にしない。

(4)の教科書は、いずれも教室で教師の指導の下で利用した教科書であり、各用法は、確実に授業中に学習したものである。『基礎教程』の第一、二冊は、基礎会話と応用会話、正文、文型、注釈、練習、単語表からなる。第三冊は、基礎会話を除き、他の部分は第一、二冊と同じである。『第三冊練習冊』は、『基礎教程』第三冊とともに使用する教科書であり、練習問題を中心とした教材である。『2級語法』は、四学期からの日本語能力試験 N2 文法指導に使う教科書で、N2 の文法解説と練習問題を中心に行っている教材である。なお、(4)の教科書は、「基礎日本語」という授業で使用するものである。この教科のほか、日本語リスニング、会話、作文などの授業もある。また、「基礎日本語」の授業数は、1年のとき、週4回(一回90分)で合計120回である。2年のときは、週3回で合計96回である。

調査期間の2年において、「基礎日本語」という授業で学ぶ「つける」の用法を示す。表4-2では、(4)の教科書に現れた「つける」の提出課、例文、単語表での記載・不記載

とその中国語訳などを示す。また、学習者の「つける」の習得過程を観察する際に、「つける」の関連語にも触れるので、ここではその関連語としての複合動詞、自動詞「つく」の例文なども表 4-2 にまとめる。

表 4-2 調査協力者が利用する教科書に出現した「つける」とその関連語

提出課	例文	単語表における中国語訳
一冊 9 課 (正文)	プールでは <u>ゴーグルをつけなければ</u> なりません。(p. 132)	つける (戴上)
一冊 9 課 (文型)	<u>車に気をつけ</u> なくてははいけません。(p. 134)	気をつける (注意)
一冊 9 課 (文型)	A: 暑いですね。エアコンをつけましょうか。 B: いいえ、大丈夫です。(p. 134)	つける (打开 (空調等电器))
一冊 10 課 (基礎会話)	この料理は味がついてますから、何もつけないで食べてください。(p. 144)	なし
一冊 10 課 (正文)	<u>お酢も醤油もつけ</u> ないで食べましたが、おいしかったです。(p. 146)	つける (蘸, 抹)
二冊 1 課 (応用会話)	でも、 <u>ストーブをつけたまま</u> 、寝てはいけませんよ。危ないですか。(p. 3)	つける (点燃; 打开 (電源))
二冊 1 課 (正文)	まず、教科書を 1 冊買って、 <u>基礎知識を身に付け</u> ます。(p. 4)	身に付ける (掌握)
二冊 2 課 (関連語彙)	日記をつける (p. 27)	なし
二冊 5 課 (文型)	私は毎日必ず <u>日記をつける</u> ことにしています。(p. 60)	つける (写上, 记上)
二冊 6 課 (基礎会話)	A: これからは、遅れないようにしてください。 B: はい、これから <u>気をつけ</u> ます。(p. 70)	なし
二冊 9 課 (正文)	私のコンビニの店員は <u>身だしなみに気をつけ</u> ているので、きれいに見えます。(p. 108)	なし
二冊 10 課 (文型)	A: ちょっと暑いですね。 B: 暑いなら、 <u>クーラーをつ</u> けましょうか。(p. 123)	なし
二冊 13 課 (応用会話 1)	それから、 <u>基礎体力をつ</u> けるために、選手を走らせましょう。(p. 161)	つける (増加, 附上)
2 級語法 一課	いろいろ <u>難癖をつ</u> けたあげくの果てに、何も買わずに帰った。(p. 3)	なし
2 級語法 一課	英語の勉強を楽しむ人にとっては消費である一方、仕事や、教養、趣味などの道具として <u>身に付け</u> たい人にとっては投資である。(p. 3)	なし
三冊 2 課 練習冊	ビジネス文章に対する苦手意識を克服し、必要に応じてすぐ作成できる <u>スキルを</u> 身に付けます。(p. 13)	なし
三冊 2 課 練習冊	あのさあ、友だちに借りた CD に <u>うっかり傷をつ</u> けちゃったんだ。(p. 14)	なし
三冊 2 課 練習冊	<u>ライトをつ</u> けないで自転車に乗っていたので、警官に注意されてしまった。(p. 20)	なし
三冊 3 課 練習冊	コートのボタンが外れ (取れ) ていたので、母に <u>つけ</u> てもらった。(p. 31)	なし
2 級語法 三課	彼はタバコが好きで、1 本吸い終わったか終わらないかのうちに、2 本目に <u>火をつ</u> けた (p. 22)	なし
三冊 4 課 (練習問題)	高級化粧品を売りつけられる (p. 47)	なし
三冊 5 課 練習冊	問題八: 旅行中、何か <u>気をつ</u> けることはありますか。(p. 47) 問題十: 天才の多かった日本人の心の中に、物事をすぐ忘れすぐ諦めるという <u>癖を付</u> けてしまったように見える。(p. 47)	なし

	……その場その場で安易な一時しのぎの対策を講じて、これで済ませてしまうという一種の無責任さが <u>植え付けて</u> しまったようである。(p. 48) 小テストⅡ <u>いったんこの癖がつく</u> となかなか抜けない。(p. 51)	
三冊 6 課 (文型)	語学を学習する上で大切なことは、基礎的な事項をしっかりと <u>身につける</u> ことである。(p. 73)	なし
三冊 7 課 (本文)	怪談は…。ハーン自身の解釈を加え、内容を <u>付け加え</u> たり削ったりして創作した文学作品である。(p. 82)	なし
三冊 7 課 (文型)	甘いものはついつい食べ過ぎてしまいがちなので、ダイエット中は <u>気を付け</u> ましょう。(p. 86)	なし
三冊 7 課 (練習問題)	あの政党が分裂したのは、要するに <u>政権につける見通し</u> がなくなったからでしょう。(p. 89)	なし
三冊 8 課 (応用会話)	祖父母に花束と大好物のお餅を贈ったの。それに「おじいちゃん、おばあちゃん、いつもありがとう。」って手作りのタイの絵カードも <u>付けた</u> よ。(P. 96)	なし
三冊 8 課 (応用会話)	以心伝心なんて思っていると、勘違いして <u>取り返し</u> がつかないようなことになることもあるかもよ。(p. 96)	[連語] 无可挽回
三冊 10 課 (本文)	ある日、わたしは、とうとう父の八ミリ撮影機を持ち出して、縁側に <u>すえ付け</u> 、アニメーションの制作にとりかかった。(p. 120)	すえ付ける (安装)
三冊 10 課 (本文)	わたしは、がっかりしたが、アニメーションには <u>想像もつかない</u> ほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだということを、子ども心に悟ったのだった。(p. 120)	なし
三冊 10 課 (本文)	子どものときに取り付かれたアニメーションに対する興味は、大人になってからも変わらず、少しずつ勉強を重ねていった。(p. 120)	取り付く (缠住, 迷住)

また、表 4-2 に出現する「つける」の用法と出現数を表 4-3 のようにまとめた。

表 4-3 教科書に出現する用法と出現数

用法	出現数	用法	出現数
電気器具の起動	2	身の回りの品の着用	1
点灯・点火	3	液体の付着・浸透	2
記入	2	体力を備えさせる	1
痕跡を残す	1	付属品の設置	2

表 4-4 は、慣用表現の出現数を示すものである。

表 4-4 慣用表現とその出現数

表現	出現数
気をつける	5
身につける	4
難癖をつける	1
癖をつける	1
見通しをつける	1

以上でまとめた8種の「つける」の用法、5種の慣用表現のほか、複合動詞が4つ（「植え付ける」、「売りつける」、「付け加える」、「据え付ける」）、「つく」に関わる用法が5種（「味がつく」、「癖がつく」、「取り返しがつかない」、「想像がつく」、「取り付く」）あった。教科書の調査結果を(5)にまとめる。

(5)①2年の調査期間において、これらの教材を通じて、学習者が「つける」の多義性のある程度理解できる。

②「つける」の提出順序は、「身の回りの品の着用」「知覚」「電気器具の起動」（同じ課に提出された）が最初であり、プロトタイプ義からではない。

③各意味用法の分布にばらつきが見られる。きちんと分布しているとは言えず、体系は成していない。また、意味間の関連性は、学習者が自力では捉えられない可能性が高い。

④学習が進むにつれて、「つける」に関連する自動詞「つく」の用法や、「つける」が含まれる複合語なども出てくる。また、教科の内容が難しくなるにつれて、「つける」用法の出てくる頻度も高くなり、困難度も高くなる。

⑤教科書では比較的簡単な用法が出現する一方、練習帳や能力試験参考書では難しい用法が出てくる。

調査協力者が学ぶ意味用法は、「つける」の用法の一部しかないが、これらの用法を習得できたら、「つける」の意味構造に対する認識がある程度できていると想定する。実は、調査期間の2年においては、(4)の教科書以外、授業中教師の提示や授業後、学習者の独学、ほかの日本語の授業なども含めて、表4-2で示したものより多くの「つける」の用法に触れる。上記の(5)の結論が「本当に正しいのか」に対する検証も含めて、次節では「つける」の習得過程に対する縦断的調査を行う。

4.5 「つける」の習得過程に対する縦断的調査

4.5.1 授業観察

まず、調査協力者の学習環境を紹介する。調査協力者は、中国の大学で学習しているので、教室以外のところでは、日本語に触れる機会が比較的少ない。当然のことながら、日本人の友達と話し合ったり、日本のアニメなどを見たりはするが、日本語の学習環境に恵まれているとはいいがたい。よって、学習者の日本語の知識の多くは教室で学んでいると考えられ、教室でその学習状態を見て、学習効果を検証することができる。

筆者は、習得調査の調査者であると同時に、授業実践者でもある。そこで、調査開始時の2014年9月から調査終了の2016年6月に至るまで、授業中「つける」に関わる内容を提示するたびに、授業を行う様子や学習者の反応、授業で行う小テストの結果などを記録してきている。調査期間中は、調査者が学習者に対して行った「つける」の指導と解説は、

教科書に載っている用法を中心にしてみた。

続いて、教室で行っている教授法と指導法を簡単に説明する。初級学習者の日本語能力を考慮し、授業における語彙説明は、ほとんど中国語で行われた。「つける」用法についての説明の多くは、教科書に出た用法に限って行った。基本的には、まず、中国語を用いて、新出の「つける」の意味を確認する。そして、いくつかの連語で意味・用法を説明する。また、既習の用法と関連付けて、できるだけ統一的な説明をするように心掛ける。語義間の関連性を意識させるために、中国語でその関連性を話させることもある。インプットおよびアウトプットの練習として、学習者には自力で習った用法を思い出させたり、中国語に訳させたりする。さらに、「つける」を用いて口頭で文を作らせたり、翻訳練習をさせたりすることも多々ある。テスト（小テスト、単語テストなども含む）、宿題などの形で、「つける」の用法を身に付けさせる。

授業実践者の用いる指導法は、意味推測活動、意味付与学習活動、連語学習活動という3つの学習活動を中心にした。また、意図的語彙学習に役立つキーワード法や文脈の中で暗記するといった指導法も、必要に応じて実施した。ただし、本研究はこれらの指導法の有効性を測るものではない。学習者はどのように多義語を身につけていくかを客観的に考察するものである。

4.5.1.1 時間順での授業記録

続いて、授業の記録を取り出して、データを学期ごとにまとめ、そこから得られる情報と調査全体に貢献できるものを示す。この記録¹³は、筆者が時間順に忠実に授業の様子を記したものである。これは、主として、授業で「つける」およびそれに関わる用法を提示する際に、授業の進め方、教授の方法、学習者（特に6名の調査協力者）の反応などである。なお、教授の内容によっては、簡単な考察としての「授業後の振り返り」を付加して、説明を加えることもある。ここに記録したすべての内容は、調査協力者だけを対象としたものではないが、調査協力者の2年間の学習過程を四学期にわたって再現したものである。「つける」の学習と習得に関係するものはすべて記録されている。その上、筆者のその時点での分析・考察を加えたこともある。

一学期（2014.9～2015.1）

このクラスには、日本語を学習する学生が39名いる。大学に入学する前までは、何名かの学習者はアニメやドラマなどを通して、少し日本語に触れたことはあるが、系統的に学んだことのある学習者はいない。一学期では、学習者が日本語を学習し始めて、まだ少しずつ日本語に慣れていく状態である。この学期の前半は、五十音図の学習が中心で、後半ではほとんどの学習者が、単語の暗記や文型を学習の中心とする。動詞の学習をし始めたら、動詞の活用や助詞の使い方、使い分けにも力を入れて、学習の中心としている。これらは、いずれも文法中心の学習である。語彙の学習は、一般的には教科書に出た意味が

学習の中心である。授業中、教師が新出語の意味を数多く紹介することや、授業の後で辞書で調べさせ、意味を自力で学習させることなどは、学習者に負担をかける可能性がある。そのため、この段階では、多くの語が多義的なものであることは認識していても、多義語の意味をすべて学習するわけではない。

学習者が初めて「つける」を学習する課では、「つける」の用法が 3 つも出てきている (2014/12/9¹⁴)。教科書に挙げた語釈を参考にし、それぞれの連語で用法を学習させ、かたまりとして覚えさせる。学習者の語彙量が少ないので、ほかの共起表現を提示しようとしても無理がある。量より、学習の質の方を重視し、学習者の既習の用法をしっかりと覚えさせる。学習の当初の、1 つの意味が出たときから、次の意味の学習につながる効率的な学習方法、多義語の提示法を考えるべきである。

少ないながら、文法を教えると同時に、教師が意識的に「つける」の練習をさせる。初級の段階では、母語を利用したアウトプット練習が授業中ではやりやすいので、これを実行した。調査協力者は、既習の 3 つのコロケーションを無理なく覚えた。一学期では、学習したものが少なく、「つける」学習の難点も現れなかったので、調査協力者間に「つける」習得の差は見られなかった。

二学期 (2015.3～2015.7)

二学期においては、学習者が日本語の学習に慣れるにつれて、単語や文法もだんだん難しくなった。二学期の間、13 回の授業記録を取った。この学期では、「つける」の意味用法のほか、自動詞「つく」も出現している。

学期の最初に、「味がつく」という「つく」の用法が新しく出ていて (2015/3/2)、その意味を確認したうえで、「つける」とは有対自他動詞の関係にあると説明し、「味をつける」の意味を当てさせるという意味推測活動を行った。その結果、E 以外の 5 名は成功できなかった。既習の「つける」の用法と自動詞「つく」の用法から、新しい「つける」の用法への推測はやはり困難であるという結果を得た。その理由には、学習した用法に対する記憶が薄いこと、「つく」の意味用法がまだはっきりと分からないこと、自他動詞の意味上の関連性が明確に把握できないことなどがある。この段階の学習者にとっては、基本的な用法から新出用法へ関係付けることはまだできない。それに、教科書で提示されなかった用例の意味を推測するのも難しい。

この初級レベルの学習者にとって、中国語訳を借りて新出語の意味を学習する方法は、母語の正の転移が生じ、習得に役に立つことがある。例えば、「醬油を付ける」を教えるときに (2015/3/3)、中国語の動詞“蘸”で説明した。学習者の母語体系にある動詞と一対一の関係が見つかったので、習得が容易になる。学習者は、その時点で、「醬油を付ける」の意味が理解できた。また、ここでの「醬油をつける」は「餃子を箸で動かして、醬油に近づかせ、付着させるようにする」プロセスを描いていると説明し、既習用法との関連性も説明した。関連性を知ることは、学習者の多義語学習に役立つ。既習の意味数は多くない

が、学習者の中で少しずつ意味の構造を作っていくことになる。さらに、学習者の比較という認知機能を生かし、日本語では同じ「つける」を用いて表現するが、中国語ではそれぞれ異なる動詞で表現することを学習者に意識させるべきである。

2日後の単語テスト(2015/3/5)では、調査協力者の6名はみんな中国語の“蘸酱油”の日本語訳を正しく書けた。とはいえ、この「つける」の用法を身につけたと言えるかどうかはさらなる検証が必要である。「香水をつける」のようなほかの名詞と共起する場合、うまく理解、かつ産出できるかが疑問である。いわゆる、共起語の広がりについているかということである。一か月後、また「醤油をつける」についての翻訳練習をさせたところ(2015/4/21)、2名(DとE)の調査協力者が「つける」を使わなかった。誤用を産出した2名の回答を見ると分かるように、Dは自分で作った言葉で表現する戦略をとり、Eは動詞を回避する戦略をとっている。この用法の習得には、やはり、難しいところがあると考ええる。

また、類義語に対する正確な理解、類義語間の使い分けもこの段階で要求されている。ここでいう類義語は類義語辞典に載っていて、母語話者の視点から認識できる類義語と、「学習者的な類義語」の2種である。学習者的な類義語とは、語を学習する際に、母語の影響で意味が類似していると思われる語のことを指す。母語話者からは全然類義関係にないと思われる語もあるので、本研究では「学習者類義語」と名付ける。例えば、中国語では、普通の眼鏡でも、コンタクトレンズでも、「装着する」の意味では動詞“戴”を使う。しかし、日本語ではそれぞれ「かける」と「つける」を用いる。このように、母語話者にとって、類義関係に属していない語のペアでも、学習者には類似していると思われることがある。学習者に誤用を生じさせないように、こういった学習者類義語の用法は明確に提示すべきである。

二学期では、電気器具などを起動する意味の「つける」について、数回にわたって、インプットとアウトプットの練習を行った。すでに学習者の中には定着し、長期記憶に残っていると思われるが、学習者がいつでも正しく産出できるとは言えない。Eは「*電気を開けたい」と間違えたことがある(2015/3/30)。「開ける」を使うのは、やはり母語の負の転移に関係し、留意しないと、思わず犯してしまう誤りである。ほかの学習者の回答からこういった傾向が見られる。「つける」と「開ける」も、学習者類義語のペアである。

「日記をつける」も、この学期に学んだ用法である。「つける」はそのプロトタイプの意味と既習の用法とはどのようなつながりがあるかを学習者に考えさせたが、適切な回答は得られなかった。6名の調査協力者は、全員「特に関連性がない」のような答えを出した(2015/6/1)。学習者からいうと、「日記をつける」においての「つける」はそのプロトタイプの意味から少し離れた用法のように見えるとはいえ、同じ物理的な行為を表わす用法であり、プロトタイプ義との関連性をつかむのがそれほど難しくはない。学習者は、語義間のつながりを自力で見出すのがまだ困難であることが分かった。したがって、こうした用法間のつながりを明確に見つけさせるための支援が必要とされる。

中国語では、“记日记、写日记”は普通に使っているが、日本語に対応する動詞は「記す」と「書く」である。「日記をつける」を1つのまとまりとして学習し、覚えている。しかし、「日記を書く」と書いた学習者もある(2015/6/2)。「日記を書く」は間違いではないものの、中国語母語話者学習者の産出しやすい表現でもあり、こういった回答からは、母語の影響が見られる。「日記をつける」を徹底的に習得させるには、単にまとまりとして覚えさせるのではなく、やはりここでの「つける」とプロトタイプ的な意味との関係を明らかにすべきである。つまり、“写日记”を日本語で表現するときに、「つける」を使う理由を明確に示すことである。

これまでの授業記録から分かるように、学習者は少しずつ「つける」の意味用法を積み重ねてきた。しかし、まだ教科書に出ている連語にしか注目できず、語の意味についてまだ深く考えることができない。また、意味間の関連性を見出すことも、このレベルの学習者にとっては無理なところがある。さらに、母語に頼り、母語との対応関係を見つけていきつつ、学習を進める傾向が非常に目立っている。場合によっては、母語からの負の転移も生じる。次節からの各テストの結果からも分かるように、調査協力者の間には習得の差がすでに現れた。

三学期(2015.8~2016.1)

三学期においては、学習者の反応や習得の状態から、連語学習の効果が見られてきた。しかし、学習者の身につけた連語は学習したものに限定されている。学習者にとって、独力で表現を生み出すのは、まだ困難である。例えば、「ネックレスをつける」を導入するつもりで中国語で“戴项链”と言って、それに相当する日本語の動詞を推測させた(2015/9/24)。その結果、「つける」への推測は成功しなかった。着用を表わす「つける」の「ゴーグルをつける」は既習だが、学習者の中にはそれしか存在しておらず、ほかの名詞と置換すると、思い出せなくなってしまう。いわゆる共起語の広がりには欠ける、ということである。

また、自他動詞の使い分けも、このレベルの学習者にとって困難に感じる。これは二学期にも現れた現象である。「気をつける」と「気がつく」の練習では(2015/10/15)、学習者の回答を見て分かるように、間違った回答もあれば、中途半端な回答もある。「気をつける」と「気がつく」は、単純動詞「つける」と「つく」のプロトタイプ的な意味とは関連性があるものの、学習者はそれらを考えずに、連語を1つのまとまりとして覚えている。この学習の段階の学習者にとって連語を覚えるのはあまり困難ではない。しかし、いざ文に入れるとなると、うまく使えなくなってしまうのである。その結果、誤用が多数生じた。特に、「気がつく」の場合、二格要素が要求されるのであるが、二格で正しく表現できた調査協力者は一人もいない。この段階の学習者にとっては、連語そのものより、さらに大きい単位の文における運用の練習が以降の学習の重点であろう。

使役性が含まれる「つける」の意味用法もこの時期に出現した。「それから、基礎体力をつけるために、選手を走らせましょう」(2015/11/18)。中国語訳は、“然后，为了提高体

能，让队员们跑步吧”である。「基礎体力をつける」が「選手に体力を持たせる」という意味を表わすように、この「つける」には使役性が含意されるので、いままで学習した用法とは異なる性質を持っている。また、中国語にも使役を表わす動詞があるものの、日本語とは異なる性格をもっているので、習得が難しいと想定する。これらに配慮し、学習者にうまく理解させようとしながら、授業を進めていくことにした。その結果、前後の文脈を考えたうえで、「体力をつける」という連語の意味合いは、6名の調査協力者を含め、クラス全員が理解できた。

既習の用法が、正確に受容できるだけでなく、正確に産出もでき、また、長期記憶に残るかどうかはこれからの調査で確認しなければならない。また、今まで「つける」の用法をいくつか学習したので、既習の用法間の関連性も無視してはいけない。それらを結びつけるように、教師は授業の工夫をしなければならない。学習者も努力を重ね、自力で「つける」の多義構造を少しずつ構築する力をつけていかなければならない。

以上のように、三学期の「つける」の学習は、連語レベルからだんだん文レベルに転じていくことが分かった。つまり、文における多義語の正確な理解や、文型と正しく組み合わせる能力などが要求されつつある。また、意味推測の能力ももっと重要となる。さらに、使役的な用法や動詞の自他性など、「つける」に関わる文法的な要素に対する理解もかなり重要となった。

四学期（2016.2～2016.6）

四学期では、慣用句、多義語の生産性に関わる複合語、特に、複合動詞が出現し、また、「つける」のメタファー的な意味用法も出てきた。これらは、いずれも「つける」に関する意味をよく習得できたうえで、身に付けられる語（意味）である。

日本語能力試験 N2 の文法指導の授業では、「いろいろ難癖をつけたあげくの果てに、何も買わずに帰った」という例文が出てきた（2016/3/10）。授業では、「つける」のこの比喩的な意味を紹介し、意味上関連する慣用句やコロケーションもいくつか挙げた。例えば、「けち／クレーム／文句／注文をつける」などである。これらの表現は、慣用句的なものと言っても、「つける」の基本義から連想できないわけではない。そこで、学習者に自分で考えさせ、その関連性を見つけさせた。その次に、「材料にいちいち細かく注文をつける」、「納入された品にクレームをつける」、「演技にけちを付ける」などの例文を挙げ、理解を深めさせた。それで、学習者は、「難癖をつける」をはじめとするいくつかの慣用表現の意味を身につけるために、1つのまとまりとして覚えるようになった。

慣用表現「難癖をつける」は、この学期に学んだものである。今までの「つける」の意味学習では、ほとんどの場合、提示された連語や慣用句における共起語は既習の語である。例えば、「気を付ける」の「気」、「味をつける」の「味」などがそうである。しかし、「難癖」という言葉は習ったことがないので、学習者自力で「難癖をつける」への意味推測はまず不可能である。こういった表現に出会った場合、教師に聞くか、あるいは辞書で引く

かのどちらかである。そして、1 つかたまりとして覚える。そのため、他の「つける」とは何の意味関係があるかについて、それは考えようもない。学習者自身の中で意味ネットワークを構築する際に、このような慣用表現は特別視するほかない。しかし、実は、慣用句を学習するとき、既習の意味と関連付けつつ、意味の類似した連語や慣用表現を取り出してグループで覚えていく方が効率的であり、長期記憶に残る学習法なのである。

また、「癖をつける」からも、同じ傾向が見られた（2016/4/28）。調査協力者のテスト調査の結果から見れば、やはり「癖を付ける」における「つける」に対する理解には不十分なところがあることが分かった。文全体の意味から考え、「つける」を適当に訳し、「つける」の意味を無視、もしくは回避する戦略をとっている。

このように、前後の文脈を通して意味推測をするのは、語や連語などの意味を理解するには1つの有効な学習法である。しかし、文全体の意味はもう分かったという場合は、語の意味や連語の意味などはいちいちはっきりと分からなくてもいいと考え、語の1つ1つの意味は明確に意識したがらなくなりがちである。

さらに、この時期は、「つける」のプロトタイプ義の学習を強化すべきときである。「ボタンをつける」は既習だが（2016/3/31）、その後のテストで出されても、正しく理解できなかった（2016/4/15）。「コートのボタンをつける」の「つける」はプロトタイプ的な意味である。しかし、それと対応する中国語の動詞とは、全く異なる性質を持っている。しかも、この用法には使役の意味合いがあり、中国語母語話者学習者には習得しにくい用法である。BとCの2名だけが正確な答えを出した。Eの回答は間違えたとは言えないが、訳文の自然さに少し欠けている。

複合動詞の学習は、四学期の語彙学習の重点に置かれている。「売りつける」、「植え付ける」、「付け加える」、「すえ付ける」などが出ている。複合動詞のインプットをあまり受けていない学習者は、これらの意味用法を容易に身につけられるとは言えない。とはいえ、習得しにくいものがある一方、習得しやすいものもある。これらの複合動詞のうち、一番身につけやすいのが「付け加える」である（2016/5/20）。というのは、「付け加える」は中国語の“附加”と全く同じ意味であり、母語からの正の転移が生じている。「売りつける」は、前後の文脈からのヒントが少なく、学習者が自力で意味を推測することができなかった（2016/4/14）。「植え付ける」（2016/4/28）に対する理解は、文脈によるものだと考える。それを中国語に正しく訳すには、「植え付ける」その語ばかりでなく、文章全体の内容を考えなければならない。AとEの訳文からは「植え付ける」の意味が正確に理解できたと見られた。「付け加える」は、中国語訳に頼り、全員正しく訳せた。しかし、正しく訳せただけでは、その語（該当の意味）が習得できたとは言えない。つまり、訳せるだけではなく、その語の意味用法を明確に把握でき、理解と産出両方ともうまくできるようになって初めて、習得されたとと言えるのである。

4.5.1.2 まとめ

以上、2年の縦断的な調査期間における授業観察の結果をまとめ、考察を加えた。授業記録では多くの細かいデータを取ったものの、4.5.1.1ですべてがまとめられたわけではない。その代表的なデータだけを取り出し、調査協力者の学習状況をまとめて、考察をしておいた。授業記録とそれに対する考察を学習者の学習状態の視点から、(6)のようにまとめた。

- (6) ①約2年にわたって、多くの「つける」の意味用法を学んだ。その中には、容易に習得できた意味・用法とそうでない意味・用法がある。
- ②学習者の習得順序は、教科書の提示する順序と一致していない。
- ③学習者は、「つける」の多義の存在は意識しているが、語義間の関連性に対する認識が薄い。
- ④「つける」という多義語の1つの意味が習得できたとはいえ、それはインプットを受けたことのある連語に限られていて、共起語の広がりには欠けている。また、1つの意味を自由に使えるかどうかは疑問である。
- ⑤「つける」に関連する語の学習には問題があり、それには、自動詞「つく」、学習者類義語の「かける」、複合語などが挙げられる。
- ⑥コロケーション、そして、文脈をどう利用すれば、学習者の習得に役立つ情報となるかを考えるべきである。
- ⑦学習者の母語の影響が多く見られるため、負の転移を防ぎ、正の転移を生かす工夫をすべきである。

4.5.2 小テスト調査

この約2年の間、数回にわたって小テストを実施した。小テストは、授業の一環として、学習者の習熟度をチェックするものである。4.5.1で述べた授業における追跡調査は、小テストを行うことで、調査協力者の学習する様子を観察すると同時に、習得状態も調査できる。また、小テストの結果は、定期的に行う総合テスト調査の基礎ともなる。このように調査に調査を重ね、各テストの結果を合わせていけば、学習者の学習メカニズムが解明できると考える。調査期間において行われた小テストの内訳は、表4-5のとおりである。

表 4-5 各小テストの形式と内容

実施日	小テストの形式	テストの内容
2014.12.11	単語テストにおける連語翻訳	“开灯”の日本語訳
2015.3.2	口頭での連語翻訳	「味をつける」の中国語訳
2015.3.5	単語テストにおける連語翻訳	“蘸酱油”の日本語訳
2015.3.13	空所補充	コンタクトレンズを_____
2015.3.30	翻訳テスト	“因为有点黑，想打开灯”の中国語訳

2015. 4. 9	筆記テスト	“打开收音机”、“打开空调”の中国語訳
2015. 4. 21	中間テストの翻訳問題	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”の日本語訳
2015. 6. 2	単語テスト	“记日记”の日本語訳
2015. 9. 21	文型練習（～ところです）	“我正在记日记”の日本語訳
2015. 9. 24	空所補充	“戴项链”の日本語訳「ネックレスを_____」
2015. 10. 15	文を作る練習	「気をつける」と「気がつく」
2015. 11. 18	翻訳テスト	「それから、基礎体力をつけるために、選手を走らせましょう」の中国語訳
2015. 11. 29	小テストⅠ	(4. 5. 2. 1 が詳しい)
2015. 12. 1	翻訳テスト	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳
2016. 3. 8	単語テストにおける連語翻訳	“打开被炉”の中国語訳
2016. 4. 6	翻訳テスト	「火をつける」の中国語訳
2016. 4. 15	単語テスト	「コートのボタンをつける」、「身につける」の2つの中国語訳 “掌握”の日本語訳
2016. 4. 28	翻訳テスト	「癖をつける」の中国語訳 「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳
2016. 5. 10	翻訳テスト	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳
2016. 6. 17	翻訳テスト	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳
2016. 6. 21	翻訳テスト	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳 「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳
2016. 6. 24	小テストⅡ	(4. 5. 2. 2 が詳しい)

授業中では、小テストが、単語テスト、翻訳テスト、空所補充、選択問題など、多くのパターンで行われた。また、口頭で回答させるものもあれば、筆記テストを実施することもある。同じ小テストといっても、規模がそれぞれ異なる。1つの用法をチェックするものもあれば、多数の意味用法を一度でチェックするものもある。表4-5で挙げた小テストの結果は、すでに授業記録にまとめ、結果と考察を示した。4.5.2.1と4.5.2.2では、4.5.1で取り上げていない他の2つの比較的規模の大きな小テストについて詳しい検討を加える。便宜上、以下では、それぞれ「小テストⅠ」と「小テストⅡ」とする。

4.5.2.1 小テストⅠ

この小テスト¹⁵は、既習用法を身に付けているかどうか、また、それらに関係する用法に対する意味推測がどれほどできるか、さらに、二格情報が与えられた場合、連語の意味を正しく理解できるかどうかを調査するものである。また、日本語の使役文を学習する前に、学習者は「つける」に含まれている使役の性質を意識しているのか、連語を中国語に訳すとき、どのようなストラテジーを利用しているのかを調査するのも目的である。

この小テストでは、連語が18問出題された。「つける」のほか、「かける」、「出る」、「取る」に関わる項目も設置した。以下、「つける」についての回答を取り出して、表4-6のようにまとめた。

表 4-6 調査協力者 6 名の「つける」に対する回答

連語	回答	正誤	連語	回答	正誤
部屋にクーラーをつける	A: 打开房间的空调	誤	火をつける	A: 点火	正
	B: 房间里开冷气	誤		B: 开火	正
	C: 给房间开冷气	誤		C: 点火	正
	D: 打开房间的冷气	誤		D: 点火	正
	E: 在房间里开冷气	誤		E: 点火	正
	F: 打开房间的空调	誤		F: 点火	正
肉に味をつける	A: 让肉入味	正	名前をつける	A: 写名字	誤
	B: 肉有味	誤		B: 写名字	誤
	C: 给肉上味	正		C: 起名	正
	D: 尝肉的味道	誤		D: 写名字	誤
	E: 肉有味了(坏了)	誤		E: 写名字	誤
	F: 尝尝肉的味道	誤		F: 点名	誤
シャツにボタンをつける	A: 给衬衫按上扣	正	部屋の電気をつける	A: 打开房间的灯	正
	B: 给衬衫系扣	誤		B: 房间里开灯	誤
	C: 给衬衫安纽扣	正		C: 把房间里的灯打开	正
	D: 解开衬衫的扣子	誤		D: 房子裡的灯开了	誤
	E: 给衬衣缝上纽扣	正		E: 给房间开灯	誤
	F: 系上衬衫的扣子	誤		F: 打开房间的灯	正
商品に値段をつける	A: 给商品定价	正	車に気をつける	A: 小心车	正
	B: 商品价格合适	誤		B: 小心车	正
	C: 给商品定价	正		C: 注意车	正
	D: 商品价格上涨了	誤		D: 在车里放松心情	誤
	E: 给商品标上价钱	正		E: 小心车	正
	F: 关心商品的价格	誤		F: 注意车	正
学生に元気をつける	A: 让学生打起精神	正			
	B: 有精神的学生	誤			
	C: 给学生活力	正			
	D: 让学生有活力	正			
	E: 让学生精神起来	正			
	F: 保持着孩子应有的朝气	誤			

続いて、小テストⅠの結果に対して、分析を試みる。まず、調査協力者の6名は、全員「部屋にクーラーをつける」を正しく理解できなかった。「クーラーをつける」という電源を入れ、電気器具を起動させる意味のインプットが多く、これはすでに習得できたものと言える。しかし、二格とともに用いられると、「設置」の意味となり、こちらは学習者がまだ身に付けていない。一方、「火をつける」は、全員正しく回答できた。また、テストの後半では、「部屋の電気をつける」も出題したが、調査協力者は全員正確に翻訳できた。「火

をつける」、「部屋の電気をつける」を見て、最初の「部屋にクーラーをつける」に対する反省ができるのではないかというのも出題者の意図であったが、その結果から見れば、やはり、二格に対する考慮が十分ではないということが分かった。

「シャツにボタンをつける」も類似した表現である。A、C、E の 3 名が正しく翻訳できた。残った 3 名の訳文から見れば、「つける」の意味を考えずに、名詞の「シャツ」と「ボタン」だけに注目し、「締める」や「開ける」などの行為に理解したものであろう。「つける」の意味については、次章で詳しく論じるが、「具体物 A を背景物 B に接触させ、B の一部になったかのように、離れなくさせて付着させる」というのが「つける」の意味のプロトタイプである。「つける」の多くの用法から抽出できる、「接触」の行為がそのスキーマである。したがって、「シャツにボタンをつける」は「つける」のプロトタイプ的な用法なのである。学習者は「つける」のプロトタイプとスキーマに対する認識がまだ不十分で、意味推測はまだうまくできない。

授業中提示したことのある「肉に味をつける」を正しく理解できたのは A、C の 2 名である。「味をつける」という用法は、すでに学習したので、正答率が高いはずなのであるが、実はそうではなかった。「肉に味をつける」は、調味料などを添え加えることで肉を新たな状態にするという意味である。また、この「つける」には、使役性が含まれている。二格が加わると、「つける」に含まれている使役の意味合いがより目立つ。それを正確に理解できない限り、正しく翻訳はできないものとする。

「商品に値段をつける」、「名前をつける」は、数値や名称などとの間に対応関係が認められる状態にするという意味である。2 つとも既習の用法ではない。それに、「名前をつける」の方は、二格を提示しなかった。「子供に名前をつける」を提示すれば、学習者は「子供」と「名前」の両語からヒントを得て、意味推測がしやすくなると思われる。そこで、単なる「名前をつける」だけで、「つける」の意味を正しく理解できるかどうかを調査した。その結果、「名前を書く」のように理解した者が 4 名、「名前を呼ぶ」が 1 名、正確に翻訳できたのは 1 名 (C) しかいなかった。

一方、「商品に値段をつける」の方は、二格を提示したので、正答者は 3 名いた (A、C、E)。残った 3 名の回答から見れば、やはり「つける」の意味を考えずに訳していることが分かる。また、正解の 3 名の答えを見ると、3 名とも「给(gei)B 動詞 A」の定型文で訳していることが分かる。「つける」における使役性を、中国語の「给(gei)B 動詞 A」で訳せるかどうかについては、後節で詳しく考察する。中国語との対照の立場からして、定型文「B に A をつける」に決まったパターンがあったとすれば、それは、学習者の習得を支援する情報となるであろう。

「学生に元気をつける」という連語に対しては、4 名の訳文が正しかった。それに、これらは、中国語の“给(gei) / 让(rang) …”という定型文で翻訳されていた。間違えた 2 名の訳文は、それぞれ“有精神的學生”(元気な学生)、“保持着孩子应有的朝气”(学生らしさを維持する)である。前者は「つける」を無視し、「学生」と「元気」だけを考え

た訳し方である。後者は動詞「つける」の存在は意識しているが、その意味を間違えて理解したものである。

最後の、「車に気をつける」の訳文は、D 以外の調査協力者が正しく書けた。「気をつける」という連語は既習であり、「車に気をつける」という表現を中国語に直す場合、文型の変換が生じない。直訳で済ませるので、学習者にとっては困難ではないのだろう。

以上、合わせて9題のうち、調査協力者それぞれの正答率は A77.8%、B33.3%、C88.9%、D33.3%、E66.7%、F33.3%である。このように、6名のうち、A、Cの2名が正答率もともと高い。それに、2名とも「BにAをつける」という定型文の存在が意識できた。それで、定型の翻訳文、すなわち“給/让…”を用いて翻訳することができるのである。逆に言うと、定型の文で「つける」のコロケーションを翻訳するという戦略をとることから、「つける」の意味特徴に対する深い理解が見られた。これは母語からの正の転移が生じたものであると言えよう。

以上の結果を踏まえ、調査の目的に合わせ、小テストIをまとめる。まず、既習の「クーラーをつける」、「電気をつける」、「気をつける」などは正しく認識でき、正確に翻訳したことから、当該のコロケーションが習得できたと言える。新用法のうち、「電気をつける」に関連する「火をつける」への推測は成功できた。しかし、他の用法は失敗が多い。「つける」の場合、プロトタイプから派生した意味はさまざまであり、基本義から推論しやすい派生義とそうでない派生義があるものとする。当然のことながら、こういった語の特性は、学習者の習得に影響を及ぼす。

調査協力者の普段の多義語学習では、意味付与学習が中心とされている。一方、意味推測のトレーニングは比較的少ない方である。そのため、新しい意味に出会うとき、どのように意味推測を行ったらいいかが分からないようである。また、連語に出ている名詞などに頼る傾向が見られるが、そうしたとしても、正確な翻訳の成功率はかなり低い。少なくとも上述の翻訳できなかった連語では、「つける」がもっとも重要な役割を担っているので、「つける」の意味を正確に理解できない限り、連語の意味も正しく訳せないわけである。それゆえ、多義語習得の支援をするために、学習者の意味を推測する能力を鍛える工夫をすべきである。

前述したように、二格との共起と、「つける」に含意される使役の意味合いに対する認識を調査するのがこのテストの目的である。「部屋にクーラーをつける」「肉に味をつける」「シャツにボタンをつける」「商品に値段をつける」「車に気をつける」「学生に元気をつける」の訳文から見れば、誤りが多く生じ、「つける」の使役性、そして二格の存在を無視したものがあつたことが分かった。この段階の学習者は、ヲ格との共起（「～をつける」）には慣れているものの、「～に～をつける」という文型をまだうまく理解できないと見られた。それゆえ、それらを克服するための工夫が必要とされる。

調査協力者は、日本語を学習し始めてからこの小テストがすべて終わった時点で一年少

し経つが、日本語の多義語の習得状況からみて、個人差が出てきたと見られる。無論、意味推測の成功率が高いからと言って、「つける」の用法を身に付けたとはいえない。現段階の調査協力者にとって、既習の意味や、多義語の中心義を利用して、意味推測を行うことはまだ困難である。今回の調査結果から見れば、出会った「つける」の諸意味間の関連性が少し意識でき、「つける」のネットワークをある程度立てていると見られた。では、「つける」の意味間の関連性をどのように理解しているか、学習者が作ったネットワークはどのようなものなのかについては、更なる調査が必要である。その調査および結果については、4.5.3.2の総合テスト調査Ⅱで述べる。

4.5.2.2 小テストⅡ

小テストⅡは、小テストⅠと同様、連語の習得を調査するものである。ただし、小テストⅠと比較して、日本語と中国語の相互翻訳が含まれる点で異なる¹⁶。テストの目的は既習の連語が長期記憶に残っているかをチェックすることと、自動詞「つく」、複合動詞「～つける」は習得できたかどうかを検討することの2点である。

学習者にテスト用紙を配布し、限られた時間内に完成させ、そして提出させる。教科書、ノート、辞書などは、一切見てはいけないこととした。翻訳テストでは、中国語を日本語に訳す問題と日本語を中国語に訳す問題に、それぞれ15種の連語が出題された。そのうち、「つける」にかかわる連語は合わせて6つある。以下、「つける」とその関連語の結果だけをまとめて考察を試みる。調査協力者の回答は、表4-7に示す。

表 4-7 調査協力者の小テストⅡの回答の一部

連語	A	B	C	D	E	F
想像がつく	想 象 的 到 (正)	想象到 (正)	有了想像 (誤)	有想象力 (誤)	发挥想像 (誤)	想象得到 (正)
傷をつける	受伤 (? ¹⁷)	受伤 (?)	受伤 (?)	受伤了 (?)	受伤 (?)	受伤 (?)
障子を取り 付ける	取下隔门 (誤)	安装拉门 (正)	把障子拿走 (誤)	取下拉门 (誤)	拉障子 (誤)	安装屏风 (正)
気がつく	反应过来, 注意到(正)	注意 (?)	注意 (?)	注意到(正)	注意 (?)	注意到 (正)
添加内容	内容をつ ける(正)	内容を加 える(正)	内容を付 ける(正)	内容をか ける(誤)	内容をつ ける(正)	内容をつ ける(正)
掌握知识	知識を身 につける(正)	知識を身 につける (正)	知識を身 につける(正)	知識につ ける(誤)	常識を身 につける (正)	知識を身 につける (正)

文脈がなくて連語だけの翻訳練習は、やりやすいところとやりにくいところが両方存在する。文脈があれば、訳し方が限られる。一方、文脈がなければ、訳文が多く存在する場合もある。それゆえ、調査協力者の答えが正しいかどうかを判断する際、場合によっては、正確さと自然さの2点で判定する。

「想像がつく」という連語の訳文としては、C、D、E の回答が不正確である。3 名全員が動詞「つく」の意味を無視している。C、D は 2 人とも「想像力が存在する」、E は「想像力を発揮する」のように理解してしまっている。本研究の目標語彙は「つく」ではないが、「つける」の自動詞のペアとして、「つける」の意味用法に深く関連するため、出題をしたので、やはり既習の用法でも習得上の問題が現れた（2016/6/21）。

「傷をつける」は、既習の用法である（2016/3/18）。調査協力者全員が“受伤”と訳した。そのなかで、D だけが過去のテンスを表わす“了”を加えた。しかし、どちらにせよ、中国語の“受伤”を日本語に訳すとしたら、もっとも適切な訳文は「(生き物が、いつの間にか) けがをする」なので、「傷をつける」とは異なってしまう。確かに、「傷をつける」は、場合によっては、非意識的な行為を描くことができるが、多くの場合、物の表面に傷を生じさせることや、物の一部を損なうことを描写する。生き物の場合、傷を負わせたり、けがをさせたりするときに使う。こうした他動詞「つける」に含意される動作性は、調査協力者の訳文から見られなかった。

一方、自動詞連語「気がつく」は、中国語の“注意到，意识到”に訳するのが自然である。そして、他動詞連語の「気をつける」は“注意”に訳するのが適切である。しかし、興味深いことに、3 名の調査協力者は「気がつく」を“注意”と翻訳した。このように、文脈がなく、単なる連語そのものの訳文からでも、学習者の不十分な習得が見られた。また、この結果から、有対自他動詞それぞれの性質をまだうまく把握できていないことが分かった。

複合動詞「取り付ける」については、B、F は“安装（「装置する」）”と訳した。他の 4 名は、“取下（「取り外す」）”（A と D），“拿走（「持っていく」）”（C），“拉（「開ける」）”（E）のように訳した。「取る」と「付ける」はいずれも出現頻度が高く、学習者に馴染みのある基本動詞である。しかし、両語が組み合わされて複合動詞をなす場合、学習者がその意味が自然に習得できるわけではない。誤りを犯した 4 名の回答を見ると、「取り付ける」への意味推測に何のヒントも獲得できていない状態で勝手に訳したようである。それらの訳文からは、この段階の学習者が複合動詞の意味構成や本動詞との関連づけをまだ意識できていないことが分かる。

以上の 4 問は、日本語を中国語に訳す練習であるのに対し、その次の 2 問は中国語を日本語に訳す練習である。その 2 問は、「つける」を目標にしている。かたまりで覚えている「身につける」は慣用表現で、インプットも多かったので、6 名全員が正しく答えた。もう 1 つの“添加内容”では、D は「かける」を用いた。こういった誤用を生じる理由には、「つける」と「かける」用法の混同がある。このような学習者類義表現の区別には、注意を払わせるべきである。

小テストⅡは、全調査が終わる直前に行った調査であるため、学習者の不習得の状態が明らかである。まず、自動詞と他動詞の性質に対する理解にはまだ不十分なところがある。意味上類似していることは理解できているが、相違点に対する配慮が足りない。また、学習者にとって複合動詞への意味推測はまだ困難である。「つける」の関連語としての自動詞

の「つく」、意味の延長線に位置する複合動詞をはじめとする複合語を、どのように学習者に提示すればいいかは、今後の課題である。

4.5.3 総合テスト調査

4.5.1 と 4.5.2 では、授業記録と小テストの結果をまとめたうえで、「つける」の意味用法の習得状況や使用・誤用の傾向を考察してきた。この節の総合テスト調査では、授業記録と小テストの結果を踏まえ、(2) の調査課題にいずれかに絞って、調査協力者の学習・習得を考察する。

4.5.3.1 総合テスト調査 I¹⁸

4.5.3.1.1 調査の目的と内容

総合テスト調査 I を通して、日本語を学習して以来、調査協力者はどのように多義語の意味を習得してきたのか、学習方法は何かなどを調査したうえで、「つける」などの多義語の既習の意味を自力で産出できるか、そして、「つける」のプロトタイプとスキーマに関して、どのように認識しているか、また、「つける」の典型的な意味を獲得できているかを調査する。

調査を実施する当日、6 名の調査協力者を集め¹⁹、調査について説明した。予め語彙を調べたり、準備しておいたりすることなどを防ぐため、具体的な調査内容に関しては、事前に教えなかった。今回の調査は、時間的な制限がないので、調査協力者にはじっくり考える時間を与える。このテストの調査項目は、(7)のとおりである。

- (7) ①名詞、形容詞、形容動詞、動詞、副詞、接続詞、連体詞などの中で、どれが難しいですか。なぜですか。
- ②どのように言葉の意味用法を覚えていますか。
- ③多義語の存在を意識しながら、勉強していますか。どのように勉強していますか。
- ④「だす」の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？
- ⑤「つける」の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？
- ⑥「かける」の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？
- ⑦「とる」の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？

4.5.3.1.2 調査結果および考察

調査問題の①-③は、語彙学習の感想を聞くものである。これを通して、学習者は語彙の学習、特に多義語の学習において、どのようなところに困難に感じるか、そしてどのように困難を乗り越えているのかなどが分かった。表 4-8 が調査協力者の回答のまとめである²⁰。なお、調査協力者が中国語で回答したので、表中の日本語は筆者の拙訳である。

表 4-8 総合テスト調査 I の結果（問題①-③）

調査協力者	問題 1	問題 2	問題 3
A	動詞、副詞、接続詞、連体詞が難しい。 自他動詞、動詞の活用が難しい。	① 漢字を見れば、だいたい分かる。 ② アニメやドラマを見て、語彙の意味を理解し、覚える。完全に理解できなくても、授業中出会ったら、すぐに思い出せ、記憶できる ③ 辞書を利用する。	発音が同じで、意味が異なる語があると気づいた。 書き方によって意味が違う。 既習の語の新しい意味に出会ったら、先生に聞くか辞書で調べると覚えるようにする。
B	副詞が一番難しい、その次は動詞。 自他動詞の分け方には規則が見えない。「止める」のような動詞は読み方によって意味が異なる。	① 繰り返して覚える。 ② 漢字が中国語と一緒に、意味も同じような語彙が覚えやすい。 ③ 有対自他動詞、五段動詞などを整理して、まとめて覚える。小さい紙に書き、身の回りの空間に貼り付け、インプットを増やすことで覚える。	多義語がなかなか習得できなくて困る。 漢字が同じで意味が異なる語をまとめて覚えてみたが、覚えられない。ドラマなどを見て少しは覚えただけ、あまり役に立たない。
C	動詞と副詞が難しい。 自他動詞が分けにくい。	① 中国語と類似しているので、読み方・書き方を覚え、先生の説明を聞き、メモする。 ② アニメやドラマを見て学習することもある。 ③ 単語の品詞性を先に確認し、それに基づき、用法を覚えていく。	1 つずつ覚えていく。 「つける」は付着の意味を持ち、文脈によって、翻訳の仕方も異なる。理解はしやすいと考える。 多義語に出会ったら、まず覚えて、その後の勉強や、ドラマなどで理解する。
D	副詞、連体詞、接続詞	① 多くの単語は当用漢字を見て意味が分かるものである。 ② アニメ、ドラマ、映画などを見て覚えたり、友達との会話から覚えたりするのもある。 ③ 語彙の用法に関しては、授業で習得したものが多い。特別な用法をまとめ、聴解の練習などを通して、理解を深めていく。	多義語の存在はあまり意識していない。アニメや映画を見るときに出会った語彙を学習した語彙から連想しているが、すぐに思い出せるとはいえない。 多義語の学習については、出会ったら、あるいは学習したら、すぐにその用法をすぐ覚える。特に、意識的にまとめたり、整理したりしていない。
E	動詞と連体語が難しい。 自他動詞を分けるのがぴんと来ない。活用も多いし、各活用（連体・連用など）文型に使うと、分かりにくい。	① 授業中に学習したら、アニメや歌などを連想して覚える。 ② 字幕なしのアニメを見て勉強する。 ③ 日本人の友達の話の話を聞いて理解してみたり、直接聞いてみる。	授業中、馴染みのない言葉に出会ったら、すぐ辞書で確かめる。教科書よりずっと多くの意味が載っているので、面白そうな、また役に立ちそうな用法を覚えるようにする。アニメを見ることでも、多義語がたくさん存在すると分かったので、多く覚えてきた。

F	副詞、接続詞、名詞と形容動詞の区別、サ変動詞の自他性が区別しにくい。	① 漢字を見て覚えるのがほとんどである。当用漢字のない語は繰り返して暗記して覚える。類義語もこの方法で覚える。 ② 基本義を通して派生義を理解し、覚える。 ③ 語彙の用法は授業中先生に教わった。	多義語の存在を意識した。勉強を進めていくのに合わせて、意味を積み重ねていく。多義語の諸用法を用いて意味を覚えるのがいい。
---	------------------------------------	---	--

今回の調査を行うまでに、調査協力者は、約一年間日本語を学習した。一学期の授業（2014年9月～2015年1月）と比べ、二学期（2015年2月～6月）では、多くの動詞に接触し、ペアの自他動詞にも多く出会った。また、多義語も多く出てきたので、多義語の存在が意識されたと言える。1つの多義語でも既習の意味の数がそれほど多くないので、意味間の関連性は把握しやすい。さらに、自力で語の意味を推測させたり、関連の用法をアウトプットさせたりする練習がまだ少ないので、多義語習得の難しさはまだ実感されていないものと思われる。

語の意味の学習方法として、まず常用漢字を用いて語彙を学習する方法は、多くの学習者が共通して利用している。つまり、中国語母語話者学習者は、日本語と母語との共通点を見出し、中国語の漢字知識を利用して日本語を学習するのである。これは、特に初級の学習者がよく利用し、初級の段階では便利な方法でもある。しかし、両言語の同漢字がいつも同じ意味用法を持っているとは限らない。多くの場合、一部の意味しか重なっていないため、時には誤解をもたらす可能性がある。こういった目標言語のルールを単純化することは、過剰な一般化になり、適用できない範囲にまで広く応用してしまうおそれもある。特に多義語の学習には、漢字を利用するのはいい方法とは言えない。漢字表記が異なるが、同じスキーマを持ち、つまり、意味間にはっきりとした関連性を持っている多義語も少なくない。その点については、現時点の6名の調査協力者は、まだ十分に配慮できないことが明らかになった。

また、初級レベルの学習者は、テキストと教師の教えた用法だけに注目する傾向が強い。それに、多義語の多義構造はいうまでもなく、既習の用法もうまく使えない。当然のことながら、これは調査協力者の学習環境にも関係する。授業においては、アウトプットより、インプットの方を多く受ける。日常生活では、日本語を利用するチャンスが少ない上に、アウトプットの練習も足りない。したがって、学習者が自力で多義語の用法を思い出すことは、やはり困難であろう。

さらに、もう1つ注目したいのは、6名の調査協力者のうち、5名が日本のアニメやドラマなどを通して語彙を学習しているということである。一年生とはいえ、授業以外にも、相当多くのインプットを受けていることが分かった。フォローアップインタビュー²¹によれば、調査協力者の見ているドラマが中国語と日本語の字幕が両方ついているのも多いという。それを利用すれば語の意味をチェックしたり、覚えた意味を確認したりするのに役に立つと考えられる。それ以外には、まとめて覚える、辞書で調べる、教師に聞くなどの

学習方法も挙げられた。

表 4-8 から見られたように、辞書を使って学習する調査協力者がいる。しかし、初級レベルの学習者にとっては、辞書で調べても、多義語のすべての意味を身に付けることはできないし、多義語の全体像を把握するのも難しい。それは、既習の意味数が少なく、また、語義間のつながりがまだ分からないからである。辞書で多数の未知の意味をいちいち覚えることは、かえって、学習の負担になってしまう。

また、「基本義を通して派生義を理解して、覚える」という方法で多義語の意味を学習すると答えた調査協力者が 1 名いる。筆者は、多義語指導を行う際に、語の基本義と派生義の関連性について紹介したことがある。1 つの語の意味をほんの少しだけ学習した段階、つまり、多義構造を作り出せるまでには程遠い段階においては、この方法で学習するのは場合によっては実行できないときがある。しかし、長期的にみると、学習者の意味の学習が進むにつれて、基本義を出発点にし、徐々に語の多義ネットワークを構築していき、意味間の関連性も分かるようになるので、有益な指導法ではある。

続いて、調査項目の④-⑦のまとめに移る。問題④-⑦では、4 つの多義動詞を挙げ、それぞれの既習の意味を思い出させて、連語などを用いて書かせる。これは、一種のアウトプット練習である。そして、語の中心義も書かせる。できれば用法間のつながりも書いてもらうことにする。なお、4 つの多義語の用法をテストしたのは、いくつかの代表的な基本動詞を通して学習者の多義語習得の状態を把握することと、調査対象が「つける」であることを調査協力者に気づかれないようにするためである。問題 5 の「つける」の結果は表 4-9 のようである。

表 4-9 総合テスト調査 I の結果（問題 5）²²

調査協力者	意味用法	中心義	用法間のつながり	補充
A	電気をつける 开灯 日記をつける 写日记 鼻をつける 鼻子堵了(×)	附着, 连接	用法都可以想成一个东西附着到另一个东西上	なし
B	電気をつける ゴーグルをつける 醤油を付ける 味をつける	附着	(空白)	なし
C	日記をつける 记日记 電気をつける 开灯 コンタクトレンズをつける 戴隐形眼镜	把 … 附着在 … 上	(空白)	なし
D	日記をつける 写日记 電気をつける 开灯	打开、覆着的東西	(空白)	中心意思的打开是开灯的开
E	電気をつける 开灯 めがねをつける 戴眼镜(×)	粘上	(空白)	感觉和汉字“戴”有关动作很像
F	電気／ラジオ／電源をつける 电源连接 酢をつける 吃什么东西的蘸 戴隐形眼镜的戴	电源的连接	都有连接的意思	

テスト調査を行った後、調査協力者にフォローアップインタビューをした。Aは、「先生が中国語でヒントをくれれば、もっと書ける」と言った。そのヒントとは、授業で行った連語の翻訳練習などのようなものである。つまり、教師が中国語で連語の意味を言って、学習者に対応する日本語を話させる練習である。今回の結果から見れば、この学習段階の学習者にとって自力で意味用法を思い出すのはやはり困難であることが分かった。

続いて、調査協力者の回答を詳しく検討する。「つける」についての既習の用法を連語でまとめてみると、「ゴーグルをつける」、「気をつける」、「電気をつける」、「醤油をつける」、「味をつける」、「ストーブをつける」、「身につける」、「日記をつける」の8つ²³である。コロケーションを中心とした学習は、当該の連語だけ習得できそうだが、同用法の他の共起語と組み合わせたものの受容と産出ができるかどうかが問題であり、別の調査で考察しなければならない。6名の調査協力者は、合わせて18のコロケーション²⁴を挙げた。そのうちの16個が正しい連語である。上記の8つの連語と照らし合わせると、まったく同じなものが12個もある。残った4つも既習の用法であるが、他の共起語と組み合わせたものである。

こういった結果から見れば、学習者には既習の用法、特に、学んだコロケーションをよく記憶している。それに、自分で生産的に新しいコロケーションを作り出すより、コロケーションそのものをかたまりとして覚え、記憶にあるものを産出する傾向が見られた。学習者が中国の大学で学んでいるとはいえ、教師に教わったとおりの表現、そして教科書に出現した表現しか産出できないとは限らない。しかし、今回調査協力者が挙げた「つける」は、その用法はともかく、用例（コロケーション）も教室で指導を受けたものが多い。

調査協力者は、全員「電気をつける」を書いた。全員がこれを産出できたのは学習の早い段階でこの用法に出会い、普段のインプットも多いからである。学習したばかりの「日記をつける」も、6名のうち、3名が書けた。また、「味をつける」の意味と同様の「酢／醤油をつける」が書けた者が2名いた。「コンタクトレンズをつける」が正しく書けた者は1名いた。コンタクトレンズという言葉を忘れ、用法は覚えている者も1名いた。

一方、「気をつける」、「ストーブをつける」、「身につける」の3用法を思い出せる調査協力者は1名もいなかった。「ストーブをつける」は、「電気をつける」とは同用法とも言えるが、それを書けなかったのはヲ格共起語「ストーブ」に馴染みがないからだと考える。Fに対するフォローアップインタビューでは、この用法の他の連語を思い出せるかという質問に対し、「ラジオをつける」と「電源をつける」と答えた。このように、「起動」を表わす「つける」の用法が分かっても、どのようなヲ格共起語と組み合わせるかは十分に身についているとは言えない。

また、「気をつける」と「身につける」は慣用表現であり、常用度の高い用法と言える。物理的な行為を表わす意味と比べ、抽象度の高いこの2つの用法を書けた調査協力者はいなかった。このように、海外で学習している現段階の調査協力者の記憶に残っているかどうかは、当該語句の常用度に関係がないが、インプットの多さ、自分の既習知識や母語知

識に近いかどうかによるものである。この段階の学習者にとって、多義語の抽象義を産出するのはまだ困難であることが分かった。

さらに、用法を間違えたり、類義語と区別できなかつたりするところも2ヶ所あり、それは「*鼻をつける」と「*眼鏡をつける」である。「*鼻をつける」は、意味不明のコロケーションで、明らかな間違いである。「*眼鏡をつける」は前の調査からも分かるように、これは学習者類義語「かける」との混同であり、比較的修正しにくい誤用ともいえる。

中国語の訳文を与えられたら、調査協力者は「つける」の用法を正しく産出できる。しかし、学習1年後の総合テスト調査Ⅰのような、何のヒントも与えられないテストでは、既習の用法を自力で産出するのは、やはり困難であることが分かった。教室で多義語を学んで、それについての知識は増え、頭では「分かっている」のだが、実際に運用（産出）することはまだ困難である。学習者の中では、「つける」用法のネットワークはまだ形成していないし、既習の用法を構造化するのもまだできない。

「つける」の中心義について、調査協力者は全員中国語で回答をした。“附着”（「付着」）と答えたのは3名（A、B、C）いた。しかし、挙げた連語には「付着」の「つける」の用法は1つもない。フォローアップインタビューで確認すると、「付着」は「つける」のすべての用法に含意される意味で、抽象化された要素であるという。筆者が教室で「つける」の意味を指導する際に、「つける」の多くの用法には、「ある物をほかの物に接触させて、付着させる」といった共通点があると強調してきた。確かに、多くの「つける」用法には、「付着」の意味合いが存在するが、学習者は、それを中心義だと考えているのである。

また、“粘上”（「貼り付ける」）と答えた者が1名（E）いた。「つける」は何かの仲介物で2つのものをつなぐ行為だと考え、「*眼鏡をつける」のような誤用を産出した。Dは「覆っているものを外す、開ける」と回答した。フォローアップインタビューによれば、「電気をつける」が「つける」の一番基本的な意味だという。また、中国語の影響を受け、中国語訳の“打开”（「開ける」）のように考えてしまったようである。Fは、「つける」の中心義が“电源的连接（「電源の接続」）”であると答えた。これも、電気器具などの起動の「つける」をその中心義だと考えた結果である。

最後に、「つける」の用法間のつながりとは何かという問いに対して、答えを出せたのは2名しかいなかった。Aは、用法間には“用法都可以想成一个东西附着到另一个东西上（「1つ物が他の物に付着しているという共通点がある」）”と回答した。Fは“都有连接的意思（「接続の意味が共通に持っている」）”と答えた。他の4名の調査協力者は無回答であった。学習者は、多義語の意味間には何らかの関係性があると意識しているが、出会った用法がまだ少ないなどの理由で、学習するときはそれを問題にせず、意味を1つ1つ覚えていくストラテジーを取っている。しかし、学習が進むにつれて、多義語の意味間のつながりを見えなくなる。意味間のつながりを意識し、多義語の意味をネットワーク化するのは学習者に負担をかけない効果的な学習方法である。総合テスト調査Ⅰの結果から見れば、調査協力者の中には、「つける」の意味ネットワークはまだ構築されていないようです。

4.5.3.1.3 まとめ

この調査は、調査協力者が日本語を学習して10ヶ月後、「つける」を学び始めてから7ヶ月後の最初の総合テスト調査である。授業で行ってきた翻訳練習などとは異なり、「つける」の用法についてのヒントは一切与えず、学習者自力で意味用法を思い出せるような調査項目を設置した。この調査結果から、調査協力者の頭の中で「つける」についての知識はまだ不十分であり、そして、既習の用法は一部しか産出できないことが分かった。学習者にとって、既習用法の受容はできるものの産出は難しい。それゆえ、こうした理解と使用との間のギャップを埋める工夫をすべきである。つまり、学習者への、多義語の産出に対する支援をどのようにするかについて更なる研究が必要とされる。

また、学習者にとって、物理的な行為を表わす意味より抽象義の方が難しいと報告された。そして、今回の調査から多義語の中心義を正確に把握できていないことも分かった。その結果、「つける」という多義語の多義構造はともかく、中心義と派生義との関連性についての理解も不十分になる。したがって、学習者に対して多義語の中心義の理解を強化する必要がある。

さらに、多くの場合、母語を用いて、語彙の学習をするという戦略を取っている初級レベルの学習者は、漢字の中国語的な解釈に頼りすぎて、過剰一般化の悪影響が目立ち、「つける」のような多義語の習得では母語の負の転移が生じる。これは、学習者が多義語の学習に、文脈を十分に利用していないからだと考えられる。多くの語義は、本来柔軟性を持ち、文脈によって、その意味が明確になっていく。ゆえに、学習者のレベルに合った文脈を提示すべきである。また、学習者の母語に配慮し、そして、それをどう最大限に生かすかが課題である。

また、授業の際、スキーマを利用するか、そして、どこまで利用できるかも問題になる。多義語のスキーマを提示したうえで、学習者の母語知識を活かし、比較・対照という学習者の持っている独特の認知機能を活かし、学習者の理解しやすい文脈でスキーマに対する理解を深めさせながら、意味の習得を実現させるべきであろう。また、スキーマの抽出と連想は、学習者のすでに持っている知識（目的語彙に対する知識、母語のそれに関連する知識）に関係するので、自力でスキーマの抽出・連想ができる場合と自力でスキーマの抽出・連想ができない場合に分けて考える。これについても、それぞれを究明したうえで、十分な指導を行うべきであろう。

最後に、多義語の意味を正確に推測させるには、学習者にどういった情報を、あるいはどこまで情報を提示すればいいのかを工夫すべきである。これには、例えば、共起語の情報、文型の情報、また類義語といった関連語の情報などが挙げられる。「つける」の意味を習得するには、中国語母語話者学習者がもっとも知りたい、あるいは、知るべき情報はどのような要素なのかを調査すべきである。

4.5.3.2 総合テスト調査Ⅱ²⁵

4.5.3.2.1 調査の目的と内容

日本語学習歴 1 年半の 6 名の調査協力者に対し、「つける」の意味拡張やネットワークの形成についてテストをする。具体的には、学習者が「つける」の意味間の関連性をどのように意識しているか、それらをカテゴリー化することができるかどうか、また、提示された意味用法をどのようにネットワーク化するかを調査する。「つける」のほかに、教科書によく出てきた多義動詞「出す」、「かける」、「とる」も調査項目に入れた。「つける」と同様、この 3 語も基本動詞であるので、教科書にはいくつかの用法が載っており、学習されてきた。2 章の予備調査からも分かったように、この 3 語も学習者がよく間違える多義語である。調査結果を示す際には、「つける」の結果のみをまとめる。ただし、学習者の多義語分類のストラテジーなどを検討するとき、必要に応じてこの 3 語から得た結果²⁶を抽出する。

総合テスト調査Ⅱにおける「つける」についての調査の手順は (8) である。

- (8) ①調査協力者に「つける」の既習の用法を 8 つ挙げ、コロケーションの形で示す (① 気をつける、② 日記をつける、③ テレビをつける、④ 醤油をつける、⑤ ストープをつける、⑥ 知識を身につける、⑦ 体力をつける、⑧ ゴーグルをつける)。調査協力者にそれぞれの意味確認をさせる。
- ②教科書には現れていないコロケーションを 13 個挙げる (a 地面に足をつける、b 火をつける、c 元気をつける、d 子供に名前をつける、e 味をつける、f 成績をつける、g 値段をつける、h 胸にブローチをつける、i 傷口に薬をつける、j 文句をつける、k 漢語に振り仮名をつける、l 知恵をつける、m 目をつける)。学習者に誤解をもたらさないように、一部の連語に二格共起語を加えた。
- ③合わせて 21 の連語の意味を推測させてから、同用法の「つける」のコロケーションを 1 つのグループにするようにカテゴリー化させる。
- ④グループ分けの根拠とグループ間の関係を述べさせる。

4.5.3.2.2 調査結果および考察

続いて、学習者別に調査結果をまとめる。分類の理由については、調査協力者の日本語レベルを考慮し、中国語で書かせた。訳文は筆者による。

① A の回答

A の「つける」の意味分類とその理由は表 4-10 のとおりである。

表 4-10 総合テスト調査Ⅱにおける A の回答

グループ分け	分類の理由
①⑦D	人的動作（人の動作）
②adfgjk	写（書く）
③	通电（電流を通じる）
④ei	蘸上（（醤油・酢などを）つける）
⑤b	点火（火をつける）
⑥l	掌握…（何かを身につける）
⑧h	戴（（身の回りの品を）つける）

表 4-10 で示されたように、A は「つける」の意味分類を積極的にやっており、これを 7 つのグループに分けた。最初のグループである「人の動作」は、上位概念的で、①・⑦・c・m が入れている。しかし、ここで挙げている連語はどれも人の動作と言えるので、これを分類の理由とするのは不適切である。その次の 6 つのグループは、いずれも中国語訳を用いて分類したものである。②は「書く」に近いが、ほかの a・d・f・g・j・k はどれも「書く」という意味が含まれていない。こうした様々な異質の用法を同じグループにすることから、A はこれらの意味をまだよく理解できていないと見られた。

また、④を e と同じグループにした。「味をつけるために、醤油をつけるのだ」という理由で両用法を一緒にするのは無理もないが、中国語の動詞“蘸”は“蘸酱油（醤油をつける）”には使えるが、「味をつける」を“蘸味道”と訳すのは不自然である。また、同じグループに入れた i の「傷口に薬をつける」は、皮膚に薬を付着させて浸透させる用法である。しかし、A がそれを「味をつける」と「醤油をつける」と一緒にしているのは適切ではない。しかも、「傷口に薬をつける」の「つける」も“蘸”で訳すことはできない。

⑤と b、⑥と l、⑧と h を同じグループにするのは、問題ないように見える。しかし、中国語訳を用いて分類するという方法の短所も明らかである。「ストーブをつける」と「テレビをつける」はいずれも起動という意味を持っているので、同じカテゴリーにするべきであるが、中国語訳を用いた分類基準では「テレビをつける」をそのグループから外してしまった。

このように、A の中では、まだ合理的な分類基準を成していないことと、新出用法に対する推測に誤解が生じたことが分かった。A は、中国語訳というストラテジーをとって「つける」の用法を分類しているが、これは、グループ間の関連性を無視してしまいがちな操作である。もしくは、グループ間の関連性そのものを見つけないことができなかったのも、そうしかできなかったのであろう。また、「つける」の意味領域やカテゴリー構造の理解ができていないことは言うまでもなく、既習の用法について十分に理解していないことが確認できた。

② B の回答

B の回答を表 4-11 のようにまとめた。

表 4-11 総合テスト調査Ⅱにおける B の回答

グループ分け	分類の理由
①②⑤⑥⑦⑧abcefhlmj	附着（付着）
③④	开（開ける）
dgk	人为设定（人為的な設定）
i	起作用（役立つ）

B は、コロケーションを 4 つのグループに分けたのだが、特に、最初のグループに 16 個のコロケーションを入れるのは不適切な分類である。この 16 個のコロケーションには、「つける」の様々な用法が含まれる。また、これらの意味関係からいうと、かなり遠く離れている用法もある。こういった分類は、「つける」の意味間のつながりに対する理解がまだ十分ではないことの証拠でもある。既習の用法④を③と同じグループにするのもそうである。「テレビをつける」の中国語訳は“开”でいいが、「醤油をつける」は“开”とは全く関係しない。また、d・g・k を 1 つのグループにして、この 3 用法から「定める」という共通点を抽出した。「人為的な設定」という分類の理由も上位概念的で、ほかの分類の理由と比べて、次元そのものが異なる。また、B の i の用法に対する理解が不確かであり、「役立つ」という分類の理由も適切ではない。こうした分類から見れば分かるように、B はこれらの「つける」用法に直面するとき、まだ自力で分類することができず、うまく処理できない。

また、B の「かける」の分類では、①・④・⑤・a・b・e・f を 1 つのグループにする理由として、「附加」と書いた。これらの用法は「附加」とは言えない。総合テスト調査Ⅰのフォローアップインタビューの際も、B は「つける」と「かける」の区別がはっきりと分からないと述べた。今回の調査からも、同じような結果を得た。この 2 語の相違点についての習得は進んでいないと分かった。

③ C の回答

C の回答は、以下のようである。

表 4-12 総合テスト調査Ⅱにおける C の回答

グループ分け	分類の理由
①⑥⑦clm	多加…（何かを多く添える）
②④aei	附着…（付着する）
③⑤b	点着…（点火・点灯する）
dfgjk	赋予（付与する）
⑧h	佩戴（身につける）

この分類を見れば、C はしっかりと「つける」の意味を考えて、使い分けようとしていることが分かる。C の分類の理由から一見中国語訳で分けているように見えるが、上位概念的な表現も使っている。単なる中国語の訳文ではなくて、語釈を用いて分類をしている。こうした理由によれば、諸用法のグループ分けができて、合理性があると考えられる。しかし、この分類は全く問題がないとも言えない。まず、②・④・a・e・i のグループを見ると、この5つの表現を1つのグループにして、特に、②をそれらの用法と一緒にするのは適切ではない。C に確認したところ、これらのコロケーションはすべて「つける」の基本的な用法と認定し、「付着」のグループにしているからだという。

C は、丁寧にこれらの用法をカテゴリー化しているが、グループ間の関係を明記していない。この学習段階の学習者は、意味分類がよくできる人にとっても、多義語の多数の意味をネットワーク化するのは難しい。

④ D の回答

D の回答は、以下のようである。

表 4-13 総合テスト調査Ⅱにおける D の回答

グループ分け	分類の理由
①	注意（注意）
②	未記入
③m	打开（開ける）
④⑥ei	使其附着上东西（物に何かを付着させる）
⑤b	点火（点火）
⑦	未記入
⑧h	戴上（身につける）
dgjk	给没有该性质的东西赋予新的 （元来備えていないものを新しく添える）

D の分類は、ばらばらであり、D はまだ「つける」の意味間の関連性をまだはっきりと見つけていないと考えられる。他の3語の分類を見ると、「だす」は5つ、「かける」は6つ、「とる」は4つのグループに分けられていた。「つける」のグループ数が一番多く、8つもある。多義語の意味間の関連性を無視し、多義語の意味を1つ1つ学習するのが学習者の負担となるに相違ない。

続いて、D の分類の詳細を検討する。まず、③とmを1つのグループにするのは適切ではない。「目をつける」は既習の用法ではない。D は、それを「目を開ける」と同一視しており、意味推測に失敗してしまった。④・e・i は「浸透」を表わす用法であるので、⑥をそれらと一緒にするのも適切ではない。とはいえ、分類の理由を見れば、これらの用法から共通した意味を抽出しようとする努力が見られた。また、D の「かける」の分類を見ると、興味深いことに、b と e と同じグループにして、「附着」を分類の理由として書い

ている。「かける」に「附着」の意味が含意されると書いたのは、「つける」と「かける」が類義関係にあると考えているからである。

さらに、分類の理由の欄を見れば、D はまだ同一した基準で分類を考えていない。その中には、中国語訳もあるし、語釈を分類の理由にするものもある。それに、何も記入せずに、空白のままにしたところも2ヶ所ある。それは、その連語の意味が分からないために、カテゴリー化もできないし、分類の理由も書けないからであると、D のフォローアップインタビューの回答から分かった。

一方、⑤と b、⑧と h のグループ分けおよびその分類の理由から見れば、中国語訳を用いたとはいえ、D は努力してカテゴリー化しようとしていることが分かった。特に、d・g・j・k の分類の理由の記述は明確であり、「新しい物（状態）の添加」という意味上の共通点を正確に抽出できた。

⑤ E の回答

E は「つける」の意味分類を下記のように図式化した。

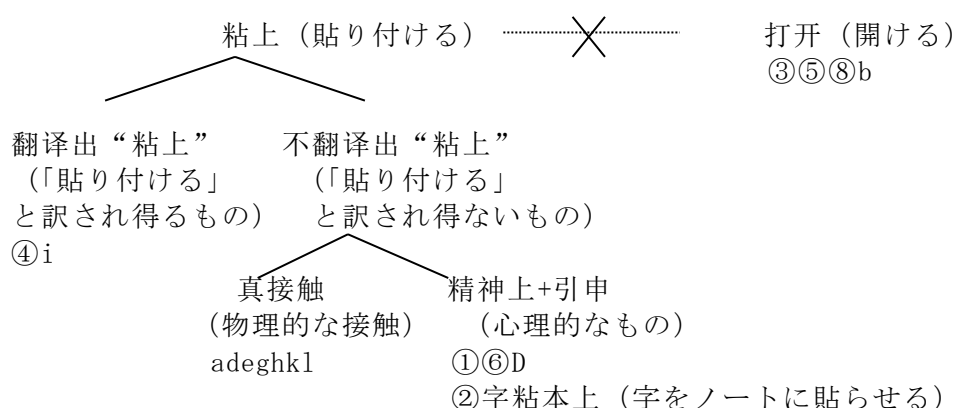


図 4-1 総合テスト調査Ⅱにおける E の回答

E は、6 名の調査協力者のうち、唯一図式で「つける」の用法を分類した学習者である。適切さはともかく、上下関係を用いて、意味の分類を試みるところだけは評価されるべきだと考える。まず、E の分類の基準を検討する。E は、ここに挙げられている「つける」の用法を「貼り付ける」と訳され得るものとそうでないものの2つに分ける。E も、中国語訳を用いてのストラテジーをとっている。“粘上 (「貼り付ける」)”に訳することができるかどうかを多義構造の出発点にして、「つける」の「貼り付ける」という意味をグループ分けの基準にするのは当然不適切なところがある。しかし、多義語の中国語訳で意味を分類するのは、学習者の1つの学習の方略である。なお、総合テスト調査Ⅰのときも、E は「つける」の中心義が“粘上 (貼り付ける)”だと考えていた。そういった認識が化石化していて、半年経ったにしても、修正はできなかった。

また、“打开”（開ける）がもう 1 つの上位分類である。「貼り付ける」と「開ける」の間は点線でつながり、しかもその真ん中に「×」が 1 つ書いてある。E の説明によると、「貼り付ける」意味の「つける」と「開ける」意味の「つける」とは関連性がないので、バツを書いたという。「貼り付ける」と「開ける」の分類はやはり、「つける」の中国語訳によるもので、合理的な分類法とは言えない。それに、「×」で示したように、母国語を用いた分類方法は、多義語の持っている語義間の関連性を切り離してしまう。これは、場合によっては、学習の障害となり、多義構造の構築にはいい方法とは言えない。母国語を利用して分類を行うことで、多義語の全体像が見えなくなってしまうのである。

E は、「「貼り付ける」と訳され得ないもの」をさらに 2 種類に分けている。今回の基準を見ると、E は、意識的に具体的な行為と抽象的な行為を分けて考えていることが分かった。物理的な行為と抽象的な行為を分けて考えること自体は非常に望ましいと考える。しかし、「物理的な行為」に属する a・d・e・g・h・k・l は、同一の性質を持っている意味用法ではないし、分類が大雑把すぎて、適切とも言えない。

⑥ F の回答

F のグループ分けは、表 4-14 で示す。

表 4-14 総合テスト調査Ⅱにおける F の回答

グループ分け	分類の理由
①⑥⑦cdek1	精神上使其具有…特性 (心理的に) 対象に何かの特性を持たせること
②④⑧ahi	表示附着、连接 (付着・結合を表わす)
③⑤bfgm	电的连通、启动, 比较抽象的 ((抽象的な用法で) 電気が通じること、起動すること)

F の 3 分類の結果を見て明らかになったのは、まず、F の中では、挙げられた用法から心理的な行為の「つける」を抽出しようとしていることである。上位分類に見られる①・⑥・⑦・c・d・e・k・l グループと③・⑤・b・f・g・m グループに対して、②・④・⑧・a・h・i グループは、具体的な行為を表わすものである。また、F の他の動詞の分類基準からも、こういった傾向が見られた。①・⑥・⑦・c・d・e・k・l グループの「対象に何かの特性を持たせること」という解釈から、F は、「つける」に含意される使役の意味合いには気づいており、ここは評価すべきである。しかし、①・⑥・⑦・c・d・e・k・l のすべてが「つける」ことで「特性が与えられた」意味を含意しているとは言えない。

また、F の「かける」の分類では、①・②・⑤・a・b・f・e を 1 つのグループにした。適切さについての検討はここでは省くが、その分類の理由の 1 つとして“附着、沾在上面(付着、その上に貼る)”を挙げた。この結果から、F も、他の学習者と同様、「つける」

と「かける」の用法をうまく区別できないことが分かった。

4.5.3.2.3 まとめ

この調査を通して、一年半日本語を学習した調査協力者が、既習の意味から新出義を推測するのはまだ困難であることが分かった。しかし、「つける」の多種多様な用法を分類する際には、不適切なところもあるものの、意味分類を積極的にやっていることが分かった。また、6名の調査協力者の意味分類を比較したところ、その分類の基準が異なり、分類の結果も一致していないことが分かった。

調査協力者の分析の基準には、統一した根拠がない。一部の意味に対して、上位概念または抽象概念を用いて分類を試みた調査協力者もいたが、多くの場合、中国語訳で意味の分類を行った。中国語訳で分類することは便利なところがあるかもしれないが、そのせいでグループ間の関連性は全然見えなくなってしまった。それに、下位分類もされていない。調査協力者は、各語義の、中心義との親疎関係を見逃しているように思われる。また、多義語の語義の連続性は、まだ意識していない。

このレベルの学習者にとって、「つける」の意味拡張の経路を抽出することはまだ難しい。新用法に出会って意味推測をするとき、まず、動詞の前に来る名詞からヒントを得て、また、母国語のそれに関連できそうな用法を利用し、自分なりに解釈する方略を用いる。これは学習の習熟度にも関わるが、多義語の性質そのものに対する認識はまだ浅いと考える。今回の調査結果からいうと、この6名の調査協力者にとって、ネットワーク作りどころか、意味の分類を行うのもまだ難しい。

また、「つける」の一部の意味間の類似性や近接性は、中国語母語話者には認識されにくいことが今回の調査で明らかになった。よって、語彙教育への支援を目的とした「つける」の意味を記述するためには、「つける」の意味がどのように拡張しているか、また、意味間にはどのような関連性があるかを示すべきである。そして、意味拡張のルートと意味の関連性を学習者に明確に提示すべきである。

日本語教育の現場において、多義語だけを教える時間はなかなか取れない。それに、1冊（1シリーズ）の教材では、多義語のすべての意味を網羅するのも無理である。ゆえに、意味推測の能力を身につけなければならない。例えば、読解の練習をする際、付随的な推測活動を用いて学習するというようなことが一般的である。学習者は、意味が与えられない状態で、既習用法や文脈などの手がかりにし、多義語の意味を推測する能力が求められる。今回の調査結果から見れば、学習者の意味推測を支援できるような更なる工夫をすべきであると考えられる。

4.5.3.3 総合テスト調査Ⅲ²⁷

4.5.3.3.1 調査の目的と内容

これまでの調査を踏まえ、総合テスト調査Ⅲでは、日本語学習歴約2年の6名の調査協力者に対し、「つける」の産出とその関連語の習得状況を調査する。第二言語習得においては、産出は理解よりずっと難しい。特に、海外で行われる日本語の教室指導を中心とした場合はそうである。今回はまず「空所補充」の形で、与えられた文脈を利用し、適切な動詞を産出できるかどうかを調査する。また、与えられた文を読み、当該動詞の意味を確認したうえで、その動詞の反義語を書かせる項目を設定した。最後は翻訳の練習である。翻訳問題には、多義語とそれを含む連語や複合語などがある。

この調査では、「つける」のほか、他の動詞についても出題した。ここで結果をまとめる際に、「つける」に関わるものだけ取り出し、分析を行う。なお、調査協力者の他の項目に対する回答は、添付資料11である。

4.5.3.3.2 調査結果²⁸および考察

①「空所補充」問題について

「空所補充」を通して、提示された文脈、あるいは共起語に基づき、適切な動詞が産出できるかどうかをテストする。また、多義語の多義拡張に対する認識、また、類義語との混用が生じるかどうかも調査する。「つける」のほか、「かける」、「とる」、「きる」、「もつ」などの基本動詞のいくつかの用法も出題した。「空所補充」は25問出題したが、そのうちの10問の回答として、「つける」がもっとも適当である。まず、その10問を取り出し、表4-15のように整理する。その後、調査協力者の答えと照らし合わせて検討する。

表 4-15 総合テスト調査Ⅲの「空所補充」の「つける」に関わる項目

Q④	引っ越しの時、うっかりして家具に傷を <u>つけ</u> てしまった。
Q⑥	母の誕生日に手作りのケーキを贈りました。そして、感謝のカードも <u>つけ</u> ました。
Q⑨	——田中さんのところ、男の子が生まれたそうですね。名前を <u>つけ</u> ましたか。 ——うん、健太っていうの。
Q⑪	先輩はいつも励ましてくれて、元気を <u>つけ</u> てくれました。
Q⑬	顔を窓ガラスに <u>つけ</u> て覗き込む ²⁹ （窺視）。
Q⑯	道を渡るとき、車に気を <u>つけ</u> てください。
Q⑰	やはり決心を <u>つける</u> のが難しい。
Q⑳	ひどい怪我をしたみたいですね。傷口にすこし薬を <u>つけ</u> てあげましょうか。
Q㉓	うわさでは、この映画では新人女優を主役の座に <u>つけ</u> たそうだ。
Q㉔	たまっていた仕事に手を <u>つける</u> 。

以上の10問に対して、表4-16では調査協力者の回答をまとめる。

表 4-16 総合テスト調査Ⅲにおける「空所補充」の結果の一部

調査協力者 質問	A	B	C	D	E	F	「つける」 の回答数
Q④	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	し	5
Q⑥	贈り	つけ	つけ	つけ	書い	つけ	4
Q⑨	決め	つけ	つけ	つけ	つけ	取り	4
Q⑪	入れ	つけなおし	もたらし	つけ	出し	上げ	1
Q⑬	だまっ	通じ	隠し	(空白)	通っ	通し	0
Q⑯	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	6
Q⑱	(空白)	決める	定める	かける	つける	つけ	1
Q⑳	ぬっ	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	5
Q㉓	座っ	取っ	決め	なっ	やっ	つけ	1
Q㉔	ひいた	離れた	出す	かける	出す	手伝う	0
「つける」 の回答数	2	5	5	6	5	4	

一方、他の問題に対して、「つける」を間違えて使ってしまった回答を、学習者別に抽出する。結果は、表 4-17 のとおりである。

表 4-17 「つける」を間違えた問題

A	なし
B	Q⑩父は自分の気持ちを口に <u>つけ</u> て言う人ではない。
C	なし
D	Q㉔山本、お客さんにお茶を <u>つけ</u> てください。
E	Q①あの眼鏡を <u>つけ</u> た人は誰だか知ってる？ Q⑩父は自分の気持ちを口に <u>つけ</u> て言う人ではない。 Q⑱料理を小皿に <u>つけ</u> て食べる。
F	Q㉔日本語の長文をどのように <u>つけ</u> て読むのが分からない。

続いて、結果分析に移る。調査協力者の回答を見れば分かるように、問題⑪・⑬・⑱・㉓・㉔の正解率が低い。コロケーションでいうと、「元気をつける」、「顔を窓ガラスにつける」、「決心をつける」、「新人女優を主役の座につける」、「手を付ける」の用法である。当然のことながら、教科書においても、教室で教師が指導するときでも、ある語に関わるコロケーションをすべて挙げることはできない。授業で導入するときは、例として挙げられる共起表現が限られている。上記の 5 つの連語は、「基礎日本語」の授業でインプットを与えたことがない。

しかし、学習が進むにしたがって、学習者は出会った意味を身につけたうえで、またどのような語と共起できるかを自分で考えられるようになるはずである。そうでないと、学習はいつになっても前へ進めないと言えよう。例えば、「元気をつける」は学習しなかったが、「体力をつける」は学習した（2015/11/11³⁰）という場合でも、「元気をつける」と「体力をつける」の「つける」が同じ意味用法であることに調査協力者が気づいていないこと

がある。こうした、1つの意味の不徹底的な習得は、学習の効率を減らし、かえって学習者の負担ともなる。そこで、「つける」の意味をしっかりと身につければ、共起語が変わっても、同一の用法ではどのような共起語があるかは把握できるようになる。つまり、共起語の範囲をはっきりと分かって、はじめて1つの用法が習得できたと言えよう。したがって、習得を支援するために、学習者に共起語の特徴や使用範囲などを提示すべきである。

また、「顔を窓ガラスにつける」は、「つける」の身体部位と背景物との一時的な付着である。既習のコロケーションではないが、「つける」の基本義を身につけていれば、意味を正しく推測できる用法である。しかし、調査協力者の回答から、文全体に対する誤解が生じたことが分かった。3名もの調査協力者が表記「通」の動詞を用いた。これは、コロケーションを中国語に訳し、「つける」に当てはまる中国語の動詞を考え、そしてまたそれを日本語に翻訳するというプロセスで推測した結果である。

「座につける」と「決心をつける」、「手を付ける」は慣用の度合いに差があるが、慣用表現である。インプットされたことがなく、「つける」の意味に対する理解が深くなければ、正しく産出できないのも当然である。同じ意味用法でも、出会ったコロケーションは分かる、出会ったことのないものは分からないというような、学習者の不完全な意味の習得を解決するための対策を考えるべきである。また、問題⑭の回答に注目すると、調査協力者は、さまざまな回答をした。問題⑭の意味は、文脈で正確に推測はできる。しかし、中国語の“插手”に相当する日本語の動詞は分からない。当然のことながら、慣用句「手を付ける」も産出できなかった。実は「手を付ける」における「つける」と既習のものとの関連性が分かると、「つける」の推測は成功する。

このように、既習の意味から未習の意味への推測方法は、まだ身につけていない。また、学習した連語は分かるが、学習しなかった連語は分からないのが学習者の学習実態である。多くの「つける」の意味用法を学習したとしても、学習者が自分の中でそれらの意味を構造化できなければ、また、推測能力がなければ、未習の意味はもとより、既習の意味も徹底的には習得できない。

一方、問題④、⑥、⑨、⑯、⑳は、高い正答率を示している。インプットを受けたことのあるコロケーションは産出しやすい。「傷をつける」(2016/3/18)、「カードをつける」(2016/6/1)、「名前をつける」、「気をつける」(2014/12/9 など数回)、「薬をつける」のうち、「基礎日本語」の授業では「名前をつける」と「薬をつける」をまだ学習していない。とはいえ、この2つの用法は常用的であり、この授業以外のところでインプットを受けた可能性も高い。

また、調査協力者の誤用から「つける」の学習者類義表現の情報が得られた。「薬をつける」と「薬を塗る」、「名前をつける」と「名前を決める」、「座につける」と「座に座る」、「*眼鏡をつける」と「眼鏡をかける」などが挙げられる。共起する表現によって、「つける」の意味も異なる。それに、対応する類義語も違う。それゆえ、「つける」の各意味に対応する類義語をどのように学習者に提示するか、そして、どのような語を類義語として学

習者に提示するかは問題となる。また、表 4-16 を表 4-15 と比較すれば分かるように、「つける」と他の動詞との混同が目立つ。これも、やはり「つける」を十分に理解していないからである。

さらに、正答率の高いものと低いものの、また誤答の「A を (B に) につける」の形を比較すると分かるように、正答の方の A は学習者に馴染みのある表現で、基本名詞として既習であるし、常用度の高い語でもある。それに、中国語の表現を連想しやすい語が多い。一方、正答率の低いものには、慣用表現が多い。また、対象名詞 A は既習でも、コロケーションそのものを学習しなかった場合もある。誤用の方にも、同じ傾向が見られる。誤答の A は、常用度は高いのだが、多くの動詞と組み合わせることができるので、かえって間違えやすくなる。

以上のように、調査協力者全員の回答を見てきた。日本語学習歴 2 年の学習者たちは、多くの「つける」意味用法を学習したと言っても、まだ習得が不十分で、自由産出に難しさを感じている。また、基本義でさえ、自由に運用することができない。したがって、派生義と慣用表現はいっそう難しい。さらに、インプットされたことのない表現に対する意味推測の能力は、まだ不十分であることが明らかになった。

②「反義語」問題について

今回の調査では、「つける」の関連語の代表としての反義語の習得状況を考察する。反義語を調査することで、「つける」の当該の意味の特徴と使用範囲を明確に把握できるかが見られる。調査で出題した「つける」の意味はすべて既習のものであり、連語の形で提示した。表 4-18 は、調査項目と調査協力者の回答である。

表 4-18 総合テスト調査Ⅲにおける問題 2 の「つける」に関わる項目

	A	B	C	D	E	F
①テレビを消す	つける	つける	つける	開ける	つける	つける
④癖をとる	抜く	捨てる	やめる	あきらめる	なおす	(空白)
⑥上着のボタンをつける	取る	取る	外す	(空白)	抜ぐ ³¹	(空白)
⑨ふすまを取り外して 1 つの部屋にする	(空白)	つける	折りる	(空白)	つける	取り入る

続いて、各項目とその回答を検討する。項目①の電気器具などの起動の「つける」と停止を表わす「消す」は、授業中のインプットがかなり多かった。比較的早い段階で習った用法であり、2 年という学習期間中において何度も提示された。調査協力者 D の使っている「開ける」は、明らかに母語の干渉を受けた結果である。前にも触れたように、「開ける」の中国語訳は“开”であり、電気器具の起動を表わす語として広く用いられている。

項目④の「癖をとる」という用法に対し、F は何も記入できなかった。他の 5 名の調査

協力者も、正しく理解できなかった。興味深いことに、この5名はみな「癖をとる」を「良くない習慣になる」のように考えている。そこで、「抜く」、「捨てる」、「やめる」、「あきらめる」、「なおす」をその反義語として書いた。この5語の共通しているところをいうと、「何かよくない物あるいは状態を取り除いたり、修正したりする」点である。当然のことながら、正しい反義語を産出できない理由には、「とる」という多義語を習得できないこともある。ここでの「とる」は「ものをそれまであったところから自分側に移す」という意味ではなく、「ものを自分に近いところから他のところへ移す」という意味である。「癖をとる」は不要なものを除くことから「良くない習慣を正す」へ拡張した用法である。実は、「癖をつける」という連語はすでに学習している。しかし、学習者の記憶に残らず、習得はできなかった。

「ボタンをつける」の反義表現を4名の調査協力者が回答した。この連語に対する誤解は、注目に値する。4名の答には「取る」、「外す」、「抜く」の3種類の回答があった。「外す」は確かに、場合により「つける」の反義語になることがあるが、ここではそれではない。また、「*ボタンを抜く」は不自然な表現である。これらの誤用が出現したのは、「ボタンをつける」の意味がはっきりと理解されていないことと、反義語に対する正確な認識がないためである。

「ふすまを取り外す」の反義表現は、「ふすまを取り付ける」である。一般的には、複合動詞の反義語も複合動詞である。しかし、複合動詞で回答した者は、1名しかいなかった。とはいえ、その回答の「取り入る」の意味とは関係がなく、学習者の誤用であると認定した。BとEは、「つける」と書いたが、単純動詞で回答したのは不適切である。

以上のように、反義語の4問のうち、3問の正解率が低い。「つける」の反義語を正しく産出するには、当該の「つける」の意味を正確に理解したうえで、その反義語に対する正しい認識が必要とされる。ここでいう「正確な理解」とは、意味の使用範囲、意味特徴、ときには語感などを明確に認識することである。反義語ペアは、意味上関連性があるので、一方をしっかりと覚えることが、他方の習得にもつながる。また、反義語ペアは、相互の習得を促進する働きも持っている。ゆえに、反義語は、類義語と同様、学習者の語彙学習に欠かせないものである。調査協力者の回答から、この面に関わる知識が不足していることが見られた。

③「翻訳」問題について

この部分では、慣用句と複合語（複合動詞と複合名詞を含める）の語例を取り上げて、翻訳をさせる。既習の意味に関わる知識を用いて、新しい意味や関連語の意味を推測することができるかどうかを調査する。15問のうち、「つける」に関わるものが表4-19の8問である。

表 4-19 総合テスト調査Ⅲ 問題 3 の「つける」に関わる項目

原文	A	B	C	D	E	F
Q①重要事項は書き付けておいたほうがいい。	重要事项还是写下来比较好。	重要的事情事先写好为好。	事先把重要事项记下来更好。	把重要事项附着写上的话更好。	重要事项事先写出来比较好。	重要的事情最好事先记下来。
Q④人の弱みに付け入るようなやり方。	针对他人弱点的做法。	切中人要害的做法。	切入人的弱点的做法。	人类是不把弱点展示给他们的人。	抓住人弱点的作法。	像这样乘人之危的方法。
Q⑥庭の木が実を付けている。	院子里的树结果了。	院子里的树结果了。	院子里的树结果了。	庭院里种着树。	院子里的树结果了。	庭院里的树木都长实了。
Q⑧病院へ駆けつけた。	狂奔到医院。	快速的去医院。	奔向医院。	到医院治病。	赶去医院。	跑去医院。
Q⑩当てつけるように自分の恋人を友達に見せる。	就像附赠品一般把自己的恋人给朋友看。	处的差不多的恋人给朋友看看。	为了安心把自己的恋人给朋友看。	(空白)	把恋人带给朋友评价看看。	把自己的朋友当恋人。
Q⑫彼はいつも格好をつけた態度をとる。	他的态度总是附和穿着。	他总是很任性。	他总是那种耍帅的态度。	他总是态度上做老好人。	他一直采取以貌取人的态度。	他总是能得到好印象。
Q⑭この議論の火付け役は部長だった。	部长是这个讨论的发起人。	这场争吵的导火索是部长。	这个争论的导火索是部长。	这个议论的矛头指向的是部长。	争论的源点是部长。	这次议论的引发人是部长。
Q⑮この部屋にエアコンが付いています。	这个房间有空调。	有人在这个屋子里装了空调。	这个房间配有空调。	这个房间带着空调。	这个房间有空调。	这个房间的空调开着呢。

調査協力者と各問題の正解数は、表 4-20 のようである。

表 4-20 調査協力者の回答

	Q①	Q④	Q⑥	Q⑧	Q⑩	Q⑫	Q⑭	Q⑮	正解数
A	○	○	○	○	×	×	○	○	6
B	○	○	○	○	×	×	○	○	6
C	○	○	○	○	×	○	○	○	7
D	×	×	×	×	×	×	×	×	0
E	○	○	○	○	×	×	○	○	6
F	○	×	×	○	×	×	○	×	3
正解数	5	4	4	5	0	1	5	4	

この 8 問は、「つける」に関連する用法で、複合動詞 4 つ、複合名詞 1 つ、連語 3 つからなる。まず、複合動詞「書き付ける」は、5 名が正しく訳せた。D は、後項動詞の「つける」の存在を意識し、前項と後項の関係を時間順で「重要事項を付言のように書く」のように考え、誤った。他の 5 名は“记下来”、“写下来”のように訳している。両方とも自然な訳文であるが、訳文だけからは学習者が「書き付ける」の意味を本当に分かったかどうかは判断できない。また、ここでは「書き付ける」ではなく、「書く」を用いても、また同じような訳文が出てくるという可能性もある。複合動詞「書き付ける」における「つける」の

働き、また、「書く」と「書き付ける」の区別はどこにあるかを理解するには、単純動詞「つける」を分析したうえで、後項動詞の「～つける」に対する別の検討が必要とされる。学習者の学習を支援するには、こういった記述が欠かせない。

関連した Q⑧の「駆けつける」も、「つける」が後項動詞になる語例である。D 以外の 5 名の訳文から、「駆けつける」が表わしている「目的地へ急ぐ」という様態は把握できていると見られる。D は、「到着」の意味を翻訳できたが、「駆ける」の様態については適切な中国語動詞を使わなかった。一方、Q⑩の「当てつける」は、全員正しく訳せなかった。「当てる」も既習語であるが、「書きつける」と「駆けつける」のように、容易には正しく推測できない。こういった複合語は、インプットをされない限り、習得はやはり難しい。とはいえ、「つける」の意味に関連づけられるならば、正確に理解できないわけではない。

Q④の「付け入る」の翻訳は、いっそう難しい。D と F の訳文は、誤りが大きい。他の 4 名の訳文は、だいたい合っているが、「付け入る」の「相手の弱みをうまく利用する、巧みにつかむ」というような意味合いが訳文からは見られなかった。「付け入る」は使用範囲が限定されていて、単純動詞「付ける」と「入る」のそれぞれの意味からは推測できない。こうした意味特徴を持っている複合動詞をどのように学習者に提示するかを検討すべきである。

Q⑭は、複合名詞の実例である。「火をつける」の点火の意味は既習の用法である。しかし、事件や議論のきっかけをつくるという意味は学習していない。とはいえ、このメタファー表現は、中国語にも存在している（“点火”）。それに、「火付け役」も、中国語の“导火索”と一致している。つまり、調査協力者の既存の理解（母語体系）と一致している。D 以外の 5 名が正しく訳せ、高い正解率を示している。このように、母語からの正の転移が発生する可能性も大きい。意味推測を行うときに、特に初級の段階では、対象語に対する知識はもちろん、学習者の母語も重要な役割を果たしていることが改めて確認できた。母語の正の転移をうまく利用すれば、学習者の語彙指導に役立つに相違ない。

Q⑥の「実を付ける」は、植物主語の花や実などの生成を表わす非意図的な用法である。他動詞で非意図的な行為を描くこの「つける」は、中国語には類似した用法がないので、習得が困難であると想定する。しかし、「実」の意味が分かれば、前後の文脈を考えて、文全体の意味を推測することは難しくない。4 名の調査協力者が正しく訳せた。文全体の意味を考えて意味の推測をした結果だと考える。一方、D の「庭には木が植えてある」、F の「庭の木がたくましく育っている」は、まず「実」の意味が分からなかったと見られた。「実をつける」のような用法を学習者に提示するときに、非意図性という特徴に対する説明や常用の共起表現の提示が重要である。また、この「つける」は、プロトタイプ義にどのように関連するかを示すのも重要である。

Q⑫の「格好をつける」も、慣用表現の 1 つである。テストの結果を見ると、全体の正解率は低かった。慣用句は、やはりインプットがなければ、学習者自力ではなかなか意味推測に成功できない。前にも触れたように、1 つの多義語を記述するのに、すべての慣用

句を例示するわけにはいかない。学習者のための多義語記述をするなら、学習者の推測しにくいもの、しかも常用度の高いものを選出して示す工夫が重要である。

Q⑮は、電気器具の起動の「つける」と考えてしまいがちである。Fは、こうした誤解をしたが、これは、二格共起語があるので、起動ではなく、設置を表わす「つける」である。Dの使っている中国語訳“附带（「付帯、付随」）”は動作ではなくて、状態を表わす語である。他の4名は、文型「BにAをつける」の存在を意識でき、正しく翻訳できた。学習者が「BにAをつける」の表わす事象を理解できない限り、「部屋にエアコンをつける」ような用法は習得できないと考える。

4.5.3.3.3 まとめ

以上の総合テスト調査Ⅲの結果と分析に基づき、(9)のようなことがまとめられる。

- (9) ①現段階の学習者にとって、「つける」の自由産出は、まだ困難である。特に、インプットされたことのないコロケーションは、産出しにくい。1つの意味の不徹底な習得が学習者の負担となる。既習の用法に基づき、同用法に使える共起語の広がりや新用法への推測を支援する工夫をすべきである。
- ②学習者にとって、「つける」とその類義表現との使い分けが難しい。多義語には多数の意味がある分だけ、類義の表現も存在するわけである。多義語とその類義語語群も1つのネットワークを形成している。多義語とその類義語をともに学習することで、両方の意味用法への理解が深まり、相互に習得を促進することができる。
- ③関連語としての反義語の学習も、類義語のように、多義語学習に関係する。意味の使用範囲が明確に分からない限り、反義語の産出は困難である。
- ④翻訳をする際、学習者が文全体の意味をだいたい理解できる場合でも、1つ1つの語の意味に対する配慮が不十分であることがある。文を構成する語の意味を正確に理解したうえで、文脈を考えることで、初めて正確に文を訳すことが可能になる。
- ⑤学習歴2年の調査協力者は、意味推測能力がまだ足りない。意味の推測能力を伸ばすには、まず既習の意味のネットワークの構築が必要とされる。そこから、新たに出会った意味との関連性を見つけ、意味の推測を行うべきである。

4.5.3.4 総合テスト調査のまとめ

今回の縦断的な調査を実施した2年間において、3回にわたって総合テスト調査を行った。総合テストⅠは、多義語の学習方法を調査したうえで、「つける」の既習用法の産出、中心義に対する認識、中心義と派生義の関連性についての理解を調査した。その結果、この段階の学習者は、母語を用いて語彙の学習をするストラテジーを取っているが、それに

は便利な点がありつつも、負の転移も生じ始めていた。学習者が独力で既習の意味用法を思い出すことは、まだ難しい。しかし、「電気をつける」のような母語の語彙体系に近い用法は、覚えやすい。

一方、初級段階の学習者にとって、「味をつける」のような、母語を借りて覚えるというストラテジーの効かない用法、「身につける」、「気をつける」のような慣用表現は、なかなか思い出せない。また、「つける」の中心義に対する間違った認識も目立つ。意味拡張の出発点に位置する中心義を習得できないと、多義ネットワークを構築することも無理であり、効果的な多義語習得はできない。

総合テスト調査Ⅱは、学習者自身が、多義語の諸意味の中から、意味合いの比較的近いものを抽出することができるかどうか、未習の意味を正確に推測できるかどうかの調査である。つまり、意味に近いものをカテゴリー化する能力をどれほど身につけているかを調査するものである。多くの調査協力者は、自分なりに「つける」の意味用法を分類し、積極的にグループ分けしている。しかし、学習者の意味分類を観察すると、その分類の基準がそれぞれ異なり、分類の結果が一致していないことが明らかである。それに、分析の基準には統一した根拠がないし、下位分類も見られない。学習者にとっては、ネットワーク作りはもちろんのこと、意味の分類を行うこともまだ難しい。未知の意味に対する推測には、失敗が多い。

総合テスト調査Ⅲの「空所補充」の回答から、学習者には普段インプットが多く、かつ母語知識に近い用法が長期記憶に残りやすいことが分かった。また、「つける」の多義拡張に対する認識は、まだ不十分なところがあると観察された。さらに、類義語との混用も見つかった。反義語という関連語に対する認識も明白ではないと見られた。上記のような産出の項目に比べ、翻訳のような受容の項目は正答率が高い。日本語を約2年間学習して、能力試験N2合格に相当する日本語能力を有している学習者も、多義語の多義派生や多義構造を把握できているとは言えない。

総合テスト調査は、授業記録の分析と小テストに対する考察と同様、それぞれの調査協力者に対する観察もあったが、6名の「つける」を学習する様子や習得の状態を合わせて検討・考察できるところが多かった。次節では、調査協力者別の結果をまとめ、考察を行う。その後、両方の結果を合わせ、本調査の目的に照らし合わせて結論を導く。

4.5.4 調査協力者別の結果

調査協力者別の結果をまとめるポイントは、「つける」の理解・使用の正確さ、使用傾向、正解数（増加が見られるかどうか）、誤用、母語干渉、母語の正の転移と負の転移、学習困難点、体系の形成などである。それらをふまえ、学習者それぞれの習得順序、「つける」の多義体系の形成、「つける」と関連語のネットワークの形成を分析していく。各テストにおける調査協力者の回答は、それぞれ表にまとめる。総合テスト調査の結果は4.5.3で示したので、表4-21から表4-26には入れないこととする。代わりに、考察を行う際、必要に

応じて総合テスト調査の結果に言及することにする。

4.5.4.1 A の場合

各テストにおいて A の回答は以下のようにまとめられる。

表 4-21 A の調査結果のまとめ

時間	テストの内容	A の回答	正誤 ³²
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	散味（味を除くこと）	誤
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	空所補充：コンタクトレンズを_____	つける	正
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いから、電気をつけたい。	正
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	お酢も醤油もつけませんが、おいしいです。	正
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	特にない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記をつける	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	（表 4-8 と表 4-9 で示す）	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	ぼくは日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の空所補充：ネックレスを_____	無回答	誤
2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒いだから、体に気をつけてください。	正
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	友達の大切さを気がついた。	誤
2015/10/29	小テストⅠ	（表 4-6 で示す）	
2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	让孩子掌握好习惯！	正
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	（表 4-10 で示す）	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをつける	正
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点火	正
2016/4/15	「コートのボタンをつける」の中国語訳	给衣服装上扣	正？ ³³
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	让孩子有教养	正
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	形成…习惯	正
2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	…一种不负责任，没有责任感的想法深深地烙印入心中。	正
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	对内容进行增减	正
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	（表 4-15～20 で示す）	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、丸を付ける	正
2016/6/21	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	安装在外廊上	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	动画需要数目难以估计的画和功夫	正
2016/6/24	小テストⅡ	（表 4-7 で示す）	

次に、調査期間の2年にわたって、各テストやイメージ調査などから A の習得状況をまとめる。表 4-21 で示しているテストの結果から言うと、A の正答率は比較的高くて、25 問のうち 21 問を正しく回答できた（総合テストと小テストⅠ、Ⅱの結果を除く）。表 4-21

に挙げたテストの内容のほとんどは、授業中学んだことについてのテストである。一方、総合テスト調査で挙げた新用法の誤用と誤解からは、A の「つける」に対する学習はまだ不十分なところがあることが分かった。

一学期では、「つける」に関わる内容も少ないので、A は、授業で習った用法と教科書に出ていた用法は習得できた。二学期においても、A は、良好な学習効果を見せているが、「味をつける」と「日記をつける」を学習するとき、問題が生じた。「味をつける」は「つく」の意味から関連付けられなかった。初めて「日記をつける」に出会ったとき、既習の用法との関連性を考え出すことはできなかった。このときの A の多義語に対する認識は、まだ浅くて、意味同士の関係、自動詞との関連性はまだうまく把握できていないと考える。また、総合テスト調査 I のイメージ調査では、A 自身も自他動詞が難しいと述べている。

総合テスト調査 I の A の学習方法からも分かるように、この段階の語彙学習は、漢字に頼りがちである。中国語の漢字と日本語の漢字で同じ意味を表わす場合には、確かに容易に習得できる。しかし、そうではない場合、学習が困難に思われる。「つける」に対する認識は、学習者の母語にかなり左右され、両言語間のずれが多く見られる。もちろん、この違いが母語の影響か、学習者の中間言語だけの現象か、現段階では結論を出すことはできないが、中国語からの負の転移を防ぐ対策が望ましい。

総合テスト調査 I の、自力で「つける」の用法を思い出させる調査項目では、既習の 8 つの用法のうち、最初に習ったインプットの多い、電気器具などを起動する意味の「電気をつける」と学習したばかりの「日記をつける」の 2 つが書けた。一方で、また、「*鼻をつける」と書き、「鼻が塞ぐ」のように誤解している。A だけではなく、他の調査協力者もそうであるが、何のヒントもない状況で語の意味を思い出すのはやはり難しかった。それから、この 2 種の用法が書けた A は、「付着」、「連結」を「つける」の基本義だと判定し、用法間のつながりという問いに対して、「1 つのものがもう 1 つの物に付着する」という判断もそれまで習った用法に適應できた。

三学期では、「味をつける」などが正用に変化していることから、習得への第一歩が見えた。一方、空所補充の「ネックレスを_____」の練習では、正しい答は出せなかった。身の回りの品の着用という用法は、学習できなかった。既習の用法と関連付けて推測できるかと考え、設置した質問であるが、A は回答を出せなかった。また、この時期で目立つのは、「～に～をつける」という定型文の練習である。他動詞の「つける」がヲ格を要求することはうまく理解できたが、二格の理解と使用に誤用が出現している。「部屋にクーラーをつける」は、その一例である。

また、「気をつける」の二格が出現しているとき、正確に使えたが、自動詞連語の「気がつく」は正確に産出できなかった。これも二格の不完全な理解がもたらした結果だと考える。とはいえ、小テスト I の結果では、A は比較的高い正答率を示している。特に、「つける」に含意される使役の意味合いがよく習得できていた。しかし、「名前を付ける」は、学習したことがないので、意味の誤解が生じた。

また、総合テスト調査Ⅱの「つける」に対する分類を見ると、A は積極的に「つける」の意味をカテゴリー化しようとしている。しかし、中国語の訳文を通しての分類が多いことから、母語を利用した学習法が A の中では重要な役割を果たしていると考えられる。

四学期のテスト結果を見ると、A は、もっと高い正答率を示している。こうした結果からも、A の「つける」の習得は進んでいると観察できた。間違えたのは、複合動詞「取り付ける」だけである。四学期では、複合動詞や関連語彙が学習の重点となるので、多くの語が出てきた。授業で提示されたものに限りがあって、それに類似している語を身につけることができるかどうか分かるように、総合テストⅢを設けた。

総合テストⅢは、本調査の最後のテストであり、少し難しかった。A は、多くの質問に正しい答えを出した一方、積極的な試行錯誤を行った結果、形態的な誤用も現れ、興味深い回答をいくつか出した。例えば、「上着のボタンをつける」の「つける」の反義語で「取る」と正確に書けたのに、「癖をとる」の「とる」の反義語を正しく答えられなかった。当然のことながら、これは「とる」の不完全な習得にも関わるが、「つける」の意味を十分に理解していないために、「取る」の産出に失敗したということも可能である。

また、前にも触れたように、予備調査で学習者の多義語の学習法として一番多く挙げられたのは、辞書を通しての学習である。しかし、A の授業で習ったものは習得できているのに、それ以外のものに誤用が多々出現していることから、授業でのインプットが多義語学習の重要な手段であるように思われる。それゆえ、初、中級段階の学習者の多義語支援を行うには、授業での多義語の指導法や指導の内容を工夫しなければならないと言えよう。

4.5.4.2 B の場合

各テストにおける B の回答を表 4-22 のにまとめる。

表 4-22 B の調査結果のまとめ

時間	テストの内容	B の回答	正誤
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	散味（味を除くこと）	誤
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	空所補充：コンタクトレンズを_____	つける	正
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いから、電気をつけたいです。	正
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	お酢もつけないで、醤油も付けないで、おいしかったです。	正
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	ない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記をつける	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	（表 4-8 と表 4-9 で示す）	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	私は日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の空所補充：ネックレスを_____	無回答	誤

2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒いですから、体に気をつけてください。	正
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	大事に思っている友達を気がつく。	誤
2015/10/29	小テストⅠ	(表 4-6 で示す)	
2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	孩子养成了好的习惯。	誤
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	(表 4-11 で示す)	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをつける	正
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点火	正
2016/4/15	「コートのボタンをつける」の中国語訳	为大衣钉扣	正
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	教育孩子	正
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	有…的习惯	誤
2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	…的想法一直被灌输	誤
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	増減内容	正
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	(表 4-15～20 で示す)	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、円をかく	正？
2016/6/21	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	安装在走廊上	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	做一个动画片需要数量大到难以想象的画以及下很多功夫的	正
2016/6/24	小テストⅡ	(表 4-7 で示す)	

B は、上記の 25 問のうち、18 問を正確に答えた。では、時間順で B の習得状況をまとめてみよう。まず、一学期では、前にも触れたように、「つける」についての学習が少ないため、調査協力者の間では差が現れていない。二学期では、B は、教科書に出ている用法、教師が授業で提示した用法をほとんど身につけている。ただし、A と同様、「味がつく」の意味から、「味をつける」への推測は成功しなかった。自他動詞の意味関連性に対して十分な知識を身につけていないからである。それに、総合テスト調査Ⅰでは、有対自他動詞の用法を整理して覚えていると言っているのに、「自他動詞の区別には規則が見えない」と回答した。やはり、自他動詞の使い分けと相互の関連性は、学習者にとっての難関である。

総合テスト調査Ⅰ自由産出の項目では、B は 6 名のうち、唯一「味をつける」が書けた学習者であった。いったん教室でインプットを受けたら、学習者は、積極的にそれらを覚えようとしている。しかし、多義語のネットワークを自分で作ろうと言われると、初級レベルの学習者にとってはまだ無理なところがある。「つける」の中心義が「付着」だと答えた B は、諸用法間のつながりは何かという問いに対しては回答できなかった。そのため、「日記をつける」の「つける」と既習の用法の間に関連性がないように考えてしまうわけである。意味間の関連性が分からないことは、多義語学習の障害となる。

日本語の難点は何かという問いに対し、B は、はっきりと「多義語がなかなか習得できなくて困る」と答えたことから分かるように、多義語の学習は学習者の負担となっている。こういった負担を減らすための工夫が必要とされる。学習した用法が少ないとしても、

それらを1つのネットワークにして、意味関係をはっきりと理解できれば、習得しやすくなるし、次の意味用法の学習にもつながる。

三学期では、諸テストの結果から、Bは、多くの誤用を出してことが見られた。「つける」の意味を学んでいくに合わせて、学習者の中に意味のネットワークが構築できない限り、深まった学習もできなくなる。しかも、混乱していく一方である。この時期のBは、「ネットワークを_____」の空所補充は正しく答えられたが、文脈の中での「気がつく」の使用には誤用が出現した。また、「子供にいい習慣を身につけさせてあげる」の翻訳から使役の意味合いを伝えることができなかった。「部屋にクーラーをつける」の二格に対する理解も誤っている。「肉に味をつける」、「学生に元気をつける」の翻訳は、不適切であった。「ボタンをつける」、「値段をつける」、「名前をつける」の「つける」の意味を既習の意味と関連付けずに推測し、勝手に翻訳したという印象だった。

また、総合テスト調査Ⅱの「つける」用法の分類では、Bの回答からも、既習の用法に対する理解が不十分であり、未知の意味への推測がうまくできないことが証明された。グループ分けの理由からも、上位概念、抽象概念と中国語訳が混在していて、統一する基準がないことも、その証拠となった。

以上挙げた、Bの習得に現れた誤用の発生は、やはり、「つける」の意味ネットワークに対する認識が不十分なためである。それで、「つける」の新用法の意味がうまく推測できなかったり、文（教科書で習ったコロケーションより大きな単位）の中に現れてしまうと、意味が把握できなくなったりする。

四学期の各調査の結果から言うと、Bの「つける」の習得は、進んでいると考えられる。特に、総合テスト調査Ⅲの「空所補充」では、高い正解率を示している。一方、Bの2ヶ所の誤用は、注目すべきである。まず、「つける」と「つく」の関連性に対する理解である。例えば、「癖をつける」の翻訳では、“有…的习惯”状態文を用いて訳し、また、文脈のない「傷をつける」を自動詞連語のように訳している。それに、「気がつく」を他動詞連語「気をつける」と同一視してしまった。これらの誤用から、Bは、「つける」と「つく」の関連性に対する理解がまだ不十分であることが分かった。もう1つは、既習の用法の不完全な習得である。また、総合テストⅠの結果を見ると、「ボタンをつける」の翻訳が適切ではなかった。Bだけではなく、多くの学習者には、「ボタンをつける」の用法は身につけにくいようである。それは、「つける」が暗示している付着させるまでのプロセスが分からないからである。

四学期には、Bの結果から、「自分の気持ちを口につける」のような形態的な誤用も見られた。テストに出ている「植え付ける」、「当てつける」といった「つける」の延長線にある複合語や「格好をつける」などの慣用表現に対する誤解も生じた。

まとめると、調査期間の2年において、調査協力者Bは、「つける」の学習に努力してはいるが、「つける」の多義構造をよく把握できたとは言えず、形態的な誤用、間違った意味理解などが出現している。その影響で、「つける」の関連語に対する認識にも問題が生じ

た。既習の意味の共起表現の広がりには注意を払わず、そのために、インプットの受けたことのないコロケーションの習得が進んでいないことが分かった。

4.5.4.3 C の場合

まず、各テストにおける C の回答を、表 4-23 で示す。

表 4-23 C の調査結果のまとめ

時間	テストの内容	C の回答	正誤
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	無回答	誤
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	「空所補充」：コンタクトレンズを_____	つける	正
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いですから、電気をつけたいです。	正
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	お酢も醤油もつけなくても、おいしいです。	正
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	特にない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記をつける	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	(表 4-8 と表 4-9 で示す)	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	私は日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の空所補充：ネックレスを_____	無回答	誤
2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒いから、体に気をつけてください。	正
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	友達の重要性が気がつきます。	誤
2015/10/29	小テストⅠ	(表 4-6 で示す)	
2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	使孩子养成好习惯吧！	正
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	(表 4-12 で示す)	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをつける	正
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点火	正
2016/4/15	「コートのボタンをつける」の中国語訳	给大衣缝上扣子	正
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	培育孩子	正？
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	…是日本人的习惯	誤
2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	生成了…无责任的心理	誤
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	增加与删减	正
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	(表 4-15～20 で示す)	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、丸を付ける	正
2016/6/21	「八ミリ摄影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	将它安在走廊	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	制作动画要超出我想像的困难，需要许许多多的画，下许多的工夫。	正
2016/6/24	小テストⅡ	(表 4-7 で示す)	

続いて、調査の期間順で C の習得状況を考察する。2 年間の教室での学習において、C

は日本語を真面目に学習し、インプットを受けた意味用法は後のテストではほとんど正しく回答できていた。Cは、調査協力者6名のうち、「つける」の習得においては、もっとも進んでいる学習者である。表4-23に挙げたテストの正解率は比較的高く、19問を正確に答えることができた。多義語に対する認識、多義語を学習するストラテジーからも多義語学習が進んでいると観察された。

総合テスト調査Ⅰの多義語学習法についての調査項目に対し、「つける」は付着の意味を持ち、文脈によって、翻訳の仕方も異なる。理解はしやすいと考える」と回答した。学習歴1年の学習者とはいえ、多義語の本質を十分に理解していると考えられる。その後の自由産出でも、「つける」の3用法を正確に書くことができた。また、「つける」の中国語に対応する定型文を“把…附着在…上”（「～に～をつける」）で回答した。ここまで書けたのは、「つける」の中心義そのものだけではなく、文脈における「つける」の意味機能も含めて中国語で表現できたからである。当然のことながら、この定型的な訳し方もいつでも適応できるとは言えない。しかし、こういった認識は、現段階の「つける」の学習に役立ち、次期の学習・習得にもよい影響を与える。

三学期では、他の調査協力者と同様、「ネックレスを_____」の空所補充を完成できなかった。繰り返しとなるが、学習したものは分かるが、未知の用法への推測は困難であるという傾向は、Cにも目立つ。ところが、学期末の総合テスト調査Ⅱのグループ分けでは、Cが多くの「つける」の未習用法を正しく分類できた。このように、Cは未知の意味を推測する能力が伸びていることから、「つける」の習得が進行していることが見られた。

また、総合テスト調査Ⅱのグループ分けでは、Cの分類は合理性があり、しっかりと「つける」の意味をカテゴリー化していた。グループ間の関係は明記していないが、中国語訳ではなく、抽象的な概念でグループ分けの理由を示した。このように、Cは、同用法の個々のコロケーションから共通した要素を抽出して、語義を定義できるようになっていると考えられる。

Cは、小テストⅠでは、9問のうち8問を正確に翻訳でき、一番高い正解率を示している。間違えたのは、「部屋にクーラーをつける」の翻訳である。それは、「つける」の二格用法に関連する誤りである。「クーラーをつける」の意味に注目しすぎると、二格の存在を無視してしまいがちである。二格の指導には、初級の段階から重点を置くべきである。

Cも、他の調査協力者と同様、「つける」の既習の意味からの、未知のコロケーションへの推測は、やはり困難であった。総合テスト調査Ⅲの「空所補充」の回答を見ると、10問のうち、Cは、5問を正しく答えていて、後の5問の回答も、積極的な試行錯誤を行った。分からない連語にしても、それに意味の近いものを入れようとしていた。回答の、「元気をもたらす」、「*決心を定める」、「*新人女優を主役の座に決める」、「(人の)仕事に手を出す」などの連語は確かに不自然、あるいは文においては不適切なところがあるが、連語の意味をよく考えて、意味の近い動詞を選んだ結果だと言えよう。Cの中では、「つける」とこれらの目的語との共起関係が明確に築かれてはいないが、文全体の意味に対する推測は正し

かった。ゆえに、どのようにして、学習者のこうした意思・意欲に応えるかを考えるべきである。すべてのコロケーションを列挙することはできないとしても、必要なものを提示し、共起できる語の範囲や特徴などを示し、学習者の自力で意味ネットワークを築く支援を工夫すべきである。

4.5.4.4 D の場合

表 4-24 は、D の各テストにおける回答である。

表 4-24 D の調査結果のまとめ

時間	テストの内容	D の回答	正誤
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	無回答	誤
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	「空所補充」：コンタクトレンズを ____	無回答	誤
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いから、電気をつけたい。	正
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	酢を蘸しなくて、醤油を蘸しなくて、なかなかおいしいです。	誤
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	特にない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記をつける	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	(表 4-8 と表 4-9 で示す)	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	私は日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の「空所補充」：ネックレスを ____	無回答	誤
2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒い	誤
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	友達の重要性を感じる	誤
2015/10/29	小テストⅠ	(表 4-6 で示す)	
2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	给孩子好的习惯。	誤
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	(表 4-13 で示す)	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをかける	誤
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点着烟	正？
2016/4/15	「コートのボタンをつける」の中国語訳	系大衣的扣子	誤
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	使孩子懂礼貌	正？
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	养成了…的习惯	正
2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	灌输了一种…的感觉	誤
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	把内容添加或删减	正
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	(表 4-15～20 で示す)	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、丸を描く	正？
2016/6/21	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	安装在外廊上	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	对动画片的想像一定要伴随着大量的画和工夫	誤
2016/6/24	小テストのⅡ	表 4-7 で示す	

各テストの結果から見れば、Dは、正解率が比較的低く、25問のうち13問を正確に回答できた。まず、「醤油をつける」の用法の習得から検討する。学習の初期は正しく翻訳できたが、そのあとのテストでは、「*醤油を蘸する」のような形態上の誤用を起こした。総合テスト調査Ⅱの意味分類では、両方とも「何かを物の上に付着させる」ことを意味すると考え、「醤油をつける」を「知識を身につける」と同じグループとした。両用法をこのような理由で同じグループにすることには無理がある。Dの中では、この2種の用法に対する誤解が存在しているようである。

総合テスト調査Ⅰの多義語のイメージ調査項目では、「多義語の存在はあまり意識していない。特に、意識的にまとめたり、整理したりしていない」と回答した。多義語の存在を意識していない限り、有効な学習方法も取れていないはずである。それに、「つける」の中心義は何かという問いに対し、「覆っているものを外す、開ける」と回答した。これはおそらく母語の影響を受け、「電気をつける」の「つける」を「開ける」のように考えてしまうからであろう。

Dは、多義語の中心義の性質に対する理解が間違っている。「電気をつける」は確かに早いうちに学び、インプットが多い用法である。しかし、それは「つける」の中心義ではない。学習者に中心義に対する概念的な理解ができなければ、派生義に出会ったとき、意味間の関連性も身につけられず、多義ネットワークを構築することも無理である。

テストの結果を見ると、三学期でも、Dが多く誤りを犯していることが分かる。その中で、注目したいのは「気をつける」と「気がつく」の翻訳テストである。他の調査協力者の誤りの多くは、二格の使用にある。しかし、Dだけがこの2つの連語を1つも書けなかった。特に、「気をつける」と中国語“注意”の対応関係は明らかであり、学習者の長期記憶に残っているはずなのだが、Dは、それをうまく産出できなかった。その後の小テストⅠでは、「車に気をつける」を再出題したが、Dは“在车里放松心情（車の中でリラックスする）”のように訳した。1つのかたまりとして覚えられるはずの「気をつける」は、習得困難な連語とは言えない。しかし、Dは、2回連続の誤用を示した。

また、総合テスト調査Ⅱの結果からも、Dの「つける」の不習得が見られる。まず、同一の基準で分類を考えずに、挙げられた用法を8つに分類した。それに、8つのうち、2つのグループに対して、分類の理由を挙げなかった。グループ分けの適切さはともかく、分類の理由を空白にしたのは、自分の中でも、その分類に自信がなく、どう分けていけばいいか分からなかったからであろうと見られた。Dの8分類を見ると、提示された「つける」の連語の意味を明確に確認したうえでの分類ではなく、多くの場合は、意味が分からないままグループ分けをしたようである。

四学期も、それ以前と比べ、習得が進んでいるような変化が見えない。電気器具などを起動する用法の誤りも「ボタンをつける」の中国語訳の誤りも、依然として出現している。総合テスト調査Ⅲの「空所補充」では、「*決心をかける」と「*たまっていた仕事に手をか

ける」の2ヶ所で「つける」ではなく、「かける」という動詞を書き入れた。その前にも、「*こたつをかける」のような間違った表現を産出していた。「かける」と「つける」は、中国語母語話者の学習者類義表現であることは前にも述べたが、Dの誤用がこのような語義認識の更なる証拠となろう。

さらに、注目に値する調査結果は、総合テスト調査Ⅲの「翻訳」項目の回答である。Dは、8問を全問間違えている。学習者間には、「つける」の到達度に差が生じていた。「翻訳」課題は、学習者の日本語の総合能力を検証するもので、前後の文脈をよく理解したうえで、「つける」の延長線にある複合語と未知のコロケーションの意味を推測できるかどうかを見る項目である。意味推測を行う際には、既習の「つける」の意味を連想して、適切な意味を抽出する能力が必要である。こういった意味推測の能力を備えないと、中・上級には容易に進めないもので、それに対する支援を行うべきである。

4.5.4.5 Eの場合

各テストにおけるEの回答を、以下のようにまとめる。

表 4-25 Eの調査結果のまとめ

時間	テストの内容	Eの回答	正誤
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	調味（調味する）	正
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	「空所補充」：コンタクトレンズを_____	つける	正
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いから、電気をあけたい。	誤
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	お酢も醤油もなくても、おいしいです。	誤？
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	ない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記を書く	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	（表 4-8 と表 4-9 で示す）	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	私は日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の「空所補充」：ネックレスを_____	無回答	誤
2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒いから体を気をつけてください。	誤
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	友達的重要性を感じ	誤
2015/10/29	小テストⅠ	（表 4-6 で示す）	
2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	孩子养成好习惯。	誤
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	（図 4-1 で示す）	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをつける	正
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点火	正
2016/4/15	「コートボタンをつける」の中国語訳	缝大衣扣子	正
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	教育孩子	正
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	养成了…毛病	正

2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	…的无责任感根深蒂固	正
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	刪減重著，增加解釋	誤
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	(表 4-15～20 で示す)	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、丸をかく	正?
2016/6/21	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	安裝在走廊	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	制作动画需要的大量手绘与工夫	誤
2016/6/24	小テストのⅡ	(表 4-7 で示す)	

表 4-25 を見れば分かるように、調査期間の 2 年において、E の回答には誤用が多く出現しており、他の調査協力者とは異質な回答も多かった。まず、二学期では、インプットの多い、電気器具などを起動する「つける」の用法が学習者には問題なく習得できたと想定されるが、E の回答には「*電気をあける」の誤用が出現した。それは、母語の負の転移の可能性が大きい。そのため、「つける」と「あける」の用法の区別を、中国語母語話者学習者にははっきりと示すべきである。

また、「醤油をつける」用法をチェックするテストでは、動詞を回避する戦略をとり、間違いではないが、やはり、この用法がそのときは身についていなかったものと考えられる。総合テスト調査Ⅰでは、「*眼鏡をつける」という誤用を産出した。「つける」と「かける」を区別できるような学習者への支援が必要であるということが、E の回答からも窺える。また、興味深い回答であるが、「つける」の中心義は何かという問いに対し、E は「貼り付ける」と回答した。そのときまで学習した「つける」意味を繰り返してみると、「貼り付ける」を含意する用法はない。こうした中心義に対する間違っただけの理解は E 自身が思い込んだもののようである。

さらに、「つける」が表わす行為が“戴”（普通、“戴帽子”（「帽子をかぶる」）、「戴眼鏡（眼鏡をかける）」などに使う）に関連すると回答した。実は、「つける」と中国語の“戴”は対応関係をなしていない。確かに、「つける」の、身の回りの品を身につける用法として、そのいくつかは中国語の“戴”に訳せるが、典型的な対応関係にあるとは言えない。中国語の動詞を用いて「つける」の行為を描くのは適切ではない。

多義語の学習法についての質問に対し、E は、授業で学習した語を辞書で調べ、面白そうな、役に立ちそうな用法を覚えていくと書いた。多義語の存在を意識して学習を進めてはいるが、具体的、かつ有効な学習方法を見つけてはいないのが現状である。この学習者の、自分勝手に学習する状態を改善するための支援が必要である。

三学期では、小テストⅠ結果から見れば、E の「つける」の習得は進んでいると見られる。誤用も出現しているが、正用への変化も多くある。その興味深い誤用の 1 つは、「肉に味をつける」の連語の翻訳である。E は、それを“肉有味了（坏了）（肉が腐っている）”と訳した。この訳文から、E は、この連語の意味を考えると、漢字の「肉」と「味」だ

けに注目し、「つける」の意味を無視していることが推測される。

総合テスト調査Ⅱの「つける」用法の意味分類に対し、E は、唯一コロケーションの意味を図式化した調査協力者である。箇条書きよりは、図式の方が各用法の上下関係が見られるので、意味間の関連性を示すのには便利である。この点からいうと、E は、多義語の多義がネットワークをなす性質を認識していると言えよう。しかし、E は、相変わらず「貼り付ける」の意味を「つける」の中心義にしている。これは、総合テスト調査Ⅰの結果と変化が見られない。「貼り付ける」を出発点にして分類を行っていくという認識が、E の中間言語体系に根差しているようである。E の分類を見れば、E は、積極的に「つける」の意味ネットワークを構築している。こういうところから見て、やはり、多義語を学習した当初に、その語に対する正しい認識が重要であると言えるので、その時点での学習者への適切な支援が必要である。

四学期の総合テスト調査Ⅲにおいて、「空所補充」項目における E の「つける」には、間違えて使われたものが目立つ。習得への変化が見られず、「*眼鏡をつける」の誤用がまた出現した。修正されても、なかなか直らないこの間違った表現は、すでに E の長期記憶に残っているのであろう。また、「*自分の気持ちを口につける」、「*料理を小皿につける」のような間違った表現も出した。「つける」を自分勝手に使っているイメージであるが、学習者が語の意味をしっかりと把握できていないと、こうした誤用が現れるようである。

4.5.4.6 F の場合

各テストにおける F の回答を、表 4-26 にまとめる。

表 4-26 F の調査結果のまとめ

時間	テストの内容	F の回答	正誤
2014/12/11	“开灯”の訳文	電気をつける	正
2015/3/2	「味をつける」の中国語訳	無回答	誤
2015/3/5	“蘸酱油”の中国語訳	醤油をつける	正
2015/3/13	「空所補充」：コンタクトレンズを _____	つける	正
2015/3/30	“因为有点黑，想打开灯”の訳文	暗いから、電気をつけたいです。	正
2015/4/9	“打开收音机”、“打开空调”の訳文	ラジオをつける/エアコンをつける	正
2015/4/21	“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃”	お酢も醤油もつけないで食べましたが、おいしいですよ。	正
2015/6/1	質問：「日記をつける」の「つける」と既習の用法と関連性があるか	特にない	誤
2015/6/2	“记日记”の訳文	日記をつける	正
2015/6/9	総合テスト調査Ⅰ	(表 4-8 と表 4-9 で示す)	
2015/9/21	“我正在记日记”の訳文	わたしは日記をつけているところです。	正
2015/9/24	“戴项链”の「空所補充」：ネックレスを _____	無回答	誤
2015/10/15	“天气冷，请注意身体”の訳文	寒いから、気をつけてください。	正
2015/10/15	“意识到朋友的重要性”の訳文	友達の重要が気がつきます。	誤
2015/10/29	小テストⅠ	(表 4-6 で示す)	

2015/12/1	「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」の中国語訳	是孩子掌握好的习惯。	誤
2015/12/25	総合テスト調査Ⅱ	(表 4-14 で示す)	
2016/3/8	“打开被炉”の日本語訳	こたつをつける	正
2016/4/6	「火をつける」の中国語訳	点火	正
2016/4/15	「コートのボタンをつける」の中国語訳	扣衣服扣子	誤
2016/4/15	「身につける」の中国語訳	掌握	正
2016/4/15	「子供をしつける」の中国語訳	教孩子懂礼貌	正
2016/4/28	「癖をつける」の中国語訳	形成了…的习惯	正
2016/4/28	「一種の無責任さが植え付ける」の中国語訳	灌输了一种…的态度	誤
2016/5/10	「…、内容を付け加えたり削ったりして…」の中国語訳	对内容进行增减	正
2016/6/9	総合テスト調査Ⅲ	(表 4-15～20 で示す)	
2016/6/17	“每隔三厘米画一个圈”の日本語訳	3センチごとに、円をかく	正？
2016/6/21	「八ミリ撮影機を持ち出して、縁側にすえ付け、…」の中国語訳	安装在走廊上	正
2016/6/21	「…、アニメーションには想像もつかないほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだ…」の中国語訳	制作动画需要想象不到的大量的画画和大量的工夫	正
2016/6/24	小テストのⅡ	(表 4-7 で示す)	

二学期までのテストでは、F は、他の調査協力者と共通した正用と誤用を示している。総合テスト調査Ⅰのイメージ調査では、語彙の学習法として、「漢字を見て覚えるのはほとんどである。当用漢字のない語は繰り返して暗記して覚える。類義語もこの方法で覚える」と回答し、漢字に対する高い依存度を示している。また、多義語の学習については、「多義語の存在を意識している。基本義を通して派生義を理解し、覚える」のように、多義語の性質を理解したうえで、学習を進めていると見られた。

しかし、F は、「電源の接続」を「つける」の中心義にした。「つける」の用法間のつながりが何かという問いに対し、すべてに「接続」の意味が含まれていると回答した。確かに、電源の接続、電気器具の起動は「つける」の常用の意味と言えるし、それまでの授業では多くのインプットを受けている。とはいえ、それを「つける」の中心義にするのは適切ではない。

また、そのあとの連語翻訳の小テストⅠで、F は、いくつかの興味深い答えを出している。「肉に味をつける」を“尝尝肉的味道”（肉を食べて、味を試してみる）、「名前を付ける」を“点名”（出席を取る）、「シャツにボタンをつける」を“系上衬衫的扣子”（ボタンを留める）、「商品に値段をつける」を“关心商品性的价格”（商品の値段を心がける）のように訳している。これらの誤用が生じた理由はさまざまであるが、共通した原因として、動詞「つける」の意味を深く考えずに、共起の名詞などの意味で連語全体の意味を推測したことが挙げられる。こういう翻訳課題では、当然のことながら、「つける」の中心義に対する正しい理解も必要とされる。中心義さえ分からなければ、深い意味学習は不可能になってしまう。

総合テスト調査Ⅱの F の分類は、大雑把に「つける」の用法をグループ分けしたという

印象である。同グループのメンバーを見れば、分類が不適切なところも多く存在している。しかし、F が同じグループの用法の共通点を抽出しようと努力している。中国語訳ではなく、できるだけ抽象的な概念を用いて解釈しているのだが、これは、このレベルの学習者にとって容易なことではない。多義語の意味ネットワークを構築するには、こういった抽象化能力が必要とされる。

四学期では、「コートのボタンをつける」の翻訳の誤りが依然として出現している。「空所補充」練習の「傷をつける」と「名前を付ける」は正しく書けず、正用への変化は見られなかった。総合テスト調査Ⅲの「翻訳」の項目でも、誤用が多く見られた。誤りのほとんどが未知のコロケーションや複合語などへの不適切な意味推測に関係している。例えば、「庭の木が実を付けている」の中国語訳を“庭院里的树木都长实了”（庭の木が元気に育っている）と書いた。「実をつける」は、学習者にとってインプットを受けたことのない表現であるので、既習の知識を用いて意味推測をしなければならない。F は、「実」を果実ではなく、“结实（元気、がっちりとした）”のように推測したようだが、「果実」とは全く異なる理解である。このように、未知のコロケーションへの正しい推測をどう実現させるのか、学習者も教師も考えるべきである。

4.5.4.7 まとめ

縦断的調査の時間の経過に沿って取った授業記録と小テストや総合テストの結果から、調査協力者別の具体的な「つける」の習得状況や使用、およびその誤用の傾向を明らかにした。約 2 年の調査を通して、6 名の調査協力者の多義語「つける」とその一部の関連語の習得状況を観察してきた。「つける」とその関連語だけではなく、他の多義語の学習・習得状況もある程度把握できたと考える。調査協力者それぞれの習得には差が見られる一方、共通しているところもある。

まず、「つける」の多数の意味のうち、学習者に習得されやすいと習得されにくいものがある。習得されやすいものには、先に学習したもの、インプットが多いもの、母語の語彙・文法知識と重なっているものなどが挙げられる。「つける」の用法に対する理解には、母語の転移（影響）がはっきりと見られた。一方、習得されにくいものも多くある。例えば、基本義から離れた意味は、習得されにくい。学習した用法であるが、インプットの受けたことのないコロケーションの意味も、推測しにくい。最初から間違った認識を持っている表現は、間違い続け、直しにくい。文法の情報が混ざっている場合も、間違いやすい。誤用が多く生じたのは、自動詞「つく」との区別、使役の意味を含意する場合などである。

次に、学習者の習得順序であるが、これは、教科書の提出順序とは必ずしも一致しているとは言えない。また、教科書に出ている用法をすべて無理なく習得できたとも言えない。学習者は、多くの方法で多義語を学習している。それに、学習期間中に、学習の方略が変化することもある。とはいえ、今回の調査結果を見れば、調査協力者が「つける」をはじめとする多義語をどのように身に付けていくのか、多義の全体像を把握するための方法が

何なのかは、まだ見出だされていないことが分かった。

また、同じ教室で学習している調査協力者ではあるが、学習者の間で「つける」のプロトタイプとスキーマ、「つける」の多義構造に対する理解のずれが見られる。そして、また、1名の学習者でも時間が経つにつれて、認識のゆれが観察された。さらに、学習者は、「つける」を自由産出するにはまだ困難がある。そして、学習していない意味をいかに推測・理解するか迷ったり、自らの方略がうまくいかなかったりする場合は、習得が困難であり、それを乗り越える方法に戸惑っている学習者の姿が見られた。

さらに、「つける」の学習においては、母語の転移が発生することも判明した。初級段階の学習者は、漢字を利用して語彙の学習を進める傾向が目立つ。中級になっても、新出用法に出会ったときは、第二言語学習者の比較認知能力を生かし、母語を利用する傾向が見られる。母語を用いて学習することは、うまくいく場合もあるが、時には、学習の障害ともなる。特に、日本語の漢字の意味を中国語のそれと同じだと思い込んでしまいがちであるという点は、長い間間違った認識を修正できず、その次の学習に影響を及ぼすことから、指導上・学習上注意を要する。母語から受けた影響は、学習者によって差があるが、負の転移が生じることも事実である。

2年間日本語を学習している調査協力者たちの中には、多義語のネットワークが形成されつつある。しかし、それはまだ不完全で、また不適切なところがある。基本義から離れた派生義は、特にそうである。また、関連語の提示、本動詞との関連づけも重要である。学習者自身の努力は言うまでもなく、教師や教科書からの多義語習得支援が必要とされる所以である。

4.6 まとめ

本章は6名の中国語母語話者日本語学習者を対象にし、多義語「つける」の習得過程を考察するものであった。習得のプロセスを把握したうえで、学習者の多義語理解に関するメカニズムなどを究明し、今後の多義語記述とその指導研究に有効なデータを得るために、(2)の調査課題を設定し、調査を行ってきた。

- (2) ①学習者の習得順序と教科書の提出順序は、一致しているか。教科書に出ている用法を無理なく習得できたか。また、学習の困難点はどこにあるのか。
- ②「つける」の意味の中には、習得しやすいものと習得しにくいものがあると想定されるが、それらは、それぞれどのような意味なのか、そして、その理由は何か。
- ③学習者は具体的にどのような方法で「つける」を学習するのか、いかに意味を推測・理解しようとしているのか。習得困難な語に出会ったとき、それを乗り越える工夫はどのようにしているのか。自らの方略がうまくいかない場合は、意味の習得が困難であると想定するであろうが、その結果はどうなるのか。
- ④学習者の中の「つける」のプロトタイプの形成、スキーマの形成、意味のネットワ

ークモデルの形成は、それぞれどのようなになっているのか。形成されている意味構造と形成されていない意味構造は、それぞれどのようなものか。

⑤母語の転移（影響）があるか。あるとすれば、どのような転移か。

（4.2 の（2）の再掲）

今回の2年の調査期間においては、授業の追跡調査、テスト調査、総合テスト調査、インタビュー調査といった多様なアプローチによる質的調査を組み合わせ、学習者の「つける」に対する習得状況を考察してきた。この縦断的な習得調査を通して、学習者の多義語「つける」に対する理解の発展、認知プロセス、学習ストラテジーの選択と運用、母語転移のプロセスなどを確認することができた。

調査結果をまとめ、6名の調査協力者の「つける」の習得過程を考察したうえで、調査課題に照らし合わせてみると、以下の（A）～（I）の事実が明らかになった。（A）～（C）は調査結果のまとめであり、（2）の①と②に対する回答である。（D）～（I）は、これらの結果をもたらす要因とその対策であり、（2）の③～⑤に対するまとめである。

- （A）「つける」の意味は、教科書の多くの箇所に出ている。しかし、学習者の習得順序は、教科書の提出順序と一致していない。学習者には、インプットの多い意味、学習者の母語の言語体系に近く、母語を用いて理解できる意味、共起表現からヒントがもらえる意味などが習得しやすい。一方、インプットの少ない意味、母語との対応関係が見つかからない意味、抽象的な意味は、習得しにくい。
- （B）「つける」の学習には、化石化現象が見られた。共起語の広がりには欠ける、プロトタイプ義を身につけていないなどの理由から、未習の意味への推測がたびたび失敗している。学習者は、語義間の関連性がよく分からず、語義ネットワークを構築できていない。学習者が1つの多義語に対して、集中的に触れる機会がなく、辞書を見ても、「つける」の全体像を把握することができないことは、習得の障害になる。新用法に出会ったときには、「つける」自体の意味を無視し、文脈に依存して意味合いを当てはめる傾向が見られた。また、「つける」の関連語の習得も困難であり、類義語との使い分け、複合動詞における「つける」の意味などが明確に把握できていない。
- （C）学習者の「つける」の意味習得においては、意味の理解と産出がアンバランスな状態である。また、理解するのは簡単な用法でも、産出するのは難しい。つまり、ある意味が理解できたとしても、産出できるまでには時間がかかる。また、海外の日本語教室における学習は、学習者の産出の機会が乏しい。意味の理解と産出の両方を重視し、産出の助けとなる意味記述をするべきである。
- （D）学習者の「つける」のプロトタイプ的な意味に対する認識が不足しているために、語の多義性が発展的に捉えられていない。よって、学習者に多義語のプロトタイプ義を強化して教える必要がある。さらに、プロトタイプとスキーマをうまく理解したうえで、意味拡張の種類を認識し、多義のネットワークを形成させる支援が必要である。
- （E）学習者には、語彙を学習する際に、多義語の意味同士の関係、そして、語と語の間の

関係に注意を払わない傾向が見られた。これでは、学習の負担になり、経済的な学習方法を利用できない。意味の連続性、他の語との関連性を学習者に意識させる支援をすべきである。

- (F) 第二言語学習者は、母語を介して目標言語を学ぶ段階があり、母語の概念に依存し、目標言語の語彙と母語の語彙との対応関係を見つけつつ、学習を進めていく。つまり、第二言語学習者は、母語の語彙体系において目標言語を考えることが多い。これは、中国語母語話者にとって有利なところがある一方、負の転移を防ぐ工夫もしなければならない。
- (G) 学習者には、「つける」だけではなく、多くの語の意味ネットワークが形成されていない。また、関連語彙に対する認識も、かなり薄い。語彙ネットワークを構築し、当該の多義語だけではなく、その関連語も指導範囲に入れるべきである、
- (H) 共起語との関係を軽視する傾向が見られた。語のコロケーション知識は、学習者の理解と産出に役立ち、さらに、既習の語義に対する整理や意味ネットワークの構築の習得も促進することができる。よって、コロケーションで語義を示す場合、学習者の母語を考慮し、そのために分かりやすい連語から、意味を学習させるべきである。また、共起語の使用範囲の広がりにも、指導の重点を置くべきである。
- (I) 学習者には、母語話者のような多義語の自然習得は無理なので、授業実践者は、積極的に多義語習得を支援する必要がある。語の多義性の存在と多義語の性質を意識させたいうで、継続的な指導をすべきである。

今回の調査を通して、中国語母語話者の多義語学習・習得の問題点をすべて明らかにできたとは言えない。質的調査には限界もあり、6名という少人数で2年間での調査中、過度な一般化に注意を払いつつ、上記の結論を導いた。本章で行った質的調査は、小規模なものであるが、予備調査の結果に裏付けられ、調査課題への回答が可能になるように設計されたものである。また、今回の調査から得た結論は、「つける」をはじめとする中国語母語話者学習者の習得困難な多義語の意味記述と意味ネットワークの構築に役立ち、日本語教育と日本語習得にとって興味深い事実を示せたものと思う。本章の調査によって明らかになった事実から、日本語教育語彙教育における多義語の扱いについて一定程度の示唆が得られたと考える。

今後の日本語教育多義語教育研究に当たって、重要なのは学習者の母語に配慮し、学習者の理解と産出に役立つ、習得を支援できる意味記述を行うことである。これまでの日本語教育では、多義語の習得プロセスを把握するための調査や研究が重要視されてこなかった。しかし、実際の習得の実態を明らかにし、各用法の学習・習得を把握することは、日本語教育にとって欠くことのできないものである。

今後も、「学習者のための多義語記述とは何か」という質問に答え続けることが日本語教育への貢献になると考えられる。学習者のための「つける」に対する再分析が必要となり、

学習者の習得に役立つネットワーク図が構築されることが望ましい。さらに、「つける」のみでなく、「つける」の関連語に対しても精密な意味記述を行う必要がある。そこで、次章では、学習者の多義語習得の支援をするための、「つける」とその関連語の意味用法についての記述を試みる。

第5章 「つける」とその関連語の意味分析 ——語彙習得支援に役立つ多義語分析を目指して

5.1 はじめに

日本語の基礎語彙である基本動詞を多義の事例として挙げ、意味分析を行う先行研究が多数ある。その中には、認知意味論の枠組みで具体的な多義語の語彙項目を記述し、その意味構造を示した研究も少なくない。第3章の先行研究においては、多義語研究の流れを整理した。

多数の多義語を研究対象とする研究であれ、代表的な語を取り出して記述する研究であれ、研究方法として、先行研究を利用し、内省を利用して用例を検討する点は共通である。用例分析と内省とどちらを主とするかの違いである。また、先行研究における多義語に対する考察の多くは、多義語のプロトタイプを認定するための調査、複数の意味間の距離を判定するための計量的な解析、多義の構造を明らかにする記述などを研究の中心内容としている。さらに、考察の目的により、記述の重点が少し異なるが、基本義の認定を行い、派生義への意味拡張を記述するところは共通している。そのうえで、多義性を体系図にまとめるもの、文脈・場面性を重視するもの、類義語との比較を通して分析するものなどもある。それに、目的によって資料の扱い方にも変化が見られる。文学作品の用例が多い記述もあれば、コーパスの検索結果を利用するものもある。理論的な枠組みに関しても、伝統的な意味研究から、国広のような独自の理論に基づくもの、認知言語学的な知見を用いるものに至るまでさまざまである。

当然のことながら、研究方法、記述の目的、資料の扱い方、理論の枠組みの違いはいずれも多義語の研究結果に影響する。同じ語を研究対象として取り上げていても、研究者による多義の意味分析の結果がさほど一致していない研究例も少なくない。また、辞書・辞典においても、意味分類や意味記述が一致していないばかりでなく、同音異義語か多義語かで見出し語としての提示が一致しない例もある。こういった記述は、学習者に混乱をもたらすに相違ない。つまり、日本語教育の観点から見れば、多義語についての研究には、まだ検討の余地があると言えるのである。

日本語学習者の多義語習得をいかに支援するかは、日本語教育に携わるものの1つの課題である。これまで行われてきた詳細な意味記述は、母語話者あるいは熟達した学習者にとっては分かりやすいものであっても、多くの学習者にとってはこれらの意味をすべて暗記しなければならない、習得に多くの時間と労力が必要である。日本語教育の現状から言えば、いかに詳しい説明をし、用例を通して多義語の意味用法を伝えても、日本語学習者は、容易にこれらの多義語の意味を身に付けられるようにはならない。そこで、本章では語彙習得支援の役に立つ多義語分析を目指した、多義語とその関連語を統括できる研究を試みる。

本章は、認知意味論の意味拡張の研究成果をふまえ、多義性の高い基本動詞「つける」

とその関連語を詳細に記述することにより、中国語母語話者学習者の語彙学習支援の一助とすることを課題とする。この課題を行うため、学習者の習得のプロセスはどのようなものなのかを考慮する必要があるので、前章ですでに中国語母語話者学習者を対象に、「つける」の習得に対する縦断的な調査を実施した。本章ではその習得調査の結果に基づき、中国語母語話者学習者にとっての有益な意味分析を試み、中国語母語話者学習者の意味学習を支援するための意味記述のあり方を考察する。

「つける」の分析を行うにあたり、記述の目的を示しておく。多義語の意味を正しく推測するには、こういった情報、あるいはどこまでの情報を提示すればいいのかを究明すること、また、学習者に理解しやすい、かつ覚えられてい、産出できる意味記述とはどのようなものなのかの究明することが重要である。そこで、「つける」を事例研究の対象にして、学習者の母語を考慮した日本語教育をどう行うべきか、教師はどのように指導し、教材にはどのような工夫をすべきかを示唆できる記述を目指す。

本章の研究対象とした「つける」を取り上げ、精密な意味分析を行った先行研究は見当たらないものの、自動詞「つく」は多く記述されてきた。これらの記述では、「つける」が分析対象として扱われてはいないのが、この語は研究価値が少ないわけではなく、「つく」の用法に関連し、「つく」の分析に通用できる部分が多い。本章では、学習者のニーズに応え、具体的には(1)の5つの課題を中心に「つける」の記述を試みる。

- (1) ①新しい意味を発見するのではなく、既存の意味をどう構造化していき、意味関係を明確に示すのかを考察する。
- ②表現の理解と産出を助ける多義語記述を目指す。語の機能が分かるには、それを支える多様な共起表現が必要となるため、それらも示す。語の意味記述の重点を「どんな文脈でどう使うのか」へと転換する。
- ③使用度の低い意味を削り、常用の意味を使いこなせるような工夫をする。
- ④語彙量を増やすことや類義語と区別することなどに配慮し、関連語との関連づけを体系的に示す。
- ⑤学習者の母語を十分に考慮・利用し、活用させられる分析を行う。

(1)の課題を究明するために、5.2では、辞書における「つける」の記述をまとめ、問題点を探る。5.3では、コーパス調査を通して、コロケーション研究による「BにAをつける」定型文の認定を行う。5.4では、数多くの実例・用例から「つける」の意味分析を行い、多義構造を構築する。5.5では「つける」の関連語を「生産性グループ」と「異質性グループ」に分け、それぞれ複合語、類義語、反義語、自動詞「つく」を中心に考察を行う。「つける」とそれに対応する中国語との対照を5.6で行ったうえで、5.7では日本語教育の立場から、学習者の母語に配慮した「つける」とその関連語の意味のネットワークを提案する。

5.2 辞典・辞書・コーパスにおける「つける」の記述

5.2.1 各辞典の多義語の扱いと語義項目数、配列の特色、記述の問題点

ここでは、日本語の辞典・辞書における「つける」の語義記述を比較検討し、よりよい記述モデルを提出するため、日本語教育の立場から問題点を探る。まず、(2)の5つの国語辞典・辞書を比較する。比較検討の内容は①同音異義語扱いの有無と語義項目数、②語義項目の配列という2点である。その結果を踏まえ、配列の特色および記述の問題点をまとめる。

(2)『大辞林』第三版（以下、『大辞林』と略称）

『明鏡国語辞典』第二版（以下、『明鏡』と略称）

『三省堂国語辞典』第六版（以下、『三省堂』と略称）

『大辞泉』増補・新装版（以下、『大辞泉』と略称）

『新明解国語辞典』第七版（以下、『新明解』と略称）

表 5-1 は考察の対象とした辞書・辞典による「つける」の見出し語と意味区分である³⁴。

表 5-1 国語辞典における「つける」の見出し語と意味区分

辞典	見出し語	表記	自他の別	意味分類数
『大辞林』	つける 1	付（「着、附、跟、点」とも書く場合がある）	他	11 (23) ³⁵
	つける 2	就	他	2 (3)
『明鏡』	つける 1	付（附）	他	24
	つける 2	点	他	1
	つける 3	就	他	4
	つける 4	着	他	3
『三省堂』	つける 1	付（附）	他	16
	つける 2	点	他	2
	つける 3	就	他	2
	つける 4	着	他	3
			自	1
	つける 5	即	他	1
『大辞泉』	つける 1	付（附、着、点）	他	8 (22)
『新明解』	つける 1	付	他	8 ³⁶

表 5-1 のとおり、5つの辞典・辞書における「つける」の意味分類や意味記述は一致しない。また、同音異義語か多義語の区別も一致していない。さらに、どの辞典・辞書においても、「付」という表記がある。しかし、他の表記には相違が存在する。辞典・辞書の記述を見ると、「つける」の意味用法が広範にわたっていて、詳しい用法、用例が記載されている。しかし、多義の意味分析結果はあまり一致していないことが分かった。

続いて、各辞書の記述の重点と配列の特色について、第二言語習得の立場から、これを

「文法重視型」と「意味重視型」に分けて議論する。「文法重視型」の特徴は、文型・文法の情報が語義解釈に入れられていることである。多様な語義が前後にばらつき、意味の分類を行わずに列挙する平板型であるため、使用頻度の高い基礎的語彙では意味の数が非常に多い。「意味重視型」の辞書では、意味の列挙は中心義また高頻度の意味義が優先される。意味分類がされるので、「文法重視型」の辞書・辞典より、まとまりが見られる。しかし、文型・文法の要素があまり現れない。

次に、「つける」の語釈から(2)の辞典・辞書の配列の特徴を検討する。まず、『明鏡』は文法重視型である。その語釈には「つける」行為の意図性と非意図性が明記されていて、「自動詞のように使う」という情報も提供されている。また、「語法」という項目を設定し、「～ヲに<結果>をとる」と書かれている。また、『新明解』も文法重視型と言える。『新明解』は格情報によって、「つける」の語義を分類している。用法がくになに・どこににヲ～>やくだれにだれヲ～>、くになににだれヲ～>などのようなパターンに分けられている。遠藤(2011: 111)では、こうした辞書は「文章を読んだり話を聞いたりしていて、知らない言葉の意味を知りたいときに使用するには十分であるが、多義語全体の理解にはつながりにくい」という欠点があると指摘されている。

一方、『三省堂』は、意味重視型であり、文法・文型についての要素が見られない。「つける」の意味を基本義から派生義まで多数列挙し、意味解釈も簡潔な言葉で行っているため、初級レベルの学習者も読み取ることができる。しかし、意味の広がりや重要視されているものの、意味分類はされていないので、意味間の関連性は見出せない。また、『大辞林』と『大辞泉』も、意味重視型である。この2つの辞典では、「つける」の意味区分が明確にされているだけでなく、さらに各語義が下位区分されている。意味間の関連性が分かりにくい語の場合、列挙型記述だけの『三省堂』より語の意味構造を捉えやすいという特長がある。『大辞林』と『大辞泉』を利用して、意味間の関連性が獲得できるとは言えないが、中級レベル以上の学習者には、多義語学習の役に立つ辞典である。

辞書・辞典の記述だけを見て、「つける」のすべての意味の関連性を説明し、1つの構造にまとめようとする、その根拠が十分に示されていないことが分かる。プロトタイプの意味がほぼ定められているとしても、それ以外のさまざまな用法を意味ネットワーク上にどう位置づけるのか、どの程度細かくあるいは大きく分類するのか、などの点で決定的な説を認めがたい。辞典・辞書の記述では、「つける」の意味が分断されているため、第二言語学習者にとっては、「つける」の意味を理解・記憶しがたいところがある。また、「つける」の関連語についての情報も少ない。学習者のニーズに応えるために、意味間の区別と関連性、そして関連語との関係をどのように学習者に示すのが課題である。日本語学習者の役に立つ意味分析として利用することができるのは、どのような辞書・辞典なのかについてはまだ明らかになっていない。

続いて、専門辞典についての検討に移る。ここで取り上げた専門辞典は、(3)の5つである。

(3)『研究社 日本語コロケーション辞典』(以下、『コロケーション』と略称)

『日本語基本動詞用法辞典』(以下、『基本動詞』と略称)

『日本語多義語学習辞典 動詞編』(以下、『多義語』と略称)

『類語大辞典』(以下、『類語』と略称)

『日本語語感の辞典』(以下、『語感』と略称)

(2)の国語辞典は、語の選択制限、用例、語法などが多岐にわたるため、どうしてもコロケーションの記述は不十分になる。その欠点を補うものとして、コロケーション専門の辞典が出版されている。『コロケーション』は、多義語「つける」を漢字表記の「付・点・着」に分けて、「つく」との関係を示しつつ、格助詞「を」、「に」と結びつく名詞を意味別に分類し、例文とともに提示している(pp.722-723)。さらに、「つける」に関わる慣用句も挙げている。語の連結の様相や具体的な用法、コロケーションが多数挙げられているところは、日本語を外国語として学ぶ学習者には役立つと考える。しかし、意味に対する記述がされず、具体例の提示だけでは、意味分類に関わる情報が少なすぎる。学習者は、またもう1つの辞書で調べなければならなくなり、学習の負担となる可能性がある。

『基本動詞』は、日本語研究の成果に立脚し、日本語教育の要求に応じようとする辞典である(p.v)。この辞典は、まず、動詞がどのような助詞を取るかでそれぞれの文型を示し、それに対応する語義を与え、例文を提示している。また、学習者の便宜をはかり、文法情報として、受身形、使役形、可能形のほか、意志形、命令形、禁止形の有無を指定し、アスペクトの用法も解説してある。さらに、主な複合動詞と慣用句を取り出し、類義語も挙げている。

『基本動詞』³⁷は、他の国語辞典とは異なり、「見出し語は使用頻度や重要度を配慮して、日本語の基本動詞として728語を選び収録した」(p.xvi)という。この辞典においては、「つける」は、見出し語として「付ける」、「着ける」、「点ける」の3つに分けて記述されている。学習者の立場から見ると、『基本動詞』は、意味分類をしてくれている。しかし、それを見るだけでは、意味用法の典型度の度合い、意味間の関連性は把握できない。また、学習者にとっては、類義語との使い分けなどの情報が重要であるので、その点でも不十分である。

類義語を詳しく記述する辞典としては、『類語』が代表的である。『類語』は、基本動詞・形容詞2700語を意味によって99のカテゴリーにまとめている。各カテゴリーは、より意味の近い語の集まりであり、いくつかの「小分類」からなる。各小分類では、語を品詞別に分け、適宜小見出し語をつけて、意味・用法の近い語を展開・配列している。その2700語の基本語から生まれた見出し語の総数は、約7万9000となった。例えば、99のカテゴリーの59「付く・つながる・着ける(付着・装着)」の下位分類には、「付く・絡む・つながる・付ける・絡める・張る・塗る・つなぐ・着る・着ける・かぶる・はく・装う・浴びる」の14語がある。また、この14語の下位分類に、それぞれ意味上関連する語が列挙し

である。

『類語』が問題点の1つとして挙げられるのは、「最初に基本的な動詞・形容詞を集めるときに、「多義語」のことを深く考えていなかった」(pp. 6-7) ことである。見出し語は意味によりカテゴリー化されるので、複数の意味を持つ多義語はそれぞれ別のカテゴリーに所属することになる。学習者の観点からいうと、これでは語の全体像を把握することは、難しい。もともと、これは学習者のための辞典ではない。とはいえ、『類語』のカテゴリー化という視点は、語彙学習の進むべき道を示している。語の多義性をよく考慮し、関連語としての類義語も、それと1つのカテゴリーに入れられる記述の方法を考えるべきである。

続いて、語感を探る手がかりとなる『語感』について少し検討する。『語感』は、各語の使用領域を規定し、具体例とともにそれぞれの感触や連想の違いなどを分析し、さらに意味・用法の微妙な差に言及するという踏み込んだ解説をしている。『語感』は、意味が似ていてどのように使い分けるか紛らわしい類義語の組み合わせを中心に語を取り上げている。

『語感』も、学習者のための辞典ではない。『語感』には「とる」、「だす」、「ひく」などの多義語が取り扱われているものの、「つける」は見出し語として挙げられていない。それはおそらく、「語感」の観点からいうと、特に日本語母語話者にとって「つける」の使用は難しくなく、類義語との語感の違いや微妙な意味合いの差を感じることがないからであろう。しかし、中国語母語話者に対する調査から分かるように、学習者にとっては「つける」は難しい。『語感』では、「付け上がる」が見出し語の1つとして挙げられている。それについての解説は、「相手の行為に付け込んで思い上がった態度をとる意で、会話や軽い文章に使われる日常の和語」(p. 684) となっている。その次に、用例を2つ挙げ、漢語の「増長」との使用範囲の区別を述べている。そもそも日本語の語感を持っていない学習者は、こうした語感についての解釈が学習に役に立つ。母語話者には当たり前のように使われている語も、学習者にとってはかなり難しく感じられる可能性もある。ゆえに、学習者のニーズに配慮し、「つける」のような語に対しても語感面からの説明が望まれる。

認知言語学の見解を取り入れた辞書・辞典の代表には、『日本語多義語学習辞典』(全三冊)がある。意味・用法を列挙する一般的な辞典とは異なり、中心義の設定、派生義の認定、メタファー・メトニミーなどを用いて意義関係の明示、意義の配列に基づき、放射状に広がるネットワークモデルを採用している。

『多義語』(pp. 298-299) は、「つける」の基本義を、「物を物に接した状態にする」と明確に設定し、その派生義を18種類にしている。さらに、下位分類をまた4つにしている。確かに、一般の国語辞典と比べて、語の意味構造が一目瞭然で、分かりやすいところがある。しかし、挙げた18種類の用法を平行にしているのかが疑問である。また、相互にどのような関連性があるのかは、この図だけでは分からない。この辞典は、認知言語学的な研究の成果が生かされてはいるものの、抽象的なモデルなどもあるため、一般向けの学習辞典ではない。このような意味記述を、第二言語学習者の習得・理解につなげることは容易ではなく、学習者の「つける」の基本義からなぜこの意味に拡張したのか」という素朴な

疑問には十分に答えることができるとは言えない。

以上のとおり、多くの類の辞典・辞書には多岐にわたり、「つける」の用法、用例が詳しく記載されている。しかし、学習者の立場からいうと、不十分なところがあり、学習者のニーズに応えられる辞典・辞書とは言えない。前節でまとめておいた中国語母語話者のための多義語分析の課題に照らしてみても、現行の国語辞典や専門辞典がそれらに応じたものとも思えない。今井（1993: 245）が指摘しているように、学習者が語彙の意味を辞書のみに頼った場合、語の意味構造を支えるメタファーが理解できないので、語の意味構造をカテゴリーとして捉えられず、その結果、学習者は、母語話者とは異なった意味表象を持ってしまう。ゆえに、学習者のための記述をするなら、新たな分析方法と「つける」の意味ネットワークの再構築が必要とされる。

5.2.2 国立国語研究所の『基本動詞ハンドブック』³⁸の記述について

国立国語研究所が開発した『基本動詞ハンドブック』（以下、『ハンドブック』と略称）がインターネット上で公開されている。そのホームページの紹介によると、『ハンドブック』は、日本語学習者と日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールであるという。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(約1億語)や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」(約11億語)などの大規模日本語コーパスを活用し、他には見られない生きた情報を提供しているという。

『ハンドブック』の特長はと言うと、コーパスに基づいた客観的な記述、認知言語学の知見を取り入れた詳しい語義解説、音声・動画の付いた豊富な用例、語義ごとの文型や文法情報の提示、誤用例・非共起例の表示、一目で確認できる動詞の意味拡張を視覚化した多義ネットワークなどが挙げられる。『ハンドブック』には、「つける」についての記述が載っている。そこには、「つける」のコアイメージ、多義ネットワーク、それぞれの語義についての記述のほかに、多くの情報も提供されている。例えば、意味の記述には文型、文法、例文、コロケーション、非共起例、解説、誤用解説、類義語・反義語などのアクセスがあり、それぞれ詳しく記述している。さらに、自他動詞についての情報、学習期間に応じた学習者のレベル、表記などに関わるものもある。また、それらの下位分類に、例えば、コロケーションの場合、その二格情報、ヲ格情報、様態についての共起語を例示している。文法の下位分類として、受身、尊敬、使役、意思、継続、結果・完了などを表わすことができるかどうかを「○」と「×」で示している。

『ハンドブック』には、多義語に関連する情報が多くあり、学習者のためのものとされている。しかし、本研究には、中国語母語話者のためという研究の立場があるので、『ハンドブック』の分類および関連語の抽出は、参考にはなるが、記述の重点が異なる。また、筆者から見ると、『ハンドブック』には不十分な点がある。まず、意味派生のメカニズムが

明示されていない。また、多義語の意味をいつ導入するのか、ということの設定基準が明確にされていない。例えば、「つける」の「起動」という意味が中級レベルに入っているが、それが適切であるかどうかは、検討すべきである。前章の習得調査では、この用法は学習者がかなり早い段階で学び、習得できたという結果が得られた。また、類義語、反義語などの関連語との関連性をもっと詳しく論じるべきである。学習者の立場からいうと、例示するだけで済ませるのは不十分である。さらに、複合語については、語例を提示しているものの、本動詞との関係が明示されていない。複合動詞についても、語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別せずに示しているところは、学習者に混乱をもたらすおそれがある。学習者のためのものなら、学習者が自力で身につけることのできない部分こそ、はっきりと示すべきである。

5.2.3 「つける」の表記

今までの多義語研究においては、語の表記はあまり問題にされていない。しかし、中国語母語話者学習者は、漢字に対して敏感なため、中国語母語話者学習者のための多義語分析を行うには、表記を無視してはいけない。国語辞書においては、だいたい2種類の方法で語の表記を示す。1つは、見出し語の後ろに、使える漢字をすべて示す。『大辞泉』は、このような辞典である。「つける」を例として挙げてみれば、語の後ろに「付ける/附ける/着ける/点ける」のように異なる表記を示している。他方、『大辞林』、『新明解』では、見出し語を「付ける」とし、用法により、語釈の前か後ろに「着ける」あるいは「点ける」などとも書くように付け加える。この2種の示し方はいずれも曖昧なところがあり、中国語母語話者学習者に混乱をもたらす可能性がある。中国語母語話者学習者のためのものとするなら、多義語の表記をはっきりと示すべきである。

「つける」は、「付・附・就・着・点・即」と書き分けられるので、これだけの多義があると中国語母語話者学習者に考えられがちである。というのは、中国語における「付・附・就・着・点・即」は、それぞれ異なる行為を表わす動詞だからである³⁹。一方、学習・習得の面から言うと、中国語母語話者学習者にとって、表記をうまく利用すれば、それが学習者の学習を助ける道具にできるので、プラス効果がある。漢字を用いることには、有利な点が多く挙げられる。例えば、中国語母語話者学習者が複合動詞「つけくわえる」を学ぶとき、表記が「付け加える」で提示されたら、簡単に習得できる。それは、表記を見て中国語の“付加（附加）”をすぐ連想できるからである。連語の場合も同様、「火を点ける」は“点火”、「位に即ける」は“即位”などのように、日本語の漢字と中国語の漢字は全く同じである。しかし、日本語と中国語の漢字は、いつも相互に対応しているわけではない。「色を付ける」は中国語の“着色”と対応するものの、「色を着ける」と書くのは非常に不自然である。また、中国語の動詞“付”の基本義は、「(お金)を払う」の意味で、日本語の「付ける」とはずいぶん異なる。名詞対象語と組み合わせて連語を作るのなら、一番最初に思い浮かぶのが“付钱、付账”であり、複合動詞は“付出、支付”などである。

これらの用法がどれほど日本語の「付ける」と重なっているかは、今後詳細に検討すべきであろう。学習者の習得に役立つものを取り出して示すばかりではなく、習得の障害になりそうなものも提示することを心がけるべきである。

このように、中国語の漢字の負の転移を防ぎ、正の転移を求めるに、異なる表記から読み取る異なる意味との関連性について、本論で考察を加える。また、本研究では、論文に挙げるときは「つける」の漢字表記を書かないこととする。実例を挙げるとき、表記の仕方は原文に従う。コーパス調査を行う際には、「つける」を見出し語とし、必要に応じて「付ける」、「点ける」などで検索することもある。そのときは、その旨を文中で示す。

5.2.4 学習者のニーズに答えられる記述の方針

「つける」の意味記述を行う前に、前章の学習者に対する縦断的な調査結果と、辞書・辞典をはじめとする意味記述の先行研究の結果を踏まえ、中国語母語話者学習者のニーズに答える記述ができるように、本研究で用いる分析の方針を定めておくことにする。本研究では、ラネカーの提唱するネットワークモデル理論を援用する。意味ネットワークをなしている多義語、コロケーションあつての多義語、関連語と厳密に関係している多義語、こういった多義語の正体の解明から着手し、記述を進めて、学習者のための多義語の分析を目指す。(1)の研究課題に照らし合わせ、本研究の分析の方針を(4)のようにまとめる。

- (4) ①中心義を設定し、語義項目間の関係を明らかにする。
- ②どのレベルの学習者にも見せられるような多義ネットワーク図にまとめる。
- ③分かりやすさを心がけ、解説的な語義記述にする。学習者の分かりにくいところに記述の重点を置く。
- ④意味ネットワークを構築する。そのために、難解のもの、まれにしか使わないものは除き、また、語義項目数が多いことをよしとしない。
- ⑤学習者の母語に配慮し、母語干渉の生じやすいところを明確に示す。
- ⑥語彙量を増やすのに有益なネットワーク図を提示する。
- ⑦用法をコロケーションで提示する。コロケーションを重要視する。
- ⑧当該語と関連付けながら、その関連語を記述し、提示する。
- ⑨語彙ネットワークを構築する。

全体的に、「つける」の諸意味に着目するだけではなく、意味間の関連性にも注目し、「つける」の多義ネットワークを構築する。さらに、「つける」とその関連語との関係に焦点を当て、「つける」とその関連語の語彙ネットワークを構築する。「つける」を習得したい」という学習者の素朴なニーズに応えられる指導の助けとなるような記述を目指す。

5.3 コロケーション研究による文型「BにAをつける」の認定

「つける」の意味分析をするにあたり、コーパス調査を行い、コロケーション研究を通して、「BにAをつける」という定型文の認定を行う。この節では、まず、コロケーション研究の可能性を述べ、第二言語習得におけるコロケーション研究の必要性を論じる。次に、コーパスで検索し、コロケーション「Aをつける」の実態を調査する。さらに、コロケーション「Bにつける」の実態の調査を行う。最後に、「BにAをつける」の認定へ導き、総合考察を試みる。

5.3.1 コロケーション研究の必要性和可能性

多義語の意味をネットワーク図にして学習者に提示するときに、コロケーションが必要とされることは、前章の学習者の習得調査からも分かったことから、これを記述の方針(4)にも含めた。ここでは、学習者のための多義語意味記述におけるコロケーション研究の必要性和可能性を、先行研究に触れながら述べる。

堀(2009: 7)によれば、コロケーションとは、「語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する習慣的な共起関係」とであると定義される。ネーション(2005: 371-372)は、「言語知識はコロケーション的知識である。すべての流暢で適切な言語使用はコロケーション的知識を必要とする。多くの単語は、コロケーションの制限された組み合わせで使用され、これらを知ることは、単語を知ることに関する一部である」と、言語学習においてのコロケーション知識の役割を示している。言語使用におけるコロケーションの重要性が認められてくるにつれて、第二言語習得研究でもコロケーション学習の役割が重要視されつつある。例えば、前川(2015: 73)は、「日本語を学ぶ学習者は語彙を単独で覚えるのではなく、連語の形で用法を学ぶことが重要である」と指摘している。

語彙を学習するということは、単語が文の中でどのような語と組み合わせで使えるかを理解するということを含む。つまり、単語を文レベルで使いこなせるようにするには、コロケーションの知識が必要である。コロケーションの検討を通して、単語を実際に産出する道を示すと同時に、類義語との使い分けの情報も得ることができる。難しい文法項目が含まれていたとしても、それを大きなフレーズとして覚えてしまうので、コロケーションの使用は、学習者の言語運用を実際の能力以上にうまく見せる戦略でもある。また、単語の典型的なコロケーションを知ることは、語彙知識の1つの重要な側面である。よって、多義語を指導する際、日本語を用いての語彙より、適切なコロケーションを使って文の型を示した方が分かりやすくなるし、学習者の習得にも役立つと思われる。

コロケーションを利用することで、学習者の負担を減らすこともできる。ネーション(2005: 64)は、「コロケーションに関する研究は、パターンがあることを示している。これらのパターンを意識することで、ある種の単語の学習負担を減らすことができる」と述べている。また、学習者の第一言語と第二言語のコロケーションが類似していれば、学習負担は軽くなるという(p. 64)。よって、目標言語におけるコロケーションのパターンを覚え、

母語のコロケーションとの相違点をはっきりと把握できれば、習得を促進できることになる。

松本・堀場（2007）が、中国語を母語とする日本語学習者は、同義語の知識は早く習得されるものの、共起語の知識は遅れていると指摘しているように、中国語母語話者学習者のための多義語記述なら、コロケーションについての分析は必要である。コロケーションを用いて多義語の意味分析を行うことで、学習者のニーズに応えることもでき、学習者の多義語習得の役も立つ。

5.3.2 「Aをつける」の使用実態

4章の学習者の習得調査では、学習者の産出の結果から、学習者が多義語を使うための情報はまだ十分把握されていないことが分かった。その理由の1つは、コロケーションをよく身につけていないことである。多義語の意味研究に限らず、多義語の習得を支援できるコロケーションの扱い方はどういうものになるのかも、本研究の重要な課題の1つである。つまり、「つける」がどのような語と共起するのかといったことを丹念に検証していく作業が必要とされる。

そこで、この節では、コーパス⁴⁰を利用し、先行研究には明示されていない「つける」の共起語を調べ、その特徴を考察する。また、共起頻度と統計値を示し、抽出されるデータを分析する。さらに、共起語から見られることをまとめたうえで、コロケーション分析が多義語意味分析に貢献できることを示す。なお、ここでいう共起頻度は、キーワードと共起語が何回一緒に出現したかを直接に数えるものである。共起頻度は、コーパス全体の語数を考慮していないし、語彙自体の使用頻度に大きな影響を受けるため、定量的分析方法としては問題がある。ゆえに、ここでは、使用頻度を考察の重点に置かず、共起語の特徴そのものを分析の中心とする。

NLBで「つける」を検索したところ⁴¹、「グループ別」という項目では、「つける」の共起語の分類として、「名詞＋助詞」、「名詞＋複合助詞」、「名詞」、「助動詞」などが挙げられている。また、「名詞＋助詞」のグループでは、「～をつける」と「～につける」の頻度数が圧倒的に多く、それぞれ20137と11642である。それに次ぐのが「～がつける」と「～でつける」であり、それぞれ1858と1731である。それに、「パターン頻度順」の項目においても、「～をつける」と「～につける」がその1位と2位を占めている。

そこで、「つける」の意味用法を検討するには、ヲ格、ニ格がそれぞれどのような名詞と共起するか、それらの特徴を究明する必要がある。本研究では「つける」のヲ格共起名詞をA、ニ格共起名詞をBとし、「Aをつける」と「Bにつける」をコーパスで調べ、それらのコロケーションの使用実態を検討する。NLBによれば、「Aをつける」のコロケーションは2475種類もある。ここでは、出現頻度10回以上のコロケーション（合計305個）を抽出し、結果を表5-2に示す。

表 5-2 NLB による「A をつける」の使用実態（頻度 10 回以上:数字は回数）

コロケーション	頻度	コロケーション	頻度	コロケーション	頻度	コロケーション	頻度
気を～	3143	箸を～	37	鎧を～	20	板を～	13
火を～	805	跡を～	36	風味を～	20	眼鏡を～	13
手を～	485	格好を～	35	コンドームを～	19	肉を～	13
力を～	391	袴を～	35	スキルを～	19	蕾を～	13
目を～	374	頭を～	35	勝負を～	19	見出しを～	13
名前を～	287	あだ名を～	34	塩を～	19	カバーを～	12
花を～	274	価値を～	34	大差を～	19	コンタクトを～	12
差を～	210	言いがかりを～	34	安値を～	19	テープを～	12
習慣を～	194	難癖を～	34	角度を～	19	ネクタイを～	12
印を～	186	香りを～	34	言葉を～	19	ネックレスを～	12
【一般】を～	170	【数字】を～	33	足跡を～	19	ヒーターを～	12
決着を～	167	さを～	33	車を～	19	具を～	12
口を～	156	実力を～	33	重りを～	19	制限を～	12
お気を～	152	知恵を～	33	題を～	19	勿体を～	12
色を～	125	点を～	32	エアコンを～	18	単位を～	12
見当を～	123	高値を～	32	名札を～	18	基本を～	12
後を～	113	けりを～	31	味噌を～	18	宝石を～	12
傷を～	112	ライトを～	31	染みを～	18	小麦粉を～	12
実を～	112	アクセントを～	30	洗剤を～	18	戸を～	12
理由を～	111	値段を～	30	石けんを～	18	手摺を～	12
見切りを～	110	眼を～	30	衣服を～	18	整理を～	12
ものを～	109	ことを～	29	いちやもんを～	17	機能を～	12
とろみを～	107	タイトルを～	29	パワーを～	17	段取りを～	12
名を～	104	目星を～	29	灯を～	17	油を～	12
明かりを～	103	稽古を～	29	点数を～	17	甲冑を～	12
変化を～	100	マスクを～	28	粉を～	17	結着を～	12
技術を～	100	人を～	28	糊を～	17	かつらを～	11
下味を～	97	区別を～	28	職を～	17	アクセサリを～	11
文句を～	96	耳を～	28	膝を～	17	オプションを～	11
テレビを～	92	都合を～	28	花粉を～	17	先を～	11
味を～	91	服を～	27	表情を～	17	卵を～	11
知識を～	91	装置を～	27	首輪を～	17	形を～	11
衣を～	89	道を～	27	口紅を～	16	態度を～	11
条件を～	87	顔を～	27	照明を～	16	指輪を～	11
クリームを～	86	香水を～	27	物を～	16	歌詞を～	11
能力を～	84	のを～	26	目印を～	16	筋力を～	11
話を～	82	模様を～	26	糸を～	16	縫いしろを～	11
けじめを～	77	記録を～	26	腕章を～	16	表題を～	11
注文を～	72	のち ⁴² を～	25	ストーブを～	15	辺りを～	11
評価を～	72	ボンドを～	25	ランプを～	15	道筋を～	11
けちを～	71	ラジオを～	25	リズムを～	15	鈴を～	11
折り合いを～	69	剤を～	25	リードを～	15	音を～	11
体力を～	68	因縁を～	25	利子を～	15	額を～	11
丸を～	64	技能を～	25	匂いを～	15	餌を～	11
狙いを～	62	節を～	25	強弱を～	15	T V を～	11

癖を～	62	薬を～	25	手袋を～	15	くせを～	10
水を～	61	方法を～	24	曲を～	15	スタミナを～	10
順位を～	61	目処を～	24	機を～	15	チェックを～	10
【人名】を～	60	エプロンを～	23	注釈を～	15	テクニックを～	10
飾りを～	60	バッジを～	23	液を～	15	メロディーを～	10
それを～	55	パン粉を～	23	渡りを～	15	丸みを～	10
電気を～	55	円を～	23	爛を～	15	体を～	10
めりはりを～	53	器を～	23	糸目を～	15	優劣を～	10
自信を～	52	ひもを～	22	結末を～	15	利息を～	10
仮面を～	50	ボタンを～	22	計を～	15	助走を～	10
日記を～	50	予算を～	22	説明を～	15	名称を～	10
リボンを～	49	反動を～	22	バターを～	14	土を～	10
先鞭を～	48	片を～	22	マスカラを～	14	感を～	10
勢いを～	48	羽根を～	22	ワックスを～	14	提灯を～	10
弾みを～	47	踵を～	22	両手を～	14	換気扇を～	10
足を～	47	醤油を～	22	切れを～	14	札を～	10
理屈を～	43	【地域】を～	21	台を～	14	材を～	10
筋肉を～	43	何を～	21	塩味を～	14	栄養を～	10
これを～	41	唇を～	21	期限を～	14	格差を～	10
下着を～	41	唾を～	21	病名を～	14	段差を～	10
体温を～	41	方を～	21	白黒を～	14	注を～	10
区切りを～	41	BGW を～	21	イヤリングを～	13	目鼻を～	10
番号を～	41	クーラーを～	20	コメントを～	13	種を～	10
面を～	41	価格を～	20	ソースを～	13	窓を～	10
マークを～	40	値を～	20	ノウハウを～	13	縄を～	10
衣装を～	40	嘘を～	20	ベストアンサーを～	13	装備を～	10
性を～	39	始末を～	20	動きを～	13	見通しを～	10
葉を～	39	学力を～	20	弁護士を～	13	語を～	10
教養を～	38	感覚を～	20	成績を～	13	踏ん切りを～	10
簿を～	38	抑揚を～	20	敬称を～	13	防具を～	10
術を～	38	連絡を～	20	日誌を～	13	頬を～	10
電灯を～	38						

続いて、表 5-2 におけるヲ格名詞 A について分類を試みる。分類は、共起語 A の性質によって行う。ただし、この分類は「つける」の諸意味に対する分類ではない。共起語の特徴と、それぞれ所属する意味領域を把握することが分類の目的である。表 5-2 に示した共起語 A を見れば分かるように、A には「こと」、「の」のような形式名詞、「地域」、「物（もの）」、「一般」のような上位概念に属するもの、「それ」、「これ」のような指示詞、「何」のような疑問詞など、何を指すかが不明な語がある。これらの用例を確認したところ、さまざまなものが混ざっていて、共通した特徴を抽出することが難しい。よって、それらを考察対象から外すこととする。また、「～台」のような多くの物を指すことができる数量詞なども、いったいどのようなものを指しているのかは例文を見ないと分からないので、考察しないことにする。さらに、「嘘をつける」のような、他動詞の「つける」ではなく、「つく」の可能形の用法も考察の対象から外す。

表 5-3 NLB による「A をつける」の共起語についての分類（出現頻度 10 回以上）

分類	共起語	属性
具体物	火/明かり/テレビ/エアコン/灯/照明/ストーブ/ランプ/電灯/ライト/装置/ラジオ/ヒーター/TV/電気/～器 ⁴³ /クーラー/～機/換気扇	火、照明、電気器具類
	鎧/コンドーム/衣服/首輪/腕章/手袋/袴/マスク/服/眼鏡/カバー/コンタクトネクタイ/ネックレス/甲冑/かつら/アクセサリ/指輪/飾り/仮面/下着/面/衣装/エプロン/バッジ/マスカラ/イヤリング/切れ/装備	身の回りの品、装身具
	手/目/口/膝/表情/頭/眼/耳/顔/額/足/踵/唇/両手/体/頬/目鼻	体、または身体部位
	衣/塩/みそ/小麦粉/卵/パン粉/醤油/ソース/バター	調理用の粉状、液状の調味料など
	粉/糊/ボンド/テープ/ワックス/～材 ⁴⁴ /土	物の表面にくっつける物
	洗剤/せっけん/口紅/香水/剤/薬/油/唾/～液/水	物の表面にくっつき、浸透できる物
	花/実/花粉/蕾/葉/種	植物関連
	肉/筋肉	肉
	縫いしろ/道	目印としての線状物
	車	乗り物
	日誌/丸/日記/番号/マーク/～簿 ⁴⁵ /印/目印	印、文字関連
	傷/足跡/染み/跡	痕跡類
	糸/紐/名札/鈴/餌/リボン/羽根/提灯/縄	細くて、垂れ下がるようなもの
	板/具/戸/窓/手すり/オブション/～計 ⁴⁶ /箸/宝石/ボタン	付属品
	人/弁護士	人
	～先 ⁴⁷	（物、あるいは身体部位の）先端
抽象物	差/大差/格差/段差/区別/勝負/強弱/白黒/優劣	比較を通してはっきりと判定されるもの
	力/習慣/技術/知識/能力/体力/パワー/実力/知恵/稽古/技能/方法/基本/癖②（くせ）/機能/態度/筋力/スタミナ/自信/職/～性 ⁴⁸ /教養/術/～方 ⁴⁹ /学力/ノウハウ/テクニック/栄養/（外国）語/～さ ⁵⁰	能力・知識など
	名前/名/題/あだ名/タイトル/見出し/表題/病名/敬称/名称	名称
	決着/始末/結末/見切り/結着/切れ目/見通し/踏ん切り	結論・決着
	順位/角度/整理/段取り/道筋	整えられるもの
	後	追跡・追尾
	理由/話/言葉/理屈/説明/評価/コメント/ベストアンサー/チェック	表現・評価
	変化/勢い/弾み/重なり/反動/動き/丸み	状態の変化
	助走	助走
	条件/制限/期限	制限・条件
	注文	注文
	予算	予算
	安値/点数/成績/価値/【数字】/点/高値/値段/～円/記録/利子/利息/単位/価格/値/札	お金関連、数字関連
	折り合い/連絡/都合/狙い	関連性、関係
	風味/色/とこみ/下味/味/塩味/匂い/香り/～さ/模様/形/音/アクセント/リズム/メロディー/めりはり/抑揚/（基礎）体温 ⁵¹ /感覚/～感 ⁵²	五感で味わえるもの
	リード/先鞭	先
	節/曲/歌詞/BGM/注釈/注/～語 ⁵³	歌・言葉関連
	気/お気	注意
	見当/目星/辺り ⁵⁴ （当たり）/目処	予測
	文句/クリーム/いちゃもん	苦情

慣 用 句	けち/言いがかり/難癖/けじめ/因縁/癖①	非難
	格好/勿体	容態・態度
	片/けり	結論・決着
	渡り	交渉上の関係
	糸目を付けない	制限
	燗	加熱したお酒

以上、使用頻度が 10 回以上のコロケーション「A をつける」を、共起名詞 A の性質によってグループ分けした。その結果を見れば、多くの具体名詞と抽象名詞がヲ格共起語として「つける」と組み合わせさせてコロケーションをなしていることが分かる。以下、表 5-3 の左欄にまとめたように、具体物、抽象物、慣用句の三つに分けて検討する。

具体物のヲ格共起語においては、身の回りの品・装身具グループのメンバーが一番多く、「衣服」から「ネックレス」、「指輪」のようなアクセサリーなどがある。ここでの「つける」は体にまとわせたり、付着・装着させたりすること、衣服などを着用することを描く。これらの語は「つける」と共起するとき、意味上「身につける」という共通点がありつつも、具体的に描く行為には差も存在する。「着る」行為もあれば、「かぶる」、「締める」行為もある。そしてこのとき、ニ格名詞となるのは体、またはその一部である。

また、装身具に次いでカテゴリーメンバーが多いのは、火・電気器具類である。表 5-3 では「～器」の実例に、合わせて 19 種類の名詞が挙げられている。火・電気器具類の名詞と共起する「つける」は、燃えるようにしたり、明かりをともしたりすること、あるいは、電気器具のスイッチなどを入れて起動させることである。前章の習得調査から分かったように、学習者が早い段階で学習し、馴染みのある用法である。コーパス調査からもこれが使用頻度の高い用法であることが分かった。

ヲ格名詞には付属品を表わす語も多い。「～計」の実例を確認すると、10 種類の共起語がある。これらの名詞と共起する「つける」は、付属品の「板・手すり・ボタン」などを他の物に物理的に接近させ、付着または一体化させる行為である。「糸・紐・リボン」などは、線状物のグループに入り、細くて垂れ下がる特徴が共通である。

さらに、「人をつける」ということは、人を誰かのそばに付かせ、「ガイド」や「秘書」のように、補佐として働かせることである。補佐という役割を果たす点は、付属品に類似している。物であれ、人であれ、付属品のように機能できれば、「つける」と共起する可能性がある。この場合は、体または身体部位も「つける」のヲ格共起語となり、動作主が自分の身体部位を移動物のように動かし、どこかに接触させる行為を表わす。

調理関連の「衣・塩・みそ」などを「つける」というのは、食材などの表面に物理的に付着させることである。作用の結果からいって、「粉・糊」などのグループも、それと類似している。これらは、いずれも物の表面にくっつくことができるものである。また、物の表面への付着にとどまらず、接触してから、中に浸透するものには、「洗剤・せっけん・香水」の類がある。これらのヲ格名詞の特徴として、液状・ペースト状物であり、物の表面に付着して内部に浸透できるということが挙げられる。これらの 3 グループに属するもの

の性質は、かなり類似している。粉状や液状のものの多くは、対象物の表面に付着しやすいものである。

「痕跡」グループには「傷・足跡・染み」などの名詞がある。いずれも結果目的語となり、「つける」行為の働きかけた結果である。筆やペンなどの道具で力を加え、「痕跡」を残すのが行為の目的である。「日誌・丸・日記」などもこのグループに属する。「日記をつける」ことを、文字をノートなどに残すことと見なすことができるため、「日記」も一種の「痕跡」と言えよう。

また、植物関連の語も「つける」と共起する。表 5-3 に示すように、「花・実・花粉・蕾・葉・種」が検索された。ここでの「つける」は植物の生長を意味する。行為の結果、新しいものが生まれるという点では、「筋肉をつける」のようなコロケーションとは共通している。他のところから A を移動してくるのではなく、動作主（植物・人）自らの生成である。

今回のコーパス調査において、「車をつける」の実例が 19 例検索された。このときの「つける」の表記としては、「着」でも書け、停めるという意味で用いられる。出現頻度 10 以上の乗り物グループでは、「車」だけが検索されたが、同グループには「船」などもある。この場合の「つける」は、乗り物がある場所に寄せてから停止させることに用いられる。

以上、「A をつける」の具体名詞 A の特徴を見てきた。(5) はそのまとめである。

- (5) ①「つける」のヲ格共起語に使用されている具体名詞には、火・電気器具類、体とそ
の一部、身の回りの品、物の表面に付着できる物、粉状・液状物のような浸透で
きる物、小物・線状物のような付属品となる物、補佐・補助とする人、身体部位、
交通機関としての「車」、「足跡・筆跡・傷・日記」など作用された結果となる物
がある。
- ②出現頻度 10 以上の共起語は、グループ化することができ、共通した特徴を抽出す
ることができる。
- ③各グループのカテゴリーメンバー数には違いがあり、装身具グループと電気器具グ
ループのメンバー数が最も多い。
- ④A となる具体物には小物、または付属品となる物で、動作主がそれを容易に動かす
ことができるような物が比較的が多い。

続いて、抽象名詞の考察に移る。表 5-3 のグループ分けから見て、カテゴリーメンバーのもっとも多いのが知識・能力グループであり、30 語も検索された。ここでの「つける」は、能力などを備えさせる行為である。また、人の名前や文章の題名などの名称と共起して、命名する意味を表わす用例もかなり多く、10 語もある。さらに、「色・味・香り」など五感で感じ取れる物と広く共起することが分かった。この場合は、他のものに作用することを表し、使役の意味合いが含意される。

「差・区別」のような比較を通して弁別できる抽象名詞、そして、「勝負・強弱・白黒」のような反義語で組み合わせた抽象名詞も「つける」と共起する。この場合、「つける」は比較などを通して、対象を判定することを意味する。

また、「つける」は、抽象的な添加の意味で用いられ、金銭・数字関連の語、歌・言葉関連の語と共起する。そもそもそこにある物・事柄に新たなものを移動物のように添加する。

「結果・結論、表現・評価」、関連性、状態の変化、「条件」、「整理」、「リード・先鞭」などの類の表現と共起できる。「つける」行為に作用された結果、新しい状態や変化が現出する。

さらに、同グループのメンバーが少ない理由で、上位概念的な特徴が抽出されない抽象名詞のコロケーションには、「後をつける」、「助走をつける」、「注文をつける」、「予算をつける」がある。これらの表現は、上記のグループの「つける」の用法と関連性がないわけではなく、ただ抽象名詞 A の性質からいうと、グループ化にすることができないだけである。また、これらの表現はいずれも共起語との結合度が高く、慣用表現に近い。

以上の、抽象物 A の特徴についての検討から (6) がまとめられる。

- (6) ①抽象名詞のヲ格名詞 A は、多種多様であり、知識・能力を表わす語や名称、五感で感じ取れる物を表わす語、数字関連、言葉関連、結論・評価関連の語が挙げられ、共通点を抽出できるカテゴリーもある。
- ②各グループの抽象名詞のヲ格名詞 A の性質は、それぞれ異なるものの、多くの場合、「つける」が「付加、添加」意味で使用されている。
- ③抽象名詞 A と共起する「つける」の行為の多くには、使役性が見られる。

「A をつける」形の慣用句⁵⁵は、豊富である。表 5-3 から分かるように、「(お) 気をつける」は高い出現頻度を示している。これは、この慣用句は話し言葉としてもよく用いられるからである。また、「けち/言いがかり/難癖/けじめ/因縁/癖をつける」グループがすべて「非難する」ことを表し、「見当/目星/当たり/目処をつける」がいずれも「予測する」ことを意味するように、多くの慣用句は意味上類似している。

また、ヲ格名詞を観察したところ、慣用句グループに属しているものと、慣用句でないコロケーションの共起名詞との共通点が見つかった。例えば、「きちんと整理すること」を意味する「片/けりをつける」は、「決着/始末をつける」の意味とはほぼ同じである。また、「渡りをつける」と「連絡をつける」もこのような例である。このように、慣用句におけるヲ格名詞 A は、抽象物グループにおける A と関係していると言えよう。

以上、コーパスの調査結果をもって、ヲ格共起語 A を具体物、抽象物、慣用句の三つに分けて「A をつける」の使用実態をまとめると、(7) のようになる。

- (7) ①「つける」のヲ格共起語は、幅広い意味領域の語からなる。ヲ格共起語として、装

身具・付属品、知識・能力を表わすカテゴリーの語がもっとも多い。

- ②具体物 A には、付属品としての小物が多く、移動物も多い。「つける」行為を通して、A が背景物に付着する結果が生じる点が一致している。しかし、行為そのもの（身体体験）が異なる。また、行為の性質からいうと、意図的な行為あれば、非意図的な行為もある。
- ③抽象物のグループでも、ヲ格共起名詞 A はさまざまあり、グループ分けできるものとそうできないものがある。また、多くの場合、「つける」は「付加、添加」の意味で使用されており、使役的に用いられる。
- ④慣用句「A をつける」においては、類似した意味を表わす表現が存在し、意味上、慣用句でないコロケーションと共通点が見つかった。また、慣用句とは言え、その一部は「つける」の意味と関連付ければ、理解はできる。

ここでまとめたヲ格共起語の特徴は、あくまでも今回のコーパス調査の結果によるまとめであり、「つける」用法の分類ではない。しかし、同じグループの名詞と共起する「つける」は、同じ意味用法の場合が多いと見られた。ヲ格共起語は「つける」の意味分類に緊密に関係し、重要な役割を果たしている。

5.3.3 「B につける」の使用実態

続いて、5.3.2 と同様の方法で「～につける」のデータを抽出し、考察を加える。「B につける」の使用実態は、以下の表 5-4 にまとめておく。

表 5-4 NLB による「B につける」の使用実態（頻度 10 回以上: 数字は回数）

コロケーション	頻度	コロケーション	頻度	コロケーション	頻度	コロケーション	頻度
身に～	2379	地面に～	29	食べ物に～	19	外側に～	13
ように～	482	後ろに～	29	さんに～	18	女に～	13
水に～	217	自分に～	29	のちに～	18	彼に～	13
タバコに～	206	言葉に～	29	ほうに～	18	時期に～	13
ために～	130	食事に～	29	代わりに～	18	本に～	13
ときに～	116	うちに～	28	側に～	18	相手に～	13
ことに～	106	位置に～	28	家に～	18	端に～	13
【一般】に～	90	子供に～	28	肌に～	18	自然に～ ⁵⁶	13
前に～	87	【地域】に～	27	髪に～	18	逆に～	13
【人名】に～	83	地に～	27	ここに～	17	適当に～	13
体に～	77	塩水に～	27	内側に～	17	部屋に～	13
的に～ ⁵⁷	69	後に～	27	問題に～	17	以外に～	12
先に～	66	身体に～	27	場合に～	17	体調に～	12

味方に～	63	パンに～	26	場所に～	17	回答に～	12
床に～	57	間に～	26	熱湯に～	17	娘に～	12
ものに～	52	顔に～	26	蠟燭に～	17	目に～	12
これに～	50	首に～	26	他に～	16	紙に～	12
手に～	50	仕事に～	25	子に～	16	脇に～	12
胸に～	50	日に～	25	液に～	16	葉巻に～	12
ところに～	49	十字架に～	24	私に～	16	語尾に～	12
それに～	48	耳に～	24	簡単に～	16	針に～	12
上に～	48	どこに～	23	職に～	16	らに～	11
下に～	46	最初に～	23	頬に～	16	ベースに～	11
何に～	46	最後に～	23	先端に～	15	商品に～	11
頭に～	46	月に～	23	口に～	15	彼女に～	11
人に～	37	周りに～	21	氷水に～	15	心に～	11
そこに～	34	指に～	21	男に～	15	時に～	11
位に～	34	点に～	21	窓に～	15	木に～	11
勝手に～	34	部に～	21	ウマに～	14	条件に～	11
さに～	33	グラスに～	20	料理に～	14	気持ちに～	11
なかに～	33	中に～	20	方に～	14	物に～	11
何事に～	33	者に～	20	生活に～	14	額に～	11
たちに～	32	腕に～	20	花茎に～	14	からだに～	10
壁に～	32	足元に～	20	辺りに～	14	ノートに～	10
【数字】に～	31	金に～	20	醤油に～	14	事故に～	10
湯に～	31	際に～	20	【組織】に～	13	同様に～	10
車に～	31	順に～	20	一緒に～	13	指先に～	10
部分に～	31	魚に～	20	切れに～	13	汁に～	10
腰に～	30	お湯に～	19	名に～	13	筆に～	10
十分に～	29	健康に～	19	地位に～	13	首輪に～	10

以上、出現頻度が 10 以上のコロケーション「B につける」を表 5-4 で示した。NLB によれば、「B につける」のコロケーション数は 2582 である。出現頻度 10 回以上のコロケーション数は 160 である。しかし、表 5-4 を観察したところ、「A をつける」と同様、検索された「B につける」にも今回の考察の対象外にするものがある。

まず、時間を表わす「時（とき）」、「うち」、「～日」、「～月」「最初」、「最後」、「際」、「時期」と、状況を表わす「場合」は考察対象外である。また、形式名詞の「こと」「もの」「ところ」、上位概念としての「数字」、指示詞の「それ」「そこ」などもある。これらの語はいったい何を指すのかは、実例を 1 つずつ見ないと分からず、B の特徴を考察するための確実なデータではないので、考察の対象から外す。さらに、「つける」とは格関係になく、「代わりにつける」や「以外につける」などのような文型的な表現、「勝手」、「十分」、「他（ほか）」、「簡単」、「一緒」、「同様」、「逆」、「自然」（その一部）、「適当」など副詞的な要素も

今回の考察の対象から外す。表 5-5 では、出現頻度 10 回以上の二格共起語 B をそれぞれの性質によって、カテゴリー化する。

表 5-5 NLB による「B につける」の共起語についての分類（出現頻度 10 回以上）

	共起語	属性
具体物	水/湯（お湯）/塩水/熱湯/液/氷水/醤油/汁	液体
	タバコ/蠟燭/葉巻	火の点けられ、燃えるもの
	家/部屋	家屋
	床/壁/地面/地/窓/ベース	広い表面の持つ地面、壁など
	【人名】/人/～たち/～ら/自分/子供/子/～者/～さん/私/男（人間）/【組織】/女/彼/相手/娘/彼女	人
	ウマ/首輪	動物、または動物の身体部位
	体（からだ）/手/胸/頭/腰/身体/顔/首/耳/指/腕/足元/肌/髪/頬/口/目/脇/心/額/指先	体、または身体部位
	パン/魚/食べ物/料理	調理用の食材、食物
	本 ⁵⁸ /紙/ノート/切れ	紙布類
	花茎/木	植物関連
	車	乗り物
	十字架	十字架
	グラス	食器
	針	針
	筆	筆
	商品	商品
抽象物	物（もの）/こと/ほう	上位概念としての抽象名詞
	【数字】/部分/～点/～部	部分、点
	そこ/それ/これ/何/どこ/ここ	上位概念としての指示詞・疑問詞
	ところ/位置/場所/【地域】	上位概念としての場所
	前/先/上/下/中（なか）/後ろ/後/のち/間/周り/側/内側/先端/辺り/外側/端	方位名詞
	味方	立場
	仕事/職/地位	集団の中での身分あるいは立場、処遇
	～位	順位
	～順	順序
	～さ ⁵⁹	ものの属性、または程度
	～方 ⁶⁰	方法
	健康/体調/気持ち/生活	心身状態
	食事/事故	事柄
	言葉/回答/語尾/名	言語・名称
	金	金銭
	問題	問題
	条件	条件・制限
慣用句	身	身
	何事	何事

5.3.2 と同様、ここでも「つける」の二格共起語を具体物、抽象物、慣用句の 3 つに分けて、B のそれぞれの特徴と意味領域を検討する。まず、具体物 B には、液体類の「水・（お）湯・塩水」などがある。それらの実例を見ると、「漬ける」と「浸ける」のコロケーションであった。「漬ける」と「浸ける」は、本研究の研究対象にした「つける」の同音異義語で

ある。「漬ける」と「浸ける」は、ヲ格名詞よりニ格名詞を要求するので、「A をつける」の検索結果を検討するときは、問題になっていなかった。また、この結果から、「つける」は、一般的には液体のニ格名詞とは共起できないことも明らかになった。

続いて、「つける」の液体以外の具体物のニ格共起語を検討する。「タバコ・蠟燭・葉巻」のような火の点けられるものがBとなれる。この場合、「火」がヲ格名詞となり、「つける」が燃焼現象を起こす行為である。ヲ格共起語Aも、「つける」の意味も規定されている。逆に言うと、「つける」の「点火」の意味を用いるとき、ニ格名詞Bが重要な要素となり、ヲ格名詞「火」が潜在化してしまう可能性もある。これと同様、ニ格共起語からヲ格共起語の所属領域と「つける」の意味が推測できるのは、植物関連グループの「花茎」である。コーパス調査から「花茎に花をつける」が固定度の高いコロケーションであることが分かった。つまり、花茎に何をつけるかという質問に対し、回答は「花」に限られる。ただし、同じグループの「木」はヲ格名詞がさまざまであり、植物の生長に関わるコロケーションは「木に実をつける」のみである。

また、場所を表わす「家・部屋」、そして部屋の一部に属する「床・壁・窓」などが「つける」のニ格共起語となれる。これらの物の共通点はと言うと、すべて広い表面を持っていて、相対的に固定していて動かすことができないということである。事例では「床に膝をつける」、「地面に足をつける」、「部屋に電気をつける」など、「つける」のさまざまな意味用法が見られ、ヲ格共起語も決まっていない。表面を有する具体物のカテゴリーには、紙・布類グループもある。「本・紙・ノート・切れ」の事例では、「ノート」の用例だけは、「つける」の意味用法が限定され、「書く、記す」意味で用いられる。したがって、「ノートにつける」は、結合度の高い表現と言えよう。

人と人の体、または身体部位も、「つける」のニ格共起語になれる。ニ格名詞が人の場合、多くの「つける」の意味用法が観察された。一方、人の体、または身体部位がニ格共起語である場合、他の事例も存在するものの、ヲ格名詞の多くが装身具類の語であるので、「装身具の着用」を意味することが多い。また、動物の場合、今回の調査では「ウマ」と「首輪」の2つだけが抽出できた。「ウマ」の事例には、ヲ格名詞として「荷・荷物・鞍・鈴」などがある。出現頻度10以下のコロケーションには、「犬」と「猫」も出てきたものの、「ウマ」の事例ほどヲ格名詞の特徴が目立たない。また、「首輪」の多くは、犬などの動物の首輪に「鑑札・名札・注射済票・リード」をつけることである。これもいわゆる付属品を身に装着する意味で用いられている。

さらに、「つける」のニ格共起語には、食材・食べ物に関わる語がある。上位概念としての「食べ物・料理」もあるし、「パン・魚」のような食材もある。共起語「食べ物」の19例を見ると、「食べ物に気/手/顔/名前をつける」のようなコロケーションが見られた。これらの場合、「つける」がそれぞれ異なる意味を表わし、共通点を抽出することができない。他方、「魚」の事例を見てみると、「魚に下味/小麦粉/衣/かたくり粉/甘味/海苔をつける」のような、魚を調理の食材にして、調理方法を言う用法がほとんどである。他の用法

としては、「魚に付加価値をつける」の1つしか現れなかった。

表 5-4 に集計した他の具体物は、共通した特徴が見つからず、カテゴリー化することもできない。「針」の多くは釣り針を指しているので、「針に餌をつける」の実例が多い。「車」の場合、「車に気をつける」、「車に傷をつけられる」、「車にオーバーフェンダーをつける」の3種の実例がもっとも多い。「車」に限らず、出現頻度 10 以下の「車」をはじめとする乗り物の実例からも、こうした組み合わせが多く見られた。「十字架にイエスをつける」は宗教関係の表現であり、イメージしやすいものであるので、「つける」の「固定して動かないように密着させる」行為を理解するには効果的である。「グラス」の場合は、「グラスに口をつける」の実例がほとんどであり、学習者に提示するとき、1 つのかたまりとして見せた方がいい。「筆」は、「商品」と同様、後ろに来るヲ格名詞がさまざまであり、「つける」の用法も多種多様である。

以上で、具体物 B の特徴を述べてきた。(8) は、そのまとめである。

(8) ①「つける」の具体物の二格共起語は固体物でなければならない。

②具体物 B は、さまざまな領域に属するものがあるが、場所や「つける」行為の帰着点となるものが多い。

③具体物 B の形から言うと、A より形状や規模が大きいものが多い。また、広い表面を持つものも多い。

④具体物の二格共起語のみで「つける」の意味を規定することは、一部の語に限られる。多くのコロケーションでは、「つける」の意味を認定する際に、二格共起語よりヲ格共起語の方が重要な役割を果たしている。

続いて、抽象物の二格共起語の考察に移る。表 5-5 にまとめた抽象物の二格共起語 B には、形式名詞、指示詞などが含まれている。前にも述べたように、これらの表現は実例をすべて確認しないと何を指しているのか分からないので、ここでは検討の対象外とした。また、「上・下・後ろ・後・側」などの方位名詞も多く検索された。表 5-5 に挙げた方位名詞の実例を見たところ、空間ではなく、時間を表わす語も混ざっている。二格共起語は時間名詞の場合、行為を行う時間となり、ここで検討する「B につける」に属していない。

抽象物共起語のうち、コロケーション「味方につける」が高い出現頻度を示している。そのヲ格共起語には「人」を表わす名詞が多いものの、「運・歳月・光・タイミング・人の力」などもある。どのコロケーションにおいても、「つける」の意味は同様であることが分かった。つまり、ヲ格名詞が変わっても、「味方につける」の意味は変わらないのである。このことから、「味方につける」は、固定度がかなり高く、慣用的な表現と言えよう。

「～位」の 34 の実例を確認したところ、そのうち、助数詞としての「位」が 19 例ある。それに、この用法で用いられるのは「2 位」以下である。このときの「つける」は自動詞的な用法であり、ヲ格共起語は要求されていない。残った実例には、「皇位の位」、「好位」、

高い位」などのような社会またはある集団の中での身分、あるいは立場・処遇・役割に身を置かせるという意味で用いられるコロケーションがある。これは「仕事/職/地位につける」と類似しており、ヲ格共起語となるのが「人」である。また、「2 位に 1000 票以上の差をつける」のような「差をつける」の実例も 5 つ検索された。

順序を表わす「～順」も接尾辞的な表現である。「年の若い順につける」、「使用順に名前をつける」、「本文中に引用された順に数字をつける」のほか、料理の作る順番の説明としての「粉、とき卵、パン粉の順に衣をつける」のような実例が圧倒的に多い。ニ格共起語「～の順」の実例を見ると、ヲ格共起語なしでは「つける」の表わす意味を推測することはできない。つまり、この場合、「B に A をつける」という定型文があってはじめて「つける」の意味を獲得できるということである。

接尾辞「～さ」の実例には原因を表わすニ格用法の実例を除き、「長さに変化をつける」、「おかしさに弾みをつける」、「高さに差をつける」、「真剣さにけちをつける」、「多様さに決着をつける」などがある。「～さ」は、そのものの属性または程度を表わし、「～さに A をつける」は、行為の主体である人間がその属性または程度を対象にして働きかけることである。同じ接尾辞「～方」も、「つける」のニ格共起語になれる。「口の利き方に気をつける」、「食器の洗い方に難癖をつける」、「溶け方に変化をつける」、「セミの鳴き方に名をつける」などのような表現が挙げられる。

心身状態グループの「生活・健康・体調・気持ち」のうち、「生活」と「気持ち」のヲ格共起語には、それぞれ「気・メリハリ・見切り・折り合い・踏ん切り・ケチ・けじめをつける」と「整理・折り合い・火・区切り・ケリ・踏ん切りをつける」のような表現がある。このように、「生活」と「気持ち」は共通的に生活や気持ちをきちんと整理することを表わす表現と組み合わせてコロケーションをなす。「健康・体調」のすべては、「気をつける」と共起する。また、「食事」と「事故」を事柄として 1 つのグループにしているのは、「健康」と関連があるからである。それに、実例を見れば、「食事/事故に気をつける」が圧倒的に多い。ここから言えるのは、心身状態・健康関連を表わす語は、よく「気をつける」と結合し、1 つのまとまりとして成り立っているということである。

言語・名称グループに属する語には、「言葉・回答・問題・語尾・名」がある。それぞれの実例を見てみると、ヲ格共起語 A や「つける」用法には共通点が見つからなかった。また、他のグループに入れられず、統一した性質が見えない語には、「金」と「条件」がある。興味深いことに、ヲ格共起語を加えると、それぞれもっとも出現頻度の高いコロケーションは、「金に糸目をつけない」と「条件に気/目/文句をつける」のような表現である。しかも、「糸目をつけない」、「気/目/文句をつける」はいずれも慣用句である。

次の (9) は抽象物 B の特徴のまとめである。

- (9) ①具体物と同様、抽象物のニ格共起語も多くの意味領域にわたっている。出現頻度 10 以上の語を、すべて上位概念を用いてカテゴリー化することは困難である

- ②方位名詞、地位や仕事、職など社会的位置を表わす名詞、助数詞「位」、「順」とともに抽象的な位置を表わす表現が「つける」の二格共起語として目立ち、「つける」行為の帰着点、すなわち、ヲ格共起語 A を付着させる場所や存在させる場所を表わす。
- ③「BにAをつける」において、二格共起語が心身状態や言語・名称などの場合、ヲ格共起語となるのも抽象的な表現が多い。

慣用句の場合、「Aをつける」と比べ、二格を要求する慣用表現はずっと数が少ない。今回のコーパス調査で検索された、二格共起語の含まれる慣用句は2つあった。1つは「身につける」である。調査結果から分かるように、この出現頻度がもっとも高い。それに、ヲ格共起語も限定される。表5-3における身の回りの品・装身具グループの語と合わせれば、体に装うことを表わし、また、能力・知識グループの語と合わせれば、知識・習慣・技術などを自分のものとし、習得化することを意味する。コロケーションの慣用度が高ければ高いほど、その共起語も決定されやすい。

もう1つは「何事」との共起である。事例を見てみると、「何事につけ」、「何事につけて」、「何事につけても」の3種の形があった。これらの表現においては、「つける」の動作性が薄く、行為を表わす単純動詞「つける」の意味に関連付けて記述することは不可能である。しかも、「つける」は、決まった活用形が要求されているので、普通の慣用句の性質とは少し異なり、むしろ文型・文法的な表現に近い。

以上をもって、二格共起語Bの性質と特徴を分析した。まとめると、(10)のとおりである。

- (10) ①「つける」の二格共起語も幅広い意味領域の語からなる。そのうち、「つける」行為の帰着点を表わす語がもっとも目立つ。
- ②二格共起語Bが具体物の場合、BはAより大きく、背景物となる。
- ③ヲ格共起語と二格共起語のどちらかが抽象物の場合、共起語の抽象度が高くなる。また、「つける」意味の抽象度が高いほど、二格とヲ格のどちらかの1つのみが要求される傾向が見られた。それに、コロケーションも慣用表現になる可能性が高くなる。
- ④二格共起語のみで「つける」の意味を規定することができるものは、一部の語に限られる。多くのコロケーションでは、「つける」の意味を認定するために、二格共起語よりヲ格共起語の方が重要な役割を果たしている。「Aをつける」の慣用表現が「Bにつける」の慣用表現より数多いことから、この結論を立証できる。

5.3.4 総合考察とコーパスの限界

5.3.4.1 総合考察

5.3.2 と 5.3.3 では、NLB における出現頻度 10 以上の「A をつける」と「B につける」のコロケーションの分布を観察し、データの抽出を行い、それぞれの使用の実態を検討した。それらの結果により、「つける」の二格共起語とヲ格共起語の使用傾向が観察され、それぞれの特徴がまとめられた。ここでは、両方の結果を合わせ、「つける」のコロケーションに対する考察から分かったことを示す。

まず、「つける」の二格共起語とヲ格共起語を見ると、両方とも幅広い意味領域の語と共起できることが分かった。表 5-3 と表 5-5 にまとめた共起語のグループにはメンバーの多いものもあれば、少ないものもある。また、共通した特徴が目立つ語グループもあれば、そうでないものもある。しかし、同じグループに属する語としても、「つける」と共起すれば、「つける」の同一の意味用法で説明できるというわけではない。したがって、この節における共起語に対する検討は、「つける」の意味記述には役立つものの、共起語の分類による「つける」の意味分類には不適切なところがあることが明らかになった。

また、ヲ格共起語と二格共起語のいずれかが分かったら、「つける」の意味、そしてコロケーション全体の意味も明らかになる可能性がある。しかし、一部の用法においては、二格情報とヲ格情報をともに把握しないと、「つける」の意味がはっきりと分からない場合もある。言い換えれば、「つける」の意味を正確に把握するには、二格とヲ格共起語をともに正しく理解することが必要とされる。

さらに、抽出した多くのコロケーションの固定度の度合いに差が存在していることが分かった。例えば、ヲ格名詞が身の回りの品の場合、二格共起語が人間・動物の体またはその一部を表す名詞に相違ない。一方、ヲ格共起語が体または身体部位を意味する語の場合、多くの意味領域の語が二格名詞になれる。また、他の具体例でいうと、「火をつける」の意味はこのコロケーションを見るだけで分かる。一方、「エアコンをつける」の場合、「エアコンを起動する」の意味もあれば、「部屋にエアコンをつける」のように、「エアコンを設置する」という意味もある。このように、二格共起語も「つける」の意味を考えると、重要な役割を果たしている。ヲ格共起語と二格共起語はどちらが重要なかは場合による。いずれにしても、「B に A をつける」という事象において「つける」行為をとらえるべきである。

このように、「つける」の意味が多くの場合、二格共起語とヲ格共起語が相関すると分かった。多くの用例はこのような形で出現していることから、「B に A をつける」という「つける」コロケーションのパターンが認定できたと考える。つまり、B が決まった場合、A も規定されて、「つける」の意味も規定されているようになる。ただし、ヲ格と二格は必ずしも同時に存在するとは言えない。

続いて、学習者の立場からコロケーション調査から分かったことをまとめる。まず、ヲ格共起語と二格共起語のコーパス調査を通して、学習者の「つける」はどのような表現と

共起するかという質問に答えられるようになった。コロケーションは学習者のための多義語記述の欠かせない部分であり、学習者の習得に役立つ語彙情報でもある。語彙学習の観点から、学習者のための意味記述においては、高頻度・高固定度のコロケーションを取り扱うべきである。このコロケーションに対する研究は、「つける」の意味記述を行うための下準備であり、学習者のための多義語ネットワーク図の構築をするためのものでもある。

また、コーパス調査から分かったように、「つける」に関わる慣用句表現もかなり多い。慣用句といっても、その多くは「つける」の意味と切り離して考えてはいけない。習得の面から言えば、学習者には慣用句を学習する際に、2つ方法が考えられる。1つは、慣用句をまとまりとして覚える方法である。もう1つは、「つける」の意味用法をよく身につけたうえで覚える方法である。前者と比べ、後者の方が長期記憶に残りやすいのであろう。それゆえ、学習者のための慣用句の習得を支援するには、「つける」のそれとの関連用法に対する詳細な解説が要求されるのである。

「つける」の異なる表記（「付ける」、「点ける」、「就ける」、「着ける」など）でコーパスを検索したら、異なるコロケーションと頻度数、また、上記と異なる結果が出てくる可能性もある。それに、コーパスでのコロケーションの出現頻度については不安定なところ（誤り、個人の癖など）があるので、出現頻度を順序で見るとは適さないところがある。とはいえ、今回は頻度10以上のコロケーションを抽出して分類したところ、「Aをつける」と「Bにつける」の特徴が現れ、使用実態が見られたので、多義語の多義性に対する記述をするには十分な情報が得られたと考える。一方、出現頻度10以下のコロケーションはここでの集計から外したものの、重要ではないというわけではない。次節からの「つける」の意味分析をする際には、必要に応じて、それらのコロケーションを抽出し、検討を行うことにする。

また、前にも述べたように、「Aをつける」と「Bにつける」の共起語の分類は「つける」の意味に対する分類ではない。しかし、異なる意味領域のヲ格名詞と共起し、これほど多くの異なる性質の語と共起することで、「つける」の異なる用法が用いられる可能性があると考え。一方、同じ領域の語であっても、「つける」は同じ用法を持っているとも言えない。ここでまとめられた「つける」のコロケーションの特徴と共起表現の使用実態に基づき、「つける」の意味分析を行うことが可能であると想定する。

5.3.4.2 コーパスの限界

コーパスを用いて、共起語の性質、または語の意味を記述するには限界があることが今回の調査から改めて分かった。コーパスから膨大な数の実例が得られるものの、コーパスには誤りや使用の個人差があり、また、重複した例も存在する。それゆえ、用法ごとに細密な検討が必要とされる。コーパスを用いた記述はマクロ的な分析だというならば、個々の意味に対するミクロ的な議論が必要である。

また、今回の調査で抽出した用例には誤用が混ざっている。例えば、「辺りをつける」

というコロケーションの例文を開いたら、本当は「当たりをつける」の実例だと分かった。また、「人名」グループの多くも人名ではない。こういったデータの実例は、分析にとっての有益な情報とは言えず、混乱をもたらす可能性も高い。このようにならぬに、コーパスを用いて調査対象の全体像を見るのにいいものの、用法を具体的に検討するとき、一個ずつ分析をしなければならないのである。

さらに、今回用いたコーパスは日本語全体が代表できるものとも言えない。「コーパスはどんなに大規模であっても、日本語という母集団のすべてにはなりえない。そのため、母集団を適正に代表するサンプルを取得することが目指されるが、偏りが全くないとは言えない」(小西 2011: 185)。このように、コーパスを用いてデータを抽出する際に、コーパスの欠点に気をつけながら、考察を行わなければならないのである。

コーパスには、以上のような欠点がありつつ、コーパスから得たコロケーションの出現頻度についての情報は語彙の記述を変えることができると考える。記述の結果が変わったら、辞書も教科書もそれとともに変わっていく。それで、日本語教育に生かすことも実現できると言えよう。

5.4 「つける」の意味分析

この節では、中国語母語話者日本語学習者のニーズに答える「つける」の意味分析を試み、「つける」の多義性と意味拡張のメカニズムについて体系的に明らかにする。また、中国語母語話者学習者のための「つける」の示し方を提案する。具体的には、5.2.4 で定めた(4)の記述の指針に従い、分析の課題に照らし合わせ、「つける」の意味用法を検討し、そのプロトタイプ的な意味を認定する。そのうえ、メタファーやメトニミーなどに基づき、意味間の関連性を明らかにし、「つける」の意味ネットワークモデルを構築する。さらに、学習者のための「つける」の多義ネットワークを示す。「つける」意味を検討する際には、学習者は語の個々の意味に注目するというより、文脈における語の意味を重視しなければならないので、ここでは文脈を用いて分析を行う。なお、ここでいう文脈は連語からテキストに至るまで幅広く捉える。実例を挙げる際は、前節で取り上げたコロケーション、特に認定できた「BにAをつける」の含まれる実例を中心に示すことにする。

5.4.1 「つける」のプロトタイプ

3.1.4 でまとめたように、多義語のプロトタイプ義は語の諸意味からなるカテゴリーの中での典型的なメンバーである。多義語のプロトタイプは、多義語の意味カテゴリーの拡張の出発点として位置付けられる語義である。多義語は、プロトタイプ義を軸に意味が拡張していく。多義語のプロトタイプ的な意味の認定は、多義語研究の中心課題の1つであり、多義ネットワークを構築するにも欠かせないことである。

動作動詞のプロトタイプは具体的な(観察できる)動作を表わす(田中 1990: 101)。よって、ここではまず「つける」の描いている物理的な行為から考察を行う。同じ物理的な

行為であっても、すべては「つける」のプロトタイプ的な意味とは言えない。「つける」の表わす物理的な行為の中、もっとも「具体的」、「観察可能」、「基本的」、「典型的」といった性質の備えた意味はどれなのか、実例を検討しつつ記述する。

動詞の格支配（つまり動詞述語の文型）とその動詞が表わす意味との関係を記述することは、語義記述の前提として必要なことである（森田 1994: 51）。前節における「つける」コロケーションの検討を通して、「(人が) ものに他のものをつける」、つまり「B に A をつける」という定型文の存在が認められた。それゆえ、「つける」のプロトタイプを検討する際には、「つける」の用例⁶¹を「B に A をつける」の形に絞って行う。

前節のコロケーション調査から分かったように、ヲ格共起語もニ格共起語も具体名詞の場合は、「つける」も物理的な行為を表わすので、プロトタイプ義の出現頻度も高い方であると想定し、表 5-3 と表 5-5 にまとめたコロケーションを合わせて実例を抽出する。また、表 5-3 の抽象名詞をヲ格共起語として組み合わせた「A をつける」における「つける」には、多くの場合には「付加」という意味が含意されている。つまり、「つける」の派生義の多くには「付加」の意味が含まれることである。「付加」の出発点が具体物 A と B の物理的な「付着」のように考えられる。仮に「付着」を「つける」のプロトタイプ義にして、次から実例を挙げつつ、検討を行う。

まず、(11) の 4 例を考察する。この 4 例の「B に A をつける」において、動作主は人、A と B はいずれも具体物、「つける」は物理的な行為であり、それに、観察できる操作でもある。

- (11) a. 礼装用のワイシャツを着て、胸のひだ飾りにはブローチをつけ、ひげはばかていねいにそっていました。

赤木かん子（編）『自立』、2002

- b. ケベックで買ったままの紙袋ではあまりだと思ったので、わざわざ専門店へ行き、上等の和紙を買い求めた。リボンをかけると大げさなので、薄い緑色のシールをつけた。

林真理子 『最終便に間に合えば』、1985

- c. 野鳥を専門に写している人は、一眼レフカメラに超望遠レンズを付けていますが、A F カメラでも野鳥の種類によっては十分に写すことができます。

森村進 『女性のためのオートカメラ自由自在』、1989

- d. 裏打紙の表に糊をつけ、掛竿を使用して裏打紙を持ち上げて、糊づけ面を作品の裏面に貼り合わせる。

荒川達 『私にもできる裏打と裁断』、1992

(11a) では、人がブローチをひだ飾りに近づかせ、ワイシャツの付属品として付着させる。その結果、ブローチがシャツ（の表面）に付いた。「つける」行為のプロセスをさらに具現化すれば、ブローチを手を持ち、ワイシャツの胸の方に移動させ、そして、手で留め具の針（ブローチピン）を持って布に刺す一連の行為である。また、(11b) の「紙にシールをつ

ける」は、人がシールを手にとって、紙に近づかせて、紙に貼るという行為のプロセスを描く。「つけた」結果、シールが紙の表面にくっついて、紙と一体となった。(11a)のブローチと同様、シールは付属品として、「つける」ことで自身より大きな背景物に付着して、それと一体化できた。

(11)a-b の「つけた」に至るまで、実際には多くの操作が必要であることが人の身体経験から分かる。行為そのものに違いがあるものの、その結果には共通性が見られる。(11)a-b の「つける」はいずれも動作主が A を物理的に移動し、背景物となる B に密着させ、付着させる行為である。「つける」は動作そのものを詳しく描く動詞ではない。もしくは、行為そのものより、操作の結果をプロファイルする。しかも、「つけた」結果を一定の時間内に維持している。

また、(11)a-b の「B に A をつける」事象においては、A と B は主従の関係にあり、背景物の B の多くは平らかな表面を持っている。たとえ B は表面を持っていなくても、A より大きく、A との接触と付着が実現されうる接触面を持っているのである。また、A に力を加え、A を B に近づけ、付着させる行為にはきっと何らかの理由がある。それに、付着させるために行う行為の実態も A と B の性質によって異なる。同様の事例には「服に名札をつける」、「シャツにボタンをつける」なども挙げられる。

(11)a-b の「つける」行為のプロセスを図 5-1 のように図式化する。(11)a-b の「つける」にはいずれも A を B に近づかせて接触させる行為があり、ここではその行為を第一ステップという。また、接触から付着に至るまでの一連の行為は第二のステップにする。さらに、B に付着したという結果を第三のステップにする。

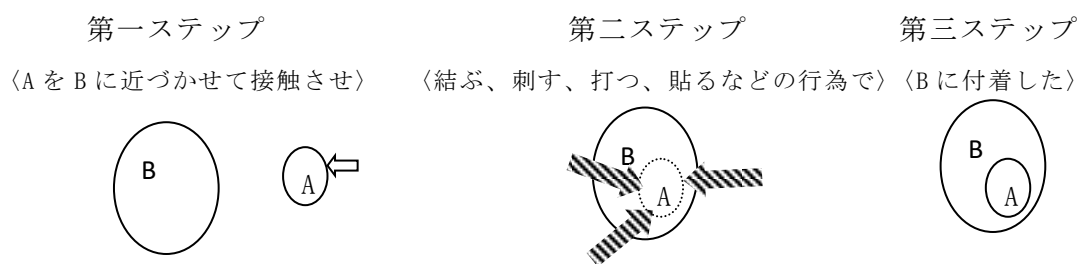


図 5-1 「付着」の「つける」の図式

図 5-1 で示しているように、「つける」は細密度が低い行為である。(11)a-b には第一のステップと第三のステップがあるものの、第二ステップの行為は決まったものではなく、「つける」行為全体の中で潜在化している。第二ステップに「つける」を特徴づける意味特徴がある。その特徴には、行為の方向、使用する道具などが挙げられる。つまり、付着という結果を果たすための「つける」過程が異なる。こういった事象の中で、ヲ格共起語、そしてニ格共起語によって、「つける」過程の違いが生じる。

(11c) では、一眼レフカメラと超望遠レンズと一体化することを「つける」で表わし、「つける」行為でそれらの接合を実現させた。「A を B に近づかせ、何からの操作で、A を

Bに付着させる」までの行為のプロセスは(11)a-b とは同様であるものの、付着させてから接合させる操作も加わる。つまり、それはAをBに接触させ、Bに付着させるというより、Bと接合させる行為である。「二本のコードをはんだでつける」、「折れた骨をもと通りにつける」(『大辞林』)も同様の事例である。結果からいうと、付着ではなく、AとBとの接合である。

(11)a-b との相違点については、まず、(11)a-b はAが一方的にBに近づき、触れるようにする行為であるのに対し、(11c)の「つける」は、どちらかの一方が背景で、もう一方が移動物のような関係にはない。また、(11c)におけるAとBは相互に必要とされ、どちらかの一方が他方の付属品ではない。AとBが対等の関係にある。(11c)の接合の「つける」は図5-2のようである。

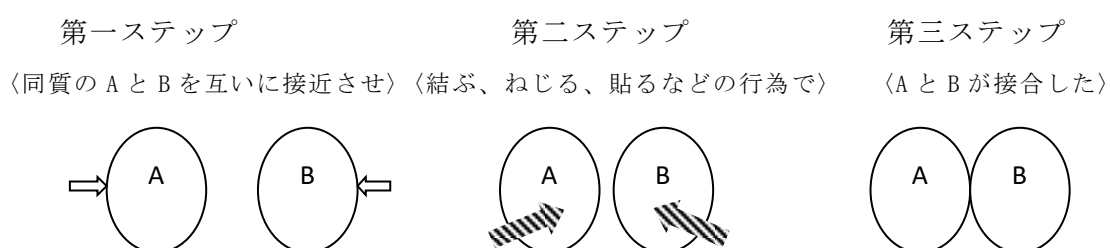


図5-2 「接合」の「つける」の図式

「つける」行為は、いつまでも第三ステップの「付着」ととどまるとは限らない。(11d)の「つける」は「Aの糊がBの裏打紙の表への付着にとどまらず、Bに接触してからその中に浸透する」ことを描く。「傷に軟膏をつける」と「手首に香水をつける」がこのような実例である。「付着」と「接合」の場合、AとBはいずれも具体物であるのに対し、「浸透」のAは液体、粉状、ゼリー状の物が多く、物の表面に付着して内部に浸透できる物である。洗剤、香水、シャンプー、塗り薬、接着剤などがこのような物である。

このようなAをそれとまったく性質の異なるBに付着させ、浸透させた結果、Aの形が崩れ、Bの表面に存在せず(跡が残る場合もある)、Bの中に浸透してしまう。また、「付着」と「接合」と異なり、いったんつけたら、AをBから取り外すこともできなくなる。前節のコロケーション調査から、(11d)のような「つける」の用法もかなり出現頻度の高い物理的な行為であると分かった。図5-3は浸透の「つける」を図式化したものである。

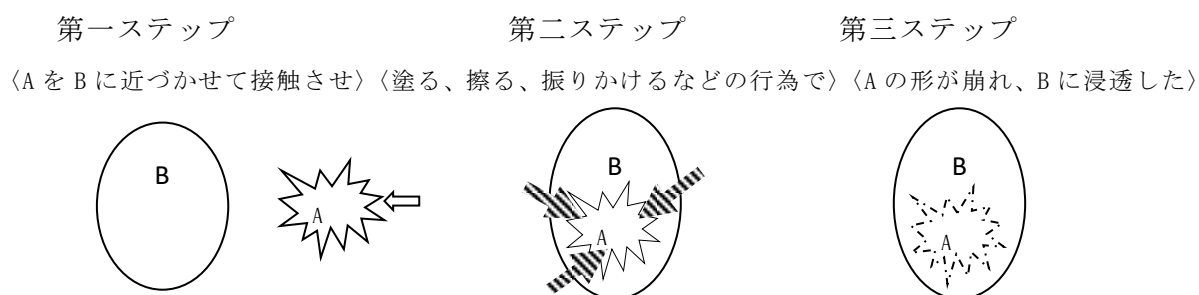


図5-3 「浸透」の「つける」の図式

ここまで述べた (11) における「つける」行為を表 5-6 にまとめる。

表 5-6 (11)の「つける」の用法のまとめ

実例	動作主	A の性質、特徴	B の性質、特徴	行為の目的	行為そのもの (プロセス)	行為の 結果
(11) a-b	人	具体物 移動物となり、 比較的小さく、 B の付属品とな れる。	具体物 本体となり、A よ り大きく、多くは 平らかな表面を 持っている。	A を B に付着 さ せ る こ と。	A を B に近づ かせ、何らか の操作で、A を B に付着さ せる。	付着 (2 つ のものが 触れたま ま、離れな い)
(11c)	人	具体物 A と B とは同質のようなもの。		A と B が 1 つ のまとまり となる。	何らかの操作 で、A と B が つながるよう にする。	接合 (A と B が一体 化する)
(11d)	人	移動物となる。 B とは異質な物 である。液状や 粉状などの浸 透できるもの。	背景となり、A よ り大きく、平かな 表面を持っている。 浸透されう るもの。	A を B に浸透 させる。	A を B に塗っ たり、かけたり する。	浸透 (A の 形が崩れ、 B に浸透 してしまう)

まとめると、(11)の「つける」は対象物 A を動かし、背景となる B に接触させ、そして付着・接合させ、または浸透させるなどのプロセスを描いている。行為の結果、A が B に付き、A と B がひとつになった。これらはすべて具現化することができ、観察が可能な動作である。(11)の「つける」用法のうち、行為の出発点となるのが「接触」である。接触してからでないと、付着もできなく、結合して一体化することもできない。さらに浸透したり、何か生み出したりすることもできない。こういった具体的な行為から共通に抽出された「接触」はスキーマとしての存在である。

(11)に対する分析から、(11) a-b のような「付着」がもっとも基本的であり、「接合」も「浸透」も A が B に付着してからの結果であり、「付着」の延長線に位置すると言える。したがって、「付着」が「つける」のプロトタイプ義だと認定できる。そして、特徴として、移動物 A および接触の目標となる B の存在、接触といった行為、行為を行った結果 (A と B が離れない状態) の 3 つの要素が挙げられる。このように、「つける」のプロトタイプを「人が具体物 A を背景物 B に接触させ、何らかの操作で B の一部になったかのように、離れなく付着させる」という意味と認定する。「つける」の他の意味がこのプロトタイプを中心に多義ネットワークを成している。

以上をもって、実例とともに「つける」のプロトタイプとスキーマを検討してきた。(11)から抽出した「接触」を「つける」のスキーマとし、典型度の高い「付着」をプロトタイプとする。また、「接合」と「浸透」は「つける」のプロトタイプ義の「付着」から少し離れ、「付着」から派生した意味のように考える。図 5-4 はスキーマの「接触」とプロトタイプの「付着」、そして「接合」、「浸透」との関係図である。

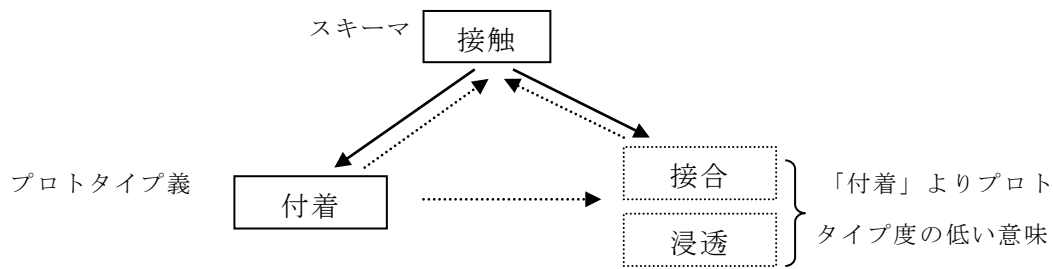


図 5-4 「付着」「接合」「浸透」の「つける」の関係図

次に、学習者の立場から「つける」のプロトタイプ義習得の難点を述べる。学習者にとって、「付着」行為における第二ステップが習得の難点である。母語話者なら生活経験が重なるにつれて、第二のステップを徐々に身につけていく。しかし、多くの場合、学習者は身体経験を通して言葉を学習するのではない。前章の学習者の調査から分かったように、学習者にとって「つける」の「付着」という特性を知るだけで、「つける」をうまく理解したり産出したりすることはできない。というのは、付着という結果が実現できるまでのプロセスは学習者が体験していないし、想像もできないので、容易に習得できないからである。

学習者のための語義記述として、これまでの記述では潜在化していたその第二のステップのあり方こそ究明しなければならない。(11)a-b における「つける」の第二のステップをまとめてみると、付属品 A を本体の B に付着させるための「貼る、結ぶ・刺す・打つ」などの操作である。学習者のための記述なら、「つけた」となるまでの第二ステップをできるだけ学習者に再現しなければならないのである。

5.4.2 「つける」の多義派生

5.4.1 では、「つける」のプロトタイプ義を「具体物 A を背景物 B に接触させ、何らかの操作で B の一部になったかのように、離れなく付着させる」という意味に認定し、「付着」と名付けた。「付着」は「つける」の意味ネットワーク拡張・発展の出発点である。また、「つける」の意味には 2 つの物が接触するという概念を有すると認定でき、「接触」が「つける」のスキーマとしての存在である。「つける」の異なる意味の中には、プロトタイプの意味との直接な関係付けが見出せる意味と、そうでない意味がある。直接な関係付けを見出すことの難しい意味は、何らかの別の意味を間に介すればプロトタイプとの関係付けを行っていくことが可能であると想定し、「つける」の多義の記述を行う。

そこで、ここでは、(4) の多義語を記述する方針に従い、学習者のための「つける」の多義を記述し、「つける」の多義ネットワークを構築する。具体的には、メタファー、メトニミーを中心に、「つける」の意味拡張を検討し、語義間の関連性を示したうえで、「つける」に対する統一的な説明のできるネットワーク図を構築する。

では、5.4.1の(11)における「つける」の用法を「つける1」と規定し、このプロトタイプの「つける1」から拡張した「つける」の多義ネットワークを図5-5のように図式化し、それらの語義関係を示す。なお、多義派生の種類を明記するために、メタファーを「→」、メトニミーを「→」で示す。また、メタファーとメトニミーのどちらにも属していない拡張の種類を「—」で示す。

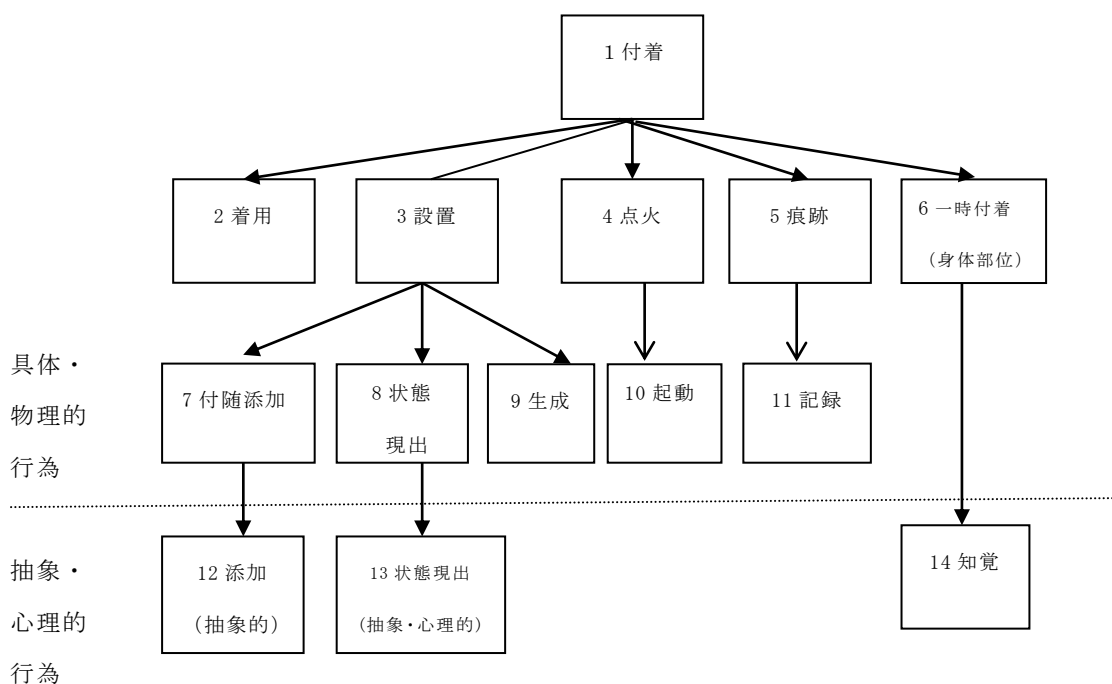


図 5-5 「付着」と「接触スキーマ」に基づく拡張義ネットワーク

続いて、図5-5に沿って、「つける2」から「つける14」までの意味を1つずつ記述する。

つける2 着用（「着ける」、「付ける」⁶²⁾

「つける」の着用・装着という用法を「つける2」とする。人が身の回りの品や装身具のAを、背景となる体のBに移動し、着る・履く・嵌める・帯びるなどの操作をして、その結果、身の回りの品を体に接した状態にする行為である。これは、あたかも「紙にシールをつける」のシールという付属品を紙に近づかせ、貼った結果、シールが紙にくっついた行為のようである。両者の共通点は、付属品のAを移して、Bに付着させるという行為にある。したがって、「つける2」は物の付着から、装身具などの着用へメタファー的に拡張された意味である。

5.3.2のコーパス調査から分かったように、多くの身の回りの品や装身具を表わす名詞がヲ格共起語として「つける」と共起できる。この場合のニ格共起語は体または身体部位である。(12)と(13)がその実例である。

- (12) a. 漂白剤が体に直接かからないよう注意し、傷んでもいい長袖ワイシャツとシャワーキャップ、ゴム手袋をつけ、十分な換気をして掃除しましょう。

『最強のお掃除テキスト』、2000

- b. 民俗芸能のなかには仮面を使う芸能がたくさんあって、それも一種の顔を隠すことには違いないが、仮面をつけること必ずしも顔を隠すことではない。

鷲田清一ほか 『顕わすボディ/隠すボディ』、1993

- c. ジャニス・ジョプリン風に、ブルーとピンクの羽根を髪に付け、たくさんの指輪とブレスレットを嵌めた王女は、青年と池のほとりに敷いた日本製の花莫座の上に坐っている。

吉行理恵 『小さな貴婦人』、1981

(12) は、人が対象物 A の「ゴム手袋」、「仮面」、「羽根」を手にとって、自分の体の一部の B に移動して接触させ、それぞれ「はめる」、「かぶる」、「挿す」行為をして、その結果、A を身につけたという行為を描く。「つけた」という結果を実現させるために、「はめる」、「かぶる」、「挿す」行為が必要であることは、人がそういった行為を経験すれば、着用できたまでのプロセスは認知できる。「つける」を用いて「着用」行為を表わすのは、「着る」「履く」「かぶる」よりの行為の細密度が低く、「着用」という事象の結果だけに焦点を当てるからである。

また、(12) a-b のように、二格共起語が潜在化している実例が多々ある。というのは、二格名詞が出現しなくても、背景物である身体部位はヲ格名詞によって限定されるからである。(12) の 3 例の動作主はいずれも人で、B が自分の体である。というのは、「着用」という行為は人自分であることができるからである。「子供にマスクをつけさせる」は成り立つが、多くの場合、「子供にマスクをつける」は不自然な表現である。しかし、二格名詞が動物あるいはまだ自分で服を着たりすることができない赤ちゃんの場合は成立する。(13) はこのような実例である。

- (13) a. 犬に首輪かハーネスと、リードを着けて散歩させます。(作例)

- b. 赤ちゃんにおむつをつける (作例)

以上で、実例によって、「付着」の「つける」から「着用」の「つける」へメタファー的な拡張が生じたことを考察した。「着用」と「付着」の行為間の共通点は「つける」ことで装身具が付属品のように体に付着したという結果である。学習者の立場から言うと、「つける」のプロトタイプ義を明確に把握できれば、「着用」の意味も分かると考える。また、コロケーション調査から見られたように、慣用句「身に着ける」の使用頻度数がかなり高い。したがって、学習者に「つける 2」を示すとき、「身につける」を提示すべきである。

つける 3 設置（「付ける」）

「つける 1」の派生義として「つける 3」の「設置」を設ける。「設置」とは、B に A を取り付けて、A をそこで機能させることである。「付着」が実現したら、その次に「設置」が生じるものだという推論を下すことがあるように、国広（1997）の「推論的派生義」を用いて、「設置」と「付着」の意味関係を示すことができる。

「推論的派生義」について 3.1.1 では少し触れたが、ここでは国広の例を挙げつつ、説明を加える。「ある動作・出来事を指す表現に関して、一般の人々は、もしその動作・出来事が実現したら、たいてい次のあることが生じるものだという推論を下すことがある」、これは常識による推論であり、この推論によって生じる意味を「推論的派生義」と呼ぶ（p. 233）。国広（1997）は、その典型例として、「筆を執る」を挙げた。筆を手にとれば、文章を書くのが一般的であるので、文章を書くという意味に派生したのである（p. 224）。「つける」の場合、物に付属品を取り付けたら、単なる付着ではなくて、付属品がそこで機能することが当然の推論と言えよう。（14）はこのような実例である。

- （14） a. 携帯電話にはラッキーカラーのストラップを付けておくとよい情報やうれしい報告がありそう。

小林祥晃『誕生月でわかる Dr. コパの風水大開運』、2005

- b. バッグに防犯ベルを付け、自転車のカゴには防犯ネットをつけましょう。

広報わたり、2008、宮城県

（14a）のストラップと携帯がつながるようになり、離れない状態にするには、一連の行為が暗示されている。携帯のストラップ穴にストラップの紐を通して、それから引っ張る。最後は結ばなければならない。それをすべて済ませればこそ「つけた」と言える。しかし、「通す」、「引っ張る」、「結ぶ」動作は細密に描かれていない。「つける」はこれらの動作を総括的に表わす表現である。「付着」とは異なり、ストラップは携帯の表面にくっついていなく、「つけた」ことで機能することが暗示されている。（14b）では、2ヶ所の「つける」はいずれも「付加的に設置する」という意味で使用されている。主となる背景物のバッグと自転車のカゴに、それぞれ付属品の防犯ベルと防犯ネットを付属させ、そして、一体化することを描いている。そして、単なる一体化するのは行為の目的ではなく、B をつけることで A の一部として機能させるのが目的である。

「つける 3」の典型的なコロケーションには「部屋にエアコンをつける」、「廊下に手すりをつける」、「ドアにカギをつける」、「店に防犯カメラをつける」、「車にカーナビをつける」、「冷蔵庫に吸盤をつける」、「窓にカーテンをつける」、「天井に滑車をつける」、「釣り針に餌をつける」などがある。これらの例における「つける」行為はいずれも B に「付着」した結果を問わずに、A を本体に添え、B と一体となって、A の機能を果たすのが目的である。また、「つける 1」とは異なり、「つける 3」の場合、二格名詞は必ずしも広い表面を

持つ物とは限らない。「つける 1」は物の表面に物理的に付着するのを重点にしている行為に対し、「つける 3」は新しいものを設置することをとらえている。

次から「設置」の派生義を「付随・添加」、「生成」、「状態出現」の 3 つに分けて記述を行う。

つける 7 (具体的な) 付随・添加 (「付ける」)

「つける 3」の拡張義には「つける 7」の物理的な「付随・添加」という意味がある。この意味においては、「B に A をつける」行為自体は物理的であるが、表わす事象が徐々に抽象化していく傾向があると見られる。「付随・添加」は人が新しい物事を付属品のように、主なる物事に添えて一緒にする行為は「部屋にエアコンをつける」の新しい付属品をある場所に取り付けて機能させる行為に類似している。物事に新しく添加することを、物・場所に新しい部品を取り付けることにたとえている。「つける 7」は「つける 3」に基づき、メタファー的に拡張した意味である。(15) はその実例である。

(15) 韓国の化粧品店は、おまけをいっぱいつけてくれるのが楽しい。

『いただき！韓流ビューティー』、2005

「おまけをつける」とは、商品に付属商品を添えることである。お客さんに商品と一緒に渡すが、別に 2 つの物をくっつける必要がない。また、「プレゼントにカードをつける」、「論文に表紙をつける」もこのような実例である。こういった具体物の添加から、抽象物の添加になるのは (16) である。

(16) a. これは固定式で、年刊なので上告審の判決より以前の年の巻を見ると、本文は判決の要旨を法条順に並べ、巻末に件名索引をつけているので、仮に目的とする原審の判決がのっていれば、これを探すことができるはずである。

板寺一太郎『外国法文献の調べ方』、2002

b. 図表に番号をつける。(作例)

c. 右側の全頁には八十歳の緑色の老人の大きな手をあげて、ヘンリー・ミラーは二人の自分自身の写真に言葉をつける—「とにかく、ともにこれから何かがはじまろうというのだ」。

田村隆一『詩人のノート』、1986

(16) における「つける」のヲ格共起語の「件名索引」、「タイトルと番号」、「言葉」が抽象表現ではあるが、(16) における「B に A をつける」行為の事象は物理的であるので、(15) のような実例と一緒にして、「付随・添加」に実例として扱われる。(16a) は主たる

物の「巻」に「件名索引」を新しく添えることで、検索などが便利になるように機能を果たす。(16b)の「番号をつける」も(16a)と同様、前にはなかったタイトルと番号を入れることで、図表がもっと分かりやすくなる。(16c)の「写真に言葉をつける」は主体の写真に言葉を書き込んで、書き手の気持ちが伝わるようになる。同様のコロケーション例には、「序文をつける」、「曲に詞をつける」、「振り仮名をつける」、「点数をつける」などが挙げられる。

5.3.2のコロケーション調査でまとめた「つける」のヲ格共起語(表5.3を参照)を見ると、この意味用法に属するヲ格名詞には数字関連の語(「番号」、「数字」など)、文字関連の語(「索引」、「仮名」、「注」、「言葉」など)が多い。(15)と(16)のヲ格共起語の抽象度に少し差があるが、「つける」ことでニ格共起語に物を新しく添加して作用させるという結果は「つける3」と共通しており、「おまけ・カード、数字や文字の添加」を「付属品の設置」にたとえて言うので、メタファーに基づいた意味拡張であると認定できた。

つける 12 (抽象的な) 添加 (「付ける」)

「つける 12」は「つける 7」からのメタファー的な拡張である。抽象的な添加を具体的な添加にたとえている。5.3.2のコロケーション調査によると、「つける 12」のヲ格共起語には3つの種類の語があると分かった。まず、(17)を挙げる。

- (17) a. 人の命は地球より重いつて言っていながら、生命保険があつて、みんな命に値段をつけているんだから。こんな怪しい世の中はないな。

ビートたけし『やっぱり私は嫌われる』、1991

- b. 本郷丸山の本妙寺で供養のために焼いた振り袖が空に舞い上がって、火事になったといわれる大火で、数万の死者が出た。江戸の人たちの面白さは、火事にもアダ名をつけてしまうことにも表れている。

轡田隆史『観光コースでない東京』、2004

(17a)の「命に値段をつける」とは、人の命にその価値を数字で添える抽象的な行為である。同類のコロケーションとして、「成績をつける」、「利息をつける」、「価格をつける」などが挙げられ、数値に関わる語がヲ格共起語として用いられる点は共通している。(17b)は命名の用法で、物に新しいものを添えるように、そもそも名のない人・事柄に新しい名称を添えることを意味する。表5-3で示しているように、この場合のヲ格共起語には、「名前/名/題/あだ名/タイトル/見出し/表題/病名/敬称/名称」などがある。数値であれ、名称であれ、「つける」ことで、ヲ格名詞とニ格名詞の間に付随添加という抽象的な関係が実現される。

また、語義の抽象度が高くなるにつれて、コロケーションが慣用句になる傾向も見られる。コロケーションの中には慣用表現が多いため、ヲ格共起語とのつながりが緊密になる

ほど、二格共起語が場合によっては、必要とされなくなることもある。このような事例には「条件を付ける」、「期限をつける」、「制限をつける」などがある。

- (18) a. 第二志望にも入れなくなったという者もいたと聞いた。こうしたことが起こらないように、厳しい条件を付けるところよりも、少しランクは低くても「是非とも来てほしい」というような大学を第一志望にすることもある。

山本麻子『ことばを鍛えるイギリスの学校』、2003

- b. 外国企業に対しては、会費が高かったり特典に何らかの制限をつけている大学もあるが、締め出すことはしていない。

宮田由紀夫『アメリカの産学連携』、2002

(18a) の「条件を付ける」とは、本来にあったルールや規則などに特定の条件や制限を設けることである。(18b) の「制限をつける」は「条件を付ける」とは類似している。物理的な行為の「設置」であれ、抽象行為の「添加」であれ、新しいものとしての A を B に添え、B と一体化するプロセスが存在する。A と B とは付属・付随の関係にある。

さらに、人がある物事に対する評価、否定的な意見を与えることも「つける 12」の用法に属する。A に用いられる名詞の範囲がさらに絞られ、意見・文句など人間の言葉に関わる語がヲ格共起語となる。(19) のように、理由を付き加える行為であれ、文句を言う行為であれ、添加・付加という点が (17)、(18) とは同様である。表 5-3 のとおり、この用法では、A となる名詞として表現・評価グループの「理由/話/言葉/理屈/説明/評価/コメント/都合」、また非難・苦情を表わす「文句/クリーム/けち/言いがかり/難癖/因縁」などの語が挙げられる。

- (19) a. ディアとしては、本堂を裏切りたくないから、なんとか理由をつけてスカルノを拒みたい。しかしスカルノの来訪の度に拒み続ければ、スカルノは当然疑惑を抱くだろう。

深田祐介『神鷲商人』、2001

- b. これがプロの出す見積りの大ざっぱな内訳だ。いろいろ文句をつけたけれども、このリフォーム店の場合はまだ良心的といえる。

阿部邑紀『値段の秘密』、2002

(19) の「理由をつける」も「文句をつける」も慣用表現と言える。前にも触れたように、ヲ格と共起しても、二格と共起しても、コロケーション全体の慣用度が高くなるほど、他方の共起語に対する依存度低くなる。(19) のように、二格が現れなくても、「つける」の表わす意味が明確である。

以上のように、「つける 1」から「つける 3」へ、また「つける 3」から「つける 7」、「つ

ける 12」に至るまでの拡張の過程を記述してきた。意味拡張の順に沿って、コロケーションを挙げると、「紙にシールをつける」から、「部屋にエアコンをつける」へ、さらに「原稿に表紙をつける」、「図に番号をつける」、「子供に名前をつける」、「条件をつける」、「評価をつける」、「難癖をつける」へ「つける」へ拡張している。ヲ格名詞の抽象度が高くなるにつれ、コロケーションの意味の抽象度もだんだん高くなる。物理的な付属品の添加であれ、抽象的な数値、名称、評価の添加であれ、「(B に) A をつける」事象では、新しいもの A を B に添えた結果、A が B の一部になるという「付着」がそれらの行為の出発点となっている。「つける 12」が事象間の類似性に基づいたメタファー的な拡張である。

つける 8 (具体的な) 現出 (「付ける」)

「つける 3」の「設置」の B に A を取り付けて、その結果、A がそこで機能して B を新しい状態にすることと、「つける 8」の具体的な「現出」のある対象物に物理的に働きかけ、ある(新しい)状態がそこに現れることと比較し、結果として B には新しい状態が出現することは同様である。それゆえ、「つける 8」はメタファーによって「つける 3」から派生された意味である。B に A という新たな物(状態)を現出させることが、あたかも B に新しい付属品を設置するようだというメタファーになっている。

- (20) a. このため、かつては集材作業の大勢を占めた架線集材は漸減し、緩傾斜地ではトラクター集材が増加する傾向にあります。しかし、車両が林地を走り回ったり、作業道をつけたりすることで、林地を荒らしてしまうこともあります。

今富裕樹・朝日一司 『森林の一〇〇不思議続』、1992

- b. 日本の住宅では出窓をつけたりするが、当地ではそもそも壁の厚さが三〇センチにもなるので、外側に窓を取りつければ、内側はおのずと出窓風の空間になる。

宮下正次 『炭はいのちも救う』、2005

(20a)の「作業道をつける」は道を整えたりして、作業するための道を作ることである。「道をつける」と「道を作る」の違いから、「つける」の新しい状態や変化をもたらすという意味が分かる。「道を作る」はそもそも道のないところで工事をして道があるようにすることである。一方、「道をつける」とは、明確な目的を持っていて、道を整えたりして新たな状態にすることである。それで、「つける」ことで、その道が新たな機能を果たす。「道を作る」と「道をつける」は異なる行為の過程をプロファイルする。

さらに、物理的な「道をつける」の意味からメタファー的に派生し、「ある方面に進む糸口をつくる」ことを意味し、さらに新しい局面を開く行為が描けるようになる。「道をつける」の基本義であれ、メタファーによる拡張義であれ、「つける」ことで B に新しい状態の変化をもたらすことは共通している。

- (20b)の「出窓をつける」が建物の壁に物理的に働きかけ、そこに出窓が新しく出現させ

ることである。そして、出窓がそこで機能する。(20a)の「作業道をつける」と同様、ヲ格共起語は結果目的語である。「設置」の「部屋にエアコンをつける」とは違い、出窓と作業道はエアコンのようなどこから持ってきた物ではない。道や壁に働きかけて作業道と出窓を作り出すのが、「つける 8」の「現出」の意味である。

このように、「現出」の背景物に働きかけて、背景物そのものを新しくし、新しい機能を持たせることを、「設置」の付属品を背景物に付着させ、それと一体となり、付属品がそこで機能することになどとえている。「つける」ことで、対象物には新状態の現出、または新たな変化が生じる。したがって、「現出」は「設置」からのメタファーによる拡張である。

つける 13 (抽象的・心理的な) 現出 (「付ける」、「つける」)

「つける 8」からさらにメタファー的に拡張し、抽象的な状態の現出を表わす「つける 13」がある。「道をつける」という道の新状態を現出させることから、人間あるいは事柄の新状態を現出させることへ拡張する。共起語の特徴から見て、「つける 13」は2種類の現出を意味できる。まず、人間に何かいい状態を新たに加えるという意味する。2つ目は、事柄の整えた状態や結論・予測の下された状態にするという意味である。

- (21) a. そんなとき、生姜紅茶（黒砂糖またはハチミツ入り）で、体を温め、糖분을補い、心身をシャキッとさせる生姜の作用で元気をつけると、一日の好スタートが切れる。

石原結實『「前兆」に気づけば病気は自分で治せる』、2005

- b. さらに、専門課程の実力を獲得しなければならない。そうした過程から、夢を持ち、実力をつけ、建設的な批判力を秘めた人材、「現実的に歩む理想主義者」が育つのであろう。

有馬朗人ほか（編）『国立大学ルネサンス』、1993

(21) の「元気をつける」のように、この用法においては、「つける」は人の習慣、能力、状態などを表わす名詞と共起する。5.3.2 のコロケーション調査により、「技術/知識/力/元気/自信/体力/学力/態度/教養」などがヲ格共起語として用いられると分かった。動作主もニ格共起語も人間である。それに、人が自分に元気をつけることと、他人に元気をつけることを両方表わすことができる。

また、(22) の「つける」は、事柄の新状態の現出を描く意味である。この場合、人の認識、思考や感情など心理領域の語がヲ格共起語として用いられる。

- (22) a. その後同位体比関係の仕事に一段落をつけた一九四〇年代の終りから、原子量測定分野に展開し、すぐれた業績を残した。

吉川秀夫『原子力/時代を先駆けた男達』、1989

- b. 寛柔とは、いかにも儒者らしく中国古典『中庸』から引いた君主のあり方を指すが、これが弱肉強食の時代に通用するかどうか。だが、戦争を回避し、外交で決着をつけ、和親条約の締結に至ったことは確かである。

加藤祐三『幕末外交と開国』、2004

(22a) の「一段落をつける」とは、物事がひとまず片付いた状態にすることを描く。また、「決着をつける」は物事の決まりがつき、終わりにする行為である。また、「けじめ/けり/始末/結末/見切り/結着/切れ目/見通し/踏ん切り/話をつける」(表 5-3 を参照) などこの類の表現である。これらの表現には結果・結論に導き、決着の状態にし、望まれていた一種の新状態を出現させるようにするという意味が共通している。

(22) はいずれも前の状態と比べ、何かをつけたことで事柄や人間の心理が新しい状態となることを表わす。それに関連する慣用表現「話をつける」の意味を考える。「話をつける」では、話そのものを添加するのではなくて、「話」が「最後の話」のようにメトニミー的に用いられる。「話をつける」は結論や決着が出されるという新状態の現出を意味する。

さらに、「順位/角度/整理/段取り/道筋をつける」のような物事の整えられた状態または限界の状態を表わす表現、意思を固めて気持ちを新しく整理する「決心をつける」と「思案をつける」、判定を通して、評価を下し、新しい結論を出す「差/大差/格差/段差/区別/けじめ/勝負/強弱/白黒/優劣をつける」、予測することを意味する「見当/目星/目処をつける」などの表現もこの「つける 13」の実例である。「つける 13」の同じ意味を持つコロケーションにおけるヲ格共起語を見れば、各カテゴリーのメンバーはある程度相互に類似し、共通した意味特徴を持っていると見られる。

5.3.3 で述べたように、意味の抽象度が高くなるにつれ、コロケーションが慣用的な表現になる可能性も高くなる。「つける 13」を含めるコロケーションの意味の抽象度もかなり高く、慣用表現と言ってもいいほどのものもある。「決着をつける」、「見当をつける」、「癖をつける」などがこのような表現である。この場合、二格共起語が現れなくても、「つける」の意味も明確に捉えられる。

このように、付属品の設置から具体物の新状態の現出へ、そして、人間・事柄の新状態の現出へ拡張している。「B に A をつける」という事象において、「つける」ことで、B に新たな変化をもたらすことは、どの用法にも共通しているので、メタファーによる意味拡張だと認定できる。

つける 9 (非意図的な) 生成 (「つける」)

「つける 3」の拡張義には、また「つける 9」の「生成」がある。「生成」の「つける」は草木に花や実が生じることと、人が脂肪や肉などを増やすことを描く。この「つける」は人主語の場合と植物主語の場合の 2 つに分けられる。いずれにしても、A をつけることで、新しいものが出現し、B には変化が生じ、新たに変身させることを意味する。この点

は設置の「つける 3」に共通しているので、「つける 3」のメタファー的な拡張だと考える。

(23) は植物主語の実例である。

(23) a. 茎の中央部からのびた花柄に 1 個だけ花をつける。

おくやまひさし写真・解説 『山菜』、1990

b. 梅は葉をつける前に花が咲く。(作例)

c. 百合は春から初夏にかけて花をつける。(作例)

(23) はいずれも意志性を持たない植物の非意図的な「咲く」と「実る」状態を表わす。植物関連の「花/実/花粉/蕾/葉/種」がヲ格共起語をなす。動作主となる植物は意識を持っていない、「花をつける」ことも「葉をつける」ことも植物の自然成長である。このときの「生成」は他動詞「つける」の非意図的な用法である。「つける」の非意図的な用法を記述するには、自動詞「つく」との関連性を避けてはいけない。非意図的な「つける 9」は中国語母語学習者にはなかなか習得のできない用法であることが前章の調査からも明らかになった。その理由として、「つける」は他動詞であるものの、動作ではなくて状態を表わすことは中国語の語彙体系と一致していないことがある。生成の意味における「つける」と「つく」の共通点と相違点は何だろうか。

(24) a. 三月に来たときには、ちょうど黄色い花を一杯つけていた。

岩瀬成子『やわらかい扉』、1996

b. 葉のない枝に、木蓮を大きくしたような真紅の花がついていた。

ユン・チアン、土屋京子（訳）『ワイルド・スワン』、1993

(23) a-b を見れば、「つける」と「つく」は区別がなくて、置換することができる。しかし、(24) a-b のように、アスペクトの「ている」がつくと、少し意味合いの違いが見られる。例えば、「花がついている」と言ったら、ある時点から今現在に至るまで、花が咲いてきている状態が暗示されている。一方、「花をつけている」と言うと、今花が咲いている状態を描く。また、「つく」の主語は花そのものであり、「つける」の主語は草木である。

一方、(25) は人間主語の実例である。

(25) また健康のためには筋肉をつけることが大切だと、そこまでは以前からわかっていましたが、これも「体にきついと感じる運動量をこなさないと筋肉はつかない」というのが常識でした。

春山茂雄『脳内革命』、1996

「筋肉をつける」は「花をつける」と同様、自分から生成したものであるが、まるで外か

ら移動してきたかのように考えている。同類の実例には「肉をつける」や「脂肪をつける」などがある。国広（1985）では、こういった用法を「痕跡的認知」と呼び、その特徴を「客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのようにとらえている所にある」（p. 8）と示されている。また、国広（2006）は、「痕跡的認知」について、「これはものの形や位置関係を、実際はそうでないのに、変化や移動の結果であるかのようにみなすことをいう」（p. 169）と述べている。確かに、「花をつける」と「筋肉をつける」を客観的に見れば、花も筋肉も移動していないが、「つける」を用いることで、あたかも外界から移してきた結果のようにとらえている。

このように、植物が自らに花や実をつけることと、人が自分に脂肪や筋肉をつけることを、人が部屋にエアコンをつけることにたとえていると考えることができる。自分の体から A の生成がまるで A をあるところから B に移動した結果、A が B に出現し、B で機能することのようである。したがって、「つける 9」は物理的な付属品の設置から、花・肉などの生成へメタファーによって拡張した意味である。

つける 4 点火（「点ける」）

「点火」の「つける」も「付着」からのメタファー的な拡張である。「タバコに火をつける」とは、タバコを燃えた状態にするために、タバコに火を移して、燃焼現象を起こす行為である。これはシールを紙に移動させて、そこに付着させる行為と見なされている。つまり、火を移してタバコに付着させることを、シールを移して紙に付着させることにたとえている。「点灯」の「明かりをつける」も同様、光を移動物のように、他のところからランプなどに移して、光るようにする行為である。では、(26) の実例を考察する。

(26) a. いつも蠟燭をポケットに入れてる。蠟燭で三本のマッチをつないで、火をつける。

宮本輝『海辺の扉』1994

b. 怒り狂った画家がマッチで絵に火をつけた。

篠田浩一郎『閉ざされた時空』、1992

c. 槌音は再び高らかに響き渡り、現場はにわかに活気づいた。期限までに間に合うかどうか、男たちの闘争心に火をつけた。

シドニィ・シェルダン、天馬竜行（訳）『星の輝き』、1995

d. 廊下の明かりを点けようと思った。だがスイッチを間違えて、リビングルーム全体の明かりを点けてしまった。

神崎京介『吐息の成熟』、2005

5.3 のコロケーション調査から分かるように、「火をつける」は「気を付ける」に次ぐ出現頻度数の 2 番目の連語である。このときの二格名詞として、「タバコ/蠟燭/葉巻」の 3 語の出現頻度がもっとも高い。また、線香、提灯、アルコール・ランプや暖炉など着火で

きる物もこの「つける」と共起できる。それは(26a)の用法である。また、(26b)は放火の意味に使われる場合であり、家、紙、絵などそもそも燃えないものをすべて燃えるようにする行為である。さらに、(26c)は「火をつける」のメタファー的な用法である。人が刺激を受けて、やりたい頑張りたい気持ちが燃えることを何かに火をつけて、それを燃える状態にすることにたとえている。

一方、(26d)の「明かりをつける」は「点灯」の実例である。「明かり」の基本義は明るい光という意味である。「火をつける」と同様、「光線」をほかのところから移動してきて、ランプなどに付着させた結果、灯が光るようになったと解釈することができる。一見、「点火・点灯」はプロトタイプ義の「付着」から離れているように見える。しかし、「火をつける」が描いている火を移動して燃やす対象に付着させる行為と、「明かりをつける」の光を移動してランプなどに付着させる行為を、具体物 A を B に移動して B に付着させるプロセスと見なすことができる。このように、「火をつける」の点火も「明かりをつける」の点灯も、「つける 1」からのメタファー的な派生だと考えられる。

つける 10 起動（「付ける」）

「つける 10」の「起動」は電気器具の起動を指す。「ストーブに火をつける」用法から、「電気ストーブをつける」へ派生したのと、「明かりをつける」から、「電灯をつける」へ拡張したのはいずれもメトニミーによる。ストーブに火をつけたら、ストーブが機能できる。明かりをつけることは、電灯を起動することに等しい。この場合、電気ストーブと電灯につけたのは「火」と「明かり」ではなく、「電流」である。

(27) a. ちょっと寒くなったから、電気ストーブをつけた。（作例）

b. 彼はそう言うと、壁のスイッチをいじって仕事場の電灯をつけた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、1985

(27) のように、「電気ストーブをつける」と「電灯をつける」における「つける」はいずれも起動する行為である。表 5-3 で示したように、「起動」の「つける」は電気器具類を表わす名詞と広く共起でき、何らかの操作でスイッチを入れて器具を作動させ、活動を開始させることを意味する。また、この場合、「つける」には二格共起語が必要とされない。同じ領域に属する電流と電気器具の近接性が認められるので、メトニミーに基づき、「点火」から「起動」へ拡張していることが解釈できる。

中国語母語話者学習者にとって、この用法は比較的身につけやすい。その理由の 1 つとして、「つける」と中国語の動詞“点”と同様、点火や電気器具の起動が意味できることが挙げられる。そこで、「つける」の「点」という表記を明記すれば、学習者の母語からの正の転移が発生し、容易に習得できるのである。

つける 5 痕跡（「付ける」）

「痕跡」の「つける 5」は力を加えたりすることで、対象物にあとを残す、あるいはあとが残るという意味である。B に作用し、痕跡 A をそこに残す結果が「付着」の「つける 1」と類似性を持っているので、そこからのメタファー的な派生と関係にあると考えられる。つまり、B に力が加えられ、A が B に残ったことを、A を B に移動して、B に付着させたことにたとえている。それに、「つける 5」における A は結果目的語である。

(28) a. この時御顔に傷を付けないように、細心の注意をして下さい。

駒沢聖刀 『やさしい仏さまを彫る』、1993

b. …玄関に入ったら「どうぞ、土足のままでいいですよ」と言われた。確かに通路もロビーも灰や泥の足跡だらけで、その上にオレの新しい泥跡をつけるしかなかった。

泉谷しげる 『とぎすまされた六感』、2001

c. 無理に点滴を引っこ抜いた腕から血が点々と床に跡をつけ、おまけにぶら下がったままのチューブから点滴が漏れだしていた。

ひちわゆか 『ラブ・ミー・テンダー』、2001

(28) から分かるように、ヲ格共起語は B に作用して残したもの、「痕跡」となるのが傷、跡、指紋などを指す名詞である。(28a)の「傷をつける」はこの用法の典型的なコロケーションである。仏を彫るときに、硬い刃物などの道具が必要である。B である仏の顔を彫るという行為を行う際に、不注意のため、傷付けてしまったことは、傷が移動物のように、背景となるものに移して、くっついたように表現されている。つまり、外界の力を受けて、B が傷ついたことは、あたかも傷の A が移動してきたかのように見なされている。

(28a) は意図のある行為であるのに対し、(28b、c)の「跡をつける」はいずれも非意図的な行為である。類似した例には「シャツに染みをつける」などがある。主語は人間であるものの、意識的に跡を残すというわけではない。このように他動詞でありつつ、非意図的な行為が表わせることは「つける 9」に共通している。

また、形作りのために、物理的に「つける」ことで、対象物に作用された痕跡が残る用法も「つける 5」に属する。(29) がこのような実例である。

(29) アイロン仕上げは、熱、水分、圧力を利用してしわを伸ばしたり、折り目や丸みをつけて外観をよくするために行う。

佐々井啓ほか(編) 『新・家政学概論』 2002

(29) の「折り目や丸みをつける」とは、服などにアイロンをかけた結果、服に作用された痕跡が残るという意味である。「折り目」も「丸み」も結果目的語である。(28) の「傷」

と「跡」は上位概念で、どのような傷と跡かは具体的に述べないと分からない。一方、「折り目」や「丸み」はその痕跡を具現化した語である。この行為を実現するには、手または道具でBに一定の力を加えなければならない場合が多い。痕跡が具体的であるほど、用いられる道具も明確になる。類似した例には「肉に焦げ目をつける」、「柱に刻み目をつける」、「肉に切り目をつける」などがある。このように、「つける」は何かの箇所を表わす接尾辞「～目」という名詞と共起するのが可能である。これらの表現はいずれも対象にある操作をされたことで跡がつくことを意味する。また、「ソースにとろみをつける」、「部材にへこみをつける」、「肉をつけて厚みをつける」などのように、「～み」の語との共起も目立つ。「つけられた」ことで、対象の状態が物理的に変化し、新しい様態になる点は「つける 8」の「現出」にも近いのである。

(30) a. 正しい答えに丸をつける。(作例)

b. 「落としたのはここだ」と男は舟べりに印をつけた。やがて舟が止まると、男は印のところから河に飛び込んで剣を探した。

中嶋秀隆、ケン・ジョーカー(訳)『ピガサス 101』2005

(30a)の「丸をつける」はペンで紙に丸を残すように力を入れてかくという行為である。

(30b)の「舟べりに印をつける」は刃物などで舟べりに印を残すように、力を加えて刻むという行為である。類似した例には、「署名をつける」、「マークをつける」、「記号をつける」などがある。これらのヲ格共起語はいずれもつけられたあとで残った物を表す名詞である。

以上で(28)–(30)に対する検討から分かるように、「痕跡」の「つける 5」は背景物Bに力を入れて作用し、場合によって道具も必要とされ、「つけた」結果、Bに痕跡を残す(が残る)。傷や印といった目に見える物を背景物に残すことは、あたかも人が物を持ってきて、背景物に付属させた結果、付属品が背景物の一部になったかようである。こういった類似性から、「痕跡」は「付着」からのメタファー的な拡張であると認められる。

つける 11 記録(「付ける」)

「つける 11」の「記録」とは、書く行為を通して、文字である具体的な内容を紙などに残す行為である。同じ領域に属する書き記した内容と、その内容が残された場所の近接性に基づき、「痕跡」から「記録」へメトニミ的に拡張しているのである。「日記をつける」、「ノートをつける」、「家計簿をつける」などはこの用法の典型的なコロケーションである。

(31) a. 私は日本語で日記をつけることにしています。(作例)

b. 三十分ほどソファに背を預け、残りの三十分は電灯をつけ、机の前に腰をおろして家計簿をつけた。

阿刀田高『花あらし』、2003

- c. とにかく、見たこと聞いたことについて簡単なノートをつけ、家で暇な時間を見つけては、記憶をたどりたどりノートを整理していく毎日が続いた。

加藤剛『時間の旅、空間の旅』1996

(31a) の「日記をつける」とは、日記に毎日あったことを継続して書き記し、文字を記録として残す行為である。(31b) の「家計簿をつける」は家計簿に日々の収支を記録して月々で合計したら、収支の状況や推移などが分かるようにするための行為である。(31c) は「ノートをつける」の実例である。自分の見たことや聞いたことをノートに書くのもそれらを記憶に残すためである。また、授業で「ノートをつける」ことは、ノートに学んだ知識をメモし、それを忘れないように、または後日復習できるように授業の内容をノートに残す行為である。この3つの行為には、いずれも後で見られるように記録を残すという意味合いが含まれる。このように、「痕跡を残す」ことから、記録として残すことへと拡張しているのである。

つまり、「跡をつける」から「日記をつける」への拡張は、空間的な近接性によって、記録の残るところである「日記」、「家計簿」、「ノート」などを用いて、記録の内容を表わすことである。このように、「痕跡」の「つける」から「記録」の「つける」への拡張の種類はメトニミーであると認定できる。

つける 6 一時付着（「付ける」）

「つける 6」の「一時付着」は、物理的な行為であり、身体部位がある表面にぴったりと触れるようにする行為を描く。「一時付着」と「付着」（「つける 1」）とは上下関係にある。人が自分の身体部位を移動物のように動かし、背景物の表面にそのまま接触させ、しばらく付着のままにさせてまた離す。この一連の行為を、物 A が物 B の表面に移動して付着するまでのプロセスにたとえているのである。

- (32) a. 日本では、屋形や大身の領主たちは、地面に足をつけたり、徒歩で歩くということとはできないというのが風習であった。 小和田哲男『国際情報人信長』、1991
b. 立山は余誠格が茶碗を投げつけたのはきっと怒ったからだろうと思って入り口へ行き、耳を壁につけて聞こうとしていたら、余誠格が飛び出して来たので鉢合わせになってしまった。

高陽、鈴木隆康・永沢道雄(訳) 『西太后』、1995

- c. 疲れきってもいたが、善意はきっと通じるものという人の好い安心感もあって、枕に頭をつけると同時に深い眠りをむさぼった。

長与善郎ほか、講談社（編）『十四人の信長』、1991

(32a) の「地面に足をつける」は地面を踏んで歩くという行為より、地面に触れて接触することを表わす。歩き続けるように、足を地面につけては離れて、また離れてはつける。

(32b) の「耳を壁につける」は耳と壁との接触が実現されたものの、そのような接触は次

の「聞く」行為を実施するための手段である。音がはっきりと聞こえるように、耳を壁にぴったりと接触させる。目的達成の後はずぐ離れる。(32c)の「枕に頭をつける」は頭を移動して枕に接触させる行為であり、寝るための行為である。寝る間に、頭が枕に接触はしているが、起きたらずぐ離れる。同様の例には「口を皿につける」、「指を目次につける」などがある。

(32)はいずれも体の一時的な付着を表現する。ヲ格名詞のAは身体部位に限り、そもそもニ格名詞のBとは関係しないものである。Bは背景となり、平らな表面を持っている。AがBの接触面に触れる時間がそれほど長くはない。いつかは必ずBから離れる。動作主の意志で足や耳などを地面、壁などに接触させる。そして、その力を抜いたら、Bとの接触もなくなる。接触面と一体化したりはしない。その一時的な接触をするだけで、行為の目的が達成される。それに、付着の「つける 1」と比べ、接触後のことも暗示されている。それは、AがBに接触し、一時付着してから、また分離するということである。つまり、「つける 6」はBに長時間付着したり、Bと一体化したりはしないのである。「付着」行為のプロセスと比較したら、「一時付着」の「つける」の特徴が明らかになる。図 5-1 で示したように、「つける 1」には3つのステップがある。

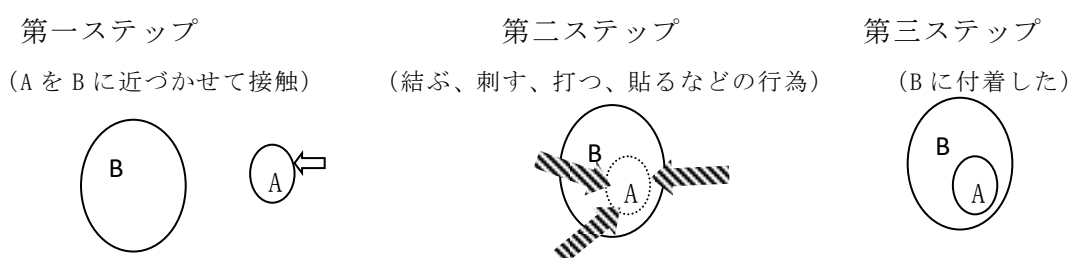


図 5-1 「付着」の「つける」の図式 (再掲)

「一時付着」と「付着」とは、第一ステップを共有している。しかし、「付着」にある第二ステップの物を背景物に付着させるための結ぶ・貼るなどの行為は「一時付着」には必要とされない。身体部位をそのまま背景物に触ればよい。また、「付着」の第三ステップより時間が短く、一体化しない。それに、「一時付着」にはいつかはまた離れるという第四ステップがある。「一時付着」を図式化したのは、図 5-6 である。

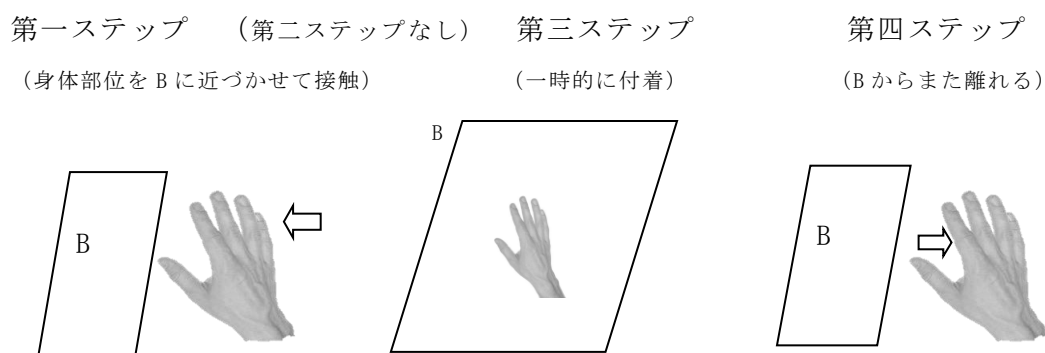


図 5-6 「一時付着」の「つける」の図式

図 5-6 のように、「付着」行為のプロセスから「一時付着」へ転移したが第一ステップと第三ステップである。これは国広（1982: 114）の「部分転用」による拡張である。国広（1982: 114）は意味拡張における「語義特徴の一部のみが用いられ、他は抑圧される」場合を「部分転用」という。しかし、現象素の概念が提出された後、国広（1982）における転用は、比喻のように扱われるようになった。人が背景物に自分の身体部位を移動し、そこに一時的に付着させることは、まるで紙にシールをつけることのようなものである。それゆえ、「一時付着」は「付着」からのメタファー的な拡張と言える。

コロケーションを 1 つのまとまりとして考察する場合、コロケーションそのものの意味拡張も考えなければならない。例えば、「手をつける」のプロトタイプ義は「つける 6」に属し、「手で接触する」意味である（(33)a）。そこからメトニミーによって拡張し、「手で何かをやり始める」の意味が生まれる（(33)b）。さらに、シネクドキーによって派生し、「開始する」を表わすこともできる（(33)c）。

- (33) a. 公にできないお金に手をつけた。（作例）
b. 家の掃除は一切手をつけていない。（作例）
c. 凄まじいスピードで九州全土の方言のアクセントを明らかにしてしまうと、今度は北海道へ飛んだ。それがすむと、奥羽と北陸のアクセントに手をつけて、その成果を発表しはじめた。

金田一春彦『金田一春彦著作集』、2004

コロケーションの意味拡張を記述するのが本稿の主旨と離れるので、詳しい検討を省くことにする。ただし、「手をつける」のようなコロケーションの用法を詳細に分析することは、学習者に有益な語彙情報を提供できるだろう。

つける 14 知覚（「つける」、「付ける」）

「知覚」の「つける」は人間の感覚・意識を働かせることを表わす意味である。「つける 6」の体のある場所に物理的に触れさせる用法から派生し、「視線をある場所・人に送る」行為の「目をつける」と「注意をある事柄に向ける」行為の「気をつける」という用法が生まれる。視線や注意を移動させることを、身体部位を物理的に背景物に移動し、一時的に付着させることにたとえられることから、「知覚」は「一時付着」のメタファー的な拡張である。

- (34) a. この庭のプラムの木には、しばらく前から目をつけていた。

スーザン・ヒル、幸田敦子（訳）『イングランド田園讃歌』、1996

- b. 彼は連邦保安局に目をつけられ、接近されて、彼らの情報源になった。

フリーマントル、戸田裕之（訳）『城壁に手をかけた男』、2004

c. 体に気をつけてください。(作例)

(34a)の「目をつける」は関心を寄せて見るという意味であり、しばらくプラムの木から目を離さない行為を表わす。多くの場合、「目をつける」は受動態で用いられ、人が何か悪いことをしているかのように監視されたりすることを表わす。(34b)がその実例である。連邦保安局が視線を彼から離れないように、彼に目をつける行為をするのである。また、(34c)は体に注意を向け、気を抜かないことを描く。それぞれの二格名詞を指すものに注意が離れない状態は「付着」の「つける 1」とは同様である。また、「一時付着」の「つける」のヲ格共起語とは類似しており、人間の器官または感覚である。「つける 6」の物理的な接触に対して、「つける 14」は人間の視覚・感覚を表わす抽象的・心理的な接触である。

このように、「紙にシールをつける」から「壁に手をつける」へ、さらに慣用表現の「目をつける」と「気をつける」へ拡張した。具体物 A を物理的に移動させて、背景物 B に接触させ、付着させる行為から、身体部位 A を動かし、背景物 B に一時的に接触してまた離れる行為に、さらに、視線や注意をある場所・人・事柄に抽象的または心理的に接触させるようにして、しばらくの間関心を持つようにする行為にたとえている。以上の記述をもって、この 3 用法の間にメタファーに基づいた意味拡張が確認された。

つける 15 接合 (「付ける」)

5.4.1 では「つける」のプロトタイプについて検討するとき、「付着」の「つける」と「接合」と「浸透」の「つける」の特徴を述べた(表 5-6 を参照)。続いて、「接合」と「浸透」を詳しく検討し、それらから拡張した意味を考察する。まず、「接合」と「付着」の「つける」のネットワーク図はを図 5-7 で示す。

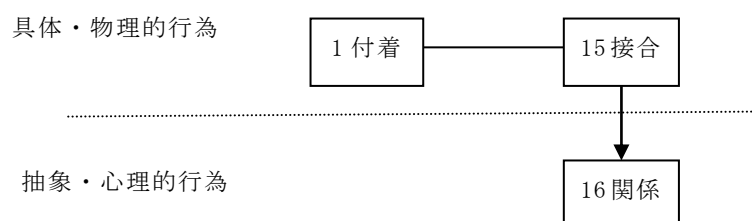


図 5-7 「接合」と「付着」の「つける」のネットワーク図

「接合」の「つける 15」について、5.4.1 ではすでに検討した。図 5-2 で示したように、「接合」は同質の具体物 A と B を相互に接近させ、結ぶ、ねじる、貼るなどの行為をして、その結果、A と B が接合した。「付着」の「つける」より典型度が低い物理的な行為である。「付着」との区別には具体物 A と B の性質、行為の方向性、行為の結果などが挙げられる。

(35) 野鳥を専門に写している人は、一眼レフカメラに超望遠レンズを付けていますが、AF カメラでも野鳥の種類によっては十分に写すことができます。

(=5.4.1 の (11c))

森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』、1989

再掲した (35) で示しているように、性質も大きさもほぼ同様の A と B が「つける」ことでつながるようになる。その結果、どちらかがもう一方に付着したのではなく、両者が接合したのである。「グループディスカッションをしやすいうに、お互いの机をつける」も同様の事例である。

つける 16 関係 (「付ける」)

「つける 16」の「関係」とは、複数の物事に関わりを持たせることである。「関係は連結」という概念メタファーが存在しているように、物事を関係づけることが、物を接合することにたとえられる。「関係」は「接合」からのメタファー的な拡張である。

(36) a. 党中央が、これら圧力団体の多くと直接かかわりをもつほか、各議員は、選挙母体を通じ、自分の選挙区内の一般有権者や、圧力団体との関係をつけるのに懸命である。

エドウィン・O. ライシャワー、国弘正雄(訳)『ザ・ジャパニーズ』、1979

b. 先生には私から明日いちばんで連絡をつけとく、昔からの顧問弁護士だから費用なんかも心配しないで。

山口洋子『演歌の虫』、1985

(36a)の「関係をつける」は各議員と一般有権者や、圧力団体と関わりを持つようにすることである。(36b)の「連絡をつける」は人同士が連絡が取れるようにすることである。これらは物理的に接合することと同様、「関係」にある A と B をつなぐようにするのが目的である。ヲ格共起語の「関係」と「連絡」はいずれも抽象名詞であり、そのコロケーション自体も抽象的な事象を描く。このように、メタファーに基づき、性質も大きさもほとんど同様な A と B の接合から、人間・団体同士、多くの事柄をつながるようにする「関係」へ拡張したと考えられる。

つける 17 浸透 (「付ける」)

次に、「浸透」と「付着」の「つける」のネットワーク図を図 5-8 で示す。

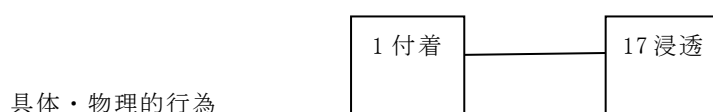


図 5-8 「浸透」と「付着」の「つける」のネットワーク図

5.4.1 で述べたように、「浸透」の「つける」は粉、液体、ペースト状、ゼリー状の A を固体の B に移動させ、塗る・振りかけるなどの行為で B の表面に付着させた結果、A が B に浸透してしまう行為である。このような A をそれとまったく性質の異なる B の表面に付着させ、その中に浸透させるように、A の形が崩れ、B の表面に存在せず（跡が残る場合もある）、B の中に浸透する。また、「浸透」は「付着」と「接合」とは異なり、いったんつけたら、A を B から取り外すこともできなくなる。例は（37）である。

- (37) 裏打紙の表に糊をつけ、掛竿を使用して裏打紙を持ち上げて、糊づけ面を作品の裏面に貼り合わせる。 (=5.4.1 (11d))

荒川達 『私にもできる裏打と裁断』、1992

(37) の「紙に糊をつける」のほか、「タオルにせっけんをつける」、「豆腐にかたくり粉をつける」、「パンにジャムをつける」などの例も考えられる。「付着」と「接合」の場合、A と B はいずれも具体物であるのに対し、「浸透」の A は液体、粉状、ゼリー状の物が多く、ものの表面に付着して内部に浸透できるものである。5.3.2 のコロケーション調査から分かるように、「浸透」の「つける」のヲ格共起語には、「洗剤/せっけん/香水/剤/薬/油/衣/塩/みそ/小麦粉/卵/パン粉/醤油/ソース/粉/糊/口紅/バター/ワックス」などのような語がある（表 5-3 を参照）。このように、そのヲ格名詞の多くは調味料、化粧品、薬品の類である。これらのものを「つける」ことで、物の表面に付着させるというより、物に浸透させるのが目的である。行為の結果、対象物 A の形が崩れ、場合によっては A が見えなくなることもある。

「醤油をつける」ことや「ソースをつける」ことなどは合わせて「味をつける」という。醤油やソースのような具体物と比べ、「味」は上位概念である。とはいえ、「味をつける」ことは具体的な操作によって実現されるので、抽象的な行為とは言えないのである。また、「口紅をつける」と比べれば、「唇に色を付ける」はやや抽象度が高くなる。というのは、「色」は「味」と同様、上位概念を表わす語だからである。（38）はその実例である。

- (38) a. フライパンにサラダ油を熱し、キャベツを炒めてからウインナーを入れ、塩、こしょう、ソースで味をつける。 鳩山エミリ 『食べるのが大好き』、2001

- b. レモン汁、さらにレモンの皮のすりおろしを加えて風味をつける。

平野レミ 『平野レミのおやつ時間』、1998

- c. 欠けたところでは、赤く錆びた鉄筋がのぞいてる。それで、そこに雨があたるから、流れ出した錆が塀をつたって落ち、どぶ板にまで色をつけてる。

川島誠 『800』、2002

(38a) では、さまざまな調味料を入れ、炒めたりして、調味料を料理に浸透させることで、

「味をつける」という目的が実現される。(38b)の「風味をつける」は(38a)に類似している。味わいばかりではなく、香りも含まれている。(38c)の「色をつける」は赤色の錆がどぶ板に浸透した結果を表わす。ヲ格名詞となる「味」と「色」は結果目的語であり、「つけた」結果でもある。味・色を加える点は、添加の「つける 7」とも共通している。しかし、ヲ格共起語となるものが単に、ニ格共起語の表面に付着したり、それと一体化したりするだけではなく、対象に働きかけた結果、その中に浸透してしまう。それで、浸透の「つける 17」に分類するのはもっとふさわしいと考える。

以上で、プロトタイプ義の「付着」(「つける 1」)をネットワークの出発点にして、「つける 17」までの意味を記述した。「つける 1」から「つける 17」の意味には、物理的な付着から心理的な付着への拡張、また、具体的・物理的な行為から抽象的・心理的な行為へ、さらに、意図的な行為から非意図的な行為への拡張が見られた。また、「付着」よりプロトタイプ度が低い「接合」と「浸透」、および「接合」の拡張義の「関係」を検討した。「付着」であれ、「接合」と「浸透」であれ、「接触」のスキーマが抽出されるのが共通点である。

一方、「つける」にはスキーマの「接触」とプロトタイプの「付着」に基づかない拡張義もある。つまり、「接触」も「付着」も見られない用法である。それは、AとBの間では「接触」の代わりに、「接近」が生じる場合である。ここでは、これらの「つける」の用法を「接近グループ」と名付ける。ここでいう「接近」とは、対象物Aを動かして背景物Bに接近させる行為である。その結果、AがBのそばか後ろに少し距離を保ちながらついていく。接触面がなくても、AがBの近くに寄せて、Bとの近隣関係を築いた結果は「付着」と類似している。「接近」は物理的な行為を表わす「つける 18~21」の意味から抽出された共通点であり、スキーマのような存在である。このように、「つける」には2つのスキーマがあり、「接近」が「接触」から派生したと考える。図9は「付着」と「接近スキーマ」に基づく拡張義ネットワーク図である。次から、「つける 18」から「つける 23」までの意味を1つずつ記述する。

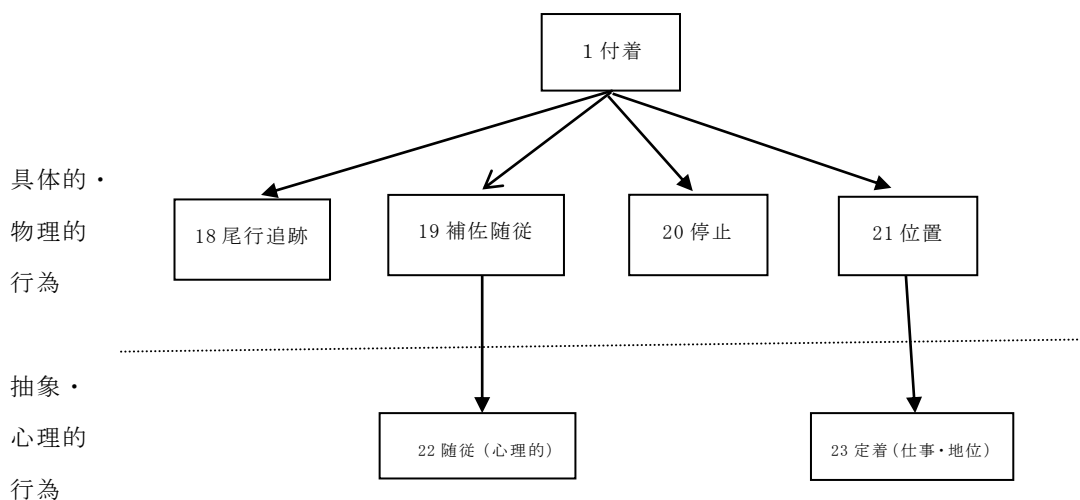


図 5-9 「付着」と「接近スキーマ」に基づく拡張義ネットワーク

つける 18 尾行・追跡（「つける、付ける」）

「つける 18」は動作主である人が他の人、または乗り物に接近し、それに体を寄せ、ひそかに後を追うことを目的とする行為である。「付着」と比較すると、「B に A をつける」という事象の変化が分かる。「紙にシールをつける」行為においては、ヲ格のシールは移動物で、ニ格の紙は背景物である。一方、「尾行・追跡」は動作主がだれかの後に自分をつけるように、寄り添う意味である。これは国広（1997: 201）の言う「再帰中間態用法」である。つまり、動作主が物を他の物に移動して付着させることから、動作主が自分を物のように移動して他の人に接近させることへ拡張するのである。一定の距離を置くにしても、対象人物との離れない状態は付着の「つける」と共通しているので、「付着」からのメタファー的な拡張であると考えられる。(39) の「(人の) あとをつける」はこの用法の典型的なコロケーションである。

(39) 陛下のご命令を受けて以来マグダネル卿の行動には注意を怠らず、外出の際には必ず後をつけて接触する相手をお確かめておりましたが…

茅田砂胡『デルフィニア戦記』、2003

「あとをつける」とは、相手の行動を探ったり監視したりするために、その後ろからひそかについて行く行為である。特に、犯人を追うのに用いることが多い。「容疑者をつける」も類似した例である。これは「容疑者に自分をくっ付けるように後ろから近付いて追跡する」行為を描いている。自分が自分を動かして相手に尾行して追うことを、物を移動して他の物に付着させることにたとえている。したがって、「尾行・追跡」は「付着」からのメタファー的な拡張だと認定できる。

ここまでは「B に A をつける」という定型文を用いて記述してきたが、「尾行・追跡」の「つける」にはその定型文が通用しない。学習者の立場からいうと、「つける 18」の意味をよく理解したうえで、「あとをつける」を1つのまとまりとして覚えるべきである。

つける 19 補佐・随従（「付ける」）

「補佐・随従」の「つける」は、ただ人 A を人 B に近づかせ、そばにいさせるのではなく、A に助けてもらい、A という人の能力を活かせることである。B にとって、必要とされるのは A という人ではなくて、A の持っている能力である。つまり、人を相手に接近させることで、相手のそばで能力を活かすことを表わす。そばにということと、そばにいて機能することとの近接性を考え、「補佐・随従」はメトニミーによる意味拡張だと考えた。例は(40)である。

(40) a. マスコミ各機関は万一の事態を慮って、主だった現場担当者にボディガードをつけて警戒している。

森村誠一『人間の条件』、2003

- b. 家では心配して家庭教師をつけてくれたけれども、相変らず学校に精を出す気配はなくて、海辺のあたりをうろついているだけだ。

檀一雄『太宰と安吾』、2003

(40a) は大切な現場担当者の安全のために、ボディーガードをその人のそばにつき添わせて守らせることを意味する。(40b) の「家庭教師をつける」は子供がよく勉強できるように、家庭教師を雇って子供の学習を助けさせる行為である。「補佐・随従」の「つける」には使役性があり、動作主が人物 A に役目を果たさせて、対象人物 B の世話をさせたり、補佐させたりする行為である。(40) から分かるように、「つける 19」のヲ格名詞も人であり、「通訳をつける」、「保衛をつける」と同様、A は付き添わせる対象（の役目）である。ニ格共起語 B は人や集団などである。「病人に付き添いをつける」、「部下をつけて出張する」、「団体客に案内人をつける」などもこの用法での例である。それに、一般的には、この用法では、ニ格名詞もヲ格名詞も必要とされる。

つまり、物 B に物 A を付着させることから、人 B に人 A を近づかせることへ拡張したのである。ただし、人 A は物理的に B に接近するのではなく、B のそばで働かなければならない。このように、人の接近で、役割を果たさせることを表わすのはメトニミー的な意味拡張である。

つける 22 (心理的) 随従 (「つける」、「付ける」)

心理的な「随従」は、人のそばにいさせて離れさせようとしないように、言われるままに人の意見に従わせたり、相手の立場に心を寄せさせて従わせたりすることを意味する。心理的な「随従」を物理的な「随従」にたとえ、メタファーに基づいた拡張である。(41) の慣用表現「味方につける」はこの用法の例である。

- (41) a. 日本だけの力でアメリカと対決することはできないので、ドイツを味方につけてアメリカと対決するのだ。

黒羽清隆、池ヶ谷真仁(編)『日米開戦・破局への道』、2002

- b. 冬に逃げることなく、冬の時と向き合って生きる道を選んだ。そして、ついには冬の寒さを味方につけ、「成功のためになくてはならないもの」にまでしたのである。

蓮実香佑『「植物」という不思議な生き方』、2005

(41a) は日本がドイツを引っ張って自分に近づかせるために、日本がドイツに自分と同じ立場に立たせて、自分の支持者にすることを描く。(41b) の「冬の寒さを味方につける」は(41a) の「味方につける」からのメタファー的な拡張である。人・団体を自分の味方にすることに、冬の寒さが敵ではなくて、支持してもらったり、応援してもらったりするような存在にすることをたとえている。

「自分が誰かを自分の味方につける」が成立するように、これも国広の再回帰中間態の用法である。「味方につける」の用法における人間（集団など）同士の心理的、立場上の接近を物理的な接近にたとえるのはメタファーによる意味拡張である。

つける 20 停止（「着ける」）

「停止」の「つける」は、乗り物 A をある場所 B に物理的に接近させ、その近くに停めさせる行為である。乗り物を動かして、停止させるのは、あたかもシールを持ってきて、紙に固定させる行為のようであるので、「付着」からのメタファー的な拡張である。例は(42)である。

- (42) a. わたしと順一は、荷物を船に積み込んだ。船は、艫づけ、つまり船尾を岸壁につけてある。わたし達は、船尾から、タックルや何かを船に積んだ。すぐに積み終わった。喜多嶋隆『ルアーに恋した日』、2001
b. クインの指示で、サムはフローテ街にあるデ・ドーレン・ホテルに車をつけて、チェックインした。

フレデリック・フォーサイス、篠原慎（訳）『ネゴシエイター』1989

(42a) の「船尾を岸壁につける」は船尾を岸壁に近づかせ、そのあたりに停める行為である。(42b) の「ホテルに車をつける」は車を出して動かし、ホテルの前かあたりに留める行為である。いずれも乗り物 A を B という場所に接近させ、停止させることを描く。この用法では、ヲ格共起語もニ格共起語も重要な役割を果たし、なくてはならない要素である。コーパスの検索では、乗り物 A の実例には車と船の2種の交通機関しか見つからなかった。また、「車いすをベッドに直角につける」も成立するように、車いすは交通機関ではないが、体の不自由の人にとっての乗り物である。(42) と同様、ここでの「つける」はベッドの近くに停めることを意味する。

このように、乗り物がある場所に停止させることを、「付着」の物を移動させて、背景物に動かせないように固定させることにたとえられることから、メタファーに基づき、「付着」から「停止」への拡張が確認できたのである。

つける 21 位置（「着ける」、「就ける」）

「位置」の「つける」とは、人がある場所に置く行為である。「つける 20」の「停止」では、乗り物の移動を前提とされているのに対し、「位置」の「つける」では、人の移動を前提とされない。シールを紙につけた結果、シールが動けなくなって、紙に付着した。付着させるまでの過程を問わず、この A が B に付着した結果と、人が所定の場所に置かれた結果とは共通しているので、メタファーに基づいた拡張だと考える。

(43) a. 子供を食卓につける。(作例)

b. これが前例のないことだった上、慣例に反してドイツは交渉のテーブルにはつけず、最後通告で受諾を迫られたりもしたから、結局受諾・調印したとはいえ、この問題は尾を引いた。
坂井榮八郎『ドイツ史 10 講』、2003

(43a) は子供を食卓の横に座らせることを描く。「走者をスタートラインにつける」、「学生を席につける」もこの「つける」の例であり、いずれも人のある場所・位置に固定させて移動させないようにすることを描写する。この場合、ヲ格共起語 A は人間であり、ニ格共起語 B は場所名詞である。(43b) の「交渉のテーブルにつける」は、交渉の場所で交渉という事柄を表す。したがって、(43b) は (43a) からのメトニミーによる拡張だと考える。

「つける 21」の「位置」は相手を命じて一定のところにいさせる行為である。ただし、そのところに物理的な接触が生じるとは限らない。かえって、その近くに位置させることが多い。「つける 1」行為の中のある場所に停めることからメタファー的に拡張し、「つける 21」は人のある場所に占めさせることを描写する。

以上で検討した「つける 18-21」の 4 つの用法はすべて物理的な行為である。接触スキーマに基づく物理的な行為を表わす「つける」のヲ格共起語には、物名詞が多い。一方、接近スキーマに基づく派生義グループの「つける 18-21」のうち、「つける 20」が乗り物であり、他の 3 用法のヲ格共起語 A には「人」が多いように、A がいずれも動けるものである。また、「接近」グループにおける「つける」の表わす事象には A と B の位置関係が重要視されると見られた。事例に対する考察から、物理的な「接近」行為では、ニ格共起語が重要な役割を果たしていることが分かった。

つける 23 (仕事・地位などの) 定着 (「就ける」、「即ける」)

「つける 23」の「定着」は人のある抽象的なところに存在させること、特に仕事や地位にふさわしい人を置くことを表す。これは、「つける 21」の人のあるところに身を置くことから、メタファーによって拡張した意味である。つまり、抽象的なポジションにいさせることを、具体的な場所にいさせることにたとえている。例は (44) である。

(44) a. ちなみにほとんど知られていないが、バングラデシュにとって、日本は突出した援助国だ。日本の援助対象国のなかでも、上から六番目の位置につける。

駒村吉重『ダッカへ帰る日』、2003

b. アッバース朝時代には、イラン人を中心とする新改宗者が要職につけられ、宰相の統率する官僚制度が発達し、行政の中央集権化がすすんだ。

詳説 世界史、2006、高

(44a) の「位置につける」が「つける 23」の典型的なコロケーションである。具体的な

場所に誰か(何か)を固定させるのではなくて、抽象的な位置に身を置くことである。(44a)の「つける」は自動詞的に用いられる。「バングラデシュが六番目の位置に自分をつける」ことを描く。類似した例には、例えば「(試合で)二位につける」が挙げられる。このときも「つける」が自動詞的に用いられ、順位を表わす。ただし、順位を表わす場合、二位以後を表わすときに「つける」が用いられるものの、「一位につける」という言い方はない。この用法では、ヲ格共起語が必要とされていない。とはいえ、「AをBにつける」の事象とは関係がないとは言えない。国広(1997: 201)の「再帰中間態用法」を用いて述べると、「二位につける」という表現は「動作主Aが二位の位置に自らをつける」から、再帰代名詞「自らを」を省いて後に残った表現であるという。ヲ格共起語が現れていないものの、意味深層には存在していると言えるのである。

(44b)の「要職につける」は、ある仕事、役や職などにふさわしい人を置くことを表わす。ニ格共起語として、「重職」や「顕職」のほか、何かの仕事または具体的な職名なども挙げられる。また、「皇位につける」も同じ類の例であり、即位を表わす。この用法のニ格共起語には、「王座／王位／帝位」などがある。

このように、「子供を食卓につける」から「有能な人材を要職につける」、「息子を王座につける」へ拡張したのは、人を具体的な場所に置くことから、人をある職務・地位に関与させることへメタファー的に派生しているからである。

以上をもって、プロトタイプである「付着」、そして、スキーマである「接触」と「接近」に基づき、メタファーとメトニミーを用いて「つける」の諸意味を記述し、「つける」の意味ネットワーク(図5-10)を構築した。しかし、この意味分類は全く問題がないとは言えない。例えば、抽象的な状態現出の「知識をつける」を設置の「部屋にエアコンをつける」の下位分類にしたものの、対象物に働きかけ結果、新しい状態がそこに現れる点では「テーブルに傷をつける」とも共通している。また、「岸に船をつける」と「味方をつける」を比較すると、前者は「ある対象物を他の対象物に物理的に近くに接近させ、そこにとどまらせる」ことで、後者は「ある対象物を他の対象物に心理的に近くに接近させ、そこにとどまらせる」ことであることが分かった。この2つの用法にも関わりがあると考えられる。

このように、意味分類の基準や事象の捉え方が異なれば、分類の仕方も違いが生じる。本研究ではそれらを問題にせず、学習者のニーズを優先的に考えることにした。つまり、学習者が自力で意味拡張の経路に対し、考え出すことができない、または理解もできない場合、どのように記述すれば支援できるかを意味分析の出発点にしたので、上記の分類を行ってきた。

また、以上の記述では多くのコロケーションを列挙した。これらのコロケーションの中には、特に慣用表現の一部が多義である(「手をつける」、「肉をつける」、「道をつける」など)ことが分かる。これらの表現のメタファー義を習得するために、「つける」の意味を十

分に理解したうえで、ヲ格共起語の多義派生を身につけなければならないのである。コロケーションの意味拡張についての検討は別稿に譲るが、「つける」の意味用法を徹底的に習得するには、「つける」の意味のほか、そのコロケーションをなす語の用法も身につける必要があると考える。

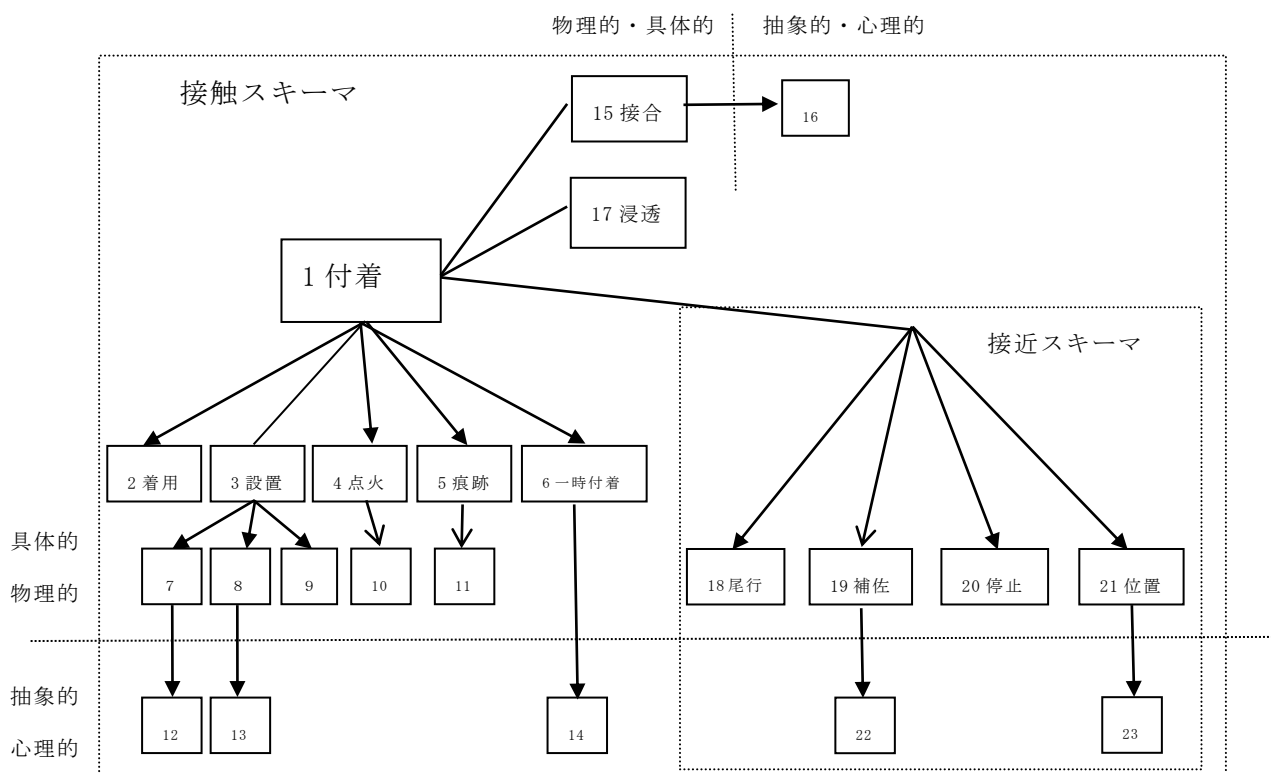


図 5-10 「つける」の多義ネットワーク図

5.5 「つける」の関連語の意味分析

前節では、認知意味論的な知見を用いて、「つける」のプロトタイプとスキーマを検討し、「つける」のプロトタイプ義を図式化した。また、コーパスから実例とコロケーションを抽出し、「つける」の多義派生を考察したうえで、多義構造を構築した。この節では、「つける」とその関連語の関連性を明確に示したうえで、学習者の学習を促進することのできる「つける」の語彙ネットワークを構築する。

1 つの基本動詞の本質を究明するには、それに対する意味分析を行うだけでなく、「概念的になんらかのかたちで関連しているほかの動詞との関係でその動詞を分析していく」(田中 1990: 126) ことが必要である。多義語の諸意味がネットワークを成している。また、多義語とその関連語とともに一つの語彙ネットワークを形成しているのである。それは、語というものは1つ独立した形で存在するものではないからである。他の語とともに、連続的な意味の世界を占めている(田中 1990: 162)。ゆえに、多義語を記述するには、多義

語とその関連語とのつながりを究明し、それらの意味をつなぐネットワークに対する考察も不可欠である。

本研究でいう関連語とは、意味的な関連を持つ語のことである。意味上関連性を持っている語はと言うと、類義語や複合語などが考えられる。森田（1989）、宮島（1972）、柴田ら（2002、2003a、2003b）は、類義語との区別を用いて、基本動詞の意味記述を行った。また、田中（1990）は、ネットワーク理論を利用し、類義語の take と hold を事例として、関連語同士の関係を説明している。さらに、長嶋（1976）によると、語の意味はどのような複合語を作れるかによっても規定されるという。これは、広い意味での文脈的機能であるという。このように、当該語とその関連語が1つのネットワークを成しているのである。

また、第二言語習得からも関連語記述の重要性が述べられている。3章にも触れたように、森田（1989）は、日本語学習者のために、語の意味を論じるには、他の語（類義語）との関連性の分析に重点を置いている。また、姫野（1999）も、日本語習得における複合動詞に対する考察の重要性を次のように述べている。「単独で使われる場合の意味（本義）がどのような形で複合動詞の中に生かされているのか、その面から考察するのは、例えば、外国人学習者の日本語習得の場合には教育的効率に関わる重要な問題だからである」（pp. 19-20）。

本研究で行った習得調査から得た結果も、先行研究の指摘と同じようなことを示している。学習者は類義語や複合語に対して高い関心を示しているものの、その難しさも感じているようである。よって、学習者の語彙学習を促進するには、類義語や複合語などについての検討が必要とされる。そこで、この節では、「つける」の意味分析の結果に基づいて、「つける」の関連語の意味分析を行い、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築する。また、「つける」に対する記述では究明されていないことを、その関連語を通じて記述する。このように、学習者に「つける」の意味をさらに深く理解させるための、有益な習得情報が得られるのである。

この節での「つける」の関連語についての記述は、2つの課題を究明しようとするものである。それは、「つける」の関連語をどのように「つける」と関連付けるのか、学習者の習得を支援するために、「つける」の関連語をどのように学習者に示すのか、である。

本研究では、「つける」の関連語を大きく「生産性グループ」と「異質性グループ」の2つに分ける。「生産性グループ」には、意味上「つける」の延長線にある複合動詞、複合名詞が含まれている。「異質性グループ」には、「つける」の類義語、反義語、自動詞「つく」が含まれている。また、「つける」の関連語には、「つける」の意味との関連性の度合いには差がある。つまり、プロトタイプ的な関連語とそうでない関連語がある。本研究は、学習者の習得を支援できるように行う分析である。それゆえ、学習者のニーズに応えるために、語例を選択する際には、学習者が間違えやすいもの、理解しにくいものを手がかりとする。

5.5.1 「つける」の生産性グループ

5.5.1.1 複合動詞の概説

複合動詞に関して多くの研究が行われてきた。代表的なものとして、石井（2007）、影山（1993）、長嶋（1976）、姫野（1999）、松本（1998）、由本（2005a、b）、松田（2004）などが挙げられる。これらには、V-V 型複合動詞の前項動詞 V1 と後項動詞 V2 との意味関係から複合動詞を分類する説があり、そのうち、影山（1993）が複合動詞の構成要素の意味関係により、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の 2 種類に分けている。語彙的複合動詞は、辞書に登録されている「飛び上がる」、「打ち取る」、「引き出す」、「押し付ける」のような V1 と V2 の意味が合成語に明瞭に含まれているものがある。統語的複合動詞は、「降り出す」、「やりつける」、「話し合う」、「考え直す」のような V2 が V1 との組み合わせが自由であり、V1 と V2 は補文関係にある語である。つまり、語彙的複合動詞は、統語上一語として存在し、その生産性が V2 に大きく依存する。しかし、生産性の高い場合でも、語彙的な結合制限がある。統語的複合動詞は、統語構造において、V2 が V1 を補文に取る補文構造になっている。

本研究における複合動詞についての研究は、本動詞「つける」の用法に応じて、関係する複合動詞を取り上げ、「つける」の意味との関連性を考察することを中心にして行う。また、影山（1993）に従い、V-V 型複合動詞を語彙的複合動詞「つけ～」、語彙的複合動詞「～つける」、統語的複合動詞「つけ～」、統語的複合動詞「～つける」の 4 つに分けて記述する。

語彙的複合動詞「つけ～」には、「付け狙う」、「付け加わる」、「付け加える」、「付け足す」、「付け込む」など語例がある。これらの語には、V1 と V2 の意味がそれぞれ保持すると同時に、結合制限がある。また、語彙的複合動詞「～つける」には、「編みつける」、「結びつける」、「塗り付ける」、「駆けつける」、「書きつける」、「取り付ける」、「焚きつける」、「売りつける」、「落ち着ける」などの語例がある。これらの語における V1 が限定された「つける」の意味を表しているため、「つける」の意味に関連付けて分析できる。

一方、統語的複合動詞「つけ～」には、「つけ始める」、「つけ過ぎる」、「つけ終わる」、「つけ続ける」のような、補助動詞の V2 と結合した語と、「つけ忘れる」、「つけ落とす」、「つけ替える」、「つけ間違える」のような、補助動詞的な V2 と結合した語がある。統語的複合動詞「～つける」には、「やりつける」、「しかりつける」、「投げつける」、「聞きつける」、「盛り付ける」などの語例がある。この場合、V2 の「つける」が補助動詞となり、多くの語と組み合わせて複合動詞を形成する。

上記の V-V 型複合動詞のほか、「接頭辞+つける」の語例（「くっつける」、「ぶっつける」）、一語化した語例（「付け上がる」、「付け入る」、「付け込む」、「取り付ける」など）、「名詞/形容詞/形容動詞+づける」の語例を挙げ、複合動詞についての検討を深める。なお、「つける」に関わる複合動詞には、多義語も多数含まれ、2 つ以上の用法を兼ねた語も少なくないので、考察の際は、必要に応じて、どちらかの用法を取り出して記述することにする。

5.5.1.2 語彙的複合動詞「つけ～」

複合動詞「つけ～」を語彙的複合動詞「つけ～」と統語的複合動詞「つけ～」の2つに分けて考察する。いままで複合動詞に対する意味的研究のテーマは、後項動詞の意味的側面に関するものである（松田 2004: 13）。しかし、学習者の立場から見ると、「つける」の関連語に属する複合動詞「つけ～」にどのような語例があるのか、「つける」とV2はどういった関係をなしているのか、また、「つける」のどの意味に関連するのかといった疑問に答える必要がある。以下、語彙的複合動詞「つけ～」における「つける」の意味に目を向け、本動詞「つける」との関連性を手掛かりにして、その語例を考察し、意味の記述を試みる。

国語辞典で調べたところ、語彙的複合動詞「つけ～」の数がそれほど多くはなかった。まず、限られた「つける」の意味に関連づけられる「付け狙う」を検討する。「付け狙う」における「つける」は、「尾行・追跡」の「つける 18」に関連する。「つける 18」は、動作主が人、または乗り物に接近し、それに体を寄せ、ひそかに後を追うことを目的とする行為を描く。「後をつける」はこの用法のコロケーションである。「付け狙う」は、相手の後をつけて、常に相手の様子を伺ったり、機会をうかがったりする行為である。多くの場合、「付け狙う」が「人」を表わすヲ格共起語を要求する。意味用法の共通点から、「付け狙う」を「つける 18」の延長線に位置づけたのである。ただし、「つける」が「狙う」と結合したことで、意味が限定されている。「付け狙う」行為自体には、マイナスな意味が含まれており、「変な人に付け狙われる」のように受身形で用いられる場合がある。

また、「付随添加」の「つける 7」と抽象的な「添加」の「つける 12」に関連する語彙的複合動詞「つけ～」には、「付け加わる」、「付け加える」、「付け足す」の3語がある。この3語の共通点は、V2の「加わる」「加える」「足す」はいずれも「添加・付加」の意味を持っている動詞ということである。つまり、添加を意味する「つける」にまた添加を表わす動詞が付く。例は（45）である。

- (45)a. 今後は、非遺伝子組換え原料の分別コストと消費者の反応のバランスによっては、
遺伝子組換え飼料を使っていないという「自然さ」「安心感」が、新たに付け加わるかもしれません。

大塚善樹『遺伝子組換え作物 大論争・何が問題なのか』、2001

- b. それは軍隊運用の限界を越えているという名言を残している。ついでに付け加えるともう一つの戦争のタイプがある。それは「ジンギス・カーン型の戦争」である。

松村劭『教科書が教えない日露戦争』、1930

- c. 父親が付けた名前だから—そんな言葉を付け足してしまったこと自体、すでに彼になにかを感じ取っていたのかもしれない。

福井晴敏『Twelve Y.O.』、2001

d. 最後の側面は、折りしろの手前まで先にはり、ボンドを布端につけ足して箱の角に合わせて接着する。

NHK 出版(編)『紙で作る!』、2005

(45a) の「付け加わる」と (45b) の「付ける加える」は、「すでにあるものに、さらにある別のものを添加する」(『大辞泉』) という意味を表わす。また、「代金に手数料が付け加わる」、「文章を二、三行付け加える」のように、この 2 語には、既存のものに、さらに新しいものを添加するという意味合いが注目される。前項動詞「つける」を用いることで、新たに添加されるものがあくまでも付属品であるというニュアンスが伝わる。なお、「加わる」と「加える」は有対自他動詞であり、「付け加わる」と「付け加える」もその性質を継ぐ。

続いて、コーパス NLB を検索し、「付け加わる」のガ格共起語をまとめる。その中には、「乗客・死者・建物」などのような具体物もあるが、「ルール・困難・機能・特徴・解釈・要素」などの抽象名詞が圧倒的に多い⁶³。また、「付け加える」のヲ格名詞として、「一言・一句・言葉・感想・意見・説明・解説・分析・判断・結論・条件・皮肉・冗談」(『コロケーション』p. 721 により、一部改) などが挙げられているように、コーパスからも同じような傾向が見られた。「付け加える」のヲ格共起語において、使用頻度の高い語は、「言葉・説明・～点・機能・意味・情報・事実・一言・魅力」などである⁶⁴。このように、「つける 7」と「つける 12」のヲ格共起語の多くが「付け加える」のと共通していることから、「付け加わる」と「付け加える」が「つける 7」、「つける 12」に関連すると見られた。

(45) c-d の「言葉を付け足す」と「ボンドを付け足す」から分かるように、「付け足す」も、既存のものにさらに何かを付け加えることを表わす。しかし、「付け足す」のヲ格共起語を観察すると、「言葉・条件・情報・説明・警告」などのような「つける 12」のと共通した語もあれば、「味・気・線・ライト・写真」などのような、「つける」の他の用法の共起語もある⁶⁵。このように、「付け足す」は語彙的複合動詞に属するものの、その意味が限定されておらず、後項動詞「足す」が補助動詞的に働く。

続いて、「付け込む」を検討する。「付け込む」には 2 つの意味がある。1 つは、「書き入れる」という意味である。このときの前項動詞「つける」の用法は、「記録」の「つける 11」に関連する。この「付け込む」と関連する複合名詞には「付け込み帳」がある。前にも触れたように、「つける」行為には動作の方向性があまり焦点にされていない。一方、「込む」は、物が外から中に移動する事象を表し、行為の方向性が決められている。「つける」が「込む」と結合すると、意味が限定されるばかりではなく、行為の方向性も規定された。

また、「付け込む」には「機会をうまくとらえて利用する」という意味もあり、「人の弱みに付け込む」がその例である。(46) の 3 例における「付け込む」は、すべて自分のプラスになるように、相手の弱みを利用するという意味で使われている。この「付け込む」は、必ずニ格名詞と共起する。「弱み(弱点/弱り目)・ミス・無知・欲・油断・焦り・窮状・危

機・痛手・不備・～の不満/不足」などのような、相手のよくない状態、特によくない精神状態を表わす語につく。(46) はいずれも、人の「親切・良心・好意・優しさ」などのような相手の善を利用し、悪質な行為をすることを表している。

- (46) a. だが、その一方、裏では党内反対派を切り崩すなど着々と準備を進め、相手の油断に付け込んだかたちで、ダブル選挙に持ち込んだのである。

伊藤惇夫『永田町権力者たちの情報戦争 政治家はこうして“消される”』、2003

- b. 世界の常識は他国の失敗や弱みに付け込んで甘い言葉で擦り寄りながら権益をむしり取ることである。

松村劭『教科書が教えない日露戦争』、2004

- c. しかし、高価さを競うかのような「ミストサウナ」も「外国製のキッチン」も、せいぜい一五年程度で必ず交換の時期がくるのです。設備過剰な住宅は、購入者に媚びた住宅であり、購入者の知識の抜け穴につけこんだともいえる住宅です。

長嶋修『住宅購入学入門いま、何を買わないか』、2005

(46) の「付け込む」は、物理的な動作ではなく、抽象的な行為であり、メタファー的に使われている。この「付け込む」における前項動詞「つける」の意味と、単純動詞「つける」との関連性はというと、かなり薄くて見つけられないほどである。つまり、前項動詞も後項動詞も単純動詞の意味を失っているので、「付け込む」は一語化していると考えられる。しかし、物を対象に接触（接近）させて付着させるという、「つける」のプロトタイプ義を思えば、「付け込む」の相手に接近して働きかける行為を理解できないわけではない。一語化しているとはいえ、単純動詞の意味そのものではなく、表わす事象から共通点が抽出されるのである。

さらに、「付け合わせる」のような、「つける」の 2 つの意味に関わる複合動詞もある。「付け合わせる」は、まず、「あしらいとして他の物に添える」（『大辞林』）ことを意味する。何かの付属品のような物を添えて、主たる物と合わせるというところがプロトタイプ義の「つける 1」に共通している。(47a) では、野菜が食卓の取り合わせとして、添えられていることを表している。また、「肉料理にサラダを付け合わせる」、「ステーキにポテトを付け合わせる」も成り立つように、「付け合わせる」は、肉料理という主たる料理に、付属品のようなサラダやポテトを添えて、両方を合わせて 1 つの料理にすることを描いている。肉がサラダ、ポテトと主従関係にあることは、前項動詞「つける」を用いることで明確に示されている。

また、(47b) の「付け合わせる」は、2 つの物・事柄を離れないように合わせて行動することを描く。事柄を付け合わせることを、物を付け合わせることと見なし、「付け合わせる」の意味がメタファー的な拡張している。具体的な行為であれ、抽象的な行為であれ、「つける」の付属品の付着という意味が「付け合わせる」の意味から見られる。

- (47) a. いろいろな野菜を色鮮やかにゆでて付け合わせにするなど、食卓が華やかになるような演出を心がけました。

赤堀千恵美『中日新聞夕刊』、2002/5/10

- b. 『サンセット計画』を知っており、そして海軍の演習日時と付け合わせれば、それが攻撃を行う日時であると推理するのは、難しいことではないでしょう。

鳴海章『日本海雷撃戦』、1995

以上、語彙的複合動詞「つけ～」の「付け狙う」「付け加わる」「付け加える」「付け足す」「付け込む」「付け合わせる」を記述した。ここまで議論したように、多くの「つける」の意味と関与する語もあれば、限られた「つける」の意味（1つか2つ）に関係する語もある。いずれにしても、語彙的複合動詞の意味をうまく理解するには、本動詞の意味を身につけるのが前提である。特に、限定された「つける」の意味に関わる複合動詞は、それと関与度の高い関連語であるので、「つける」の語彙ネットワークに欠かせない語である。

また、興味深いことに、複合動詞における「つける」の意味が限られた場合、その表記も限定されることが分かった。「つける」の表記には柔軟性がある一方、複合動詞における「つける」の表記が決まっていることは、ここまでの検討で明らかになった。複合動詞での「付」を他の漢字で置き換えることができないことから、「付」が「つける」の基本的な表記であることが確認できたと言えよう。

5.5.1.3 統語的複合動詞「つけ～」

コーパス⁶⁶の調査によれば、統語的複合動詞「つけ～」の語が13語検索された。それらは、「つけ始める」「つけ過ぎる」「つけ終わる」「つけ続ける」「つけえる」「つけまくる」「つけかねる」「つけうる」「つけかかる」「つけこなす」「つけ終える」「つけ切る」「つけそびれる」である。この13語は、多く意味を持っており、多くの「つける」の意味にも関連付けられる。また、これらの語の後項動詞は、いずれも補助動詞であり、「つける」のみならず、多くの動詞と結合して複合動詞を成すのである。

また、「つけ忘れる」「つけ落とす」「つけ替える」「つけ間違える」も統語的複合動詞「つけ～」に属する。これらの語における前項動詞「つける」にも多くの意味用法が現れた。一方、後項動詞の「忘れる」「落とす」「替える」「間違える」は、それぞれ自身の意味を保持している。「～始める」や「～過ぎる」などの補助動詞と比較すると、補助の典型度が低いものの、多くの動詞と組み合わせることができ、補助動詞的に働く。

以上で挙げた語例は、辞書で調べてもほとんどは見出し語として出てこない。「付け始める」や「つけ忘れる」のような、V2が多義動詞であっても、いったん統語的に機能すると、数多くのV1と結合できるようになる。そして、V1とV2の意味関係は、補文関係である。また、実例を観察したところ、V1の「つける」には多くの用法が出現している。それゆえ、単純動詞「つける」の意味に関連付けようとしても、まとめられないのである。これらの

統語的複合動詞「つけ〜」は、「つける」の関連語であるが、限定された「付ける」の意味に関連付けられず、プロトタイプの関連語とは言えない。

さらに、統語的複合動詞であるものの、辞書の見出し語として出現している語もある。「つけ出す」がその1例である。辞書によれば、「つけ出す」には、①記入し始める、②売掛金の請求書を書きつけてさしだす、③荷物を馬などの背中に付けて送り出す(『新明解』)の3つの意味がある。第1義の「付け出す」における「出す」は、何かをし始めるという意味である。この「出す」は補助動詞的に働く。語釈を見れば、この「付け出す」における「つける」は、「つける 11」の記録に関連する。しかし、コーパスで検索すると、(48)のような用例があった。

- (48) a. 五十年の伐期を目標にしているが、十年目くらいから実をつけだしたら、四十年間は実を落とすのだから、その四十年間はクマが実を食べればいい。

栗栖浩司『熊と向き合う』、2001

- b. 食べても時間を決めて、明日の仕事にさしつかえのない時間内で終わるように気をつけだした。

福田俊一、増井昌美『克服できる過食症・拒食症』、2005

(48a)の「つけだす」は、実が実り始めることを意味する。(48b)は、気をつけ始めることを意味する。これらの用法は辞書には記載されていない。したがって、補助動詞の「出す」と結合した「つける」は、前後の文脈がなければ、どの意味を表しているのかが分からないのである。

また、「つけ出す」の語釈②と③は、語彙的な複合動詞の用法である。後項動詞「出す」には、単純動詞「出す」の意味があり、また、前項動詞としての「つける」も単純動詞の意味に関連付けられる。「つけ終わる」や「つけ忘れる」などの語と違って、「付け出す」が辞書に登録されているのは、語彙的複合動詞の用法も統語的複合動詞の用法も持っているからであろう。統語的複合動詞より、語彙的複合動詞が単純動詞との関与度が高いので、語彙としての情報量も比較的多いと思われる。

一方、統語的複合動詞に属しているものの、前項動詞「つける」の意味が限定され、複合動詞全体の意味も習慣化してしまう語例がある。(49)の「付け回す」は「どこまでもうるさくあとをつける」(『大辞林』)行為を描く。これは、「後をつける」の「つける」の意味に関わる。(49)のように、付け回されると、人が不愉快になるものであり、「付け回す」における「つける」の意味が限定されている。「付け回す」とその自動詞「付け回る」の意味は、いずれも「つける 18」に関連付けて記述できる。

- (49) a. 彼はその女の子をしつこく付け回した。(作例)

- b. 彼は私立探偵に付け回されている。(作例)

以上、「つけ始める」と「つけ忘れる」のような「つける」の意味に関連付けにくい語、「つけ出す」のような辞書に登録されていても、多くの「つける」意味に関連付けられる語、「つけ回す」「つけ回る」のような限られた「つける」の意味に関連付けられる語を検討した。「つけ出す」、「つけ始める」と「つけ忘れる」のような統語的複合動詞は、前項動詞の「つける」は多くの意味を表わすことができ、コロケーションまたは文脈を離れて複合語の意味を考えるのが不可能である。これらの語を学習する際に、前項動詞の「つける」より、後項の補助動詞のほうに重点を置くべきである。このような統語的複合動詞「つけ～」は「つける」の典型的な関連語とは言えない。一方、「付け回す」のような見出し語として辞書に登録してあり、複合語における「つける」の意味も限定されている語が少ないので、学習者に提示すべき「つける」の関連語である。

5.5.1.4 語彙的複合動詞「～つける」

続いて、複合動詞「～つける」について検討する。影山（1993）は、語彙的複合動詞の生産性はV2に大きく依存し、さまざまな度合が見られると指摘している。では、V2としての「つける」は合成語にどう働きかけているのだろうか。姫野（1999）によると、語彙的複合動詞の「～つける」は「接着・密着」を何らかの形で含むものであり、「中途半端ではなく、動作をしっかりと完全に行う」（p.110）というニュアンスが伴うという。以下、語彙的複合動詞「～つける」と本動詞「つける」との関連性を中心にして、記述を行う。

①何らかの操作で、離れないようにする

語彙的複合動詞「～つける」には、プロトタイプ義の「つける 1」の「付着」に関連する語が多く存在している。例えば、「編みつける」「結びつける」「縛りつける」「縫いつける」「貼りつける」「綴じつける」「押しつける」「打ちつける」「巻きつける」「着付ける」などが挙げられる。これらの複合動詞の共通点と言えば、物理的な行為を表わすこれらの語における「つける」は、V1の行為を通して、対象物AをBと一体化させ、離れない状態にするということである。「つける」についての記述から分かったように、「つける」は、多くの場合、行為のプロセスより、行為の結果に焦点を当てる行為である。ここで挙げた複合動詞の前項動詞「編む」「結ぶ」「縛る」「縫う」「貼る」「綴じる」「押す」などは、いわゆる「付着」を実現するための手段でもある。

次に、実例を検討し、考察を加える。

- (50) a. 東京でも、大地震が来れば、軟弱な地盤に立つ建物は、杭がしっかりと固い岩盤まで打ち付けられていないと、液状化の被害に遭う可能性が高い。

川西勝『東京大震災は明日起こる』、2001

- b. 下曾我遺跡の曲円形の底板に側板の下縁部だけがごく狭く残っていて、側板の口

径は底板の直径よりもうんと小さく、側板と底板の接合は木針で固定するのではなく、樹皮をもって数カ所綴じつけたものである。

岩井宏実『曲物』、1994

- c. もう一度、ささらえの坐っていた床を見たり、二人の子供の遊んでいた庭の樹木や石を手に触って、別れを告げた。大風の糸を樟の幹に巻きつけたのは、とっさの思いつきだったが、狩野介が風糸に目をつければ、必ず館に近づいて来るに違いない。

矢代和夫（文）柳沢秀紀（絵）『弓の名人為朝』、1996

(50a) の「打ち付ける」は、建物の杭を強く打つことで、岩盤に固定させるという物理的な行為である。打ち付けられた結果、杭がしっかりと岩盤に届いた。(50b) の「綴じつける」は、側板と底板が離れないように、樹皮を綴じて、双方を連結させる行為である。「柱にロープを巻き付ける」と同様、(50c) の「巻きつける」は、大風の糸を樟の幹に巻き、その結果、樟の幹の周りに糸を絡み付けたという行為を描写している。複合動詞の V1 が 2 つの物を付着・連結させるための手段である。また、「つけた」という状態が行為の目的である。これらの複合動詞における「つける」には、「密着させる」という意味合いが含まれているのである。

5.4.1 で触れたように、「つける」は行為の細密度の低い動詞である。「つける 1」の場合、「つける」の一連の行為における接触から、付着に至るまでのプロセス（図 5-1 を参照）には、多くの操作がされる可能性がある。母語話者とは異なり、多くの場合、学習者は身体経験を通して語彙の学習をしていないので、「つける」に暗示されているこれらの行為はいったいどのようなものなのかが想像しにくいのである。これらの語彙的複合動詞「～つける」の前項動詞によって、潜在化している付着までの行為のプロセスが明確に示されている（図 5-1 の第二のステップを参照）。

このように、このグループの語彙的複合動詞「～つける」に対する検討は、学習者の疑問に答えられ、学習者の「つける」の習得に役立つ情報が提供されている。「つける」のプロトタイプ義に関連するこれらの語も、プロトタイプ的な語彙的複合動詞「～つける」だと考える。それゆえ、学習者に提示する際に、プロトタイプ義と連続的に示すべきなのである。

②対象物の表面に塗ったり、染めたりして、浸透させる

「つける 17」の「浸透」に関連する語彙的複合動詞「～つける」には、「塗り付ける」「染め付ける」「吹き付ける」「擦り付ける」などがある。浸透の「つける」は、粉、液体、ペースト状、ゼリー状の A を固体の B に移動させ、ある行為をして A を B の表面に付着させて、B に浸透させる行為を描く（図 5-3 を参照）。では、A を B に接触させてから、浸透させるまで、具体的にはどのような操作をするかという点、このグループの複合動詞の前

項動詞から回答が得られる。

(51) はその実例である。

(51) a. 整髪料をいつも髪にべったり塗り付けて、においをぷんぷんさせている。

『類語』 p. 894

b. 特に流しの下の油や調味料などをしまうコーナーは、湿気と油汚れでいろいろな種類のカビが繁殖する絶好の場所。 中に入っているものを全部取り出して、住居用洗剤を吹きつけてから、熱湯で絞ったぞうきんでふくようにします。

『最強のお掃除テキスト』、2000

(51a) の「塗り付ける」は、整髪料を髪にしっかりとくっつくように厚く塗ることを描く。

(51b) の「吹き付ける」は、洗剤を吹いて、物の表面に付着させる行為である。また、「傷に薬を擦り付ける」の「擦りつける」は、擦ってつけるということである。「皿に花模様を染め付ける」の「染め付ける」は、染めて花の模様をつける行為を描く。これらの前項動詞はいずれも行為を実現する手段であり、「つける」はその目的である。つまり、V1 の「塗る」「吹く」「擦る」「染める」は、A を B に接触させてから浸透させるまでの具体的な操作である。

ここまでの分析から、「薬をつける」と「薬を塗り付ける」の区別も明らかにできる。「つける」は、行為の細密度が低く、浸透の結果をプロファイルするのに対し、「塗り付ける」は、浸透させるための操作が「塗る」に限定されて、行為そのものがより細かく描写されている。このように、学習者にとって、「浸透」の「つける」を正確に把握するには、「塗り付ける」「染め付ける」「吹き付ける」「擦り付ける」をともに学習するのが効果的である。他方、これらの複合動詞は、「浸透」の「つける」の意味の延長線に位置し、「つける」の語彙ネットワークに欠かせない語群である。

③場所・人の近くに寄る

5.4.2 の「つける」の多義分析では、「つける」の意味ネットワークには「接触」と「接近」の2つのスキーマが存在しており、この2つのスキーマと「付着」というプロトタイプ義により、「つける」の多義が派生して多義構造をなしていることを述べた。また、「接近」スキーマに基づいて、「尾行」、「補佐」、「位置」という人をヲ格共起語とする行為と、「停止」という乗り物をヲ格共起語とする行為を表わす拡張義が生まれる。(52) の「駆けつける」「寄りつける」「呼びつける」は、いずれも人の行為であり、目的地や目標人物の近くに寄ることを意味し、「つける」の接近スキーマを共有している。

(52) a. この組織は、大震災があった後、一日目か二日目には神戸に駆けつけて、災害センターを立ち上げます。

横山芳春『自治の挑戦』、2003

- b. だから、自然や風土は、人間がどんなに原型を変造させても、その底辺で常に生き続けている。自然はかんたんには人を寄せつけない厳しいものである。

田村明『江戸東京まちづくり物語』、1992

- c. これは私のひとつの体験だが、私のほかにもインボデン課長に呼びつけられ、威圧された新聞人は数多くいたのである。

小原正雄『青春社会部記者』、1988

(52a) の「駆けつける」は、場所名詞としての二格共起語を要求し、人が走るように急いでどこかへ行くという行為である。(52b) の「寄せ付ける」には使役の意味合いを持っており、人や動物などを表わす名詞がそのヲ格共起語となって、「近くにひきつける」(『大辞林』) ことを描く。それに、「寄せ付ける」は、否定的な文脈で使われることが多い(宮島 1972: 682)。「呼びつける」とは、立場の上の人が下の者を呼んで自分のところに来させる行為である。その受身形の(52c) の「呼びつけられる」は、自分が人に呼ばれてその人自らのところに来させることを表している。この3語の他、「乗りつける」もこのグループに属し、「駅まで車で(を)乗りつける」のように、乗り物に乗って、目的地に到着する行為である。

「駆けつける」「寄せつける」「呼びつける」「乗りつける」における「つける」は、いずれも目標の近くに寄せるという意味を持っている。前項動詞の「駆ける」「寄せる」「呼ぶ(呼ばれる)」「乗る」は、目的地の近くに「接近」するための手段である。「接近」スキーマによる派生義の「尾行」であれ、「位置」であれ、目的地に近づける手段は問わず、その接近した結果のみをプロファイルする。このグループの複合動詞によって、「接近」の「つける」の行為の中身が明確に示されている。

④ 跡をつける

「痕跡」の「つける 5」とは、力を加えたりすることで、対象物にあとを残す、あるいはあとが残るという意味である。この「つける」に関連する語彙的複合動詞として、「刻みつける」「書きつける」「彫りつける」「焼き付ける」「染め付ける⁶⁷」などが挙げられる。(53) はその実例である。

- (53) a. 再生産されることになる音の振動は針により蠟版に刻み付けられ、それを鑄造した版から振動板を用いて再び音に変換される。

L. モホリ=ナギ、利光功(訳)『絵画・写真・映画』、1993

- b. 昨夜のウイスキーのせい、睡眠導入剤のせい、痩せているのにむくんでいて、眉間や口の脇には、寝ていた時にもしっかりと刻み付けていたのだろう苦い皺の痕が残っている。

藤沢周『焦痕』、2005

- c. この呪文は石に綺麗に刻みつけたり、旗に染めつけられているだけでなく、輪蔵とも呼ばれる祈禱車の中にぎっしり詰めこまれている紙片にも、くり返しできるだけ多く刷りこまれている。

R. L. バードソルほか、山本健一郎（訳）『ミニヤコンカ初登頂』、1998

- d. 実際にその頃、手帖に書きつけたよろこびのコレクションは、いま読み返してみますと、じつにたあいのないものばかりであるのに驚きます。

五木寛之著『生きるヒント』、1993

(53a) と (53c) の「刻み付ける」は、「彫って、あとをつける」(『大辞林』) という物理的な行為を描く。そこから派生し、(53b) の「しっかりと心にとどめておく」(『大辞林』) という意味となり、心に印象深く残っていることを表わす。心に印象を残すことを、板に跡を残すことにたとえ、メタファー的な派生である。また、(53) c-d の「染め付ける」と「書き付ける」も「つける 5」に関連する。(53c) の染めることで旗に呪文を残すことと、(53d) の手帖によるこびのコレクションを書いて残すことは、いずれも文字としての痕跡を残したという結果を持っている。

「痕跡」の「つける」の典型的なコロケーションである「あとをつける」が用いられるときに、それは、どのようなあとを残すのか、どのような道具でどのようにしてあとを残すのかが場合によって異なり、文の中で判断しなければならない。複合動詞「刻みつける」「書きつける」「彫りつける」「焼き付ける」「染め付ける」によって、「あとをつける」方法が限定されるのである。つまり、単純動詞より、複合動詞によって表される行為の細密度が上がり、あとをつけるための手段や道具なども明らかになった。

⑤物を取り付けて、一定の場所に固定する状態にする

「設置」の「つける 3」は、B に A を取り付けて、A をそこで機能させるという行為である。この用法に関連する複合動詞には、「取り付ける」「作り付ける」「据え付ける」「備え付ける」などがある。(54a) は実例である。

- (54) a. また、天井にシーリングファンを取り付けたり、空気清浄機を使ったりしても空気環境の改善は見込めます。

小池康壽（編）『現代家相学で「快適」な住まいづくり』、2003

- b. ゼルダ伯母さんは、ジェンナのすぐわきの壁に作りつけられた小さな木の扉を指さした。

アンジー・セイジ、唐沢則幸（訳）『七番目の子』、2005

- c. 大人二、三人が乗ればいっぱいになるほどのサイズだが、外観は本物そっくりにつくられている。電車の中には自転車が据え付けられていて、ペダルをこげば市電と同じレールの上を走ることができる。

小川裕夫(編)『日本全国路面電車の旅』、2005

- d. マウゼンは立ち上がり、入り口近くの壁に備え付けられていた内線電話の受話器をとる。

仁木健『Add』、2004

(54a) のように、「取り付ける」は、装置することを意味する。「浄水器/部品/警報装置/アンテナ/金具を取り付ける」などのコロケーションが存在している。これらのヲ格名詞は、いずれも付属品を表わす語である。また、(54b) の「作りつける」は、木の扉を取り外しのできないように壁に取り付けて作るという行為である。「作りつける」は、「家具などを部屋の壁面などに固定して取り付ける」(『大辞林』) ことを表し、「書斎に書棚を作りつける」もこの用法の実例である。(54c) の「据え付ける」は、電車の中に自転車を置き、しかもそれを動かないようにする行為である。「壁に防犯カメラを据え付ける」も同様の実例である。(54d) の「備え付ける」は、入り口近くの壁に必要である電話の受話器を設備して、それを使えるようにすることを意味する。

「取り付ける」「作り付ける」「据え付ける」「備え付ける」は、「設置」の「つける」と同様、「B に A をつける」の定型文で用いられ、場所 B に物 A を動かないようにして設備する事象を描写する。そして、A がそこで機能する。前項動詞の「取る」「作る」「据える」「備える」は、一見、共通点が見出せないが、「つける」と結合して複合動詞をなすと、A を B に設備するまでの操作が限定されるようになった。「取り付ける」からは、A を取って B に移動させ、B に装置する行為、「作り付ける」からは、A を先に作り出して、そして B に取り付ける行為、「据え付ける」からは、A を B という場所に固定するようにして、設備する行為、「備え付ける」からは、必要な A を決まった B に置いておき、機能させる行為が見られる。つまり、前項動詞によって、この 4 語における「つける」の「設置」の意味の上に、行為の方向性や A の由来などの要素が添えられる。

⑥ 点火をする

「点火」の「つける 4」には、「火をつける」というコロケーションがあり、それは、物を燃やすために、火を移動物のように、タバコ・蠟燭・ストーブ・家などに付着させるという事象を表す。語彙的複合動詞「焚きつける」は、「つける 4」に関連して、火をつけて燃やすという意味を表わす。(55) は「焚きつける」の実例である。

- (55) a. なにしろ彼のベッドは人の出入りする部屋にあったのだし、住人共同のボイラーから昨晚の石炭殻を掻き出して今日の石炭を焚きつけたり、ポンプで粗末な容器

に水を汲んだり、広間を掃除しておが屑を撒いたり、その他の仕度の物音で邪魔されるのだから。

C. ディケンズ、小池滋（訳）『リトル・ドリット』、1991

- b. 本当いえば、これから一里の道を歩いて帰って、米を買いにも行き、それからご飯を焚きつけるのだと思っていたのに、ヨシノは嬉しくてたまらなかったのである。

嵐山光三郎『文人暴食』、2002

- c. けれどジョージは「頑張ってみようぜ。もう少し待って、いろいろ見てみよう」と私を焚きつけた。だから私は待って、見てみた。この街を好きになることはできなかった。

ヘンリー・アンダーソン；鈴木正弘（監訳）『アメリカ生まれのアフリカ人』、2002

(55a) の「焚きつける」とは、「石炭に火をつける」ことである。「石炭を焚く」が成立するが、「石炭をつける」は不自然な表現である。(55b) の「焚きつける」は、「炊きつける」とも書け、ここでは煮るという意味である。当然のことながら、石炭を燃やすことであれ、ご飯を煮ることであれ、火をつけなければならない。(55c) の「焚きつける」は、抽象的な意味である。うまい言葉をかけて、そうする気持ちになるようにしむけることを、火をつけることにたとえ、メタファーによる拡張である。

前項動詞である「焚く」のヲ格共起語として、「ご飯・粥・玄米・線香・香・松明・薪・石炭・篝火・暖炉・ストーブ・風呂」などが挙げられる。「線香」といった可燃物と共起すると、「線香に火をつける」という意味になり、また、ご飯類の語と共起すると、「炊」と書くのが一般的であり、炊飯という意味となる。前者は、(55a) に関連して、後者は、(55b) の用法に関連する。この「焚く」の性質から言うと、「焚きつける」においては、「焚く」が主要部分として機能しているのである。

⑦相手にしつこく近寄り、無理矢理に何かをする

「つける 18」の「尾行・追跡」は、動作主が人、または乗り物に接近し、それに体を寄せ、ひそかに後を追うことを目的とするという行為である。この意味に関連する語彙的複合動詞として、「売りつける」と「押し付ける⁶⁸」が挙げられる。

- (56) a. 例えばマンション業界。販売員は自分たちをだまそうとしているのではないか、
なんとか高く粗悪な物件を売りつけようとしているのではないか、そんな眼で見られがちです。

長嶋修『住宅購入学入門いま、何を買わないか』、2005

- b. 本格的な高齢社会において、現在のような定年制度を維持し続けている企業は、社会的コスト負担を国民全体に押しつけながらビジネスを行っていることになる。

(56a) の「売りつける」とは、無理矢理に買わせるという意味であり、相手を騙したりして、悪質な売る行為である。また、行為の主体も受け手も人である場合が多い。「売りつける」行為のプロセスを考えるてみると、売るという目的を実現するために、まず目標人物に接近しなければならず、そして、相手に買わせるように、いろいろ話したりしてしつこく説得するといった一連の行為が含まれる。それに、相手が買うまで、そばを離れずに付いていく。

また、(56b) の「押し付ける」とは、国民の望ましくないことを無理矢理に負担させるという行為である。「責任を押し付ける」や「不利な条件を押し付ける」などのコロケーションにもこのような意味合いが含意されている。相手に引き受けさせることを、「押して、離れないようにする」(『大辞泉』) ことにたとえ、物理的な行為からのメタファーによる拡張である。

このように、「売りつける」と「押し付ける」には、「相手にしつこく近寄り、無理矢理に何かをする」要素があり、この点では一致している。「売りつける」の物売るために、しつこく相手に近づき、離れようとしないうという行為も、「押し付ける」の相手の否応なしに強制的に自分の意思を加えるという行為も、相手に不満に感じさせるに相違ない。「つける 18」の「尾行」も、相手に近づく行為を表し、場合によっては嫌われることもある。このように、「売りつける」と「押し付ける」の意味には、「つける」の相手に接近するという要素と、無理矢理に何かを引き受けさせるという要素があるのである。

⑧固定させる、安定な状態にさせる

「つける」のプロトタイプ義は、物を他の物に付着させて、動かない状態にすることを目的とする行為である。また、「つける」の諸意味を見渡すと、「B に A をつける」事象の結果の共通点として、A を B に固定させ、A を安定な状態にさせるということが挙げられる(「一時付着」などの用法を除く)。「落ち着ける」と「植え付ける」の意味からは、「つける」のこの特徴が見られる。(57) はその実例である。

- (57) a. 屋台時代の呼称の名残りで、もとは文字通り、客が立って食べることを言ったが、その後は転じてカウンターで食べることを指すようになった。屋台の握りずしは、腰を落ち着けて食べるものではなかった。

日比野光敏『すしの事典』、2001

- b. ミュウは台所に行って、ミネラル・ウォーターをグラスに何杯か続けて飲んだ。そして居間のソファに腰を下ろし、ゆっくりと深呼吸をして気持ちを落ちつけた。

村上春樹『スプートニクの恋人』、1999

- c. 秋に球根を植え付けるが、その際に配色を考えて、球根と球根の間にパンジーやビ

オラなどを植えると、春まで花壇が裸地にならない。

土橋豊『カラー・ガーデニング』、2002

- d. 日本のアイデンティティの意識を植え付けられた者は、それを己の姿の核として育んでいくことが出来る。

櫻井よしこ『迷走日本の原点』、2001

(57a) の「腰を落ち着ける」は、物理的な行為であり、ある場所に定着することを意味する。「椅子に腰を落ち着ける」も成立すれば、「ある町に腰を落ち着ける」も「国連本部に腰を落ち着けて翻訳の仕事をする」も成り立つ。つまり、「腰を落ち着ける」は広くある居所や地位、職業などに定着することを表わすのに用いられる。(57b) のような人の心情に関わる語と共起する「落ち着ける」は、心理状態を表わす抽象的な行為を描いている。

(57) a-b の共通点はというと、両方ともヲ格共起語で表わすものを安定させる状態にするところである。なお、コーパス調査⁶⁹の結果によれば、「落ち着ける」のヲ格共起語には、「体、身、腰、尻、筋肉、髪の毛」など体あるいは身体部位に関連する語、また「気、気持ち、心情、運氣、状態」など心身状態を表わす語が多い。

また、(57) c-d の「植え付ける」を考える。(57c) の「球根を植え付ける」は、「空地に野菜を植え付ける」と同様、ある植物をある場所に植えて、そこで成長させるようにすることである。この「植え付ける」のヲ格共起語は、「芽、球根、株、根、草、苗」など植物に関連する語である。また、その派生義には、(57d) のような、ある新しい観点・観念を人に教え、人の心に刻み付けるという意味がある。この場合、ヲ格共起語として、「意識、印象、精神、記憶、感情、感覚、競争心、愛国心」などの心理・思想を表わす抽象名詞が挙げられる。物理的な行為であれ、抽象的な行為であれ、対象である植物やある感情を一定の場所に定着させるところは一致している。

このように、「落ち着ける」と「植え付ける」の2語には、「つける」の対象物をある場所に固定させ、安定とした状態にさせるという要素がある。換言すれば、「落ち着ける」と「植え付ける」を正確に理解するには、単純動詞「つける」に含意される「物が動かないようにする」意味合いを把握しなければならないのである。

以上で、語彙的複合動詞「～つける」を「つける」の意味に関連付けて、8つのグループに分けて記述を試みた。ここまで取り上げた複合動詞を見渡すと、どのグループにおける後項動詞の「つける」も具体的な行為を意味し、前項動詞のほとんどは他動詞である(姫野 1999: 120)。5.4 の検討から「つける」行為のプロセスにはいくつかのパターンがあるということが分かった。例えば、「移動—接触—付着(固定)」型、「移動—接触—浸透」型、「移動—接近」型などが挙げられる。このように、「つける」は、1つの操作ではなく、一連の操作を意味する動詞である。語彙的複合動詞「～つける」における「つける」は、上記の一連の行為のどちらかの部分をプロファイルしているので、単純動詞「つける」の意

味を正確に理解すればこそ、複合動詞の意味をはじめて明確に把握できるようになるのである。

また、語彙的複合動詞「～つける」の記述を通して、「つける」行為に潜在化している細密な操作が見られるようになった。語彙的複合動詞「～つける」は、単純動詞「つける」より、細密度が高い行為を描写する。前項動詞と組み合わせてこそ、前項動詞から「つける」に潜在化している行為の在り方が表に現れるようになった。の立場から言うと、身体経験を持って語彙の学習をしていない学習者は、語彙的複合動詞「～つける」を通して、具現化された「つける」行為のプロセスを、無理なく獲得することができるようになる。

5.5.1.5 統語的複合動詞「～つける」

統語的複合動詞においては、後項動詞はそれ自身の意味を失う代わりに、補助動詞として機能する。統語的複合動詞「～つける」も、直接に単純動詞「つける」に関連付けても記述することができないと思われがちであるが、実はそうではない。以下、統語的複合動詞「～つける」を4つの用法に分けて記述を試み、「つける」に「～つける」をどのように意味づけるのかを究明し、学習者への示し方を提案する。

① いつもしていて、それに慣れる

統語的複合動詞「～つける」は、日常生活に関わる基本動詞と結合して、習慣を表わすことができる。「飲みつける」「読みつける」「乗りつける」「持ちつける」「履きつける」「使いつける」「見せられつける」などがこの用法の語例である。(58)は「食べつける」と「やりつける」の実例である。

- (58) 自分が平常、食べつけないもの、やりつけないことに、かなりひどい拒否反応を起す。幼稚園へ入った長女の上に、むかしの自分の欠点や弱点を発見して、私は母親としてそれを矯正しなければと思う前に、庇うほうへ廻ってしまう。

平岩弓枝『極楽とんぼの飛んだ道』、2002

(58)の「食べつける」、「やりつける」はそれぞれ「食べる」、「やる」のに慣れていることを意味する。「つける」の前に来る前項動詞には、日常生活によく行う動作を表わす動詞が多い。習慣化した行為は、つまりよく行うことであり、日常の行為から切り離して考えてはいけない。

姫野(1999)が示しているように、統語的複合動詞の「～つける」は習慣を表わすもので、長期的に見れば、一定の状況への絶えざる「接触」ともとれる(p.110)。また、5.4.1の検討からも分かったように、「つける」のプロトタイプ義においては、「接触」は「付着」を実現させるための第一歩である。絶えずに対象に接触し、それをするのが習慣になってしまうのが「～つける」のこの用法である。着用、設置の「つける」であれ、停止、定着

の「つける」であれ、多くの「つける」行為の結果は対象物をあるところに固定させた状態になるのである。そこから、ある行為を対象にして長期的に働きかけた結果、習慣化してしまう。常に行うことを習慣化してしまうことを、絶えず接触する行為にたとえ、メタファーに基づき、派生しているのである。

② 動作・作用が相手に確実におよび、強い勢いでそれをする

この「～つける」は接尾語的に用いられ、行為の勢いの激しさと、行為や作用が相手に及び、影響を与えることを表わす。つまり、行為の力の強さと方向性の2点である。このような「～つける」にはこの2点を兼ねて含める複合動詞もあれば、どちらかの片方を重んじるものもある。

- (59) a. そうしたところに立ってみると、なにも頭をおさえつけて、無理やり挨拶をさせる必要はなくなります。

幼年教育研究所(編)『しつけのポイント 50』、1988

- b. 立山は余誠格が茶碗を投げつけたのはきっと怒ったからだろうと思って入り口へ行き、耳を壁につけて聞こうとしていたら、余誠格が飛び出して来たので鉢合わせになってしまった。
(=5.4.2 (32b))

高陽、鈴木隆康 永沢道雄(訳)『西太后』、1995

- c. 大助はさけび声をあげてにげだした—と思ったとたん、だれかに、いきおいよくぶつかった。「あぶないじゃないの！」ききなれた声が、しかりつけるようにいった。お母さんだった。

三田村信行『おそろしい手紙』、1990

- d. こうして代表同士がテーブルについたからには、その信義を損なわないようにすること、すなわち両者がすべてを信じ合って、本日約束通り調印をするべきではありませんか」社長は押し黙ったまま、顔を紅潮させて私をにらみつけていたが、やおらペンを取り上げると、契約書の署名欄にさっとサインをした。

檜谷芳彦『「発言力」が面白いほど身につく本』、1999

まず、(59)の「押さえつける」、「投げつける」、「しかりつける」、「にらみつける」のほか、「締め付ける」、「どなりつける」、「たたきつける」、「こすりつける」、「脅しつける」、「責めつける」、「攻めつける」などの前項動詞の特徴をまとめると、いずれも身体部位を駆使して勢いよく行う行為ということである。V1の後ろに「つける」を添えるとしても、V1の語意の変化は生じない。しかし、前に来る動詞を強めたりする働きを持っている。これらの複合動詞はいずれも相手に向かって勢いよく行動することを描き、行為の方向性と激しさの両方をともに強調する。

また、「照りつける」もこのグループに属する語例である。自動詞の「照る」につき、日

差しが激しく照ることを描写する。「照る」と比べれば、行為の方向性より、行為の激しさが重要視されるのである。一方、「貸す」、「送る」などの動作動詞に次ぎ、その行為がある対象に向けられる意を表わす。この場合、後項動詞「つける」は何の意味も持っておらず、ただ行為の方向性を示している。それに、この場合の前項動詞はある方向に向かって働ける語に限られる。

- (60) a. 銀行は、国家レベルの建設プロジェクトや外国との合弁企業に一〇五億ドルの外貨借款を貸しつけた。いい換えれば、この外貨貸しつけは中国人の個人外貨貯蓄で賄えたと理解してよい。

莫邦富『十二億人市場を狙え 中国経済の魅力とリスク』、1995

- b. 本来、請求書はもらって嬉しいものではない。勝手かもしれないが、バーに遊びに行ったあと、一週間もせずに、その店の名の入った封筒が送り付けられてくるとうんざりする。今度はどれくらい請求してきたかと、見るのが怖くなる。

渡辺淳一『渡辺淳一全集 第24巻』、1997

物理的な行為を表わす「つける」の諸用法を見渡すと、行為の勢いの強弱を問うものはない。また、「つける」には動作の方向性も特に問題にされていない。「BにAをつける」から見れば、「つける」がAがBに接近・接触するプロセスを描いているので、AがBに向かって移動することもある。「貸しつける」の「貸す」も明確な方向性の持つ行為である。それに、(60a)も示しているように、「貸しつける」の主語となるもの多くは銀行のような金融機関で、ヲ格名詞となるのは、金・資金・費用など金銭関係のものに限る。補助動詞「つける」と組み合わせると、「貸す」の意味縮小が見られた。(60b)の「送り付ける」は好ましくない請求書を送り届けることを描く。「貸しつける」、「送りつける」この2語における「つける」は意味上単純動詞と関連付けられない。しかし、行為全体を考えると、「つける」を添えることで、行為がその受け手に及ぶということを表わせるようになった。

さらに、「言いつける」と「申しつける」もこのグループの語例である。(61)のように、「言いつける」と「申しつける」には「立場の上の人が下の者に命令する」というニュアンスが含まれている。こうして、動作主と動作対象の関係が限定されている。つまり、行為の方向性が決まっている。

- (61) a. 弟子とか使用人とかの目下の者に、居丈高な口調で用事を言いつけたり、小言を言ったりする人がいます。

青山俊董『道元禅師に学ぶ人生』、2005

- b. 「わたしは、いかなる場合でも、將軍さまのお味方をいたします。どうぞ、何なりとご用をおもうしつけください」と、いいました。

筑波常治(作)、坂本玄(絵)『足利義昭』、1999

語感からいうと、この「～つける」は多くの場合、無理矢理にあるいは勝手に相手に作用することを表わす。この「～つける」を用いることで行為の受け手としては、どうもそうやられるのが嫌だという気持ちが伝わる。一般的には、この「～つける」はいいことに使わない。

上記で記述したように、この「～つける」は本動詞「つける」とは意味上直接的な関連性を持っていないものの、行為の結果から見ると、いずれも自分の行為や作用が、相手に及び、影響を与えたという特徴を持っている。「つける」の場合も、動作主に「つけられた」ことで、Bにその行為・作用の影響を受け、B自体が形式・状態の変化が生じる。この点においては、この「～つける」と本動詞「つける」とは関連付けられる。(62)の「聞きつける」、「嗅ぎつける」、「見つける」は代表的な語例である。

③感覚器官でとらえて、それを探り出す

また、「～つける」は耳、鼻や目などで感じ取って、何かを探り当てる意を表わすこともできる。いわゆる感覚器官を通しての認識や知覚を描く複合動詞である。

- (62) a. 犬は耳がいいので、そのぶん雷の音もずっと大きく聞こえるし、人間の耳には届かない遠くの雷鳴も先に聞きつける。だから、釣りに出かけたとき、チャップはわたしの行動に気をつけていればまちがいない。

チャップマン・ピンチャー、中村風子（訳）『犬のディドより人間の皆様へ』、1994

- b. 領事さん、それは見わけるといふんじゃなくて、嗅ぎつけるんですな。必要なのは、嗅ぎつけることでして、こいつは、聴覚、視覚、嗅覚とならべた場合、どうも特別の感覚のようです。わたしは、そういった紳士づらを装っていた犯人をなんども捕えましたよ。

ジュール・ヴェルヌ、江口清（訳）『八十日間世界一周』、2004

- c. ハガーマンはこの取り組みについて批判を受けた—当時は、DNAを社会問題の解決に役立てようとするありとあらゆる試みに対し、全体主義的な恐ろしい未来を嗅ぎつける人たちの運動が盛り上がっていたのだ。実際、この問題は個人的であると同時に社会的なものでもある。

アンドリュー・ベリー；ジェームス・D・ワトソン、青木薫（訳）、DNA2003

- d. 合格者の中に自分の名前を見つけて喜ぶ。 『コロケーション』 p. 1123

「つける」の用法の1つは、「目・耳・鼻・口・手・気をつける」などのように、五感を駆使することで、感覚や意識を働かせる意である（「つける 14」）。「見る・聞く・嗅ぐ」などの動詞と合わせて使うのは、「つける 14」に関連づけて考えれば、理解できるだろう。

意味上、「聞きつける」「嗅ぎつける」「見つける」3語の共通点が、知られていないこと

や、隠れているものなどを見出したり、発見したりすることにある。人の身体体験から考えると、「聞きつける」、「嗅ぎつける」、「見つける」はいずれも動作主が物理的、あるいは心理的に対象に近づこうとする行為である。しかし、「つける」の「接近」とは異なり、相手に見る・聞く・嗅ぐという行為で働きかけ、目標物を目立たせるのが最終的な目的である。また、(62c)のように、この3語はいずれもメタファー的に派生でき、「何かを探り出す」という抽象的な意味を表わす場合もある。行為全体からいうと、「つける」を添えることで、対象に接近することをプロファイルし、「つける」とは関連付けられる。

④工夫を凝らして美しく何かする、または目立たせるようにわざと何かする

統語的複合動詞「～つける」に、前項動詞の表わす行為を行い、何らかの工夫をして対象物をもっときれいにし、または目立たせるようにする意味合いが含まれる。このような語例には、「飾り付ける」「盛り付ける」「見せつける」がある。(63)は実例である。

- (63) a. 香ばしいエッセンスの香りとさくさくした歯ざわりのこの焼菓子、豪華な銀製の皿に飾りつけられ、見るからに食欲をそそる外観で会食者の前に運ばれた。

桐生操『血の伯爵夫人 エリザベート・バートリ』、1995

- b. 趣向を凝らしたおぼんざいが彩りよく小鉢に盛り付けられて次から次へと登場する。

『歩く京都』、2001

- c. 家庭用の消火器では全く歯が立たなかった火災は、消防隊員によって直ぐに消しとめられた。本職の威力をまざまざと見せつけられたような恰好だったが私には、消防服を着た彼らが逞しくみえた。

阿刀田高選『やっぱり奇妙にこわい話』、2002

(63)の「～つける」には、念を入れて工夫をする意味が含まれている。(63a)の「飾り付ける」は工夫を凝らして美しく飾ることであり、(63b)の「盛り付ける」は見栄えがするように、料理を食器に美しく入れることである。また、(63c)の「見せつける」は自慢したい気持ちで、相手に見せる意味である。つまり、「見せつける」の前に来るヲ格対象物を目立たせる気持ちで振舞うのである。この点においては、「飾り付ける」が「盛り付ける」と同様である。また、結果の対象物を目立たせる点は前にも触れた「聞きつける」、「嗅ぎつける」、「見つける」の用法に類似している。

以上、統語的複合動詞「～つける」の用法を4つに分けて、実例を分析しつつ、それぞれ検討した。後項動詞である「つける」は、生産性が高く、多くの動詞と結合することができるとはいえ、考察を通して、各用法においては、前項動詞から共通点が抽出できることが分かった。また、統語的複合動詞「～つける」は、単純動詞「つける」の意味に関連付けにくいものの、行為の方向性、目標を実現するためのプロセスなどから「つける」と

の関連性が見つかった。「つける」の語彙ネットワークにおいて、統語的複合動詞「～つける」は意味上「つける」と離れていても、「つける」の事象との関連性を学習者に明確に示せば、習得に役立つ支援になると考える。

5.5.1.6 「接頭辞+つける」の語例

この部分では、「接頭辞+つける」を検討する。その語例として、「くっつける」と「ぶっつける」を挙げる。(64a)の「くっつける」は顔を文字にすき間なくぴったりと接しようとする意である。(64b)は語に語を繋ぐことを意味する。いずれにしても、接頭辞「くっ」を加えることで、物と物、事柄と事柄を隙間なく付着させるという意味合いが生じる。それに、「つける」には、主となるものに付属品を付着させることを描いているのに対し、「くっつける」は「物体の形状や接着方法を問わない」(松本 2006: 71)。

- (64) a. 近眼なので、顔をくっつけそうにして、紙吹雪に書かれた文字をたどたどしく読んだ。

木村航『かえってきた、ペとペとさん』、2005

- b. 中国語は単語の変化がなく語順で文意が決まり「孤立語」と呼ばれますが、日本語は次々に補足して文意を決めていくもので、これは「膠着語」と呼ばれます。補足するというのは、例えば「行かないことはない」というように、どんどん言葉をくっつけていくもので、両者はまったく違うものです。

岩松研吉郎『日本語の化学』、2001

「くっつける」は他のヲ格名詞とも共起できる。その際は「つける」の他の意味用法と関連付けられる。例えば、「取れたボタンをくっつける」、「折れた骨を固定してくっつける」、「新製品に景品をくっ付けて売る」、「名詞の前に数詞をくっつける」(『コロケーション』p. 386 による)などが挙げられる。また、コーパスで検索したところ、「くっつける」のヲ格名詞として出現頻度の高い語は「顔・鼻・頬・頭・耳・足・額・背中・体」のような体や身体部位を表わす語である⁷⁰。このことから分かるように、(64a)のような「くっつける」は常用度が高いので、学習者に「くっつける」を提示する場合、「受話器に耳をくっつける」、「窓に顔をくっつける」のようなコロケーションを中心に提示すべきである。

また、(65)の「ぶっつける」は接頭辞「ぶっ」を用いて行為の激しさを描く。「ゴミ箱に車をぶっつける」、「壁に頭をぶっつける」と同様、(65a)の「岩に膝がしらをぶっつける」は物理的な行為で、強く当てることを描く。また、(65b)のように、遠慮や隠し事をしないで、心にあることをすべて表わすというメタファー的に用いることもできる。この場合、「ぶっつける」のヲ格名詞となるのは「疑問・難問・欲求・憤怒・不満・嫉妬・怨み」などの語である。

(65) a. 私は滝の中で転んで岩に膝がしらを思いきりぶつつけた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、1985

b. 私に腹を立てるくらいのその母親の心情を、私に向かってぶっつけなさんなよ。

ぶつつけるのは、わが子に向かってですよ。

伊藤友宣『プロカウンセラーが明かす子どもの個性を伸ばす魔法の聞き方』、2003

このように、「ぶつつける」の意味においては、「つける」の対象物に接触する意が残り、「付着」は問題にされていない。「ぶっ」を用いて、その接触の激しさを表現する。当然のことながら、「ぶつつける」は「つける」のすべての用法に共通しているわけではない。

接頭辞「くっ」と「ぶっ」が「つける」動作の様態を表わす。「つける」の語彙ネットワークを構築する際に、決まった「つける」の意味に関連づけられた複合動詞と比べ、この「接頭辞+つける」は特別な存在であるので、特別な扱いをすべきである。

5.5.1.7 一語化した語例

「つける」に関わる複合動詞には、一語化したものもある。一語化した語は、形式上前項動詞と後項動詞があるが、語の意味を検討する際には、前項動詞と後項動詞を分けて考えるのが不適切である。一般的には、前項動詞と後項動詞の意味は、一語化した語には現れない。しかし、「つける」の一語化した語例を考察してみると、「つける」とはまったく関連付けられないとも言えないのである。以下、「付け上がる」「当て付ける」「取り付ける」「付け込む」「付け入る」を挙げ、「つける」との関連性を検討する。(66)は「つけあがる」と「あてつける」の実例である。

(66) a. 山猫は、かま猫の家にくる前に、書記の猫たちがうそのつげ口をしているよう
も見てきていたのです。「あいつらは自分より弱いやつを見るとつけあがる
んだ！自分より仕事ができるやつがゆるせないんだ。あの事務長だって同じさ。や
つら、きみをおとしいれようと…」かま猫は山猫の話を信じられませんでした。

鈴木俊介、宮沢賢治（原作）『賢治のトランク』、1996

b. 「訴訟をつづけるように検事が夫妻を説得すればよかったのさ」ポールも口をは
さんだ。「テッドはそのために金をもらっているんだし、弁護士として教わって
きたことをしただけだ」デイヴがあてつけるように言った。

アンドリュー・ニーダーマン、庭植奈穂子（訳）『悪魔の弁護人』、1998

(66a)の「つけあがる」は「相手の寛大さにつけこんで、増長する」（『大辞林』）意味である。(66b)の「あてつける」は「ほかの事にかこつけて、またそれとわかるように、相手の気にさわるようなことを言ったりしたりする」（『大辞林』）意味である。「付け上がる」と「当て付ける」はいずれも相手に対する態度を表わす語である。相手に近づくよう

にするという行為の様態が単純動詞「つける」に類似している。「つける」の特定の意味に関連付けるのではなく、行為そのものの様態や作用の方向性に対する考察から「つける」との関連性が見つかるのである。

また、5.5.1.2 での「付け込む」に対する考察から分かるように、機会をうまくとらえて利用することを意味する「付け込む」も一語化した複合動詞である。さらに、「付け込む」の類義語の「付け入る」も一語化した例である。相手の弱みやすきをうまくとらえることで、意味上「付け込む」と類義している（例は(67) a-b）。しかし、用例を見れば、使用範囲にはずれがある。「付け込む」はよく比喻表現として使われる。(67) c-d から明らかになったように、「付け入る」は戦いやスポーツの戦術として、相手の弱点を利用し、勝利をとる技を表わす。また、(67d) のように、「付け入る」の前後にはよく「すきがない（ある）」、「すきを与える」、「すきを見せる」のような表現と共起する。「付け入ってすきがあった」という行為の流れで、「付け入る」は「すきを作る」という結果が伴う。これも一種のコロケーションと言える。

- (67) a. 世界の常識は他国の失敗や弱みに付け込んで甘い言葉で擦り寄りながら権益をむしり取ることである。
(=5.5.1.2 (41b))

松村劭 『教科書が教えない日露戦争』、2004

- b. しかし、高価さを競うかのような「ミストサウナ」も「外国製のキッチン」も、せいぜい一五年程度で必ず交換の時期がくるのです。設備過剰な住宅は、購入者に媚びた住宅であり、購入者の知識の抜け穴につけこんだともいえる住宅です。
(=5.5.1.2 (41c))

長嶋修 『住宅購入学入門いま、何を買わないか』、2005

- c. 死を決していた侍は、ようやく余裕をとりもどし、狂人の手もとにつけいり小手を打ってとりおさえたのである。相手の手もとにつけいり、おそろべき威力を発揮する小太刀の技は、富田流と柳生新陰流にその精華をあらわしている。

津本陽 『真剣兵法』、1991

- d. つまり、冷戦終結によって戦争は終わったという油断と 90 年代に行われた規制緩和や自由化の推進が、アメリカに反発する組織に、容易に付け入る隙を与えたということにほかならない。

米山秀隆 『世界恐慌』、2002

「付け込む」と「付け入る」から共通に見られるのは、対象に接近し、巧みに対応したり、相手の欠点を見出したりする点である。逆に言うと、機会を捉えることであれ、相手の弱みを利用することであれ、対象または相手に接近しないと実現できないことである。この2語から抽出された「接近」という行為の用法は「つける」の派生的なスキーマと一致する。

また、もう 1 つの一語化した例は「取り付ける」の抽象的な用法である。(68) は実例である。

- (68) a. 宜子の古い知人がそこで働いているので、昼休みに会って、いろいろと話を聞く
約束を取り付けてある。

二階堂黎人『宇宙神の不思議』、2002

- b. 日本は積極的に新ラウンドを提唱し各国の協力を取り付け、73 年に東京ラウンド
が開始された。

通商白書、1998

コーパス調査⁷¹では (68a) の「約束を取り付ける」の出現頻度が一番高い。540 個のコーポレーションのうち、22 件を占めている。また、「同意/支持/契約/了解を取り付ける」が (68) a-b とは同様の用法であり、「相手を説得して、自分の思い通りの返事を得る。獲得する」(『大辞林』) ことを意味する。「取り付ける」のこの用法は、「取る」とも「付ける」とも関係しない。前項動詞と後項動詞を分けて考えるより、一語化した語だと判定するのが適切である。限定された「つける」の意味に関連付けられなくても、「取り付ける」が表れる相手への心理的な接近は「味方につける」などの用法と共通する。「意見を取り付ける」行為も、他人の意見を移動物のように自分の方に移し、自分に付着させるように獲得する点では、「つける」とは同様である。

以上、「つける」の一語化した語例を考察した。前項動詞と後項動詞が組み合わせたことで、新しい意味が生まれ、単純動詞からは推測できないようであるが、実は「つける」とは関連付けられる。「つける」の一語化した語例は、統語的複合動詞「～つける」のように、「つける」の個々の意味に関係するのではなく、行為全体の様態、作用された結果、行為の方向性などをプロファイルすれば、「つける」とは関連付けられるのである。

5.5.1.8 「名詞/形容詞/形容動詞+づける」の語例

「つける」に関連する複合動詞には、V-V 型複合動詞のほか、N/A/AN-V 型の複合動詞もある。ここでは、「名詞/形容詞/形容動詞+づける」と名付け、「つける」の意味に関連付けつつ記述する。インターネットで公開された「コトバンク」の逆引き検索機能を利用して調べたところ、「づける」で終わる語が 66 件あった⁷²。そのうち、本研究対象の「つける」と関係しないものと重複したものを除くと、29 件の「名詞+づける」の見出し語が抽出できた。また、「形容詞+づける」と「形容動詞+づける」の語例がそれぞれ 1 つずつあった。「近づける」と「元気づける」である。表 5-7 は、「名詞+づける」の語例を示し、それにおける「つける」の意味用法に基づいて、分類を行った結果である。

表 5-7 「名詞/形容詞/形容動詞＋づける」の語例

関連する「つける」の意味	語例
「つける 5」	「跡付ける」「傷つける」
「つける 6」	「口付ける」
「つける 12」	「理屈付ける」、「基礎付ける」、「印象付ける」、「運命付ける」、 「義務付ける」、「裏付ける」「名付ける」、「価値付ける」、「意味付け る」、「特徴付ける」、「特色付ける」
「つける 13」	「元気付ける」（形容動詞）、「力付ける」、「勇気付ける」 「結論付ける」、「決定付ける」、「片付ける」、「取り片付ける」、「縁付 ける」、「方向付ける」、「位置付ける」
「つける 14」	「心付ける」
「つける 16」	「関係付ける」、「関連付ける」、「紐付ける」
「つける 17」	「色付ける」
「つける 18」	「近付ける」（形容詞）
関連付けられない	「言付ける」

まず、語例を通して前項の名詞の特徴をまとめる。前項の名詞となる語の多くは事柄を表わす抽象名詞であり、物名詞はほとんどない。「紐づける」の「紐」は物名詞でありつつ、複合語全体は「紐をつける」という物理的な行動を意味するのではない。このように、「名詞＋づける」は具体的な行為より、抽象的な行為を表わすことが多いのである。

また、多くの前項の名詞が「つける」とコロケーションを成すことができる。しかも、その前項の名詞の多くは「つける」のヲ格共起語になれる。少ないながら、「縁付ける」は「縁につける」に相当するように、ニ格共起語との組み合わせるもの、「口付ける」は「口で付ける」のように、デ格共起語に相当するものもある。例外もある。「心付ける」は「心をつける」のではなく、「気をつける」の意である。さらに、「名詞＋づける」の意味は「名詞」と「つける」で作られたコロケーションの意味に近い。

続いて、「名詞＋づける」の意味とそれに関連するコロケーションとはどのような相違点があるかを検討する。(69)のように、「意味づける」と「意味をつける」はほとんど同じように使われていることがある。(69a)の「意味づける」も(69b)の「意味をつける」も「物事に意味や理由をつける」意からもっと抽象的な「意義や価値をもたせる」こと、あるいは「その事にどんな意味や価値があるかを明らかにする」意味に発展する。意味上、差がほとんど見られない。

(69) a. たとえば、化石燃料によって支えられている現在のわれわれの生活は、文明発展の達成点ではなく、未来に対する障碍として意味づけられるのか。

薬師院仁志『地球温暖化論への挑戦』、2002

b. もう少し小数のケタをふやしたら、なおいいわけですが、しかし一方には三というような簡単な数に意味をつけようとする傾向がある。ギリシャにだってそういう思想はあったわけですから…。

加藤周一・湯川秀樹『現代はどういう時代か』、2000

一方、(70)の「位置づける」は、主観的な行為であり、ある物事が全体の中や他との関係で占める位置を考え定めることを意味する。この語に含まれている「定める」という意味合いから「つける 21」に関連すると思われるものの、「位置づける」ことで、対象が新状態となり、意味上「つける 13」に関連する。そして、「位置づける」には「位置につける」にない意味を持っている。それゆえ、(70)の「位置づける」は「位置につける」と置き換えられない。また、統語上、他動詞「位置づける」はヲ格名詞と共起できる。一方、「位置につける」はまたヲ格共起語につくのが不自然である。

- (70) その子どもが含まれる学習集団における他の子どもたちの学習特性を把握し、集団としての学習特性を考慮した授業展開を計画し、そこに特にニーズの強い子どもの学習特性を位置づけることで、単なる個別の配慮だけにとどまらない学習集団全体の向上を図ることができる可能性が生まれてくるのである。

真城知己『図説特別な教育的ニーズ論』、2003

また、意味上大きな差が存在する場合もある。「裏付ける」と「裏をつける」はその例である。(71a)の「裏をつける」の「つける」は「ボタンをつける」と同様、服に裏を加えることで、物理的な「添加」行為を意味する。(71b)の「裏付ける」は結論を史料といった証拠によって確実にすることを指す。両者には関係がないように見える。しかし、「裏をつける」ことで、服が丈夫になるように、「裏付ける」ことで結論がもっと確かになる。働きかける対象が異なるものの、結果は類似している。それゆえ、メタファーによって、物理的な行為から抽象的な行為へと派生したと言える。

- (71) a. 「一枚の袷を、夏は裏をはがして単衣にし、秋にはまた裏をつけて袷に戻したりして」とおっしゃる先生でしたが、固定観念や常識にとらわれない発想の新しさと、創意と工夫によって手持ちのものを生かす知恵は、無類だったと思います。

宇野千代『きもの日和』、2003

- b. 少なくとも斎王が夜中の御阿礼祭に奉仕したことを明確に裏付ける史料は、今のところ見あたらない。

所功『京都の三大祭』、1996

このように、「名詞/形容詞/形容動詞+づける」は、それに関連するコロケーションの比べ、意味の数が少なくなっている。つまり、意味の縮小が生じたと言えよう。また、「名詞+づける」は、抽象的な意味を表わすことが多いことが確認できた。「名詞+づける」を関連するコロケーションの延長線に置き、連続的に学習者に示せば、物理的な行為から抽象的な行為へという認識発展の順序に一致する。ただし、両者は形式上対応関係を成しているものの、意味間の相違点を無視してはいけない。

また、「名詞/形容詞/形容動詞＋づける」に対する検討は、学習者のための「つける」意味の提示法への示唆が得られた。「つける」の意味を学習者に示すとき、どのようなコロケーションで示すかという点、プロトタイプ的なコロケーションがもっともいい。例えば、抽象的な現出の「つける 13」は、人の習慣・能力・状態などを表わす名詞と共起する。その共起語のうち、もっとも典型的なのは、「元気」、「力」、「勇気」である。「元気づける」「力づける」「勇気づける」があるように、コロケーションの結合度が高いからこそ、「～づける」となれるのである。

5.5.1.9 複合動詞のまとめ

「つける」意味の延長線にあるこれらの複合動詞は、「つける」の語彙ネットワークの構築には欠けてはならない部分である。「つける」の意味に関与する度合いには差が存在するものの、その例の検討によって、「つける」の意味を明確にすることができた。上記の分析に基づいて、「つける」の語彙ネットワークを構築するにあたり、どのように「つける」と関連付けて記述するのか、そして、どのように学習者に示すのかという2つの課題に対する結論が(72)である。

(72) ①ここまでの考察を通して、プロトタイプ的な関連語としての複合動詞、また学習者の「つける」の意味理解に有益な情報を提供できる複合動詞の抽出が可能であることが分かった。複合動詞を「つける」と関連付けて記述する方法には2種類がある。1つは語彙的複合動詞「～つける」のように、限定された「つける」の意味に関連付けて記述することである。もう1つは、統語的複合動詞「～つける」のように、行為の表わす事象から考え、「つける」との様態、行為の結果、相手との関わり、行為の方向性などの面から関連付けて記述することである。

②語彙的複合動詞「～つける」は「つける」の意味に関連させて、記述できる。それらに対する記述は本動詞「つける」に対する理解も深まる。特に、語彙的複合動詞「～つける」の前項動詞を通して、動作の細密度の低い「つける」行為に潜在している、接触させてから付着（浸透）させるまでのプロセスが明らかになった。学習者の立場からいうと、これがもっとも重要な関連語情報といっても過言ではない。

また、統語的複合動詞「～つける」、一語化した語などは「つける」意味に関連付けにくいものの、各用法においては、「つける」の前に来る動詞がそれぞれ特徴あるいは共通点があることが分かった。そして、行為の方向性、目標を実現するためのプロセスなどから「つける」との関連性を見つけた。特に、習慣の「～つける」は「接触・接近」のスキーマも持っていて、学習者にとっての重要な関連語情報として、まとめて提示すべきである。

③学習者にどのように提示するかについても、2つに分けて考えられる。「つける」

の意味用法に関連付けられる語彙的複合動詞などは、当該の意味とともに提示すべきである。その関連語を提示することで、語彙量を増やすことだけではなく、当該の「つける」の意味に対する理解を深めることができる。一方、統語的複合動詞や一語化した語は限定された意味ではなく、「つける」行為そのものに関連するので、それらの語例と用法をまとめて提示すべきである。

- ④本動詞の多義性の記述は複合語動詞の意味を記述する原点であり、一方、複合動詞についての検討で、本動詞の意味に対する理解が深まる。学習者の多義語学習を支援するための意味記述には、そして、学習者のための多義語語彙ネットワークを構築するには、複合動詞は重要な位置を占めていることは多義語習得の立場から立証できた。

5.5.1.10 複合名詞

ここでは、「つける」の名詞形「つけ」の用法を検討したうえで、「つける」に関わる複合名詞を、「V-V 型複合動詞から生まれたもの」、「名詞+づける」から変化したもの、「つける」のコロケーションに関連するもの、「接尾辞の「づけ」で作られたもの」、「動詞連用形+つけ」、上記以外の場合の「その他」の6種類に分けて考察する。

「つける」の関連語の生産性グループには複合名詞も多く存在している。「つける」の名詞形「つけ」も1つの語として存在する。「つける」に関連する複合名詞の意味は「つける」の意味のみならず、「つけ」の意味にも関連するので、まず、「つけ」の意味をまとめてみる。

『大辞林』では、(73)の意味用法が例示されている（実例とその出典は略）。名詞としての用法が10種、接尾語の用法が1つ挙げられている。

- (73) ① 勘定書き。請求書。書きつけ。
② 現金払いでなく、後日まとめて勘定することにして帳簿につけておくこと。
③ 歌舞伎で、見得みえ・駆け足・打擲ちようちやく・立ち回りなどの時、上手かみて横で大道具方または狂言方が、拍子木に似た柝きで板を打つこと。また、その拍子。つけ拍子。
④ 「付け帳」の略。
⑤ （普通「ツケ」と書く）囲碁で、相手の石に単独で接触させて打つ手。
⑥ 理由。口実。
⑦ 手紙。
⑧ その人についてまわる運。
⑨ 連歌・俳諧で、「付合」に関するすべての事象（付心・付所・付味など）をさしという語。
⑩ 名詞の下に付いて、それを付けることの意を表す。

(接尾) 動詞の連用形に付いて、し慣れていることの意を表す。

『大辞林』における「つけ」の意味には略語の用法や専門用語的な用法もある。①と②は現代日本語として用いられている意味である。一方、③-⑨は現代ではほとんど用いられない用法である。また、『明鏡』や『新明解』などは、①と②の用法のみ挙げている。この2つは常用度が高いように考える。学習者に「つける」の関連語の1つとしての「つけ」を提示する際に、①と②を示すべきである。⑩と接尾辞の用法は複合名詞「～つけ」の用法にかかわるので、次節で詳しく検討する。

続いて、(73) ①と(73) ②を「つける」に関連付けて分析する。「つけ」は「つける」の連用形であり、「つける」の動作性を継ぐ。「つける 11」の「記録」の実例には、「日記をつける」と「家計簿をつける」があり、このときの「つける」は書く行為を通して、紙などに文字としての具体的な内容を残す行為である。「つける」の書きつける行為から、「つけ」の心覚え・記録などのために書きしるしたものへ拡張できたのは、メトニミーによる。つまり、出来事で、行為に作用された後残ったものを表わす。

「つける 11」に見られるように、「つける」には文字などを残して、あとで見られるように記録する意味合いが含まれる。(74a)の「帳簿につける」も同様、金銭の収支などを後日確認できるように、帳簿に書いておくことである。「帳簿につける」から、「つけ」の「今すぐ支払わずに、後でまとめて勘定すること」にして帳簿につけておくことへ拡張する。そして、「つけ」は負債に相当し、現在支払わないにしても、将来は必ず返さなければならない。ここからさらに意味が拡張される。メタファーによって、(73) ②の金銭の負債を(74b)の自然環境への報い・返済にたとえる。

(74) a. 前日のお花代を帳簿につけ、女将の指示に従ってその日のお座敷のスケジュールや冠婚葬祭の段取り、また芸妓、舞妓が着ていく衣装の準備もします。

岩崎峰子『祇園の教訓』、2003

b. その歩みがやがて地球を救う大きなうねりとなり、子や孫の代にツケを残さないで済むよう、まず、できることからスタートしようではありませんか。

広報くりはし、2008、埼玉県

(75a)の慣用表現「つけを回す」と、例は挙げていないが、自動詞表現「つけが回る」は、メタファー的な用法で、お金の補償をさせるという意味から、他人に責任を転嫁する意味へと派生している。(75b)の「ツケを払う」もメタファー的に用いられる。ここでの「つけを払う」は、あとから請求書がまわってきて支払いをさせられる意から、報いが現れることへと転じている。また、「つけが来る」、「つけがきく」、「つけを飛ばす」などのコロケーションもある。

(75) a. しかし、彼は大統領就任演説において、アメリカは生き伸びるために変わらなければならないとして自助努力を強調していたのに、またもや他国につけを回しはじめたのは理解しがたいところである。

横溝雅夫『新しい日本の構想』、1993

b. 環境対策でも、短期的利益のみを考えると何もできなくなり、将来大きなつけを払うことになる。

吉川弘之、IM 研究会（編）『逆工場』、1999

以上、「つける」の名詞形「つけ」の現代日本語における 2 つの常用的な用法を検討してきた。メトニミーに基づき、「つける 11」の記録する意味から (73)①・②の意味へ拡張した。(73)②からさらに、メタファーにより、具体的な負債から抽象的な報いへ拡張する。学習者は「つける」の意味を正確に把握することで、その名詞形およびそのメタファー的な意味も理解できる。それゆえ、「つけ」を「つける」の語彙ネットワークに入れなければならない。

以下から「つける」に関わる複合名詞を考察する。語例を見渡すと、複合名詞における「つけ」の意味が結合要素により限定されていると見られた。「つける」に関わる複合名詞の型はさまざまであり、それらの意味も多様性に富んでいる。コーパス⁷³とインターネット辞書の見出し語検索機能を利用したところ、数多くの複合名詞の語例が抽出された。ここではすべての語例を記述するのが無理であるので、その一部を取り出した。語例の抽出を行うとき、本動詞「つける」の意味の持つ語例を中心とする。また、学習者のための記述をするので、語例をいちいち例示するより、複合名詞が生じたメカニズムおよびその意味の変化を究明することに重点を置いて論述する。

5.5.1.10.1 複合名詞の分類

まず、「つける」に関わる複合名詞を抽出し、その複合語の構成を検討したうえで、その分類と代表的な語例を表 5-8 のとおりである。

表 5-8 「つける」に関わる複合名詞の型とその語例

複合名詞の型	語例
① V-V 型複合動詞から生まれた語	当て付け、着付け、染め付け、塗り付け、受け付け、煮つけ、貼り付け、付け替え、付け合わせ、付け揚げ、付け落とし、付け込み、付け足し
② 「名詞+つける」に関連する語	動機付け、裏付け、片付け、意味付け、位置付け
③ 「つける」のコロケーションに関連する語	ボタンつけ、火付け、印付け、味付け、値付け、名付け、番付け、丁付け、横付け、外付け、鑑付け、半田付け、格付け、景気付け、釘付け、袖付け 付け根、付け景気、付け火、付け薬、付け汁、つけ麺、付け知恵、付け目、付け仮名

④接尾辞の「づけ」で作られた語	さんづけ、糊づけ、日付、後付け、前付け、下付け
⑤動詞連用形+つけ	行きつけ、掛かり付け
⑥その他	心付け、付け入れ、付け届け、付け立て、付け目

次に、表 5-8 の分類に基づいて、実例を加えつつ、「つける」の意味用法に関連付ける複合名詞の記述を試みる。

①V-V 型複合動詞から生まれた複合名詞

V-V 型複合動詞から生まれた複合名詞の語例を見渡すと、語彙的複合動詞から変化した語が多々ある。統語的複合動詞より語彙的複合動詞の方が複合名詞になりやすいのは、語彙的複合動詞の前項動詞と後項動詞の結合度が高く、複合動詞の意味も限定されているからである。一方、統語的複合動詞の意味は、前項動詞の多義性によって、多くの意味を表わすことができる。そのため、統語的複合動詞から生まれた複合名詞も、決まった意味を持っていない。そして、前項と後項の動詞の結合度の高い、一語化した複合動詞がもっとも複合名詞になりやすい。

次に、この種の複合名詞の意味特徴を複合動詞に関連付けて考える。V-V 型複合動詞から変化した複合名詞は、動詞の連用形でもあるので、行為を表わすこともでき、普通の性質名詞と比べ、意味範囲が広い。しかも、複合名詞の意味は、複合動詞の意味と類似している。多くの場合、複合名詞は、行為そのものを指すことと、作用された結果・成果を表わす。例えば、「煮付け」は煮付けることと、煮付けたものを意味する。「染め付け」は染めつけること、また、その色や模様を表わす。「付け揚げ」はてんぷら、油で揚げたものを指す。「塗り付け」は吹き付けること、また、その塗装方法を指すことができる。

他方、複合動詞の意味と比べ、違いが見られる場合もある。「受け付ける」と「受付」はその例である。(76) のように、「受け付ける」は苦情や相談などを受けるという意味である。一方、名詞形の「受付」は「願書の受付」のように受け付けることのほか、受け付ける場所も意味できる。こういった行為からそれをする場所への意味変化はメトニミーによる派生である。「ホテルの受付」はそのような例である。

(76) セルガチョフさんにこの疑問を投げかけると、「毎週火曜日の夜に、地区の住民の苦情や相談を受け付ける会合があるから、取材に来てください」と言う。

平田宏『もう一つのソビエト—モスクワ団地族を追って』、1986

以上、「つける」の V-V 型複合動詞から生まれた複合名詞の語例を挙げつつ、その特徴を述べた。まず、語彙的複合動詞と一語した複合動詞は、複合名詞になりやすいと見られた。また、多くの複合名詞は複合動詞の意味を継ぎ、行為そのものと行為で作用された結果を表わす。このように、この種の複合名詞の意味を理解するには、まず、その動詞形の

複合動詞の意味を明確に把握できなければならない。複合名詞における「つけ」の意味を理解するには、その複合動詞における「つける」の正解な理解が要求される。この場合、複合名詞の意味を前項と後項と分けて考えてはいけない。それゆえ、学習者のための語彙ネットワークを構築する際、単純動詞、複合動詞、そして複合名詞を連続的に示すべきである。

②「名詞＋づける」から変化した複合名詞

複合動詞「名詞＋づける」については、5.5.1.8ですでに述べた。表 5-7 にまとめた「名詞＋づける」は、すべて「名詞＋づけ」という名詞形になる。そして、動作・作用を表わす「名詞＋づける」に対し、その名詞形の「名詞＋づけ」は行為の様子や結果などを表わす。

5.5.1.8 で述べたように、この「名詞」となる語の多くは事柄を表わす抽象名詞であり、物名詞はほとんどない。また、「名詞＋づける」は具体的な行為より、抽象的な行為を表わすことが多い。それゆえ、「名詞＋づける」から変化した複合名詞には物名詞ではなく、抽象的な概念や様態を表わす語が多いのである。

「名詞＋づける」から変化した複合名詞は多くの V-V 型複合動詞から生まれた複合動詞と同様、「名詞＋づけ」の意味が「名詞＋づける」の意味に左右されるので、両者を分けて考えてはいけない。したがって、単純動詞「つける」、「名詞＋づける」、そして「名詞＋づけ」を連続的に考えるべきである。

③「つける」のコロケーションに関連する複合名詞

「つける」のコロケーションに関連する複合名詞を検討するとき、「つける」が要求する格要素を考える。前に触れた定型的なコロケーション「B に A をつける」にガ格の動作主、デ格の道具を加えることも可能である。ここでは、動作主を C、道具を D で示す。では、「C が B に A を D でつける」に関連する複合名詞にはどのようなものがあるだろうか。

「つける」のコロケーションに関連する複合名詞には、「A をつける」から変化したものが最も多い。この類の複合名詞が、「付け薬」「付け汁」「つけ麺」「付け知恵」「付け目」「ボタンつけ」「火付け」「印付け」「味付け」「値付け」「名付け」である。

また、少ないながら、「B につける」から生まれた複合名詞もある。「横につける」からの「横付け」、「外につける」からの「外付け」はこのような語例である。さらに、「D でつける」の場合、「鑢でつける」からの「鑢付け」、「釘でつける」からの「釘付け」、「半田でつける」からの「半田付け」が挙げられる。「C がつける」から変化した複合名詞は見つからなかった。

続いて、「つける」のコロケーションに関連する複合名詞については、「名詞＋つけ」と「つけ＋名詞」の 2 種類に分けてそれぞれの特徴を検討する。「つけ」が後項名詞の場合、行為そのものを指すと同時に、行為を行う人を指すこともできる。例えば、「火付け」は、

放火とその犯人を両方指すことができる。また、「味付けする」、「値付けする」、「格付けする」が成り立つように、「名詞＋つけ」にはサ変動詞の語幹となる語がある。「名詞＋つけ」における「つけ」がコロケーションにおける「つける」の意味を継いでいるため、コロケーションの動作性もそのまま保持する。

一方、「つけ」が前項名詞である場合、「つける」が連体修飾語として、後項名詞を修飾する。結論から言うと、つけようとするものと、つけたものの2種類を意味できる。また、「つけ＋名詞」の「つけ」の多くは動作性が強く、しかも「つける」の基本義と類似している。とはいえ、「つける」の意味に関連しつつ、対応する動詞（動詞の連語）の意味より使用範囲が狭くなったり、少し変容したりするものも見られる。

以上、コロケーションに関連する複合名詞「つけ～」と「～つけ」を検討した。ヲ格共起語とともに作られた複合名詞がもっとも多いことから、「つける」がヲ格共起語とは結合しやすく、複合名詞にもなりやすいと分かった。また、コロケーションから変化した複合名詞は「名詞＋つけ」と「つけ＋名詞」の2種類に分けられ、それぞれ異なる特徴を持っている。学習者にこれらの複合名詞を提示するとき、そのコロケーションと一緒に提示すべきである。「つける」の語彙ネットワークでは、「つける」、「つける」のコロケーション、そして、コロケーションから変化した複合名詞を連続的に扱うべきである。

④接尾辞の「づけ」で作られた複合名詞

接尾辞の「づけ」の意味も、単純動詞「つける」に関連付けられる。「つける」のAを移動してBに接触させて、そこに付着させる行為から、接尾辞の「づけ」の意味が生まれる。接尾辞「～づけ」の前に来られる名詞が限定されている。「糊づけ」は、糊がついていること、「さんづけ」は、敬称のさんをつけて呼ぶことを意味する。もう1つの用法は、日付を示す数詞の下に付いて、その日付であることを表わす。例えば、「五日づけの手紙」、「六月一日づけで採用する」などが挙げられる。

また、方位名詞「前」、「後」、「下」、「奥」などが接尾辞的な「づけ」の前に来て、書籍・手紙関連の用語として用いられる。「前づけ」は、書籍の本文の前につける題字・序文・目次・凡例などを指す。その反義語の「後づけ」は、書籍の巻末に入れる後記・索引・付図・奥付などを意味する。「下づけ」は、謹状・再拝のような、手紙で謙遜の気持ちを表わすために、署名の下につける語のことである。本の巻末によくある、書名、著者、発行者、印刷者、出版年月日等を書いている部分を「奥づけ」という。「前づけ」「後づけ」「下づけ」「奥づけ」は、「前/後/下/奥につける」物のように理解され得るものの、複合名詞の使用範囲がコロケーションよりかなり狭く、意味が限定されている。

「糊づけ」「さんづけ」であれ、「前づけ」「後づけ」であれ、先行名詞がどれも「付属品」であって、何かの中心となるものではない。これは、「つける」のヲ格名詞との特徴と類似している。それゆえ、接尾辞の「づけ」の意味を単純動詞「つける」に関連付けて記述できるのである。

⑤動詞連用形＋つけ

『大辞林』によると、名詞「つけ」には、動詞の連用形に付いて、習慣を表わす用法がある。これは、統語的複合動詞「～つける」の「いつもしていて、それに慣れる」用法からの派生である。例えば、「行きつける」の連用形「行きつけ」が「行きつけの店」のように名詞として用いられる。同様の動詞には「食べつける」「飲みつける」「持ちつける」「履きつける」「使いつける」がある。

また、形式上「動詞連用形＋つけ」のように見える「掛かりつけ」がある。しかし、「掛かり付ける」という動詞は実際に存在しない。「～つける」は習慣的に何かをする用法から、名詞形「～つけ」も習慣を意味できるようになる。そこから、「掛かりつけ」のような表現が生まれる。「掛かり付け医」、「掛かり付けの医者」、「掛かり付けの薬局」などの表現もあり、いつも診てもらっていることを意味する。

「つける」の意味との関連性を考えると、「接触スキーマ」の「つける」から、習慣を表わす「～つける」へ、さらに、し慣れることを意味する「行きつけ」と「掛かり付け」へ発展している。「つける」の語彙ネットワークにおいては、これらの用法が連続的につながっている。

⑥その他

以上のいずれのグループにも属していない「つける」に関連する複合名詞がある。ここでは「付け届け」を検討する。「付け届け」には動詞形の「付け届ける」がない。「付け届け」の意味は謝礼のため贈り物をする事、また、その金品のことである。一見、「つける」とは関係しない。しかし、「付け届けをする」という行為を考えると、「つける」とは関連付けられる。金銭や贈り物を持って行って、世話になる人に受け取ってもらうようにする。その結果、金品が自分の手から相手に届けられる。このプロセスを考えると、「つける」と「届ける」行為がいずれも含まれることが分かる。

このように、「付け届け」はコロケーションや動詞からの語ではないが、その事柄を行うプロセスからは、複合語の構成要素としての「つけ」には「つける」行為と関連していると見られた。つまり、「付け届け」といった複合名詞を「つける」とは関係しており、それらの意味を正確に習得するには「つける」への正しい理解が前提となる。

5.5.1.10.2 複合名詞のまとめ

以上で「つける」関連語の生産性グループに属する複合名詞の語例を挙げ、6つのグループに分類し、議論を行った。学習者の立場から、「つける」に関わる複合名詞の特徴を次にまとめる。

- (77) ①「つける」に関わる複合名詞は、「つける」との関連性があるものの、複合動詞や「つける」のコロケーションと比べ、「つける」との関連度の度合いが比較的低

いため、語彙ネットワーク図では、複合動詞やコロケーションの延長線に位置する。

- ②コロケーションから生まれた複合名詞であれ、複合動詞（V-V 型複合動詞と「名詞＋づける」）から生まれた複合名詞であれ、日本語教育の立場から言うと、意味変化の著しい語が学習者にとって習得の難点となり、明確に示されるべきである。
- ③接尾辞「づけ」と「動詞連用形＋つけ」は、それぞれ「付着」の意を表わす「つける」、習慣を表わす統語的複合動詞「～つける」と緊密に関連している。2 種の用法はいずれも生産的であり、学習者にとって有益な関連語情報である。
- ④「その他」に属する複合名詞も「つける」行為に関連付けられ、「つける」の語彙ネットワークに位置できる語である。
- ⑤「つける」に関連する複合名詞は語例が多く、多様性に富み、形式上分類は可能である。しかし、「つける」の意味に基づき、それらを分類するのが困難である。とはいえ、個々の語の意味を考えると、多くの場合は、単純動詞「つける」と関連付けられる。

5.5.2 異質性グループ

ここでは、「つける」の異質性グループに属する関連語を検討する。5.5.2.1 では「つける」の類義語を記述する。5.5.2.2 では、その反義語を分析する。類義語であれ、反義語であれ、「つける」の意味範囲を明確に把握できて、初めて理解・産出のできる語群である。5.5.2.3 では、他動詞「つける」の意味領域と比較し、自動詞「つく」の特有の用法を中心に述べる。「つける」の関連語の異質性グループに対する考察は、具体的にどのような語を検討の範疇に入れるのかを明記したうえで、「つける」との関連性を記述の中心とし、日本語教育の立場から「つける」の語彙ネットワークを構築するために、その類義語と反義語、自動詞「つく」を記述する必要性と重要性を論じる。

5.5.2.1 「つける」の類義語

日本語学習者による「つける」とその類義語との誤用や不自然な使用は、初級のみならず中上級になっても観察される。これまでの研究では、国広（2010：17）は「意味論の中心的問題は類義語の意味の異同を明らかにすることである。特に、外国人学習者にとっては大きな問題である」と考えている。また、森田（1991：67）は、語の意味を記述するときの類義語との比較の重要性を述べている。ここでは、日本語学習者が理解しやすい多義語指導の一部となる類義語指導のための基礎研究として、中国語母語話者のための「つける」の語彙ネットワークを作るにはどのような類義語を入れるべきか、その類義語とどう使い分けるかを記述することにする。

4 章の習得調査から分かるように、「つける」の誤用や不自然な使用が生じる要因の 1 つ

は、「つける」とその類義語の区別ははっきりと把握できないということである。「つける」もその類義語も多義語であり、意味が類似した語義が複数存在し、またその対応関係が複雑である。「つける」の用法が多く存在しているだけ、それぞれの意味を取り巻く類義語も異なる可能性がある。そこで、「つける」の類義語の全体像を把握するために、『類語大辞典』（以下、『類語』とする）を参考にし、「つける」に関わる意味分野を見て、類義語とされる語を表 5-9 で例示する。なお、表 5-9 の類義語欄に列挙した語は『類語』で示された「つける」と同じ意味分野の語であり、必ずしも挙げられたコロケーションで「つける」と置き換えられるとは限らない。

表 5-9 『類語』による「つける」の意味分野とその類義語

表記	意味分野	類義語	コロケーション例 ⁷⁴
つける	温度	あたためる	酒をつける 燗をつける
付ける	生育	生やす	花を付ける 実を付ける
	教示・広報	しるす	○をつける
	表記	書き付ける	家計簿を付ける 日記を付ける
	探索・追求	追う	容疑者のあとを付ける
	接触	当てる	手を壁に付ける
	付着・装着	塗る	写真の裏にのりを付ける 傷口に軟膏を付ける
	設置・積載	据える	車にカーナビを付ける
就ける	設置・積載	置く	教務主任を教頭に就ける
即ける	設置・積載	置く	先王の弟を帝位に即ける
着ける	中止・休止	とどめる	船を岸壁に着ける
	付着・装着	着る、はく	ブラウスにブローチを着ける
点ける	運動	動かす	照明をつける テレビをつける
	燃焼	ともす	明かりをつける

『類語』は、「つける」の表記ごとに、意味分野を区分する。「つける」を「温度」の意味分野に分類し、そのうちの「あたためる」の下位分類に「酒をつける」を挙げている。この「つける」の類義語として「あたためる」が考えられる。

「付ける」は、7つの意味分野にわたって、他の動詞と類義関係をなす。「生育」という意味分野では、「生成」の「花をつける」と植物を生えるようにする「生やす」と類義関係にある。「教示・広報」では、「痕跡」の「○をつける」と文字や文章を書きとめる「記す」と類義関係にある。「表記」という意味分野では、「記録」の「家計簿を付ける」、「日記を付ける」と「書き付ける」が置き換えられる。「探索・追求」では、「追跡」の「容疑者のあとを付ける」は「容疑者のあとを追う」とも言え、「追う」とは類義関係にある。「接触」の分野では、身体部位の「一時付着」の「手を壁に付ける」が「当てる」に置き換えられるので、2語間の類義性が認められる。「付着・装着」の「写真の裏にのりを付ける」、

「傷口に軟膏を付ける」の「付ける」は「塗る」と置換されうる。最後に、「設置・積載」の「設置」を表わす「車にカーナビを付ける」が「据える」とは類義語関係にある。

「就ける」は「設置・積載」に分類され、「教務主任を教頭に就ける」など仕事・職務の定着の意味で、「置く」と置き換えられる。「即ける」も同じく「設置・積載」の下位分類に位置し、「先王の弟を帝位に即ける」では、「置く」と類義関係にある。「着ける」なら、「中止・休止」の意味分野に属させ、「船を岸壁に着ける」では、「とどめる」と類義関係にある。また、「付着・装着」の意味分野では、ヲ格共起語によって、「着る」「はく」などの語と類義関係にある。「点ける」は、「運動」の意味分野において、「起動」の「照明をつける」「テレビをつける」が「動かす」と類義関係にある。「燃焼」の意味分野では、「明かりをつける」という「点灯」の意味で「ともす」と類義関係にある。

『類語』によって、「つける」は異なる語と類義関係にあることが明らかになった。また、同じ意味でも、コロケーションによってはその類義語が異なることもある。例えば、「指輪をつける」と「下着をつける」は同じく「着用」の用法であるものの、類義表現は「はめる」「する」「着る」である。そこで、5.4 の「つける」多義分析の分類に基づき、典型的なコロケーションを挙げ、それにおける「つける」の類義語を表 5-10 にまとめる。

表 5-10 「つける」の類義語

「つける」の意味	「つける」のコロケーション	類義語
「つける 1」 付着	シールをつける リボンをつける	シールを貼る リボンを結ぶ
「つける 2」 着用	下着をつける スカーフをつける 長靴をつける 指輪をつける	下着を着る スカーフをかぶる 長靴をはく 指輪をはめる
「つける 3」 設置	防犯カメラをつける	防犯カメラを設置する/据える
「つける 4」 点火	火をつける	火をともし/燃やす
「つける 5」 痕跡	跡をつける 傷をつける	跡を残す 傷を残す
「つける 6」 一時付着	地面に足をつける 壁に耳をつける	足で地面を踏む 壁に耳を当てる
「つける 7」 付随添加	おまけをつける 索引をつける	おまけを添える 索引を加える
「つける 8」 現出	道をつける	道を作る
「つける 9」 生成	花をつける 実をつける 肉をつける 脂肪をつける	花がつく/咲く 実がなる 肉を増やす 脂肪をふやす
「つける 10」 起動	電灯をつける 電源をつける	電灯をともし 電源を入れる
「つける 11」 記録	日記をつける 印をつける	日記を書く/書き付ける 印をかく/記す
「つける 12」 (抽象的) 添加	条件をつける コメントをつける 文句をつける 速度をつける 値段をつける	条件を添える/付す コメントを出す 文句を言う 速度を上げる 値段を決める

	名前をつける	命名する/名前を決める
「つける 13」(抽象・心理的) 現出	元気をつける 能力をつける 自信をつける 勝負をつける 決心をつける	元気を出す 能力を高める 自信を加える/持つ 勝負を決める 決心を固める
「つける 14」 知覚	気をつける 目をつける	気を配る/遣う 目を向ける
「つける 15」 接合	(折れた) 骨をつける	骨をつなぐ
「つける 16」 関係	連絡をつける 関係をつける	連絡をとる 関係を結ぶ
「つける 17」 浸透	香水をつける 薬をつける 醬油をつける パン粉をつける 口紅をつける 味をつける 色をつける	香水をふりかける 薬を塗る 醬油をかける パン粉をまぶす 口紅を塗る 味を添える 着色する/彩る
「つける 18」 尾行	あとをつける	あとを追う/尾行する
「つける 19」 補佐	警護をつける	警護を伴う
「つける 20」 停止	車をつける	車を停める
「つける 21」 位置	位置につける 席につける	位置に留める 席に座る
「つける 22」 (心理的) 随従	味方につける	味方にする
「つける 23」 定着	仕事につける 皇位につける	仕事に携わる 即位する/皇位を授ける

出典『類語大辞典』

5.5.2.1.1 以下、表 5-10 における「つける」の類義語をいくつか取り上げ、意味上「つける」との関連性を考察する。類義語を抽出する手がかりとして、いわゆる典型度の高い類義語、または、前章の習得調査から分かった学習者の間違いやすい語に着目する。また、類義語との区別を記述する際、「つける」の意味に立脚し、類義語の関連する意味だけを取り上げる。つまり、意味の重なりがありつつ、微妙に違いがあるようなところを重点に置く。さらに、「つける」とその類義語の置き換えの原理を明らかにするためには、置き換えが可能な個々のケースの記述のみに留まらず、個々の現象を生じさせる「つける」とその類義語の意味的な特徴の違いを明らかにする。

5.5.2.1.1 「つける」と「かぶる」「きる」「はく」

着用の「つける」と「かぶる」「きる」「はく」の共通点と相違点を述べる。5.4.2 では「着用」の「つける」を検討した際に述べたように、「つける」には、「体にまとわせたり、帯びたりする」意味があり、身の回りの品を着用する意が含まれている。そのコロケーションの例は、「衣服/腕時計/長靴/ネクタイをつける」などのコロケーション例が挙げられる。また、「頭に花の飾りをつける」、「腰に制服のスカートをつける」、「耳に補聴器をつける」、「腕に自動巻き時計をつける」などのように、二格共起語が現れる場合もある。しか

し、多くの場合、ヲ格名詞によってニ格共起語が限定されるため、「Bに」がなくても、「BにAをつける」ことの全体が分かる。

「帽子をかぶる」、「服をきる」、「腕時計をはめる」、「長靴をはく」、「ネクタイをむすぶ/しめる」などのような表現が成り立つように、「着用」の意味の「つける」と「かぶる」「きる」「はく」が類義関係にある。宮島（1972: 196）によれば、「つける」は体の特定の部分を指定していないという。また、Aを体に付着させる結果を重視する「着用」の「つける」は「身の回りに持っている」ことに焦点を当てる。それが多くの身体部位を表わす語が「つける」のニ格共起語として用いられる理由である。これに対して、「かぶる」「きる」「はく」は特定の身体部位にしか使えない。それで、体のどこにどのように体に付着させるかで「つける」とこれらの語の区別ができる。

まず、「つける」と「かぶる」の実例を考察し、比較をする。「かぶる」は（78a）のような、頭・顔を覆う意味で用いる実例が典型的である。「仮面/頭巾/ヘルメット/スカーフ/マスク」などがそのヲ格名詞として共起する。一方、「つける」の場合、（78b）の「面を着ける」も成り立つ。（78）の「かぶる」と「着ける」はいずれも「頭の上へのせ、その上に掛けて覆う」ことを描いている。（78a）と（78b）の「かぶる」と「着ける」が置換可能であることから、両語は類義関係にあると言える。

（78） a. 浮立は佐賀・長崎で伝承されてきた踊りで、室町期に流行した風流踊りの流れといわれる。鬼の面をかぶり小太鼓を打って舞うのが特色。

カルチャーブックス編集部（編）『365日「今日は何の日か？」事典』、1991

b. 狐のぬいぐるみ（モンパ）をまとい、狐の面を着けたまま、激しい動きを含んだ演技を長時間にわたって持続させることには、また、強靱な体力が要求される。

金関猛 『岡山の能・狂言』、2001

しかし、「つける」は多くの場合、行為のプロセスではなく、付着したという結果に注目する動詞である。着用の「つける」はどのような操作で身の回りの品を体に着用するかは問題にされていない。それに対して、「かぶる」は必ず頭の上から覆う行為であり、行為そのものが限定されている。行為の細密度からいうと、「つける」より「かぶる」の方が高い。例えば、（79a）の「帽子をかぶる」とは言えるのに対し、「帽子をつける」は多くの場合不自然な表現である。（79b）は「かぶる」なら言える。また、「スカーフをつける」と「スカーフをかぶる」は両方成り立つが、異なる行為を表わす。（79c）はスカーフの結び方を紹介するときに用いる例である。この「スカーフをつける」はスカーフを首に巻くことである。（79d）「スカーフをかぶる」はスカーフを頭に覆う行為である。このように、スカーフと接触する身体部位も異なり、行為そのものも異なる。

（79） a. 帽子をかぶっていて、顔がはっきり見えません。（作例）

b. *帽子を目深につける (作例)

c. スカーフをつけている人とつけていない人では周囲からのイメージはもちろん、本人のモチベーションも大きく変わってきます。

(<https://ut-press.com/knowledge/497/> による)

d. 母は紺色のスカーフを頭にかぶり、あごの下で結んでいた。頬は、昔のようにきめ細かくすべすべした肌ではなくなっていた。

ユン・チアン(著)、土屋京子(訳)『ワイルド・スワン』、1993

また、「いくら起こしても、布団をかぶって起きてこない」(『類語』p. 906)のように、「かぶる」は、頭あるいは顔面を覆うものを掛けたりする行為も描ける。また、上から浴びる意も表わす「水をかぶる」はメタファーに基づき、派生した用法である。上から浴びることを、上から頭あるいは顔を覆うことにたとえている。こういった場合の「かぶる」は「つける」に置き換えられない。

次に、「つける」と「きる」「はく」の相違点を検討する。「つける」と「きる」をコーパス⁷⁵で検索したところ、2語とも「着物/洋服/スーツ/制服/ドレス/ジャケット/ワンピース/水着/ジーンズ/エプロン」などと共起できる。また、「つける」と「はく」とは、いずれも「靴/スカート/ズボン/パンツ/ストッキング」⁷⁶などと共起できる。このように、「つける」は上半身、または体全体に衣服をつける意の「きる」、下半身につける衣服に足を通して、身につける意の「はく」と類義関係にある。しかし、両語と「つける」がどのような相違点があるのだろうか。

(80a)の「着ける」は「きる」で置き換えられない。「素肌につける」とは、肌に接触し、触れることである。また、(80b)から分かるように、「ポリエステルをつける」と「ポリエステルを着る」の区別は、皮膚に接触することを強調するかどうかにある。「着ける」には「付着」という行為が存在し、体、あるいは身体部位を覆うように接触する意味合いが強い。それゆえ、場合によっては二格も要求されている。一方、(80b)の2つ目の「着る」を「つける」と置換するのがやや不自然である。着用の「つける」はこの語の常用的な用法ではあるものの、用法上の制限があるので、「つける」はヲ格共起語名詞を明記しないと、何を指しているかは分かりにくい。

(80) a. 杏奈は、私の知らない、ニットのスーツを素肌に着けていた。髪をあっさりと束ねていたが、離れた場所からでも、その軽やかな香りが漂ってくるようだった。

大沢在昌 『秋に墓標を』、2003

b. ポリエステルは直接地肌につけずに着て、綿の汚れものとも分けて洗っているという彼女のブラウスは、「もう何年も着ているわ」という言葉が信じられないほど、真っ白でした。

佐光紀子 『ナチュラル・ランドリー』、2003

このように、以上述べた「かぶる」「きる」「はく」の用法はいずれもこの3語のプロトタイプ的な意味で、どこにどのようにして着用するかという使用の範囲が分かれば、正しく用いられる。一方、着用の「つける」は「付着」の「つける」からメタファー的に拡張した意味で、共起語がなければ、意味領域が把握しにくいのである。また、「つける」の行為そのものより、装身具を体に接触させ、付着されるという結果を重視するのも他の3語と区別する際に、重要な要素である。

5.5.2.1.2 「つける」と「かく」「しるす」

次に、「つける」と「かく」「しるす」について考える。この「つける」(5.4.2の「痕跡」の「つける5」と「記録」の「つける11」に相当する)は、筆記用具や硬いものなどの道具を使って、跡を残すのを目的とする行為である。「かく」は文字、文章、図、絵などを記す意味で、幅広く使われる基本語彙である。「しるす」はやや文章語的な表現である。3語の共通点が「記入」を表わすという意味にある。では、その相違点はどこにあるだろうか。まず、コーパス調査の結果に基づき、「つける」「かく」「しるす」のヲ格共起語を挙げ、その使い分けを表5-11にまとめる。

表 5-11 「つける」と「かく」「しるす」の比較⁷⁷

	つける	かく	しるす
小説を～	×	○	×
論文を～	×	○	×
日記を～	○	○	×
年賀状を	×	○	×
漢字を～	×	○	×
数を～	○	○	○
地図を～	×	○	×
(紙に) 名前を～	× ⁷⁸	○	○
メールを～	×	○	×
メモを～	○	○	×
日時を～	×	○	○
…の状態を～	×	○	○
事実を～	×	○	○
印を～	○	?	×
足跡を～	○	×	○

次に、表5-11に基づき、3語それぞれの意味特徴を検討する。記入の内容を重点に置く場合、「つける」は不自然な場合が多い。例えば、小説、論文や年賀状のような名詞とは共起できないし、また、「紙に名前をつける」も適切な文脈がなければ、自然な表現にはならない。この「つける」はいずれにしても痕跡を残すのを強調するのである。例えば、「日記をつける」は後日でも読めるように字を残す行為で、手を動かしたりする行為は意識されない。つまり、記録の「なし」という状態から「あり」という状態への変化を描いている。

換言すれば、「つける」は内容を記入するというより、「添加」してそこに「痕跡」を残すという事象をプロファイルする。

一方、「かく」は一般的な動詞として「文字や文章にして残す」ことに広く用いられる。「記入」が「かく」のプロトタイプ的な意味である。字や文章をかくとき、手にペンなどを持って、紙など字を残すように腕を動かしたりして、その結果、必ず字や絵などが残る。「かく」はこの一連の行為をプロファイルする。それゆえ、「記入」という事象に対して、「つける」と「かく」は異なる捉え方を持っていることが分かった。これこそ「つける」と「かく」の根本的な違いである。

「しるす」のプロトタイプ的な意味は「書き留める」ことであり、使用範囲が限られている。「感想などを簡潔に記す」は言えるものの、小説、論文や年賀状のような名詞とは共起できない。しかし、名前や生年月日のようなすぐに書けるものなら、「しるす」は使える。「しるす」は書くものが特定され、「つける」の結果重視に対し、「しるす」は書いた内容を重視する。また、メタファー的に派生したのは「心にしるす」の用法である。これは記憶として心に残る意である。さらに、「しるす」は文章語であることは、前に来るヲ格共起語からもその特徴が見られる。「経緯、没年、大要」などのうやや硬い表現や「結果、状態、事実」などのような抽象名詞とも共起できる。

この3語のうち、「かく」の使用範囲が一番広い。表 5-11 の中での「かく」は唯一少し不自然なのが「印をかく」である。(81) のように、「矢印」がヲ格名詞なら成り立つものの、単に「印」をいうと、具体的にはどのようなものか分からない場合、「かく」は使えないことがある。このように、記入という行為の細密度からいうと、「かく」は高い方であるのに対し、「つける」は比較的低い。

- (81) 棒磁石のN極からS極まで、磁針のN極がさす向きに矢印をかいていくと、磁界の向きを線で表すことができる。

新しい科学 1分野上、2005、中

以上、「つける」「かく」「しるす」の共通点と相違点を検討してきた。「しるす」は文語であるので、他の2語の使用範囲とはやや異なり、書いた内容を重視する。日常表現の「つける」と「かく」の違いはやはり、事象の捉え方にある。「つける」は跡が紙などに残った結果をプロファイルする行為に対し、「かく」は手を動かす行為をプロファイルする。このような違いを学習者に示すには、両語のプロトタイプ的な意味の違いから導入すべきである。

5.5.2.1.3 「つける」と「もやす」「ともす」

「つける」には、「点火」と「起動」(「つける4」、「つける10」に相当する)の意味がある。メトニミーに基づき、「火をつける」行為から、「テレビをつける」行為へ拡張したこ

とは 5.4.2 で述べた。その場合、火、照明、電気器具類などのものがヲ格名詞として広く用いられ、燃焼現象を起こしたり、電源を入れたりすることを描写する。

「もやす」のプロトタイプ的な意味は、「薪か何かで炎を上げさせる」という意である。「もやす」は電気器具の起動には使えない。「つける」と「もやす」が置換できるのは、(82a)のように「火・蠟燭・松明・炎」など火を意味する名詞がヲ格共起語となる場合である。しかし、「家に火をつける」の場合は、「もやす」は用いられない。「もやす」には「放火」の意味を持っていない。また、「つける」には、「もやす」が持つ「感情や意欲などで心を高ぶらせる」という意味がない。(82b)は「火をもやす」のメタファー的な用法であり、「火をつける」に置き換えると不自然となる。また、「希望の火をもやす」や「情熱の炎をもやす」の場合も「つける」と置換できない。

(82) a. 結果として、コロニーの内部では、何世紀も前に地球上で繰り広げられたような生活が営まれていた。木を切り、火を燃やし、それを取り囲むように集まる人々。

千葉智宏『The Sneaker 2003 年 2 月号 (第 11 巻第 1 号)』、2003

b. 大きなものでなくとも、毎日の生活のなかで、ささやかな希望の火を燃やすものを見つけることから始めてみようではないか。

宮内博一『六十歳からなすべきこと よく生きることはよく死ぬこと』、1993

このように、「つける」は火を近づけたり、電源をつないだりする、つまり「接続」することで、点火・起動の目的を実現することを表わす。一方、「もやす」は「火をつける」手段で、炎を上げて、対象物をすべて燃やしてしまうのが目的とされる。

「ともす」は明かりをつけることである。「火を灯す」は、明るくするための行為であり、何かを燃やすための行為ではない。この行為の目的が「つける」とは異なるのである。したがって、「タバコに火をつける」は言えるが、「タバコに火をともす」は自然ではない。「火」や「蠟燭」のほか、「電気」や「ライト」なども「灯す」と共起できる。ただし、明るい状態にならない電気器具の起動を表すには「灯す」は使えない。(83)においては、「つける」が「線香をともす」の「ともす」に置き換えられない。しかし、「線香に火をつける」は適切である。

(83) 挨拶が終わったらローソクに火をつけ、線香をともし、焼香の用意をします。

松原哲明監修『臨濟宗』、2005

このように、「火」と共起できるこの 3 語は燃焼のプロセスにおいては、それぞれ異なる部分をプロファイルする。「火をつける」は「火」をニ格対象物との接続・付着という燃焼の最初の段階をプロファイルする。「火をもやす」では、「火」が燃焼を促す手段となり、対象物がすべて燃えるようにすることに焦点を当てる。「火をともす」は主に明かりをつけ

るのが行為の目的である。これらの特徴から、各自の意味がさらに拡張していく。

5.5.2.1.4 「つける」と「かける」

前章の習得調査で示されたように、学習者は「醤油をつける」と「醤油をかける」がはっきりと区別できない。また、「眼鏡をかける」を「*眼鏡をつける」と間違えることもある。しかし、実は2語は異なる行為を描写している。「つける」のプロトタイプ義は「具体物Aを背景物Bに接触させ、何らかの操作でBの一部になったかのように、離れなく付着させる」ことである（図5-1を参照）。「かける」の「具体物Aを具体物Bに覆いかぶせるようにして、その結果、BがAを支えるようにする」意味がその典型的な用法である。このように、AとBの特徴、行為の方向性、行為の結果などには大きな違いがあり、それらの拡張義にもこれらの要素が働く。

学習者の立場に立って、学習者の誤用例を挙げ、「つける」と「かける」の相違点について記述を行う。まず、「醤油をつける」と「醤油をかける」はいずれも文法的にも意味的にも適格である。「醤油をつける」は、寿司などを取って、醤油に移動し、接触させる行為である。これは浸透の「つける17」の用法である。一方、「醤油をかける」は醤油をもって、上から料理にまく行為である。「ご飯にお茶をかける」、「手に水をかける」なども同様の実例である。この「かける」は「上から置いて留める」というプロトタイプ的な意味から派生した「上から物全体くらい液体や粉などを覆いかぶせる」意味である。両語は対象との「接触」という点が類似している。しかし、「かける」の「上から作用する」という意味が「つける」にはない。

また、学習者が「眼鏡をかける」を表現しようとするとき、「*眼鏡をつける」と言ってしまうことがある。「つける」と同様、「かける」にも「ものを留めて動かないように固定する」意味を持っている。しかし、固定させるまでのプロセスが異なる。「*眼鏡をつける」が不自然な表現になるのは、眼鏡のレンズは顔に付着させるわけにはいかないからである。また、「ボタンをつける」と「ボタンをかける」は両方成立する。しかし、固定させる過程も異なれば、固定させた結果も一致していない。前者のボタンは付属品として捉えているのに対し、後者のボタンは留めて固定する対象である。

さらに、「つける」にも「かける」にも「何かの操作を加えて機械・装置などを作動させる」意味がある。例えば、「テレビ/エアコン/電気/ラジオをつける」と、「目覚まし/レコード/ラジオをかける」は自然な表現である。共通したヲ格共起語のコロケーションとして、「ラジオをつける」と「ラジオをかける」が挙げられる。「起動」の「つける」は、スイッチを入れることで電流を起動させる行為である。この「かける」のヲ格共起語となるものがすべて音が鳴る機械である。このように、「ラジオをつける」と「ラジオをかける」の区別をまとめると、前者は電流をつないで起動することであり、後者は音を出すために起動することである。

以上、5.4で行った「つける」の意味分析に基づき、「つける」の類義語をいくつか取り

出して、「つける」との違いを考察した。前にも触れたように、多義語は用法ごとに類義語があると言えるほど、多く存在する。「つける」とその類義語の意味の違いは、根本的には対象をいかに捉えるかの違いである。これこそ、学習者にとっての習得の難関である。母語話者と異なり、学習者は、多くの場合、身体経験を通して語彙学習をしていないので、目標言語の動詞にはどのような操作が暗示されているのかは想像しにくいのである。したがって、動詞習得の支援として、学習者に当該語が表わす行為そのものを示すべきである。類義語との区別、つまり、事象の捉え方の違いを把握するには、第一、それぞれのプロトタイプ的な意味に対する正確な理解が必要とされるのである。

5.5.2.2 「つける」の反義語

反義語に関しても類義語と同じような傾向が見られ、「つける」には多くの反義語が存在する。「つける」の意味範囲を明確に把握できなければ、当該の反義語も正確に用いられるようになる。「つける」の反義語をその語彙ネットワークに入れることで、「つける」に対する認識も深めることができるわけである。5.4.2 の多義分類に基づき、各意味の典型的なコロケーションを取り上げ、それと対応する反義語を表 5-12 に示す。

表 5-12 「つける」の反義語

「つける」の意味	「つける」のコロケーション	反義語
「つける 1」 付着	シールをつける リボンをつける	シールを外す リボンを外す
「つける 2」 着用	下着をつける 指輪をつける	下着を脱ぐ 指輪を取る/外す
「つける 3」 設置	防犯カメラをつける	防犯カメラを外す
「つける 4」 点火	火をつける	火を消す/落とす
「つける 5」 痕跡	跡をつける 傷をつける 印をつける	跡を消す 傷を消す 印を消す
「つける 6」 一時付着	地面に足をつける 壁に耳をつける	地面から足を離す 壁から耳を離す
「つける 7」 付随添加	索引をつける 番号をつける	索引を削除する 番号を消す/削除する
「つける 8」 現出	肉をつける 脂肪をつける	肉を取る/落とす 脂肪を落とす
「つける 9」 生成	花をつける 実をつける	花が枯れる 実を落とす
「つける 10」 起動	電灯をつける 電源をつける	電灯を消す 電源を切る/落とす
「つける 11」 記録	家計簿をつける	家計簿を消す
「つける 12」 (抽象的) 添加	条件をつける 速度をつける コメントをつける 期限をつける	条件を減らす/外す 速度を落とす コメントを削除する 期限を取り消す
「つける 13」 (抽象・ 心理的) 現出	元気をつける 自信をつける	元気をなくす 自信をなくす
「つける 14」 知覚	気をつける	気を抜く
「つける 15」 接合	(折れた) 骨をつける	骨を折る

「つける 16」 関係	連絡をつける 関係をつける	連絡を切る 関係を切る
「つける 17」 浸透	パン粉をつける 口紅をつける 味をつける 色をつける	パン粉を落とす 口紅を落とす 味を取る 色を消す/落とす
「つける 18」 尾行	あとをつける	――
「つける 19」 補佐	警護をつける	警護を振り切る
「つける 20」 停止	車をつける	車を走る
「つける 21」 位置	位置につける 席につける	位置から離れる 席を外す
「つける 22」 (心理的) 随従	味方につける	味方を見捨てる
「つける 23」 定着	仕事につける 皇位につける	仕事から外す 退位する/皇位を退く

以下、「つける」の代表的な反義語の語例として、「外す」「落とす」「消す」を挙げ、「つける」の意味に関連付けつつ、議論する。

5.5.2.2.1 「つける」と「外す」

表 5-12 のように、「つける」が「付着」「着用」「設置」「(抽象的) 添加」「知覚」「位置」「定着」などの意味で用いられるときに、「外す」とは反義関係をなすことがある。「外す」のプロトタイプ義は「取り付けられているものを取って離す」ことであり、「(B から) A を外す」のような定型文が存在している。ゆえに、B に対して、A が付属品である場合、付着させる行為の「つける」と取って離す行為の「外す」が反義語の対になる。(84a) の「アクセサリーをつける/外す」も (84b) の「チューブをつける/外す」もその実例である。また、例えば、「ボタンをつける/外す」、「ネックレスをつける/外す」、「鍵をつける/外す」、「カバーをつける/外す」、「障子をつける/外す」など多くの実例が挙げられる。

- (84) a. 今までの規則にはない、たとえば鼻につけたアクセサリーだの、男性のイヤリングだの、カトケ夫人の気苦労もなみたいではないです。片方の耳につけたイヤリングをはずす、はずさない、でもめたスチュワードのマイクの例もあります。

泉・ブラーシュ(文)、相沢るつ子(絵) 『夢はつばさにのせて』、1990

- b. ベッドの傍らに座った日野原さん、女性の鼻に酸素を送るチューブをつけているのに目をとめます。「私が診査している間だけ、酸素のチューブを外すことができますか。その方が話しをしやすいから。あなたも楽でしょう？」と問いかけ、はずしてもらいます。

『新経典日本語第三冊』「いつも学びがある」⁷⁹

また、上記の物理的な行為のほか、抽象的な意味でも両語の対義関係が見られた。ある

仕事や地位に固定させ、定着させる（85a）の「任務につける」（「つける 23」）と、その場から身を引くことを意味する（85b）の「任務から外す」が対義関係も成している。

- (85) a. 「マクリーをどうやってロンドンであの任務につけたんだ？」 クインはまずあまり重要でない質問からはじめた。

フレデリック・フォーサイス、篠原慎（訳）『ネゴシエイター』、1989

- b. 「俊坊は作業中かなり体がガタガタと震えており小心者だ。本番のときは重要な任務からはずした方が安全だ」 とアドバイスした。

安達冬芽『反逆あるのみ』、2002

そのほか、「枠をつける/外す」、「席につける」と「席を外す」なども同様の例である。

このように、「つける」意味の一部と「外す」の一部が反義関係にあることが明らかになった。特に、「外す」は「設置」や「着用」などの「つける」の反義語として、多くのヲ格共起語を共有し、反義関係をなす。これは、ヲ格名詞の A が付属品の場合、あるいは B とは付属関係にある場合である。つまり、A と B の付属品と本体に焦点を当てる場合には、「つける」と「外す」は反義語の対になりやすい。しかし、こういった反義関係は体系的なものとは言えない。1 つの意味においても、ヲ格共起語の性質などによって異なり、そのコロケーションのすべては「外す」と反義関係にあるとは限らない。

5.5.2.2.2 「つける」と「落とす」

表 5-12 で示しているように、「つける」が「点火」「現出」「生成」「起動」「浸透」などの意味で用いられるときに、「落とす」とは反義関係をなすことがある。「落とす」のプロトタイプ義は「物を上から下へと移動させる」という意味である。＜よい・多い状態は上、悪い・少ない状態は下＞（レイコフとジョンソン 1986:22-24）のメタファー的な派生のパターンに基づき、「落とす」の派生義には、「不要なものを取り除く」や、「質や量を下げる」、「電源をオフにする」という意味がある。「つける」にも対象物を移動させる操作が含まれる。しかし、行為の方向性は決まったものではない。「つける」を用いて痕跡、ある状態の出現、電気器具の起動などの意を表わすとき、その一部のコロケーションの反義表現として「落とす」を用いることができる。（86）は例である。

- (86) a. 敵に発見される前に発見し、上空から速度をつけて加速して接近し一撃で破壊し、そのまま逃げる巴戦なんか絶対やらない。

『ポルシェ・ファン』、2001

- b. いつの間にか列車が速度を落として、景色の流れが緩やかになっていた。

壁井ユカコ 『キーリ』、2004

- c. そしてその木は大変美しく、幅の広い、輝く葉をつけ、黄色い果実の房をつけて

いた。

大沢銀作『写真と文によるマンスフィールド雑記録』、1989

d. カボチャやクワの葉に穴があき、樹木も葉を落とした。

井原俊一『日本の美林』、1997

e. 私が泳ぐのは、ただ単に体に余分な肉をつけたくないからだ。

村上春樹『TV ピーブル』、1990

f. 背筋だけでなく反対側の胃から下腹の筋肉も鍛えて、ぜい肉を落とす。

斎藤陽子『カラダ引き締め脂肪を燃やす斎藤陽子さんのプチダンベル』、2003

(86)a と (86)b の「つける」と「落とす」は反義関係にある。「速度をつける」は抽象的な付随添加の「つける」の用法であり、「速度を上げる」の意味に近い。また、(86)c と (86)d の「葉をつける」と「葉を落とす」も反義関係にある。しかし、この場合の「つける」は植物の「生成」に記述の重点を置き、ない状態からある状態への変化を表わす。一方、「落とす」は単に葉が木から地面に向かって落ちることを描いている。さらに、(86e) の「つける」と (86f) の「落とす」も反義関係にある。ただし、この場合の「落とす」は不要なものを取り除くことに用いられる。「つける」のこの用法にはこのような制限がない。「汚れをつける/落とす」、「匂いをつける/落とす」、「脂肪をつける/落とす」、「化粧をつける/落とす」も同様な例である。また、他の反義の対の例として「信用をつける/落とす」、「電源をつける/落とす」などのコロケーションもある。

以上、「つける」と「落とす」の共通したヲ格共起語を用いて、反義関係にあるコロケーションの分析を試みた。まとめると、「BにAをつける」という事象において、AのBへの移動をプロファイルするとき、特に、下から上、少ない（ない）状態から多い（ある）状態への移動や変化をプロファイルするとき、「落とす」はその反義語として反義関係をなしやすいと言える。

5.5.2.2.3 「つける」と「消す」

表 5-12 から「痕跡」「記録」「点火」「起動」「浸透」の「つける」は、「消す」と反義関係をなすことがある。「消す」のプロトタイプ的な意味は目の前にあるものをなくすことである。「消す」のヲ格共起語となるものには、「姿・火・明かり・電気・匂い・文字・線・跡・履歴」などがある。「つける」と対義関係にある用法を考えると、「電気をつける/消す」、「跡をつける/消す」、「印をつける/消す」、「色をつける/消す」、「番号をつける/消す」、「記録をつける/消す」などのコロケーションが挙げられる。また、(87a)は「火をつける/消す」、(87) b-d は「味をつける/消す」と「匂いをつける/消す」の実例である。

(87) a. ソファの前には小さなテーブルが置かれていて、その上の、ウイスキー会社の名前を印刷した安っぽい灰皿に、千春の煙草の吸い殻が残っていた。千春は出がけ

に火を点け、思い直してすぐ消したらしい。

ねじめ正一『昼間のパパと夜明けの息子』、1994

- b. ねぎに醤油味をつけて焼いたものを飯の上に乗せただけのものだ。ねぎがきつね色に焦げて醤油の香ばしい匂いとあいまって、ごはんとよくあった。

嵐山光三郎『素人庖丁記』、1998

- c. 石太郎の着物はいつ洗ったとも知れず、垢で真黒になっている。その着物に、家の中のあの貧乏の匂いや、ポンツクの生臭い匂いをつけて学校へやって来る。

太宰治、志賀直哉『列車;小僧の神様』、2005

- d. そうやって食べているうちに、だんだん「食べられる」という自信がついてくればしめたもの。次は、味やニオイを消す下ごしらえも徐々にやめて、普通に料理するだけで食べられるようにしていきます。

熱海勝『子どもの「好き嫌い」がなくなるお母さんの魔法のレシピ』、2003

「BにAをつける」が表わす事象においては、動作主の行為によって、AをBに付着させた結果、AがBに残ったりして、そもそもないものがBに新しく現れることがある。特に、「つける」行為には、跡を残すことをプロファイルする用法が多い。その跡のある状態からない状態へ進むには、「消す」行為が必要とされる。それゆえ、「消す」が「痕跡」とそのメトニミー的な拡張義の「記録」の「つける」の反義語として成り立つ。

また、「点火」とそのメトニミー的な拡張義の「起動」の場合、「つける」行為で火を燃やしたり、電源を入れたりして、火や電流を存在物のように目の前に出現させる。一方、「消す」ことで消火したり、電源を切ったりして、火や電流を消滅させる。さらに、「浸透」の「味/匂い/色をつける」が「消す」と反義関係を成すのも同様、ある状態を現出させることと、消滅させることの対義が成立するからである。

このように、「つける」と同様、「消す」も細密度の低い行為と言える。「字を消す」であれ「火を消す」であれ、どのようにして消すのかには重点が置かれず、跡をなくす結果のみがプロファイルされる。それゆえ、これらの意味においては、「つける」と「消す」が反義関係を成すのである。

以上で、「つける」の関連語の一種としての「反義語」について、「外す」「落とす」「消す」の3語を挙げ、「つける」の意味に関連付けつつ、実例を用いて「つける」との反義関係を明らかにした。「BにAをつける」という事象においては、AとBとの付属品と本体の関係に焦点を当てるときは、「つける」と「外す」が反義語の対となる。AがBへの移動することをプロファイルするときは、「つける」と「落とす」が反義関係にある。Bが作用された結果、Aが跡として残されたことをプロファイルするときは、「つける」と「消す」が反義語の対である。

しかし、「つける」は、どの語と反義関係を成すのかは共起語の性質にもよるため、上

記の結論が成り立たない場合もある。また、「外す」「落とす」「消す」の3語のほか、意味用法によっては、「つける」と他の動詞とも反義関係を成すことができる。学習者にとって、一語の反義語を考え出すには、反義関係にある2語に対して正確、かつ深い理解がなければできない。類義語と同様、反義語を「つける」の語彙ネットワークに入れるのは、学習者のための多義語「つける」の関連語に対する記述を充実することができる。また、反義語に対する議論を通して、「つける」の意味機能や意味領域に対する理解をもっと明確にすることができるのである。

5.5.2.3 「つける」と「つく」

「つける」の関連語のうち、自動詞「つく」は重要である。「つく」に関して、認知意味論的な研究においては、鈴木（2001、2003）が詳しい。鈴木（2001）では、「つく」に見られるスキーマ的な意味を抽出し、互いに関連付ける試みを行った。鈴木（2003）では、「つく」のネットワーク構造を作り出し、そして、ネットワーク構造上において、心理的な顕著性としてのプロトタイプ度の高さを、「意味間の関係付けの網の集中度」（p. 66）として位置づけた。

本研究における「つく」と「つける」に対する考察は、その自他動詞の特徴や性質などについてのものではない。5.4で構築できた「つける」の語義ネットワークに基づき、「つける」と「つく」の用法を比較し、意味上関係しないものを各自抽出して、それぞれの独特の用法を示すことに重点をおく。ここでの「つく」についての記述を行う目的は、「つける」の意味に対する考察を深めることである。また、他動詞「つける」の意味用法に基づき、学習者の立場から、関連語としての自動詞「つく」の意味用法にどのように関わっているか検討することである。

まず、共起語から2語の関連性を述べる。コーパス⁸⁰の結果によると、「つく」の実例にはガ格共起語と二格共起語の語数が一番多い。また、実例を観察したところ、定型文「～が～につく」が存在していると分かった。さらに、「つく」のガ格名詞が「つける」のヲ格名詞になる場合が多いと観察された。例えば、「ほこり・条件・知恵・花・味・看護師・火・決心・気…」のような名詞である。これらの「つく」のガ格共起語から、「つける」と「つく」は多くの意味において共通点を持っていることが分かり、その緊密な関連性が示されているのである。

また、2語は同じ二格共起語を持つ場合も多い。例えば、「味方・身・席・仕事・後ろ・地面・眠」が挙げられる。この「つく」は動作主の行為を表わすのに対し、「つける」は多くの場合、使役的に他人の行為を促すことを意味する。この違いがあるものの、使用範囲はほとんど同じである。同じ二格名詞が用いられるのも、意味的に関連性を持つ証拠である。なお、「目をつける」と「目につく」、「鼻をつける」と「鼻につける」などのような、「つける」のヲ格共起語が「つく」の二格共起語になる場合もあるものの、比較的少ない方である。

以上から、「つける」と「つく」のコロケーションから両語の意味用法上の関連性が見られた。当然ながら、すべての共起語が助詞の転換を通して成り立つことができるとは言えないものの、自他動詞の用法間の関連性があることは認められる。

次に、「つく」と「つける」に特有の意味を検討する。「つく」と「つける」の多義ネットワークを比較して、「つける」特有の意味は「つける 2」の身の回りの品の着用、「つける 6」の一時付着、「つける 11」の記録である。一方、「つく」の特有の用法には、「果物に虫がつく」「客がつかない」などの「寄り集まる」という意味、「ばい菌がつく」の「感染する」という意味、「今日がついている」の運が向くという意味、「狐がつく」の霊が人に乗り移るという意味などがある。「つける」は「付・就・着・附・点・即」と書き分けられる。「つく」は「付・就・附・着・点・即・憑」の表記を有する。「つく」の特有の表記は「憑」である。これらの各自特有の用法と表記の明記は、学習者にとっての有益な情報である。

また、他動詞「つける」は主に意図的な行為を表わし、自動詞「つく」は非意図的な行為を表わす。5.4.2で「つける」の多義派生を論じたとき、「つける」が非意図的な行為を意味する場合もあると記述した。その際、「つく」との関係性にも触れた。例えば、「シャツに口紅をつけてしまう」と「シャツに口紅がついてしまう」、「好位置につける」と「好位置につく」、「傷をつける」と「傷がつく」、「花をつける」と「花がつく」などの用法では、「つける」と「つく」が類似している。しかし、まったく同様とは言えない。(88)は実例である。

(88) a. 唯一立ち寄った古本屋で帽子に白いリボンをつけている老人がいた。

今井紀明 『ぼくがイラクへ行った理由』、2004

- b. 白いリボンがついている帽子（作例）
- c. *白いリボンをつけている帽子（作例）
- d. 帽子に白いリボンがついている老人（作例）

(88a)の「リボンをつけている」と(88b)の「リボンがついている」は同じ事態を表わすように見える。しかし、連体修飾節の被修飾節語は、(88a)では老人（人）、(88b)では物である。さらに、(88)c-dから、被修飾語が人か物かによって、自他動詞のどちらかを使うのも異なる。連体修飾節内は、「人がリボンをつける」、「物にリボンがつく」となるのである。この用法はやはり他動詞の動作性、自動詞の状態性と切り離して言うものではない。こういった動詞の意図性に関わる場所は学習者にとっての難点であろう。

以上から、「つく」の用法を「つける」との関連性について、日本語教育の立場から検討し、次の4点がまとめられる。まず、「つける」の多くが付着させる、または接近させる行為を表わすのに対し、「つく」が付着する、または接近することを意味する。行為の使役

性と能動性から事象構造の区別が見られることが学習者にとって有益な情報である。また、「つく」の多くの用法が「つける」の共通しており、「つける」のヲ格共起語が「つく」のガ格共起語である。「つける」の定型文の「BにAをつける」に対して、「つく」の定型文が「AがBにつく」である。さらに、共通している意味を持っている一方、「つける」と「つく」は、それぞれ特有の用法も持っているところについて、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築する際に、その記述に重点を置くべきである。最後に、「つける」には「つく」と類似した非意図な意味が存在することも学習者に明示すべきである。

5.5.3 「つける」の関連語のまとめ

5.5.1 では複合動詞と複合名詞という「つける」の生産性グループの関連語を、5.5.2 では類義語、反義語、自動詞「つく」という「つける」の異質性グループの関連語を、「つける」との関連性を述べつつ考察してきた。ここで取り上げた関連語は、「つける」に関わるすべての関連語ではない。しかし、これらの語に対する記述を通して、「つける」との関連性が明らかになり、「つける」とその関連語の語彙ネットワークに必要な語例が抽出できたと言えよう。

前にも触れたように、「つける」の関連語といっても、「つける」との関与度がそれぞれ異なる。それで、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築するには、どのような関連語を入れるのが問題となる。前章の習得調査の結果を踏まえ、この節の記述と合わせて考えると、「つける」との関与度が高く、しかも、使用頻度も高い語を入れるべきである。また、学習者に誤解をもたらす可能性があり、母語の負の転移などが起きやすい語も入れるべきである。こういった語はいわゆる学習者の立場からの「つける」のプロトタイプ的な関連語である。

「つける」の語彙ネットワークに入れる関連語が決まったら、どのように関連語を学習者に提示するかを考えなければならない。国語辞典の多くでは、単純語の記述の次に、関連する複合語や類義語などを示すという方法を取っている。ここでは意味関連性を明確に示したうえで、それぞれの関連した用法の次に、関連語を提示すると提案する。また、限定された「つける」の意味に関連するのではなく、行為の様態や結果などに関連付けられる場合、その関連性を明記したうえで、まとめて示すべきである。

本章で行った意味分析では、コロケーションを多く挙げた。学習者のための記述には、コロケーションの提示の重要性についてはすでに詳しく述べた。関連語の用法を提示する際に、コロケーションを活かすことで、学習者はよりよく語の当該意味とそれに関連する語の関係を把握でき、当該語とその関連語を語彙のネットワーク図の中に捉えられるようになる。

このように、多義語の意味ネットワークモデルは1つの語の意味記述だけではなく、その関連語の記述にも援用できる。多義ネットワークに関連語を加えることで、学習者の語彙量が増えると同時に、「つける」とその関連語への意味の推測・理解を促進し合うことも

できる。つまり、語の意味は他の語との関係の中でつかむことである。5.5.1 と 5.5.2 から得た知見は 5.7 で構築する学習者のための「つける」の語彙ネットワークに活かすことにする。

5.6 「B に A をつける」の日中対照

この節では、中国語母語話者学習者の日本語学習の役立つ多義語記述の一環として、「つける」とそれに対応する中国語との対照を行う。本研究は、中国語を母語とする学習者の調査に基づいているので、「つける」の語彙ネットワークを作り出すには、対照研究の結果を入れなければならないと考える。今までの多義語対照研究においては、目標言語の 1 つの語彙とそれに対応する母語の 1 つの語の対照が多く行われている。しかし、日中対照においては、このような方法で「つける」のような動詞との対照はうまく行われない。というのは、「つける」の諸用法はいうまでもなく、1 つの用法でさえ、目的語によって対応する中国語の動詞が異なるからである。

例えば、5.4.1 で「つける」のプロトタイプ義を検討する際に挙げた、(11)における「つける」のコロケーションを抽出して、その中国語訳を表 5-13 に示す。「つける」と対応する中国語訳を見てみると、この 4 つのコロケーションにおける「つける」を、それぞれ“別”、“貼”、“安”、“涂”と訳すことが分かる。このように、用法ごとに、そして、コロケーションごとに異なる訳し方がある。それゆえ、「つける」の用法は、学習者に中国語の訳語で提示しても提示しきれないと言っても過言ではない。

表 5-13 (11)における「つける」コロケーションの中国語訳

原文	訳文
胸のひだ飾りにブローチをつける	在胸前 <u>别</u> 着胸针
薄い緑色のシールをつける	<u>贴</u> 上淡绿色的贴纸
一眼レフカメラに超望遠レンズを付ける	给单反相机 <u>安</u> 上超长焦距镜头
裏打紙の表に糊をつける	在裱里纸的正面 <u>涂</u> 上胶水

とはいえ、初めて出会った語に対して、それと対応する中国語を見つけなければ、学習者は不安を感じ、学習に対する抵抗感が生じる。では、母語と比較するという学習者の認知機能をどう利用すればいいのか、正の転移をどう実現させるのかが課題になる。そこで、ここでは、「つける」に対応する中国語の動詞ではなく、「つける」の基本的なコロケーションと対応する文型（定型文）との対照を行う。5.3 では、「つける」の基本的なコロケーションは「B に A をつける」であると確認できた。「B に A をつける」の中国語訳はどのような特徴を持っているのか、翻訳の定型文が存在しているのかを究明できれば、中国語母語話者学習者の学習方法などに示唆できると考えられる。

5.4 の検討を通して、「つける」意味の抽象度が高ければ高いほど、二格とヲ格のどちら

かの1つのみが要求される傾向があると分かった。一方、多くの物理的な行為を表わす「つける」はニ格とヲ格が両方必要とされる。そこで、ここでは、物理的な「つける」を含める「BにAをつける」と中国語の対照を行う。次の(89)はそのような「つける」のコロケーションである。

(89) a. シャツにボタンを付ける (「つける 1」)

在 衬衫 上 钉 扣子
に／シャツ／上／縫う／ボタン

b. 胸に校章をつける (「つける 2」)

把 校徽 佩戴 在 胸前
を／校章／つける／に／胸／前

c. 部屋にクーラーをつける (「つける 3」)

在 房间 里 安装 空调
に／部屋／中／設置する／クーラー

d. タバコに火をつける (「つける 4」)

把 烟 点着 (火)
を／タバコ／点す／(火)

e. 廊下に足跡を付ける (「つける 5」)

在 走廊 里 留下 脚印
に／廊下／中／残す／足跡

f. 壁に耳をつける (「つける 6」)

把 耳朵 贴 在 墙上
を／耳／貼る／に／壁／上

g. 商品におまけをつける (「つける 7」)

给 商品 加 上 赠品
に／商品／加える／上／おまけ

h. 二の腕に筋肉をつける (「つける 8」)

使 上臂 长 肌肉
させる／二の腕／伸ばす／筋肉

i. 一眼レフカメラに超望遠レンズを付ける (「つける 15」)

给 单反相机 安 上 超长焦距镜头
に／一眼レフカメラ／設置する／上／超望遠レンズ

j. 傷口に薬を付ける (「つける 17」)

给 伤口 涂 (上) 药
に／傷口／塗る／(上)／薬

k. 社長に通訳をつける (「つける 19」)

给 社长 配 翻译

に／社長／手配する／通訳

1. 車を正面玄関につける（「つける 20」）

把 车 停 在 正门 门口

を／車／停める／に／正門／玄関

- m. 子供を食卓につける（「つける 21」）

让 孩子 坐 在 餐桌 （旁）

させる／子供／座る／に／食卓／（隣）

(89) の 13 種のコロケーションの訳文を観察し、使われている中国語の文型を抽出する⁸¹。そのうち、意図的な行為を表わす「B に A をつける」の訳文は、大きく 2 つのパターンに分けられる。1 つは、A が先に来て、B がその後ろに付くパターンの“把（让）＜A＞＜V＞在＜B＞上（旁、边…）”で、(88)b・d・f・l・m がその実例である。もう 1 つは、B が先に来て、A が後ろに付くパターンの“在（给、使…）＜B＞上（里、前…）＜V＞＜A＞”で、(88)a・c・e・g・h・i・j・k がその実例である。前者は中国語の“把”構文という定型文である。後者の文を“把”構文に変換しても、不適格な文とは言えず、内容は十分に伝わる。しかし、場合によっては、やや不自然なところがあるので、二格共起語をヲ格共起語の前に置くのである。

続いて、この 2 つの訳文の定型文を考察する。中国語の基本的な構文の 1 つとして、“S+V+O”が挙げられる⁸²。例えば、“我还书（私は本を返す）”のように、動詞が目的語の前に来て、その間には助詞がない。場所名詞が現れる場合、“我还书给图书馆”より“我把书还给图书馆（私は図書館に本を返す）”の方が自然である。つまり、“把”を用いることで、目的語を動詞の前に移すことが可能になる。また、中国語の“把”構文（“把…（上、前…）”）を用いて、物の空間移動を実現させることを表わすことができる。例えば、“请把书带来（本を持ってきてください）”、“把啤酒放到冰箱里（ビールを冷蔵庫に入れる）”などが挙げられる。物理的な「つける」の行為は、移動物 A を背景物 B に接触・接近・浸透させて、B に付着させたり、B と一体化させたりするプロセスを表わすことが多い。つまり、「つける」という事象においては、A の空間移動が行わる。それゆえ、「B に A をつける」は中国語の“把”構文で翻訳することができるのである。

また、“在（给、使…）＜B＞上（里、前…）＜V＞＜A＞”パターンの訳文を検討する。この定型文では、動詞と目的語の順序は“S+V+O”に一致している。ただし、「動詞が前、目的語が後ろ」という順序を保証するには、場所名詞 B を動詞の前に置かなければならない。例えば“把啤酒放到冰箱里（ビールを冷蔵庫に入れる）”を“往冰箱里放啤酒（ビールを冷蔵庫に入れる）”に言い換えられる。しかし、この場合は、“往…里”がなくてはならない。「つける」用法のうち、A の空間移動より、(89) a・c・k・m のように A が B に付着・接近した結果に焦点を合わせる場合、このパターンの訳文の方がより自然である。

一方、「BにAをつける」という定型文では、場合によっては、二格が背景化することもある。このようなコロケーションの訳文についても検討して、考察を加える。例えば、「日記をつける」が成立したのは、「ノートに」といった要素が前提としてあったからである。また、母語話者にとって、「ノートに」が言われなくても、ノートの存在が意識できる。しかし、中国語のそれと対応する“写日记”という表現では、どこに書くか、つまり、書いた内容がどこに存在するかは全然問題にされない。

したがって、この「つける」は“写”と同様だと考えてしまうと、誤用を起こす可能性がある。“写日记”の“写”は“写信（手紙を書く）、写作业（宿題をする）”のと同じ用法であるものの、「*手紙をつける」、「*宿題をつける」は自然な日本語ではない。というのは、「日記をつける」には、筆記具などを使ってノートに接触することで、その日その日の痕跡を残すという意味が含まれているが、中国語の“写”にはそういう意味もなければ、Bの存在も要求されていないためである。

二格が背景化することによって、ヲ格が顕在化するようになった。「名前をつける」も類似した例である。二格共起語が現れなくても、「つける」の意味が限定されている。その中国語訳は“起名字”である。しかし、この「つける」が中国語の動詞“起”とは対応関係にあるとは言えない。一方、「子供に名前をつける」の訳文は“给孩子起名字”で、前述した2つ目の訳文の定型文と一致している。それゆえ、二格が背景化した表現においても、訳文の定型文が存在していると言えよう。

以上、この節では、物理的な行為を表わす「BにAをつける」の中国語訳の定型文を考察した。「BにAをつける」の訳文の定型文は、中国語母語話者学習者にとって、有益な学習情報であり、「つける」の意味を理解するには重要である。母語を通して目標言語の語彙の意味を学習するとき、両言語の区別と関連性を無視してはならない。特に、動詞の場合はいつまでも母語と一対一で対応するわけではない。母語の正の転移を求める方略として、目標語の意味ネットワークを正確に理解するのが前提である。そして、その中から訳語間の関連性を見出さなければならない。

学習者の多義語習得を支援をするために、彼らの母語に配慮すべきである。つまり、「つける」の語彙ネットワークには、学習者の母語との対照研究の成果を入れるべきである。このように、母語からの負の転移を抑制することができ、学習者の習得を促進することができるのである。

5.7 学習者に提示する多義語「つける」の語彙ネットワーク

5.1 では、まず、4章の習得調査に基づいて、学習者のための「つける」を記述する課題を(1)のように示した。

- (1) ①新しい意味を発見するのではなく、既存の意味をどう構造化していき、意味関係を

明確に示すのかを考察する。

- ②表現の理解と産出を助ける多義語記述を目指す。語の機能が分かるには、それを支える多様な共起表現が必要となるため、それらも示す。語の意味記述の重点を「どんな文脈でどう使うのか」へと転換する。
- ③使用度の低い意味を削り、常用の意味を使いこなせるような工夫をする。
- ④語彙量を増やすことや類義語と区別することなどに配慮し、関連語との関連づけを体系的に示す。
- ⑤学習者の母語を十分に考慮・利用し、活用させられる分析を行う。

(再掲)

また、5.2 では、辞典・辞書・コーパスにおける「つける」の記述をまとめて検討し、(1)の研究課題に照らし合わせて、本研究においての分析の方針を(4)のように定めた。

- (4) ①中心義を設定し、語義項目間の関係を明らかにする。
- ②どのレベルの学習者にも見せられるような多義ネットワーク図にまとめる。
- ③分かりやすさを心がけ、解説的な語義記述にする。学習者の分かりにくいところに記述の重点を置く。
- ④意味ネットワークを構築する。そのために、難解のもの、まれにしか使わないものは除き、また、語義項目数が多いことをよしとしない。
- ⑤学習者の母語に配慮し、母語干渉の生じやすいところを明確に示す。
- ⑥語彙量を増やすのに有益なネットワーク図を提示する。
- ⑦用法をコロケーションで提示する。コロケーションを重要視する。
- ⑧当該語と関連付けながら、その関連語を記述し、提示する。
- ⑨語彙ネットワークを構築する。

(再掲)

続いて、5.3 では、(1)の課題に答えるために、(4)方針に従い、コロケーション研究の必要性と可能性を述べたうえで、コーパス調査によって、「つける」のヲ格共起語とニ格共起語の使用実態をそれぞれ検討・考察し、「BにAをつける」定型文の認定を行った。さらに、コーパスの限界を認めつつ、「つける」を記述するのにコーパス調査とコロケーションの重要性を述べた。

5.4 では、認知言語学の枠組みで、「つける」のプロトタイプ義を「具体物Aを背景物Bに接触させ、Bの一部になったかのように、離れなくさせる」という意味に認定した。また、メタファーやメトニミーなどの意味拡張の種類に基づき、コロケーション「BにAをつける」を記述の中心にして、実例を挙げつつ、「つける」の多義を記述した。5.4の最後では「つける」の意味ネットワークを構築した。

「つける」の多義ネットワークの構築にとどまらず、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築するために、5.5では、「つける」の関連語を生産性グループと異質性グループに分けて記述した。「つける」に関連する複合動詞、複合名詞、類義語、反義語、自動詞の「つく」などの考察を通して、「つける」の語彙ネットワークに入れるべき学習者にとってのプロトタイプ的な関連語を定め、そして、学習者への提示の仕方を提案した。

5.6では、学習者の母国語に配慮し、学習者のための「つける」の語彙ネットワークに必要と考えられる「中国語との対照」に対する考察を試みた。これは、母語別の学習者のために多義語習得を支援しようとするものである。このように、5.3から5.6までの検討は、すべて(1)の研究課題を明らかにするための検討であり、(4)の研究方針に従ったものである。

では、ここまでの検討をまとめ、学習者に提示する多義語「つける」のネットワーク図と意味⁸³を次のように示す。

「つける」のイメージ・スキーマ

解釈：人がAを物理的に移動し、背景物のBに接触させ、付着させる行為

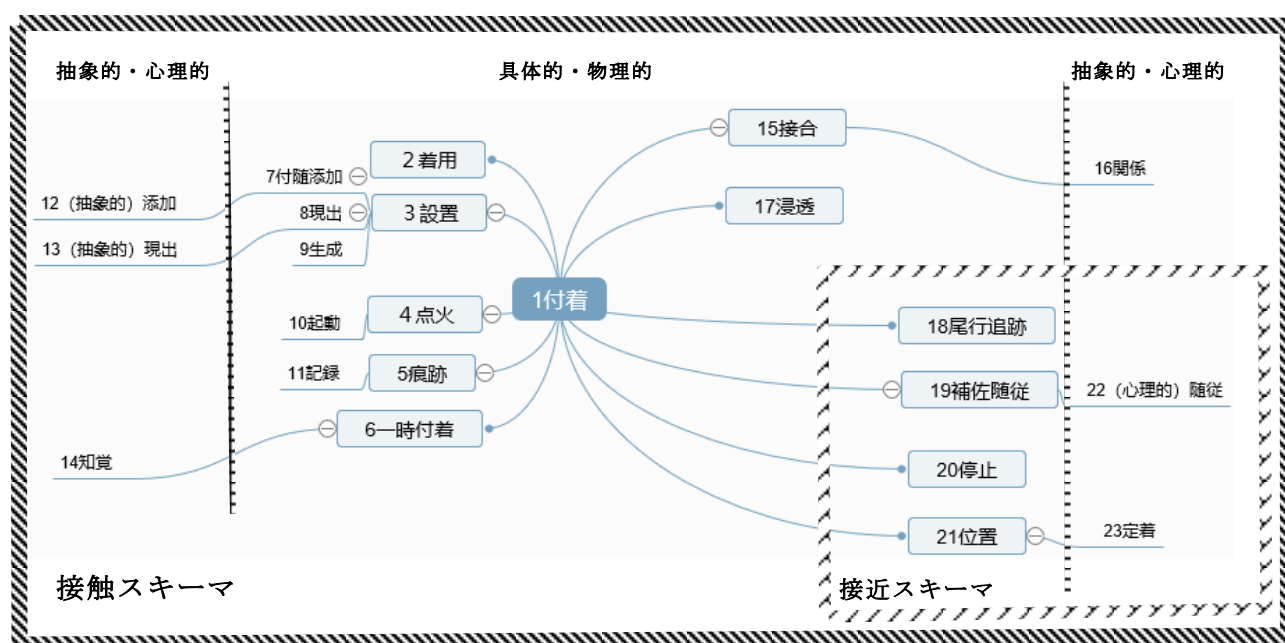
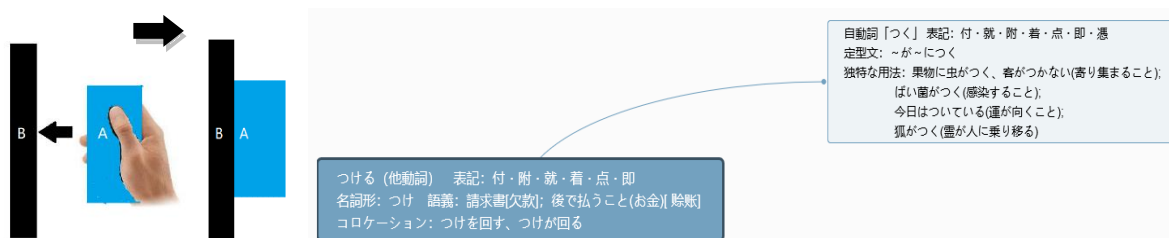


図 5-11 学習者に提示する「つける」の多義ネットワーク図

つける（他動詞）

表記：付ける・附ける・就ける・着ける・点ける・即ける

名詞形：つけ

語義：請求書[欠款]；後で払うこと(お金)[賒账]

コロケーション：つけを回す、つけが回る

自動詞：つく

表記：付く・附く・就く・着く・点く・即く・憑く

定型文：～が～につく

「つく」の独特な用法：

- ①果物に虫がつく、客がつかない<寄り集まること>;
- ②ばい菌がつく<感染すること>;
- ③今日はついている<運が向くこと>;
- ④狐がつく<霊が人に乗り移ること>。

つける 1 付着（プロトタイプ義）

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：<背景物>に<付属品>をつける（BにAをつける）

定型文の翻訳例：紙にシールをつける、[在紙上貼封条]

解釈：付属品Aを背景物Bに近づかせ、「結び・縛る・縫う・貼る・押す」などの操作で、AをBに付着させる行為である。[把一个作为附属品的东西通过结、绑、缝、贴、压等动作，使它和主体物连接在一起的行为]

コロケーション：下駄の裏に金具をつける、

リボンをつける

シャツにボタンをつける（ボタン付け）

関連語：編み付ける・結び付ける・縛り付ける・縫い付ける・貼り付ける・綴じ付ける・押し付ける^①・打ち付ける・巻き付ける <前項動詞の操作で、2つのものを離れないようにする>

付け鼻・付け髭・付け睫・付け爪<本物ではなく、わざとつけ、他人に見せるもの>

付け合わせる^①(付け合わせ)<あしらいとして添える>

例:ステーキにポテトを付け合わせる

慣用句：尾ひれをつける<誇張する> 例：ささやかなことを尾ひれをつけて言う。

類義語：（シールを）貼る、（リボンを）結ぶ

反義語：外す

つける 2 着用

表記：着ける、付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：<体>に<身の回りの品>をつける

定型文の翻訳例：手に手袋をつける[戴手套]

解釈：人が装身具のAを「着る・履く・嵌める・帯びる」などの操作で体に付着させる行為はまるでシールという付属品を紙に近づかせ、貼った結果、シールが紙にくっついた行為のようである。[人穿衣戴帽等行为就好像把贴纸贴在纸上的行为一样，是一种隐喻的语义扩展]

ワ格共起語：衣服・首輪・腕章・手袋・マスク・カバー・コンタクトネクタイ・ネックレス・アクセサリー・指輪・飾り・仮面・下着・衣装・エプロン・バッジ・マスカラ・イヤリング

ニ格共起語：体・手・胸・頭・腰・身体・顔・首・耳・指・腕・足元・肌・髪・頬・指先

コロケーション：衣服を身につける(着付ける)、

胸に校章をつける、
犬に首輪をつける

慣用句：身につける＜能力などを備える＞ 例：知識を身につける

類義語：かぶる＜頭の上から覆う＞、
着る＜上半身の着装＞、
履く＜下半身の着装＞

反対語：脱ぐ、外す、

誤用： ①

○指輪をつける	○衣装をつける
×指輪がつく	×衣装がつく

＜「つく」には「着用」の意味がない＞

②

×眼鏡をつける	○コンタクトレンズをつける
○眼鏡をかける	×コンタクトレンズをかける

<

「かける」は物を対象に上から置いて留めることであり、
メガネレンズは顔には付着させることはない＞

つける 3 設置

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜ある背景物・場所＞に＜付属品＞をつける

定型文の翻訳例：部屋にエアコンをつける [给房间安装空调]

解釈：B に新しい付属品の A を取り付けて、付着させた結果、A が機能する。[在某个地方
安装上某件附属品，不仅仅是使它们成为一体，更重要的是让它发挥它的功能]

コロケーション：ドアにカギをつける、
防犯カメラをつける、
窓にカーテンをつける、
車にカーナビをつける、
携帯電話にストラップをつける
(付け根＜紐の先端につける小さな細工物＞)

類義語：設置する、据える

反義語：外す

関連語：据え付ける＜あるところに据えて、そこに固定させる＞

例：建物に防犯カメラを据え付ける

作り付ける＜作って、建物の一部として取り付ける＞

例：書斎に書棚を作りつける

取り付ける＜設置すること（反：取り外す）＞

例：浄水器・部品・警報装置・アンテナ・金具を取り付ける

つける 4 点火

表記：点ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜蠟燭やタバコなど＞に＜火＞をつける

定型文の翻訳例：タバコに火をつける [把烟点着（火）]

解釈：火を移してタバコに付着させることを、シールを移して紙に付着させることにたと
えている。[把火像物体一样移向可燃物的行为，比喻成在纸上贴封条的行为。通过隐
喻实现了语义扩展]

コロケーション：家に火をつける

ストーブに火をつける

関連語：焚きつける<燃やすために、火をつける> 例：石炭を焚きつける
火付け<火をつけることと、その人>
火付け役<火をつける役。転じて、事件・論議などのきっかけをつくる役。また、その人。> 例：彼は議論の火付け役だ。
付け火<故意に火をつけることと、その火から起こった火災>
類義語：点す<明かりをつける>：火を点す
燃やす<炎を上げさせる>：火・蠟燭・松明・炎くを燃やす
反対語：消す

つける 5 痕跡

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性ない場合もあり、使役性あり

定型文：<ある場所>に<傷、跡、指紋、印>をつける

定型文の翻訳例：廊下に足跡をつける [在走廊里留下脚印]

グラフに印をつける [在图上做标记]

解釈：背景物 B に力を入れて作用し、場合によって道具も必要とされ、「つけた」結果、B に痕跡を残す（が残る）。これを紙にシールをつけ、シールが紙に残ることにたとえている。[把用力（有时也会运用笔、刻刀等工具）在背景物上留下印记痕迹的行为，比喻成贴封条的过程，它们的共同点是 A 都在背景物上留了下来。是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：家具に傷をつける（傷付ける）、
紙に折り目をつける、
跡をつける（跡付ける）
署名・マークをつける<筆記用具や硬いものなどを使って、跡を残す>、
印をつける（印付け<用布の上に、裁ち縫いに必要な目印をつけること>）、

関連語：書き付ける・刻み付ける・彫り付ける・焼き付ける・染め付ける<前項動詞の操作で対象物に跡を残す>

類義語：残す

反対語：消す

つける 6 一時付着

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性のない場合もあり

定型文：<壁や地面などの表面>に<身体部位>をつける

定型文の翻訳例：壁に耳をつける [把耳朵贴在墙上（听）]

解釈：人が自分の身体部位を移動物のように動かし、背景物となる表面にそのまま接触させ、しばらく付着のままにして、また離れる。[把身体与墙面地面的接触，比喻成物体和背景物的接触。不同的是身体的接触是短时的，可能即刻会离开，而物体的附着可能是长时间的。是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：地面に足をつける、
ガラスに口をつける（口付ける）、
手をつける <身体部位はある表面にぴたりと触れる行為>

慣用句：手をつける（着手）<（手で）やり始める>例：家の掃除は一切手をつけていない。

類義語：（耳を）当てる

反義語：（耳を）離す

つける 7 付随・添加

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：<物・事柄>に<物、お金、数字、文字などの関わるもの>をつける

定型文の翻訳例：商品におまけをつける [給商品加上贈品]
 プレゼントにカードをつける [給礼物附上卡片]
 番号をつける [添加号码]

解釈：新しい物事を主なる物事に添えて一体にする行為を「部屋にエアコンをつける」の新しい物を他の物・場所に取り付けて機能させる行為と見なして、物事に新しく添加することを、背景となる物に新しい部品に添えることにたとえている。[是基于比喻的语义扩展，把在某事物上添加新的事物比喻成在某物或者某地安装一个新的机器使其发挥功能]

コロケーション：振り仮名をつける（付け仮名）、
 表をつける、
 索引をつける、
 注をつける

関連語：付け添える
 付け加える 例：文章を二、三行加える
 付け加わる 例：代金に手数料が加わる

類義語：添える、加える

反義語：削除する、消す

つける 8（具体的）現出

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜新状態となるもの＞をつける

定型文の翻訳例：道をつける（作る）[铺路]

解釈：背景物に働きかけて、背景物自体を新しくし、新しい機能を持たせることを、「設置」の付属品を背景物に付着させ、それと一体となり、付属品がそこで機能することにとれている。[是基于比喻的语义扩展，通过对 B 进行重新整理、修缮、改造等操作，使它呈现新的状态，这就好像在某地安装新的物件使其发挥功能一样]

コロケーション：出窓をつける

つける 9 生成

表記：つける

行為の性質：物理的、意図性なし＜同「つく」＞、使役性なし

定型文：＜木や根など＞に＜花や実など＞をつける

定型文の翻訳例：桜の木に花をつけた [樱花树开花了]

 二の腕に筋肉をつける [使上臂长肌肉]

解釈：植物が自らに花や実をつけること、人が自分に脂肪や筋肉をつけることを、人が部屋にエアコンをつけることにたとえている。自分の体から A の出現がまるでどこから A を B に移動した結果、B に A が出現し、機能することのようである。[植物的开花结果、人体肌肉脂肪的生长，就好像把附属品装在某处使其发挥功能一样，是基于设置用法的隐喻扩展]

コロケーション：実をつける（着果）、
 花粉・蕾・葉・種をつける
 肉をつける（増やす—とる）、
 脂肪をつける（増やす—落とす）

類義語：（実が）なる、（花が）咲く、肉を増やす、脂肪を増やす

反義語：（実を）落とす、（花が）枯れる、肉をとる、脂肪を落とす

自他動詞の解説：花をつけている＜今花が咲いている＞

 花がついている＜ある時点から今現在に至るまで、花が咲いてきている状態＞

つける 10 起動

表記: 点ける

行為の性質: 物理的、意図性あり、使役性あり

定型文: <電気器具>をつける

定型文の翻訳例: エアコンをつける [打开空调]

解釈: メトニミーに基づき、「点火」から拡張された意味である。「ストーブに火をつける」用法から、「ストーブをつける」へ派生し、ストーブに火をつけたら、ストーブが機能できる。そこからさらに、「つける」が広く何らかの操作でスイッチを入れて器具を作動させ、活動を開始させることを意味する。[是基于转喻的语义扩展, 由给炉子点火, 变成点炉子。继而用来表示电器的开启]

ワ格共起語: 明かり・テレビ・エアコン・灯・照明・ストーブ・ランプ・電灯・ライト・装置・ラジオヒーター・TV・電気・～器・クーラー・～機・換気扇・電源

類義語: 点す<明かりをつける>: 蠟燭・電気・ライトを点す
電源を入れる

反対語: 消す、切る

誤用:

×電気を開ける	×エアコンを点す
○電気をつける	○エアコンをつける

つける 11 記録

表記: 付ける

行為の性質: 物理的、意図性あり、使役性なし

定型文: <日記など>をつける

定型文の翻訳例: 日記をつける [写日记]

解釈: 書く行為を通して、紙などに文字としての具体的な内容を残す行為である。書き記した内容とその内容を残すところの関連性に基づき、「つける 5」からメトニミー的に拡張している。[记日记等写字的行为, 就等同于在纸上留下字迹的行为。这是基于「つける 5」的转喻扩展]

コロケーション: 日記をつける
家計簿をつける
記録をつける
メモをつける

関連語: 付け込む^①<書き入れる>

反義語: 消す

類義語: 記す<文語的、「書き留める」意>、書く<幅広く使われる>

×小説をつける	○印をつける	×紙に名前を付ける	×メールをつける
×小説を記す	?印をかく	○紙に名前を書く	○メールを書く
○小説を書く	×印を記す	○紙に名前を記す	×メールを記す

つける 12 (抽象的) 添加

表記: 付ける

行為の性質: 抽象的、意図性あり、使役性なし

定型文: (<人・事柄>に) <条件、数字、名称、人間の言葉、表現・評価、非難・苦情に関わる抽象的な語>をつける

定型文の翻訳例: 子供に名前を～ [给孩子起名字]

解釈: 抽象的な添加を具体的な添加にたとえている。「子供に名前を付ける」ことを、「プレゼントにカードをつける」ことにたとえる。[由具体的添加到抽象的添加的隐喻扩展。把给孩子起名字的抽象行为比喻成给礼物附带卡片的具体行为。]

コロケーション：条件をつける[附加条件]、
説明をつける[添加説明]
予算をつける[做預算]
注文をつける[預定;点餐]
速度をつける[加速]
理屈・理由(理屈付ける)[添加理由]
評価・コメント[添加评论]
クリーム・けち・言いがかり・難癖・文句・因縁をつける<マイナスな
見解が多い>をつける[抱怨、刁难]
成績をつける、
あだ名・愛称をつける(名付け)、
利息をつける
値段をつける(付け値<買い手がつける値段>、
付け札<商品につけた値段札>)
慣用句：勿体・もったい・をつける<重々しい態度や威厳をつける>
類義語：添える、出す、言う、上げる、決める
反義語：減らす、落とす

つける 13 (抽象的・心理的) 現出

表記：付ける、つける

行為の性質：抽象的・心理的、意図性あり、使役性あり

定型文：<人>に<人の習慣、能力、状態に関わる語>をつける

<事柄>に<結果・評価・決心・予測などの人の認識、思考や感情を表わす語>
をつける

定型文の翻訳例：子どもに勇気をつける [使孩子拥有勇气]

仕事に一段落をつける [使工作告一段落]

解釈：「道をつける」という道の新状態を現出させることから、人間あるいは事柄の新状態
の現出させることへメタファー的に拡張している。[是基于隐喻从具体的出现到抽象
的心理上的出现的语义扩展，把人或事物呈现出的新的状态比喻成「道をつける」那
种具体的状态的变化]

コロケーション：技術・知識・力・元気・自信・体力・学力・態度・教養・勇気・実力・
癖をつける <人の知識や能力など>
けり・始末・結末・見切り・結着・切れ目・見通し・踏ん切り・話を
つける <結果・結論に導いた決定にさせる>
片をつける(片付ける、片付け、後片付け)
順位・角度・整理・段取り・道筋をつける
<物事の整えられたの状態または限界の状態にさせる>
決心・思案をつける <意思を固めること>、
差・大差・格差・段差・区別・けじめ・勝負・強弱・白黒・優劣をつけ
る<判定を通して、評価を定める>、
見当・目星・目処をつける<予測する>

関連語：元気付ける、力付ける、勇気付ける

付け元気<うわべだけ元気そうなふりをする>

付け景気<景気がいいように見せかける>

付け知恵<わきの人が入れ知恵をすること>

落ち着ける^②<気持ちを静める>

ヲ格:<心理状態>気、気持ち、心情、運氣、状態

例：ゆっくりと深呼吸をして気持ちを落ちつけた。

植え付ける<ある新しい観点・観念を人に教え、人の心に刻み付けること>

ヲ格:<意識心情>意識、印象、精神、記憶、感情、感覚、競争心、愛国心

例：子どもに正しい世界観を植え付ける

番付け/ばんづけ/<技術・力量などの順位をつけること。また、それを示す表>
例：相撲の番付け

つける 14 知覚

表記：付ける、つける

行為の性質：抽象的、意図性あり、使役性なし

定型文：<気、目>をつける

定型文の翻訳例：体／健康に気をつける [注意身体]

解釈：視線や注意を移動させて対象物に付着させることを、身体部位を物理的に背景物に移動し、一時的に付着させることにたとえている。「つける 6」からのメタファー的な拡張である。[把视线或者注意力的移动，比喻成身体部位与地面等背景物的瞬间接触。是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：気をつける（心付ける、気付け）、目をつける

関連語：嗅ぎつける・聞きつける・見つける<感覚器官でとらえて、それを探り出す>
付け所<着目し、注意すべきところ>

類義語：（気を）配る・遣う、（目を）向ける

反義語：（気を）抜く、（目を）離す

つける 15 接合

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：<B物>に（と）<A物>をつける

（BとAは多くの場合同性質のものであり、対等関係にある）

定型文の翻訳例：一眼レフカメラに超望遠レンズを付ける[给单反相机安上超长焦距镜头]
紙と紙を糊でつける [用胶水把纸粘在一起]

解釈：「接合」は同質の具体物AとBを互いに接近させ、結ぶ、ねじる、貼るなどの行為をして、その結果、AとBが接合した。「付着」の「つける」より典型度が低い「付着」との区別には、具体物AとBのそれぞれ性質、行為の方向性、行為の結果などが挙げられる。[表示“接合”的「つける」的A和B属于同等性质的物体，通过绑、拧、贴等操作使两者接合起来，不是附属关系。在物体A和B的性质、行为的方向性、行为的结果等方面与“付着”存在差异，典型度较低]

コロケーション：骨と骨をつける(つなぐ一折る)、

関連語：半田付け/はんだづけ/<はんだで金属を接合すること、その接合したもの>

つける 16 関係

表記：付ける

行為の性質：抽象的、意図性あり、使役性あり

定型文：<人や事柄>に（と）<関係・連絡>をつける

定型文の翻訳例：先生に連絡をつける[和老师联系]

解釈：物事を関係づけることを、物を接合することにたとえる。結果的には、2つの事柄あるいは二人がつながるようになった。「接合」からのメタファー的な拡張である。[是基于隐喻的语义扩展。把事物之间相互关联，比喻成物体的接合。其结果是两件事或者两个人之间产生了关联或联系]

コロケーション：関係をつける（関係付け）
折り合いをつける

関連語：付け合わせる^②<2つのものをひきくらべてその間の異同を調べる>

例：A書類とB書類を付け合せて内容を確認する。

類義語：（関係を）結ぶ、（連絡を）とる

反義語：切る

つける 17 浸透

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜料理、人の皮膚など＞に＜調味料、化粧品、薬品など＞をつける

＜物・事柄＞に＜味、色など＞をつける

定型文の翻訳例：傷口に薬をつける（付け薬）[给伤口涂药]

ご飯に塩味をつける [给米饭加上咸味]

解釈：AをBに移動させ、塗る・振りかけるなどの行為でBの表面に付着させて、Bに浸透させる行為である。その結果、Aの形が崩れ、Bの表面に存在しない（跡が残る場合もある）。また、「付着」と「接合」と異なり、いったんつけたら、AをBから取り外すこともできなくなる。[把A通过涂、撒等操作使它附着在B的表面，并且使其渗透进去的行为。这时A的形状发生变化，消失在B的表面（有时会留有痕迹）。与「付着」和「接合」不同，A和B不能再分开。]

ワ格共起語：洗剤・せっけん・香水・剤・薬・油・唾・水・衣・塩・みそ・小麦粉・卵・パン粉・醤油・ソース粉・糊・口紅・バター・ワックス＜液体・粉末状・糊状のもの＞

コロケーション：においをつける（着臭）、

染みをつける

（酸・苦・下・風…）味・（焼き・焦げ・水・赤い…）色をつける

慣用句：色をつける＜情を加えて処理する＞

例：この前借りた分を返すわ。ちょっと色付けておいた。

関連語：塗り付ける（塗り付け）例：整髪料を髪に塗り付けてる

吹き付ける＜洗剤を吹いて、物の表面に付着させること＞

擦り付ける＜擦ってつけること＞ 例：傷に薬を擦り付ける

染め付ける（染め付け）例：皿に花模様を染め付ける

＜前項動詞の操作で、AをBに浸透させる＞

付け汁＜うどん・そば・てんぷらなどにつける汁＞

付けペン＜いちいちインクをつけながら書くペン＞

※前項動詞からAをBに浸透させるまでの具体的な操作が分かる。

色づける（色付け）

類義語：醤油をかけて食べる＜醤油をもって、上から料理にまく＞

つける 18 尾行

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性なし

定型文：＜乗り物や人（のあと）＞をつける

定型文の翻訳例：前の車をつけてください。 [请跟上前面的车]

解釈：動作主が物を他の物に移動し、付着させることから、動作主が自分を物のように移動し、他の人に接近させることへメタファー的に拡張する。[把人跟在他人（或车）的后面尾随的行为，比喻成移动物体使其附着在其他物体的上面。由物物的接触，扩展成人与人的接近。是基于隐喻的语义扩展。]

コロケーション：後をつける、犯人をつける

関連語：付け回す（自：付け回る）＜どこまでも離れないように、しつこくなるほど後をつけて行く（マイナスイメージ）＞例：彼は私立探偵に付け回されている。

付け狙う＜相手の後をつけて、常に相手の様子を伺ったり、機会をうかがったりする（マイナスイメージ）＞例：変な人に付け狙われる。警察は彼を付け狙った。

売りつける＜無理矢理に買わせる＞

押し付ける^②＜相手にしつこく近寄り、責任を負わせる＞

類義語：追う、尾行する

つける 19 補佐・随従

表記：付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜人＞に＜家庭教師、付き添い、案内人などの付き添わせる対象＞をつける

定型文の翻訳例：社長に通訳をつける [给社长配翻译]

解釈：物 B に物 A を接近させて、付着させることから、人を相手に接近させ、相手のそばで機能させることへ派生し、その人でその人の役割を表わす。メトニミー的な拡張である。[使物体 A 接近物体 B，并附着在 B 的上面的行为，扩展到一个人接近另外一个人，并且留在他的身边起到辅佐的作用。是基于转喻的语义扩展]

コロケーション：息子に家庭教師をつける、
病人に付き添いをつける、
部下をつけて出張する、
団体客に案内人をつける、
警護をつける

類義語：伴う

反義語：振り切る

つける 20 停止

表記：着ける、付ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜乗り物＞を＜ある場所＞につける

定型文の翻訳例：車を正面玄関につける [把车停在正门门口]

解釈：乗り物を動かして、停止させるのは、あたかもシールを持ってきて、紙に固定させる行為のようであるので、「つける 1」からのメタファー的な拡張である。[把启动汽车等交通工具，使它停在指定地点的行为，比喻成把封条固定在纸上的行为。是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：船を岸壁につける

関連語：寄せ付ける＜近くへ来させる＞ 例：敵を近寄せない。

（寄付＜公共事業や社寺などに金品を贈ること＞、寄付金）

駆け付ける（緊急駆けつけ） 例：震災地に駆けつけて救援する。

呼び付ける＜立場の上の人が下の者に呼んで自分のところに来させる行為＞

例：部長に呼びつけられて、叱られた。

乗り付ける＜乗り物に乗ってその場所に到着する＞

例：急いでタクシーで乗り付ける。

近付ける 例：顔を近づけて覗き込む。

横付け＜車や船などを横ざまにつけること＞

例：船が船着き場に横付けになった。

類義語：停める

反義語：走る

つける 21 位置

表記：着ける

行為の性質：物理的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜人＞を＜ある場所＞につける

定型文の翻訳例：子供を食卓につける [让孩子坐在餐桌（旁）]

解釈：人のある場所に置く行為である。A が B に付着した結果と、人がある所定の場所に置かれた結果とは共通しているので、「付着」からのメタファー的な拡張である。[是指把人安置在某个位置。物体 A 和 B “付着”的结果和人被安置在某个指定位置的结果相类似。这是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：学生を席につける、位置につける（位置付ける、位置付け）、
走者をスタートラインにつける

関連語：落ち着ける^①＜体などのある場所にすえる＞

ヲ格：＜身体部位＞ 体・身・腰・尻・筋肉・髪の毛

例：屋台の握りずしは腰を落ち着けて食べるものではない。

植え付ける＜所定の場所に草木や作物の苗を植える＞

ヲ格：＜植物関連＞ 芽・球根・株・根・草・苗

例：空地に野菜を植え付ける

類義語：（席に）座る、（位置に）留める

反義語：外す、離れる

つける 22（心理的）随従

表記：付ける

行為の性質：抽象的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜人・集団・事柄＞を＜味方＞につける

定型文の翻訳例：腕のいい弁護士を味方につける [聘请有能力的律师]

解釈：人のそばにいさせて離れさせようとしないように、言われるままに人の意見に従わせたり、相手の立場に心を寄せさせて従わせたりすることを意味する。心理的な「随従」を物理的な「随従」にたとえ、メタファーに基づく拡張である。[把让遵从某人的意见，心理上依附于某人的抽象行为，比喻成跟在某人身边做他的帮手等具体的行为。是基于隐喻的由具体的跟从到心理的随从的语义扩展。]

コロケーション：時間・運を味方につける＜心を寄せさせて従わせる＞

類意義表現：味方にする

反義表現：味方を見捨てる

つける 23 定着（仕事、地位）

表記：付ける、就ける、即ける

行為の性質：抽象的、意図性あり、使役性あり

定型文：＜人＞を＜ある場所・順位＞につける

定型文の翻訳例：田中さんを管理職につける [让田中担任管理层]

解釈：「つける 21」の人をあるところに身を置くことからメタファーによって、拡張した意味である。抽象的なポジションにいさせることを、具体的な場所にいさせることにたとえている。[使某人处于某个位置或职务，比喻成把某人安置在某个具体的位置，是基于隐喻的语义扩展]

コロケーション：仕事につける、職につける、皇位につける

類義語：（仕事に）携わる、（皇位）を授ける

反義語：外す、（皇位）を退く

一語化した複合動詞：

付け込む^②＜機会をうまくとらえて利用する＞

ヲ格：弱み（弱点・弱り目）・ミス・無知・欲・油断・焦り・窮状・危機・痛手・不備・～の不満・不足＜相手のよくない状態、特に精神状態＞

例：相手の油断を付け込んで勝った。

（人の）親切・良心・好意・優しさ＜相手の善を利用し、悪質な行為＞

例：穏やかな学者タイプの人柄に付け込む画策をした。

関連名詞：付け目＜つけこむべき所。利用すべき相手の弱み＞

類義語： 付け入る（付け入れ）

付け上がる＜相手の寛大さに付け込んで、思い当たった態度を取り、増長する＞

例：おとなしく引き下がったら、彼は付け上がる。

調子に乗って付け上がる。

取り付ける^②＜相手を説得して、自分の思い通りの約束や承諾などの返事を獲得する＞

ヲ格：同意・支持・契約・了解・協力

例：部長と会う約束を取り付ける。

複合動詞「～つける」

①<いつもしていて、それに慣れる>

語例：行きつける・食べつける・やりつける・飲みつける・読みつける・乗りつける
待ちつける・使いつける・見せられつける・履きつける
(名詞：行きつけ、食べつけ、やりつけなど)

②<動作・作用が相手に確実におよび、強い勢いでそれをする>

語例：しかりつける・にらみつける・押さえつける・締め付ける・どなりつける
照りつける・たたきつける・こすりつける・脅しつける・責めつける・攻めつける
投げつける・貸しつける・送りつける・言いつける・申しつける

③<感覚器官でとらえて、それを探り出す>

語例：嗅ぎつける・聞きつける・見つける

④<工夫を凝らして美しく何かする、また目立たせるようにわざと何かする>

語例：飾りつける・盛りつける・見せつける

接頭辞+つける

くっつける<ぴったりとつける>

コロケーション：受話器に耳をくっつける、窓に顔をくっつける、
壁際に背中をくっつける

ぶっつける<強く当てる>

コロケーション：水中の岩に頭をぶっつける、大きなゴミ箱に車をぶっつける
難問をぶっつける

複合名詞：

①接尾辞の付け/づけ/

<…がついている>

例：糊付け<糊がついている>

さん付け<敬称の「さん」がついている>

<日付を示す数詞の下に付いて、その日付であることを表わす>

例：6月30日付け

<方位名詞につき、書籍・手紙関連の用語として用いられる>

前づけ<書籍の本文の前につける題字・序文・目次・凡例などを指す>

後づけ<書籍の巻末に入れる後記・索引・付図・奥付などを意味する>

下づけ<謹状・再拝のような、手紙で謙遜の気持ちを表わすために、署名の下につける語のこと>

②特殊な複合名詞：

掛かり付け(掛かり付け医)<いつも診察してもらっていること>

×掛かり付ける

付け届け<謝礼のため贈り物をする、また、その金品のこと>

例：病院で付け届けをしたら罰金を課す。

×付け届ける

以上のように、学習者の多義語習得を支援するために、学習者のニーズに応えられる「つける」の提示法を示した。この「つける」とその関連語の語彙ネットワークが学習者のためのものである。「つける」の意味記述自体は、認知意味論の枠組みで行ったもので、プロトタイプ義を中心にして、多義が放射状カテゴリーを成している。また、分かりやすさを求めるために、行為に対する説明とコロケーションを同時に示している。さらに、各語義

の解釈においては、学習者の習得を支援するために、「つける」の延長線に位置する関連語を加えた。本研究で提案した多義語の記述方法は語義間の連続性だけでなく、関連語との連続性も「つける」の語彙ネットワークに示す方法である。そうすることによって初めて、「つける」とその多くの関連語を連続的に学習することが可能になったのである。

本研究で構築できた「つける」とその関連語の語彙ネットワーク、および「つける」の用法のまとめは、どのレベルの学習者にでも適用できるようにしたものである。そして、その一部だけを取り出して学習者に見せることも可能にしている。また、学習者の母語に配慮し、難読語や定型文に対して中国語訳をつけたり、学習者の母語のメカニズムと一致する関連語を入れたりして、母語の正の転移を促進する工夫をした。このようにして、中国語母語話者の多義語習得を支援するための意味提示のありかたを提案したのである。

この提示法における記述は、いずれも(1)の記述方針に従ったものであり、学習者の「つける」習得支援に役立つと考える。また、認知言語学的な観点から言語の習得過程を考えると、上記で示したような意味のネットワーク状の記述がいかに学習者にとって有益かが分かる。学習者は、本来、言語使用の実例に数多く当たり、学習者が個人的に意味ネットワークを構築していき、語の意義を部分的かつ全体的に習得していつているはずである。しかし、学習者自力でいつまでも正しいネットワークが作れるとは限らない。正確なネットワークを構築する支援が必要とされる。上記の意味記述はその過程全体を提示しているので、学習者は個々の言語経験を1つ1つ自分で積むことなくその語の意味の全体的広がりを把握することができると考える。

第6章 終章 本研究の要約と今後の課題

本研究では、学習者の多義語習得に対する調査を行ったうえで、「つける」とその関連語に着目し、多義語をどのように記述すれば、中国語母語話者学習者の学習の手引きになれるのかを明らかにし、学習者のニーズに応えた多義語の語彙ネットワークモデルを構築した。本研究は、中国語母語話者学習者の多義語の習得研究であり、その支援への提案をするための多義語の意味研究でもある。この終章では、まず、各章についてまとめる。そして、本研究の中心課題について総合的な考察を行う。最後に、本研究の限界と今後の課題を示す。

6.1 各章のまとめ

序章では、本研究の動機と目的、研究内容と課題、研究方法を示した。筆者は、自分の学習と授業実践を振り返り、そして、学習者の多義語習得が進まないことなどから、多義語の指導の改善を考えるようになった。そこで、本研究では、中国語を母語とする学習者が日本語の多義語をどのように習得していくか、多義語の個々の意味を習得するとき、どのように扱っているのかなどを究明したうえで、教育現場に生かせる多義語の記述を行うことにした。

このような学習者のニーズに応えられ、中国語母語話者学習者の学習を支援できる多義語分析をするために、学習者はどのように多義語を学習し、その習得のプロセスはどうなっているのか、学習者のための多義語をどのように記述すればいいのかという2つの課題を設定した。これらの課題を究明するために、意識調査としてのアンケート調査と質的調査をともに行い、学習者の学習・習得状況を把握すること、および認知意味論の枠組みを使い、コーパスとコロケーションを利用して、語の多義ネットワークを構築し、そのうえで、中国語母語話者学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築することを、それぞれ実施することとした。

第2章では、中国語母語話者上級日本語学習者を対象とし、アンケートの形で、ニーズ調査を行った。調査の目的は、中国語を母語とする日本語学習者の多義語習得、特に多義動詞の習得状況を把握すること、学習のストラテジーを調査し、その問題点を発見すること、事例研究の対象を選出することの3点である。この調査は、中国の某大学で日本語・日本文化、日中翻訳通訳を専攻する中国人大学院生89名を対象にしたものである。

考察を通して、調査の目的に照らし合わせてみると、下記のようなことが明らかになった。まず、学習者の習得状況を(1)のようにまとめた。

- (1) ①上級学習者にとっても、多義語の学習・習得はたいへん難しく感じられる。
- ②多義語の難しい理由は多々あり、語の受容と産出の両方に関わっている。
- ③学習者は、多くの方法で多義語学習を行っているが、有効な方法がなかなか見つかる

らず、戸惑うことが多い。

- ④多義語のうち、多義動詞習得の困難さがもっとも目立つが、それには動詞の生産性、意味構造などが関係している。
- ⑤初級の段階から学習した基本動詞が上級になっても、習得できたとは思えない。
- ⑥中国語母語話者学習者は、母語の影響を受けるが、そこには、正の転移がある一方、負の転移も発生し、それが多義語学習の障害となる。

また、多義語の学習方法とその問題点は（２）のとおりである。

- （２）①多義語学習のルートが辞書中心になり、教科書・教室・教師からの支援が少なすぎる。
- ②意味が派生するメカニズムや意味構造に対する学習が少なく、それらに対する工夫が不足している。
- ③例文や文脈などによる学習が多くある中で、暗記や反復のみで覚えていくのは効率が悪く、学習者の負担ともなる。
- ④「見る・読む・聞く・書く・話す」といった活動を通して、多義語の学習を進める中で、「考える」ことで意味間の関連性を抽出したり、多義を構造化していくなどの努力が少ない。
- ⑤多義語の生産性、多義語の関連語の学習に対する工夫が足りない。
- ⑥母語を用いての学習に不適切なところがあり、負の転移を防ぐ対策が見られない。

さらに、例示した基本動詞のうち、どれがもっとも困難だと思うのかの答えとして、「上がる」と「付ける」の２語の回答数が圧倒的に多かった。その理由として、意味が多数あること、意味間の関連性が薄いこと、文法的な要素が数多く含まれていることなどが挙げられた。そして、「上がる」と「付ける」のどちらを事例研究の対象にするかを決めるときに、プロトタイプ義がつかみにくいこと、中国語母語話者にとって自動詞より他動詞のほうが馴染みがあること、また、語の生産性、共起語の豊かさなどを考慮し、事例研究の対象を「つける」に定めた。

この上級日本語学習者を対象とした調査を通して、中国語母語話者学習者の多義語の学習と習得の現状が把握でき、学習者の立場からの多義語研究をする必要性和重要性があることが分かった。これらの結果に基づき、次に行う縦断的な習得調査の課題がより明確になった。

第３章では、先行研究の概観を行い、本研究の位置付けを示した。多義語分析についての先行研究の中で重要なのは、国広哲弥、森田良行、田中茂範の研究である。国広は、意義素論と現象素論を提唱し、多義語の意味関係を精密に分析し、多義派生のメカニズムを明らかにした。特に、現象素による１３種類の派生の型は、相互に少し重なっている項目が

あるものの、多義構造全体を究明するには示唆に富み、多義構造の構築に有益な理論的根拠を提供している。

森田は、語そのものの多義性・多義構造より、ほかの語（類義語）との関連性の分析に重点を置く。また、語の中心義・派生義などはあまり問題にせず、語を使用する文脈や場面を記述の中心としている。日本語教育から見れば、学習者実際の運用に役に立つ記述となるが、その一方、学習者はこうした記述を見るだけでは語の全体像を把握することはできないと考える。

田中は、コア、プロトタイプ、ネットワークの3つの概念を統合した意味論の枠組みで多義語を検討している。田中の言うプロトタイプ、ネットワークは、認知意味論のそれと関連する。用例の最大公約数的な意味としてのコアは、ラネカーのスキーマに相当し、語の意味範囲の全体をとらえる概念としてのコアは、国広の現象素に相当するという。コアの考え方は、語彙学習の観点からは役に立つが、コアが示されている語が限られているので、教育に適用できる語は少ない。

続いては、認知意味論的な多義語分析のプロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係の明示、複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明という3つの課題をめぐり、認知言語学における多義語研究の方法を列挙しつつ、本研究に關係する理論について述べた。特に、本研究で援用しようとしている Langacker (1987) が提唱した「プロトタイプとスキーマに基づくネットワーク・モデル」の有効性について述べた。

この理論では、多義語の各意義がプロトタイプ義を中心に有機的につながり、放射状にネットワークを成す。拡張とスキーマに基づく、このネットワーク・モデルは、多義語の中心義から各意義へと放射状に広がるネットワークの様子を示す方法で意味記述を行うものである。多義ネットワークを形成する意味の間には、メタファーやメトニミーなど意味拡張の基本原則に基づいて記述が可能である。

ネットワーク・モデルは、多義語の様相を適切かつ詳細に捉えられるものであり、多義語の全体像を記述する方法としてはきわめて有効である。しかし、多義語の分析を行う際、どのモデルを用いて多義構造を示すかは、語の性質に従う。語ごとに適切なモデルがあるとも言えるが、どの語にも統一的に適応できるモデルがあるかどうかについてはまだ研究の余地があると考ええる。

一方、第二言語習得論における多義語習得に関わる先行研究についての検討では、多義語を対象とした語彙習得研究の課題を示したうえで、多義語習得研究におけるプロトタイプとスキーマ、ネットワークモデルの応用研究、コアの応用研究、コロケーションの応用研究についてそれぞれまとめた。そのうえで、多義語についての研究成果が日本語教育の現場には十分に反映されていないこと、日本語教育における多義語習得・指導の面から検討の余地があることを述べた。

さらに、先行研究の検討を通して、本研究の位置づけを示した。この研究は、中国語母語話者の日本語習得という観点から、多義語とその関連語を統括できる語彙ネットワーク

を作り、学習者の日本語多義語習得に役立つ多義語記述を目標にして、学習者のニーズに応じた多義語分析の可能性を探ることにしている。そこで、本研究を、多義語の意味分析に関する理論研究からスタートし、学習者の多義語習得支援を目標とする実用的な目的を持つ、応用研究への橋渡しの手法を探る研究であるというように位置付けた。

第4章では、2章のニーズ調査の結果に基づいて、「つける」の習得過程に対する縦断的調査を行った。この質的調査は、中国語母語話者日本語学習者6名を対象としたものである。調査期間は、約2年間（2014年9月～2016年6月）で、調査の中心課題は、学習者の「つける」を代表とする多義語の習得プロセスを究明することである。調査では、事例研究の研究手法を用いて、教科書調査、授業観察、インタビュー、テスト調査など多くの調査方法を利用してデータを集めた。そして、内容分析という分析手法でデータを調査別、調査協力者別でそれぞれまとめたうえで、調査の結論を導いた。

調査課題は（3）の5つである。

- （3）①学習者の習得順序と教科書の提出順序は、一致しているか。教科書に出ている用法を無理なく習得できたか。また、学習の困難点はどこにあるのか。
- ②「つける」の意味の中には、習得しやすいものと習得しにくいものがあると想定されるが、それらは、それぞれどのような意味なのか、そして、その理由は何か。
- ③学習者は具体的にどのような方法で「つける」を学習するのか、いかに意味を推測・理解しようとしているのか。習得困難な語に出会ったとき、それを乗り越える工夫はどのようにしているのか。自らの方略がうまくいかない場合は、意味の習得が困難であると想定するであろうが、その結果はどうなるのか。
- ④学習者の中の「つける」のプロトタイプの形成、スキーマの形成、意味のネットワークモデルの形成は、それぞれどのようなになっているのか。形成されている意味構造と形成されていない意味構造は、それぞれどのようなものか。
- ⑤母語の転移（影響）があるか。あるとすれば、どのような転移か。

なお、①と②は学習者の習得についての調査結果に関わるものである。また、③-⑤はその結果をもたらし要因に関するものである。

調査を通して、以下の（4）の9点の結論が得られた。

- （4）（A）学習者の習得順序は、教科書の提出順序とは一致していない。学習者には、インプットの少ない意味、母語との対応関係が見つからない意味、抽象的な意味は習得しにくい。
- （B）「つける」の学習には化石化現象が見られ、1つの語義に対する徹底的な理解、未知の語義への推測、類義語との使い分け、関連語との関わりの理解といった深い語彙学習は行われていない。

- (C) 「つける」の意味習得において、意味の理解と産出はアンバランスな状態であると見られるため、意味の理解と産出を両方重視すべきである。特に、産出の助けとなる意味記述を目指すべきである。
- (D) 学習者の、多義語のプロトタイプ義の学習を強化する必要がある、さらに、プロトタイプとスキーマを確実に理解したうえで、意味拡張の種類を認識し、多義のネットワークを形成させる支援も必要である。
- (E) 教師、教材、また学習者自身も語彙量を増やす際に、語と語の間の関係を築くことにあまり注意を払わない傾向が見られるので、意味の連続性、他の語との関連性を学習者に意識させる支援をすべきである。
- (F) 第二言語学習者は、母語を介して目標言語を学ぶ段階があり、母語の概念に依存し、目標言語の語彙と母語の語彙との対応関係を見つけつつ学習を進めていくので、母語の正の転移を促進し、負の転移を抑制する工夫が必要とされる。
- (G) 学習者の多義語習得を支援するには、語彙ネットワークを構築し、当該の多義語だけではなく、その関連語も入れるべきである。
- (H) 共起語との関係を軽視する傾向が見られるので、コロケーションで語義を示す場合には、共起語の使用範囲の広がり提示の重点を置き、分かりやすい連語から意味を学習させるべきである。
- (I) 授業実践者は積極的に学習者の多義語習得を支援し、語の多義性の存在と多義語の性質を認識させたうえで指導を行うべきである。

(A)–(C)は調査結果のまとめであり、調査課題の①と②に対する回答である。(D)–(I)は結果をもたらす要因とその対策であり、調査課題の③–⑤に対するまとめである。

2章と4章の学習者に対する学習・習得調査の結果をふまえ、3章の先行研究に基づいて、第5章では、「つける」とその関連語の意味記述を行い、中国語母語話者学習者の語彙習得支援に役立つ多義語分析を目指した。「つける」の意味分析をするにあたり、辞書・辞典やインターネットで公開された『基本動詞ハンドブック』などの意味記述を検討し、学習者の立場から問題点を洗い出した。また、4章の学習者に対する縦断的な調査およびその結果を考慮し、学習者のニーズに応える多義語を記述する際の方針を定めた。その方針は、(5)の9点である。

- (5) ①中心義を設定し、語義項目間の関係を明らかにする。
- ②どのレベルの学習者にも見せられるような多義ネットワーク図にまとめる。
- ③分かりやすさを心がけ、解説的な語義記述にする。学習者の分かりにくいところに記述の重点を置く。
- ④意味ネットワークを構築する。そのために、難解のもの、まれにしか使わないものは除き、また、語義項目数が多いことをよしとしない。

- ⑤学習者の母語に配慮し、母語干渉の生じやすいところを明確に示す。
- ⑥語彙量を増やすのに有益なネットワーク図を提示する。
- ⑦用法をロケーションで提示する。コロケーションを重要視する。
- ⑧当該語と関連付けながら、その関連語を記述し、提示する。
- ⑨語彙ネットワークを構築する。

続いて、学習者の多義語学習におけるコロケーションの重要性を示し、コーパスにより、定型文「BにAをつける」について考察を行った。その次に、記述方針に従い、「つける」の意味分析をした。コーパスによるコロケーションや実例などを抽出して、認知言語学の理論の枠組みで、「つける」の多義ネットワークを作り出した。また、「つける」の関連語に属する複合動詞、複合名詞、類義語、反義語、自動詞「つく」などについて「つける」の意味に関連付けながら記述した。さらに、中国語母語話者に独特な学習ニーズに応じて、定型文「BにAをつける」と中国語との対照も検討をした。最後に、「つける」とその関連の意味を語のネットワークの中で捉え、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築した。

6.2 総合的考察

本研究は、上級学習者に対する予備調査から始めている。そこでは、アンケート調査の結果に対する考察を行い、学習者の多義語の習得状況、多義語の学習方法とその問題点をまとめた。また、予備調査で学習者の学習困難な語を調査することで、「つける」を多義語分析の事例研究の対象に定めた。多義語研究とその習得研究に関わる先行研究を概観したうえで、本論ではまず、多義語「つける」についての縦断的な習得調査を行った。2年にわたって、学習者の「つける」の学習・習得についてデータを集め、考察を行った。そして、学習者の「つける」の学習・習得の問題点をまとめたうえで、学習者のニーズを考察し、意味分析の方針を定めた。その方針に従い、意味分析を試みた。多義語の意味記述においては、「つける」の分析にとどまらず、「つける」の関連語も含め、「つける」の語彙ネットワークを構築し、中国語母語話者学習者のための多義語分析を行った。

本研究が多義語の習得研究と意味研究に貢献できたと思えるのは、以下の2点である。1つは、意識調査に質的調査を加え、学習者の多義語学習・習得の状態を精密に調査した点である。学習者の習得を支援できる多義語記述をするために、まず最初に習得研究を行った。約2年間にわたったこの質的調査は、多くの調査手法を実行し、学習者の多義語「つける」に対する理解の発展、認知プロセス、学習ストラテジーの選択と運用、母語転移のプロセスなど学習者の多義語学習・習得のメカニズムを明らかにした。それによって、中国語母語話者学習者の多義語習得の実態を把握することができたと考える。そして、調査の結果とその考察から、質的調査を用いた、学習者に対する多義語の習得研究の可能性と、その有効性を示すことができた。

もう1つは、本研究で作り出した「つける」の多義ネットワーク、「つける」とその関連語の語彙ネットワークが学習者のためのものであるということである。「つける」の意味記述自体は、認知意味論の枠組みで行ったもので、プロトタイプ義を中心にして、多義が放射状カテゴリーを成している。また、分かりやすさを求めるために、行為に対する説明とコロケーションを同時に示している。さらに、各語義の解釈においては、学習者の習得を支援するために、「つける」の延長線に位置する関連語を加えた。本研究で提案した多義語の記述方法は語義間の連続性だけではなく、関連語との連続性も「つける」の語彙ネットワークに示す方法である。そうすることによって初めて、「つける」とその多くの関連語を連続的に学習することが可能になったのである。

本研究で構築できた「つける」とその関連語の語彙ネットワーク、および「つける」の用法のまとめは、どのレベルの学習者にでも適用できるようにしたものである。そして、その一部だけを取り出して学習者に見せることも可能にしている。また、学習者の母語に配慮し、難読語や定型文に対して中国語訳をつけたり、学習者の母語のメカニズムと一致する関連語を入れたりして、母語の正の転移を促進する工夫をした。このようにして、中国語母語話者の多義語習得を支援するための意味提示のありかたを提案したのである。

本研究は、多義語の意味記述の一例を示したに過ぎないとは言え、本研究で試みたような、「つける」とその関連語、特に、一見、関連性を見出しにくい関連語との関連性の記述が積み重なれば、第二言語学習者の意味理解方略（関連語との比較、母語語との対照）を生かした意味推測や意味理解などが可能になる。これによって、第2章と4章で行った調査からまとめられた、学習者の種々の疑問に答えられるような指導実践の支援ができるものとする。

6.3 本研究の限界と今後の課題

本研究の議論を通して、まだ究明できていないことを、以下に示す。

まず、第一に、本研究で定めた「つける」意味記述の方針は、縦断的習得研究に基づいたものであり、調査から生み出された結果は、本縦断的研究の調査参加者間だけに見られる現象である可能性もある。この限界を念頭に置き、その欠点を補う対策を考えるべきである。

第二に、本研究は、学習者の習得調査結果に基づいた「つける」の意味分析を行い、「つける」とその関連語の語彙ネットワークを構築したものだが、では、その記述が学習者の学習・習得支援にどの程度有効なのかをさらに検証する必要がある。

第三に、本研究は母語別の応用研究を行うための基礎研究ではあるが、筆者の語学力の限界もあって、中国語母語話者以外の学習者がどのような学習のプロセスを持っているのかはまだ十分に把握していない。また、本研究で構築できた中国語母語話者学習者のための「つける」の語彙ネットワークは、他の言語を母語とする学習者の学習を支援できるかどうかはまだ分からない。

第四に、本研究は「つける」とその関連語の意味研究ではあるが、「つける」のすべての関連語を取り上げることはできなかった。特に、「つける」と複合名詞の関連付けについては、まだ検討の余地がある。また、自動詞「つく」との関連性についての考察では、「つく」のすべての意味を取り扱えなかった。さらに、「B に A をつける」の日中対照を行ったが、構文上の対照を行ったにとどまる。「つける」の語義ネットワークを深く考察するには、これらに対する更なる検討が必要である。

以上、本研究の限界を述べた。今後の研究の課題として、次の4点が考えられる。

まず、縦断的調査から見られた現象がほかの学習者にも存在しているかどうかを調査しなければならない。質的調査に量的調査を加え、質的調査の結果の普遍性を検証すべきである。

次に、本研究で構築できた「つける」とその関連語の語彙ネットワークの有効性を教室でのモデル授業や、学習者に対するインタビュー、教師に対するインタビューなどを通して、検証する必要がある。

さらに、他国の学習者は「つける」などの多義語に対し、どのような学習のプロセスを持っているのかを明らかにすることにも目を向けていく必要がある。中国語母語話者と比較すれば、多義語学習・習得に対する研究をよりいっそう深めることができると考える。

最後に、「つける」に関連する複合名詞については、語例と用例を集め、分析・記述を進める。認知意味論の枠組みで、自動詞「つく」の多義構造を解明し、「つける」と比較する。また、日中対照の立場から、意味上、構文上「つける」との対照を全面的に行っていく。

以上の4点を今後の課題とし、学習者のための多義語の記述をするように更なる研究を進めていこうと考えるものである。

注

- ¹ この調査は城西国際大学研究倫理委員会で承認された。
- ² アンケートの回収日は 2014 年 9 月 3 日である。調査用紙は資料 1 を参照する。
- ³ この 50.7%は、難しいと答えた 73 名のうち、何名が「意味が複数ある」という理由を書いたかという割合の計算である。
- ⁴ 80 名のうち、未記入の調査協力者が 1 名いた (CS20)。
- ⁵ 調査協力者の使った用語で、語源や語の意味の歴史的な変化などを指す。
- ⁶ この項目に対しても、複数の回答をした者がいた。
- ⁷ 調査協力者 CS14 は、「上がる」を挙げた。
- ⁸ 複数の語を選択した者がいたので、ここでは比率の計算はしない。
- ⁹ 例文は靱山 (2010: 37) によるが、例文の通し番号は筆者による。
- ¹⁰ 筆者は、中国語で「日本語の多義語研究の概観」というテーマで雑誌論文を書いた。詳しくは「現代日语多义词研究概観」(『黒竜江教育学院学报』36: 115-117) を参照。
- ¹¹ この調査は城西国際大学研究倫理委員会で承認された。
- ¹² 教科書の詳細は以下のとおりである。

劉立国等(編)(2014)『新経典日本語 基礎教程第一冊』外语教学与研究出版社
劉立国等(編)(2014)『新経典日本語 基礎教程第二冊』外语教学与研究出版社
劉立国等(編)(2015)『新経典日本語 基礎教程第三冊』外语教学与研究出版社
劉立国等(編)(2015)『新経典日本語 基礎教程第三冊同步練習冊』外语教学与研究出版社
羅雪梅等編(2008)『日本語能力測試 2 級語法対策』长春出版社
- ¹³ 授業記録の詳細は添付資料 3 を参照。
- ¹⁴ 期日で授業記録の日を示す。
- ¹⁵ テスト用紙は添付資料 4 を参照。
- ¹⁶ テスト用紙は添付資料 5 を参照。
- ¹⁷ 間違った訳文ではないが、自然さまたは正確さが不足している場合は「？」で示す。
- ¹⁸ テスト用紙は添付資料 6 を参照。
- ¹⁹ 授業などで、6 名調査協力者のどの語の学習・習得状況を記録するかは、その時点では調査協力者に教えていない。2 年の調査が終わった後、調査協力者に全調査の経緯を話し、了承を得た。
- ²⁰ この 3 問に対して、6 名の調査協力者は中国語で答えた。表 4-8 に示した調査協力者の回答は、筆者が翻訳したものである。
- ²¹ 添付資料 7 は、インタビューの内容を文字化したものである。
- ²² 調査協力者は、全員日本語で連語を書き、中国語で解釈を加えた。表 4-9 の結果をまとめる際には、調査協力者の回答をそのまま写した。中国語で書いたものは後の分析のところで日本語に訳し、検討を加える。

- ²³ この 8 つの用法は、すべて「基礎日本語」の授業で学習した用法である。詳しくは、表 4-2 を参照。
- ²⁴ ここでの計算は学習者の書いた連語の延べ数である。
- ²⁵ テスト用紙は添付資料 8 を参照。
- ²⁶ 添付資料 9 を参照。
- ²⁷ テスト用紙は添付資料 10 を参照。
- ²⁸ 添付資料 11 は、調査結果を表にまとめたものである。
- ²⁹ 学習者に誤解を招かないように、習ったことのない語を中国語で注釈した。
- ³⁰ 期日は、「体力をつける」を学習した日である。2015 年 11 月 11 日の授業記録では、学習の内容と過程が詳しく記録されている。以下同。
- ³¹ 「抜く」の間違いである。
- ³² 正誤を判定するとき、ほかの文型文法の間違いは無視し、「つける」の結果だけを見る。
- ³³ この中国語の訳文は、間違っているとは言えないが、自然さに欠けているので、「？」を付けた。
- ³⁴ 詳しくは、添付資料 12 を参照。
- ³⁵ 意味分類数のカッコ内は、下位分類数である。
- ³⁶ そのうちの 1 は「着」、4 の一部は「点」、6 は「就」または「即」とも書くと明記している。
- ³⁷ 詳しくは、添付資料 12 を参照。
- ³⁸ 検索サイト：<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>
- ³⁹ 中国語の辞典である『新華字典 第 11 版』（2013）により、中国語における動詞「付・附・就・着・点・即」の第一義を以下のように示す。日本語訳は筆者によるものである。
- 付：交，給。（出す、あげる）
- 附：另外加上，随带着。（付け加える、付随する）
- 就：凑近，靠近。（近づく）
- 着：穿（衣）。（（服を）着る）
- 点：加上点子。（点を付け加える）
- 即：靠近。（近づく）
- ⁴⁰ このコロケーション調査で利用するコーパスは、『NINJAL-LWP for BCCWJ』（本稿では、NLB と略す）である。これは、国立国語研究所（以下、国語研）が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）であり、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。NLB バージョンは 1.30 である。
- 検索サイト：<http://nlb.ninjal.ac.jp/>
- ⁴¹ 出力日は 2015 年 1 月 19 日である。なお、「つける」を見出し語として検索する問題点の 1 つは「漬ける」と「浸ける」の結果が混ざっていることである。集計をする際に、そ

これらの語例を取り出すように心がけた。

- ⁴² 検索されたコロケーションはすべて「後（あと）をつける」である。
- ⁴³ 「盗聴器」、「加湿器」、「給湯器」などの例である。
- ⁴⁴ 「反射材」、「舷外浮材」、「接着材」などの例である。
- ⁴⁵ ほとんどは「家計簿」の例である。「通信簿」の例も少しあった。
- ⁴⁶ 「温度計」、「万歩計」、「心拍計」、「雨量計」などの例である。
- ⁴⁷ 「脚の先」、「鼻先」、「ペン先」、「骨の針先」などの例である。
- ⁴⁸ 「公共性」、「理論性」、「社会性」、「寛容性」、「人間性」などの例である。
- ⁴⁹ 「歩き方」、「食べ方」、「人との関わり方」、「学び方」などの例である。
- ⁵⁰ 「ながさ」、「強さ」、「高さ」、「おおらかさ」などの例である。
- ⁵¹ 検索されたコロケーションは「体温をつける」であるが、実例を見るとすべては「基礎体温をつける」であった。
- ⁵² 「遠近感」、「躍動感」、「脱力感」などの例である。
- ⁵³ 「接尾語」、「修飾語」、「目的語」などの例である。
- ⁵⁴ 実例のほとんどはコロケーション「当たりをつける」の用法であり、「辺りをつける」ではない。
- ⁵⁵ 表 5-3 の「慣用句」にまとめたものは、『大辞林』に慣用句として載っているものである。当然のことながら、『大辞林』に載っているものの、他の辞典の載っていない可能性もあり、逆の場合もありうる。この調査の目的は、共起表現の特徴を見ることで、慣用句を認定する基準に関わるものではない。それゆえ、ここでは便宜的に『大辞林』に従うことにする。
- ⁵⁶ 大自然を意味する実例が 1 つあるが、ほかの実例はすべて副詞の「自然に」の用法である。
- ⁵⁷ 「段階的」、「経済的」、「人為的」などのような形容動詞の実例であり、副詞的用法である。
- ⁵⁸ 実例には具体物の本の例もあれば、数量詞の「本」もある。「一本の木」、「一本のまっげ」などのような実例である。
- ⁵⁹ 「寒さ」、「強さ」、「長さ」、「おかしさ」などの例である。
- ⁶⁰ 「楽しみ方」、「呼び方」、「接し方」、「洗い方」などの例である。
- ⁶¹ 本研究で使う実例の多くは、コーパスは国語国立研究所と Lago 言語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス NINJAL-LWP for BCCWJ』（検索サイト <http://nlb.ninjal.ac.jp/>）である。また、作例と辞書から引用した実例も少数ある。下線は筆者によるものである。
- ⁶² （ ）の中に当該意味の表記を書き入れる。
- ⁶³ 検索サイト：<http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.08326/>
- ⁶⁴ 検索サイト：<http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.01002/>

- ⁶⁵ 検索サイト:<http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.04604/>
- ⁶⁶ ここでは、『NINJAL-LWP for BCCWJ』の「NLB1.30」版からデータを収集した。出力日は、2017年1月28日である。
- ⁶⁷ 「染め付ける」は、前の「ものを対象の表面に塗ったり、染めたり、浸透させたりする」グループにも入れた。1つの単語は、捉え方の違いにより、または共起語により、異なる用法に属させる可能性がある。
- ⁶⁸ ここで取り上げるのは「押し付ける」の「無理矢理に引き受けさせる」という拡張義である。
- ⁶⁹ 検索サイト: <http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.02799/>
- ⁷⁰ 検索サイト: <http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.02326/#SS39>
- ⁷¹ 検索サイト: <http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.01159/>
- ⁷² 検索サイト:
https://dic.yahoo.co.jp/search/dsearch?p=%E3%81%A5%E3%81%91%E3%82%8B&ei=UTF-8&b=1&dic_id=jj&stype=suffix
- ⁷³ 検索サイト:<http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.00043/#SS95>
- ⁷⁴ これらのコロケーションは、『類語』に挙げた例文によって抽出された実例である。
- ⁷⁵ 検索サイト: <http://nlb.ninjal.ac.jp/headwords/V.00186-V.01613/>
 今回の検索は、『NINJAL-LWP for BCCWJ』の「2語比較」の機能を利用した。また、検索結果の確実さを保証するため、「つける」ではなく、「着ける」の表記を利用して検索を行った。
- ⁷⁶ 検索サイト: nlb.ninjal.ac.jp/headwords/V.00554-V.01613/
- ⁷⁷ 表に挙げるコロケーションと使用の可否は、以下のサイトを参照:
<http://nlb.ninjal.ac.jp/headwords/V.00034-V.00043/>、
<http://nlb.ninjal.ac.jp/headwords/V.00034-V.01180/>、
<http://nlb.ninjal.ac.jp/headwords/V.00043-V.01180/> による。
- ⁷⁸ 「名前をつける」における「つける」は記入の意味ではないので、ここではあえて「×」をつけた。
- ⁷⁹ 4章の習得調査に参加した調査協力者が利用した教科書から引用した文である。
- ⁸⁰ 検索サイト: <http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/V.00032/>
- ⁸¹ 中国語の訳文の定型文を示す際に、日本語のヲ格共起語に相当する語を「A」、ニ格共起語に相当する語を「B」、「つける」に相当する語を「V」で示す。
- ⁸² S＝主語、V＝動詞、O＝目的語
- ⁸³ 語釈に用いる記号は、[]が中国語訳、/ /が読み方、< >が語義の説明、()が類義語などの関連語である。

参考文献

- 麻生迪子・志水俊広 2011「多義語コロケーションの研究—日本語教育での多義語派生義習得研究への応用を目指して」『言語科学』46: 121-132
- 荒川洋平(編) 2011『日本語多義語学習辞典 名詞編』アルク
- 李 澤熊 2008「動詞「ダブる」の意味分析—「重なる」と比較して」『名古屋大学日本語・日本文化論集』16: 27-44 名古屋大学留学生センター
- 石井正彦 2007『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 今井新悟・森山新・荒川洋平 2010「学習辞典編纂のための形容詞の意味ネットワーク記述・試論—「小さい」を中心に—」『日本認知言語学学会論文集』10: 344-354
- 今井新悟(編) 2011『日本語多義語学習辞典 形容詞・副詞編』アルク
- 今井むつみ 1993「外国語学習者の語彙学習における問題点—言葉の意味表象の見地から—」『教育心理学研究』41: 243-253
- 遠藤裕子 2005「多義構造の違いによる基本動詞の型—語義教育の観点から—」『人文・自然・人間科学研究』13: 25-44 拓殖大学
- 遠藤裕子 2011「多義語の意味分析の目的と方法—意味研究のための覚書き—」『拓殖大学語学研究』124: 99-119
- 大堀壽夫 2002『認知言語学』東京大学出版会
- 岡智之 2007「日本語教育への認知言語学の応用—多義語、特に格助詞を中心に—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』58: 467-481
- 小野正樹・小林典子・長谷川守寿 2009『コロケーションで増やす表現—ほんきの日本語—』vol.1 くろしお出版
- 小野正樹・小林典子・長谷川守寿 2010『コロケーションで増やす表現—ほんきの日本語—』vol.2 くろしお出版
- 影山太郎 1993『文法と語構成』ひつじ書房
- 梶川克哉 2008「現代日本語における「散歩」の意味分析」『名古屋大学日本語・日本文化論集』16: 1-26 名古屋大学留学生センター
- 加藤稔人 2005「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論, 言語転移理論の観点から—」『第二言語としての日本語の習得研究』8: 5-23
- 国広哲弥 1982『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥 1985「慣用句論」『日本語学』4 (1) : 4-14
- 国広哲弥 1985「認知と言語表現」『言語研究』88: 1-19
- 国広哲弥 1994「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106: 22-44
- 国広哲弥 1995「語彙論と辞書学」『月刊言語』24 (6) : 38-45
- 国広哲弥 1997『理想の国語辞典』大修館書店
- 国広哲弥 2006『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店
- 国広哲弥・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子 1982『ことばの意味 3—辞書に書いてない

- こと』平凡社
- 国広哲弥 2010「語の意味をめぐって」『語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ意味論講座第1巻 澤田治美（編）ひつじ書房
- 児玉徳美 2002『意味論の対象と方法』くろしお出版
- 小西円 2011「使用傾向を調査・分析する方法」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』森篤嗣・庵功雄（編）ひつじ書房
- 近藤崇将・松谷緑「語彙習得におけるコロケーションの重要性」『山口大学教育学部研究論叢』63（1）：203-214
- 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進 1976『ことばの意味1—辞書に書いてないこと』平凡社
- 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進・浅野百合子 1979『ことばの意味2—辞書に書いてないこと』平凡社
- 白井恭弘 2008『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』岩波新書
- 白石知代・松田文子 2007「多義動詞『かける』の意味—コア図式論を応用した意味記述」『表現研究』85：34-44
- 白石知代・松田文子 2014「多義語「ぬく」のコアとそれを用いた複合動詞「Vーぬく」の意味記述—L2学習者の意味推測を支援するために—」『日本語教育』159：1-15
- 杉村和枝・赤堀侃司・楠見孝 1998「多義動詞のイメージスキーマ—日本語・英語間におけるイメージスキーマの共通性の分析—」『日本語教育』99：48-59
- 鈴木智美 2001「多義語「ツク」（付・着・就・即・憑・点）の意味分析：そのスキーマ的意味の抽出と関係付け」東京外国語大学留学生日本語教育センター論集27：79-92
- 鈴木智美 2003「多義語の意味のネットワーク構造における心理的なプロトタイプ度の高さの位置付け—多義語「ツク」のネットワーク構造を通して—」『日本語教育』116：59-68
- 鈴木孝明・白畑知彦 2012『ことばの習得—母語習得と第二言語習得』くろしお出版
- 瀬戸賢一 1997「第Ⅱ部 意味のレトリック」『文化と発想のレトリック』（日英語比較選書1）巻下吉夫・瀬戸賢一 研究社出版
- 高橋圭介 2003「類義語「しる」と「わかる」の意味分析」『日本語教育』119：31-40
- 田中聡子 1996「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110：120-142
- 田中茂範 1987「多義語の分析——コアとプロトタイプ」『茨城大学教養部紀要』19：123-158
- 田中茂範 1990『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社
- 田中茂範 2004「基本語の意味のとらえ方—基本動詞におけるコア理論の有効性—」『日本語教育』121：3-13
- 谷ロ一美 2003『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』研究社
- 辻幸夫 2013『新編 認知言語学キーワード辞典』研究社
- ジョン・R・テイラー 2008『認知言語学のための14章』第三版 辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実（訳）紀伊国屋書店（原著 *Linguistic Categorization: Prototype in Linguistic Theory*, Third edition, Oxford: Clarendon Press.）

- 長嶋善郎 1976「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店
- 西村義樹・野矢茂樹 2013『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』中公新書
- I. S. ポール・ネーション 2005『英語教師のためのボキャラリー・ラーニング』吉田春世・三根浩(訳)松柏社(原著 *Learning Vocabulary in Another Language*: Cambridge University Press.)
- 姫野昌子 1999『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 堀正広 2009『英語コロケーション研究入門』研究社
- 前川喜久雄 2015『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』「日本語教育とコロケーション: 連語の形で用法を学ぶ重要性」73-78
- 前田満 2012「意味変化」『朝倉日英対照言語学シリーズ6 意味論』中野弘三(編) 朝倉書店
- 町田健 2002『認知意味論のしくみ』研究社
- 松田文子 2000「日本語学習者による語彙習得—差異化・一般化・典型化の観点から—」『世界の日本語教育』10: 73-89
- 松田文子 2001「コア図式を用いた複合動詞後項「〜こむ」の認知意味論的説明」『日本語教育』111: 16-25 日本語教育学会
- 松田文子 2004『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房
- 松本曜 1998「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83
- 松本曜 2003『認知意味論』大修館書店
- 松本曜 2010a「多義性とカテゴリー構造」『語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ意味論講座第1巻 澤田治美(編) ひつじ書房
- 松本曜 2010b「多義語における中心的意味とその典型性: 概念的中心性と機能的中心性」*Sophia Linguistica*57: 89-99 上智大学国際言語情報研究所
- 宮島達夫 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 三好裕子 2007「連語による語彙指導の有効性の検討」『日本語教育』134: 80-89 日本語教育学会
- 榎山洋介 2001「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』1: 29-58 ひつじ書房
- 榎山洋介 2002『認知意味論のしくみ』研究社
- 榎山洋介・深田智 2003a「意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』大修館書店
- 榎山洋介・深田智 2003b「多義性」松本曜(編)『認知意味論』大修館書店
- 榎山洋介 2010『認知言語学入門』研究社
- 榎山洋介 2014『日本語研究のための認知言語学』研究社
- 森田良行 1978「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学研究所
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行 1991『語彙とその意味』アルク

- 森田良行 1996『意味分析の方法－理論と実践－』ひつじ書房
- 森田良行 2008『動詞・形容詞・形容動詞の事典』東京堂出版
- 森山新 2006「多義語としての格助詞デの意味構造と習得過程」『認知言語学論考』5： 1-47
ひつじ書房
- 森山新 2008『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得－日本語教育に生かすために－』ひつじ書房
- 森山新 2011「「出す」の意味構造に関する実験的研究：日本語学習辞典の開発のために」『日本認知言語学会論文集』 11： 277-286
- 山梨正明 2001「ことばの科学の認知言語学的シナリオ」『認知言語学論考』11： 1-28 ひつじ書房
- 山梨正明 2012『認知意味論研究』研究社
- 由本陽子 2005a「複合動詞の統語素性－日本語の語彙的複合動詞における下位範疇化素性を中心に－」大石強・西原哲雄・豊島庸二（編）『現代形態論の潮流』くろしお出版
- 由本陽子 2005b『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房
- 横山吉樹・三ツ木真実 2014「語の意味カテゴリー能力と多義語の語彙知識との関連性」『北海道教育大学紀要 教育科学編』65(1)： 279-291
- ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン 1986 『レトリックと人生』渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）大修館書店 *Metaphors We Live By*, Chicago: University of Chicago Press.
- ジョージ・レイコフ 1993『認知意味論－言語から見た人間の心』池上嘉彦他（訳）紀伊國屋書店
（原著 *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. ）
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- 文秋芳等 2013 《认知语言学与二语教学》 外语教学与研究出版社

辞書

北原保雄(編) 2010『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・市川孝・飛田良文(編) 2008『三省堂国語辞典』
第六版 三省堂

小泉保・船城道雄・本田晶次・仁田義雄・塚本秀樹(編) 1989『日本語基本動詞用法辞典』大修
館書店

柴田武・山田進(編) 2002『類語大辞典』講談社

小学館辞典編集部(編) 2003『使い方の分かる類語例解辞典』新装版 小学館

中村明 2010『日本語語感の辞典』岩波書店

姫野昌子(監修) 2012『研究社 日本語コロケーション辞典』研究社

松村明(編) 2006『大辞林』第三版 三省堂

松村明(監修) 1998『大辞泉』増補・新装版 小学館

森山新(編) 2012『日本語多義語学習辞典 動詞編』アルク

山田忠雄・柴田武・酒井憲次・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 2012『新
明解国語辞典』第七版 三省堂

付録

資料1 予備調査としてのアンケート調査

この調査は、博士論文作成のために多義語の習得などについて、皆様のご意見を伺うものです。それ以外の目的では一切使用しません。ご協力をよろしくお願いいたします。なお、内容に関して疑問などございましたら、下記までお願いいたします。

日本城西国際大学 人文科学研究科 比較文化専攻 李焱
(qingtian333@hotmail.com)

氏名：() 日本語学習年数：(年 ヶ月) 日本語能力検定：(級)

1 多義語を勉強するとき、難しいと感じていますか。どんなところが難しいと思いますか。具体的に書いてください。

2 多義語をどうやって勉強してきましたか。具体的に書いてください。

3 (1) 下記の基本動詞を観察し、勉強上、もっとも困難だと思うものを選んでください。そして、その理由を教えてください。

上がる、取る、行く、付ける、飲む、ある、込む、打つ、できる、走る、思う、切る

(2) どんな動詞が難しいと考えていますか。

ありがとうございました。

資料2 予備調査の結果

被調査者	学習年数、日本語能力検定	質問1	質問2	質問3 (1)	質問3 (2)
CS1	4年3ヶ月、N1	難しい 意味が複数ある。	意味を1つ1つ身につける。	付ける 意味が複数あり、覚えにくい。	多義語
CS2	5年、N1	難しい 使い分けにくい。	辞書で調べ、諸意味を確認したうえで、例文を利用して覚える。	上がる 表現が複数ある。	他動詞
CS3	4年3ヶ月、N1	難しい 派生義が複数あり、覚えにくい。誤用を起こす心配があり、使用するとき戸惑う。	多義語の存在を念頭に置き、例文をたくさん読む。多義語に出会うたびに、意味の確認を行う。	上がる 意味が複数あり、構造が複雑である。	「付ける」のような単純動詞としても使われるし、接尾語としても使われる語が難しい。 「緩む」のような具体義も抽象義も多数ある語が難しい。
CS4	4年1ヶ月、N1	難しい 意味が複数あり、覚えにくい。それに、諸意味では、意味の近いものもあり、区別しにくい。	基本義を明確に把握して、それから、そこから派生した意味を理解する。	上がる 意味が複数あるので、理解しにくい。	常用で、そして、多義性を持つ動詞が難しい。例えば、「上がる」「取る」「付ける」など。
CS5	4年2ヶ月、N1	難しい 意味が多くて、どのような場合に使うか分からない。	辞書で1つ1つ調べてきた	打つ 「打つ」を含める慣用句が多くある。中国語の用法に混同しやすい。	授受動詞
CS6	4年2ヶ月、N1	難しい 例えば、「売る」には意味が複数あり、共起する名詞により、意味が違う	多義語の多くは中国の古語から変化してきた。よって、中国語の古語と比べて学ぶのが多義語の理解に役に立つ。	込む 語そのものは意味が複数あり、また、他の語と共起して、意味の変化が生じる	自動詞
CS7	4年2ヶ月、N1	難しい 意味が多すぎて、誤用が生じる。	日本のドラマを見ると、多義語に留意し、メモして、使用の場面を覚える	込む 複合動詞がたくさん作れる。	複合動詞
CS8	未記入	難しい 意味が複数ある。場合により用法も違う。	文脈の中で語の意味を理解して覚える	上がる、付ける 意味がさまざまある。	漢字を見て、学習者の思う意味と実際の意味が異なる動詞が難しい。
CS9	7年4ヶ月、N1	難しい 意味が複数あり、どの場合でどの意味を用いたらいいかわからない	複数の意味を暗記する。例文で暗記する。	上がる、上げる 自他動詞の使い分けがわからない	有対自他動詞
CS10	4年2ヶ月、N1	困る 用言の場合、意味がたくさんあるなら、困る。例えば、案内。	ちゃんと辞書で調べ、ノートに書く。例文も書き加える。	上がる 自他動詞の用法両方ある。また、接尾語として複合動詞が作れるからである。	多義動詞
CS11	未記入	難しい 覚えにくい	意味を覚えて勉強する	上がる、行く	他動詞
CS12	4年2ヶ月、N1	難しくない しかし、コンテキストを間違えることも多々ある。	語の意味をちゃんと調べて例文を分析して覚える。それから、自分で例文を書いてみる。間違えたところを再確認して、分析する。要は練習することである。	付ける さまざまな意味を1つ1つ覚えるのがたいへんである。	自他動詞 自他動詞の使い分けが微妙であるので、使い分けにくい。
CS13	4年2ヶ月、N1	難しい 意味が複数ある。それぞれの意味は区別できない。日常的にあまり使わない意味は忘れやすい。	練習を通して、意味を身につける。繰り返して勉強する。	上がる 意味が複数ある。抽象義や尊敬語的な用法もある。また、複合動詞の一部にもなる。	複合動詞

CS14	4年2ヶ月、N1	難しい	連語で覚える。 目的語と動詞の組み合わせを覚える。	上がる	「上がる」のような特性の多い動詞が難しい。
		意味が複数あり、覚えにくい。例えば、取る。		用が多い。 自他動詞、接尾語、尊敬語的な用法がある。動作だけではなく、状態も表せる。	
CS15	4年、N1	理解しにくい。	例文を書いて勉強する。	付ける、かける	「つける」、「かける」などの動詞が難しい。
		「さすが」は文脈によって、意味が異なる。理解できないところがある。		どんなときに、何の語と、どのように結合するかはよく把握できない。	
CS16	4年2ヶ月、N1	難しい	辞書の語釈を覚える。文脈と一緒に覚える。	ある	動詞でありながら、助動詞の一部にもなれる語が難しい。
		多義語であるかどうか分からない場合や、多義語であることが分かっても、すべての意味を覚えていられない場合は困る。		簡単そうに見えるが、さまざまな用法と活用があつて、複雑である。	
CS17	4年2ヶ月、N1	難しい	暗記	付ける	すべて難しい。
		文脈の中の多義語の意味がわからないことがある。		複合動詞の後項にもなるからである。	
CS18	4年、N1	難しい	辞書で調べ、メモをとる。少しずつ積み重ねていく。	上がる	形容動詞
		意味同士は関連しない。一部の意味は日常的に使わない。よく使うのは少数である。		意味がたくさんあるだけではなく、意味間の関連性もない。「上がる」の意味のうち、「のぼる」と「高まる」の意味しか覚えられない。	
CS19	4年1ヶ月、N1	難しい	多くの単語を覚えていくうちに、だんだん分かってきた。	上がる	複合動詞
		意味を間違えやすい。		理解しやすい意味と、分かりにくい意味がある。	
CS20	1年6ヶ月、試験未参加	難しい	(未記入)	付ける	自動詞
		(未記入)		(未記入)	
CS21	6年1ヶ月、N1	意味が似ていて使い分けにくい。	具体的な勉強方法がない。出会った単語を覚えるだけである。その後、文章の中で、その区別を考える。	付ける	意味が多く、そして、各意味にそれぞれの類義語のある語が難しい。
				接尾語としての用法も多数あるからである。	
CS22	4年6ヶ月、N1	難しい	書きながら意味を覚える。何度も覚える。	上がる	複合動詞
		単語の意味が混乱している。意味は覚えにくい。		意味が多すぎる。ほかの動詞との組み合わせがもっとも難しい。	
CS23	未記入	難しくない	基本的な文法から一步一步勉強している。	付ける	付ける
		(未記入)		用法が複雑であり、意味が多い。	
CS24	4年6ヶ月、N1	難しい	名詞と動詞などと一緒に覚える。辞書で調べる。	付ける、切る、できる	「切る」、「する」、「できる」など
		覚えにくい		意味が多い。使い方も多い。	
CS25	4年8ヶ月、N1	困る	本を読む。コミュニケーションする。	付ける	行く
		複数の意味があり、覚えにくい。また、どのような場面で、どの意味を使うかが分からなくて困っている。		意味が複数ある。多くの場面で使われている。	
CS26	4年6ヶ月、N1	難しい	辞書で調べる。コミュニケーションで使う。	付ける	付ける、取る
		1つ1つの場面でのどのように翻訳すれば、自分の気持ちが伝えられるかが問題である。		さまざまな意味があつて、たくさんの場面で使われる。	
CS27	4年1ヶ月、N1	難しい	暗記して勉強してきた。多義語の意味をすべて覚える。	付ける	多くの意味を持つ動詞が一番難しい。
		意味が似ていて難しい。		ほかの動詞と組み合わせ、新しい複合動詞になれる。	
CS28	4年、N1	難しい	連語を通して、多義語を	付ける	一段動詞、五段動詞

		すべての意味を身につけるのが難しい。基本義はわかるが、派生義はわからない。意味推測もできない。	勉強する。	意味用法が多い。「つける」の表記も多い。	が難しい。漢字で意味を覚えるのが難しい。サ変動詞も母語の影響を受け、意味が誤解しやすく、用法を間違える。
CS29	6年1ヶ月、N1	初級のときはよく間違えた。	暗記する。ドラマや放送などで耳を磨く。語感をトレーニングする。	上がる	「開き切る」と「開きはらう」、「できた」と「できあがり」(類義語)
		組み合わせが紛らわしいところが多い (※CS29は「かける」、「かかる」など類義語の例を挙げた)		自他動詞用法を区別しないとけないので難しい。特定の組み合わせがある。文脈によって、意味が違う。	自然に使うのが難しい。
CS30	4年2ヶ月、N1	(未記入)	辞書で意味を1つ1つ調べ、出会うたびに覚える。	上がる	複合動詞
		当てる、上がる、つける、かける		(未記入)	取り消す、吹き込む、奪い起こす
CS31	5年1ヶ月、N1	難しい	意味をできるだけ暗記する。そして例文を覚える。	込む	漢字を見て全然意味を推測できない動詞が難しい。
		文脈によって、意味も全然違うので、覚えにくい。		前に動詞と結合したら、中国語にどう訳すかに困る。	
CS32	4年1ヶ月、N1	難しい	繰り返して暗記する。	上がる	動詞の「させられる」形が難しい。使役受身が難しい。
		意味が多い。例えば、「かける」。表記も複数ある。どの表記でどのような意味を持っているかを区別するのが難しい。意味を覚えるのが難しい。		あまり見慣れない語である。日常生活ではあまり使わない語である。	
CS33	5年、N1	少し難しい。	暗記する方法で覚える。例文を通して理解を深める。	上がる、打つ、できる、切る、走る	多くの意味がある動詞が難しい(上がる、打つ、できる、切る)。
		異なるセンテンスの中では、異なる意味があるので、具体的に分析しなければならない。		意味がいくつかある。中日同形異義の動詞も難しい(「走る」)。	
CS34	4年1ヶ月、N1	難しい	同じ単語が違う文章で見かけるときちゃんと辞書で調べ、また別の文章で見るとき比較してみる。	付ける	意味が多いと同時に、お互いに関連性がない動詞が難しい
		どういう状況でどういう意味かは大体分かるが、具体的にいうとどこが違うかは説明しにくい		意味が多すぎるので覚えられないから、直感や前後の内容(文脈)で判断するのができない	
CS35	未記入	特に難しいと感じていない。	例文と対照しながら、勉強してきた。 (※例文を通して学んでいるようである。)	付ける	1つの漢字にいくつかの平仮名で読む動詞が難しい。
		(未記入)		「付ける」は意味が多数あるにもかかわらず、複合動詞の一部でもある。	
CS36	4年2ヶ月、N1	難しい	その多義語を含める文を覚える。	上がる、取る、付ける、込む、切る	意味が多すぎる動詞が難しい。
		その言葉の意味が多ければ多いほど、すべての意味を覚えて使いこなすのが難しくなる。		意味が多数あるので、すべて覚えるのが難しい。	
CS37	4年2ヶ月、N1	本当に難しい。	ドラマやテレビ番組などを見聞きしたら、覚えやすくなると思う。	上がる、付ける、ある	すべて難しい。
		よく使わないし、覚えにくい。		(未記入)	
CS38	4年2ヶ月、N1	難しい	まだ手探りの状態である。多くの慣用句を覚えるしかない。	上がる、付ける、込む、打つ、切る	「～出す／切る／付ける」といった複合語が難しい。
		意味が多すぎて、なかなか覚えられなくて頭が混乱する。		1つの基本義から多くの意味に派生しているので、覚えにくくなる。	
CS39	4年3ヶ月、N1	難しい	出会った多義語(の意味)だけを学んだ。	付ける	「上がる」、「付ける」、「切る」のよ
		意味が複数あり、覚えきれな		基本義は分かる	

		い。それに、実際に運用するとき、やっと覚えた意味を間違えることもある。	多義語の勉強に取り組んだことはない。	が、実際に使う際には、ときどき迷う。	うなさまざまな意味があり、複合動詞の一部にもなる動詞が難しい。
CS40	6年3ヶ月、N1	難しい	語の意味をすべて調べ、それぞれの例文を覚える。	上がる	意味の多い動詞が難しい。
		読み方が同じであるが、漢字表記や意味が異なる。		(未記入)	
CS41	4年2ヶ月、N1	難しい	例文を通して勉強する。	上がる	複合動詞
		母語の影響を受けているかもしれないが、いったいその単語の意味が中国語の同じ形の語と同じかどうかは分からない。 また、どのような場面で使うか、その多義語のどの意味を用いて表現するかが確認できない。		意味が複数ある。	
CS42	4年2ヶ月、N1	そんなに難しくない。	「高い」を反義語の「低い」「安い」とペアで身につけた。 また、多義語は特定の文における意味がどうなっているかを考えて身につけている。	上がる	有対自他動詞 何通りの意味を持つ動詞が難しい。
		多義語は日本語学習においてはあまり触れられていないし、学習の中心でもない。 多義語には難しいところがあるかもしれない。		意味用法が複数ある。 他動詞的な用法があり、使い分けにくい。	
CS43	4年2ヶ月、N1	難しい	例文を通して覚える。というのは、多義語の意味を1つずつ覚えていくのが難しいからである。	上がる、付ける	自動詞、動詞の敬語表現
		意味が多数あるので、はっきりと区別して覚えるのが難しい。 「当たる」は20種類の意味があり、文の中で出会うたびに困る。この場面ではいったいどの意味で用いられるかはよく分からない。		この2つの単語は簡単であるが、ほかの動詞と結合して用いるのが難しい。	
CS44	4年、N1	(未記入)	語を1つ1つ単独で勉強しないで、例文の中に使って、例文と比較して勉強する。	上がる、付ける	自他動詞の用法を両方持ち合わせる動詞が難しい。
		中国語からの意味干渉		意味用法が多数ある。	
CS45	3年、N1	ちょっと難しい。	文章を読むとき、理解できない言葉を辞書で調べて覚える。	できる	意味の多い動詞が難しい。
		意味が多数あるので、すべて覚えるのが難しい。		意味が複数ある。	
CS46	4年2ヶ月、N1	ちょっと難しい。	多義語の用法、例文を暗記して、その意味を理解して身につける。	上がる、切る	自他動詞
		「かける」は「欠ける」「掛ける」「架ける」「懸ける」「賭ける」「駆ける」などの意味があり、実際に運用するときどの意味を用いるか分からなくて時々困る。		意味が多数ある。 複合語もたくさん作れる。訳すときが難しい。	自他動詞の区別が分からない。
CS47	4年2ヶ月、N1	(未記入)	すべての意味をできるだけ覚える。 運用の場面により、異なる意味を使用する。例文を作って、文章を作成するときを使うと便利である。	行く	意味の多数の動詞が難しい。
		多くの意味を丸覚えするのが必要とされる。運用するとき、語の1つの意味を抽出して、そして言内の意味と言外の意味を考慮しなければならない。 (※場面の重要性を強調している)		使用のとき、視点が重要である。 話し手と聞き手の視点を必ず区別しなければならない。	多くの意味を覚えただけで、それぞれの用法を知ることが必要である。
CS48	6年3ヶ月、N1	難しい	その多義語の意味をすべて覚える。 暗記して、文脈によって、適切な意味を抽出する。	上がる、付ける、できる	多義動詞
		文脈、場面によって意味が異なるので、判断しがたい。		多義語だから、いったいどのような意味があるか分からない。	
CS49	4年6ヶ月、N1	難しい	基本義と慣用句(よく共起する表現)をまず覚える。 それから、他の用法と区別して覚える。 日常生活で出会うとき、よくメモして覚える。	上がる	自他動詞の用法両方持ち合わせる動詞が難しい。 自他動詞のペアで、意味用法が類似した動詞が難しい。 特別の動詞が難し
		意味が多いから、混乱しやすい。 使用のとき、他の語とどう組み合わせればいいのか分からない。 特に、意味が多くて、意味間		意味が多数あるので、具体的な用法が区別しにくい。 共起する語も難しい。	

		の区別が少ないときに、意味を使い分けるのができない。	多く運用する。		い。
CS50	4年2ヶ月、N2	かなり難しい 異なる意味を持っているからである。 例えば、「気」。慣用表現を身につけるのが難しい。	1 辞書で調べて、文やコロケーションで覚える。 2 よく見聞きする（ドラマ、映画などを通して）。時代の発展とともに、派生義を理解する。語の時代性や文化背景に留意する。 （※語を通時的に考えているようである）	上がる 基本義は分かるが、（意味間には）微妙な差がある。 謙譲語でもあるし、運用は難しい。	使役動詞と授受動詞の組み合わせ、動詞の使役受身形、自他動詞
CS51	5年1ヶ月、N1	曖昧語は難しい。 「結構」という言葉は使う場面によって意味が異なる。	会話の場面によって、適切な解釈で理解して身につける。（例えば、「今度」は会話の前後の文脈によって意味が異なる）	取る 具体的な意味と抽象義が両方あるので難しい。	自他動詞、複合動詞
CS52	5年4ヶ月、N1	難しい 日常会話あるいは文章に出現頻度の高い意味は覚えやすいが、あまり使わない意味が身につけがたい。	電子辞書を使って多義語の意味を確認して、1つずつ覚える。	ある 中国語の“有”と対応するときに、「持っている」意味と「存在」の意味の区別がよく分からない。	瞬間動詞
CS53	5年、N1	難しい 一番困るのは場面によって意味が違うということである。	多義語の各意味をはっきりと覚える。 文章の中で、この多義語がどの意味で用いられているかをよく考える。	上がる、付ける この2つの動詞の意味が多いから、覚えにくい。使い方がはっきりと分からない。	意味の多い動詞が難しい。
CS54	4年2ヶ月、N1	多義語の意味が難しい 意味をすべて覚えるのが難しい。 多くの多義語は慣用句になると、形上は似ているから、間違えやすい。	一番重要な意味をまとめて整理する。 ほかの意味は例文で覚える。	付ける 意味がもつとも多い。 諸意味の関連性を見つめるのが難しい。	自動詞、自発動詞、接尾語になる動詞、多義語、複合動詞
CS55	4年1ヶ月、N1	難しい 意味がたくさんあるので、どのような文脈で使うかは分からないので、非常に難しいと思う。 そして、別の文脈で用いられる場合、語の意味間の区別をつけにくい。	多義語のすべての意味を覚えなければならない。そして、それを使う場面に注意を払う。それで、用法もだんだん分かってきた。	付ける 多くの動詞と組み合わせさせて複合動詞になる。そして、意味も（単純動詞と比べて）大きく変わった。その新しく組み合わせた単語の意味を覚えるのが難しい。	意味の多い動詞、使用範囲の広い動詞、（他の動詞と）区別しにくい動詞など
CS56	5年2ヶ月、N1	理解しにくい いくつかの意味を持っていて、それらの関連性は理解しにくい。	語の意味をすべて調べ、ほかの多義語（意味）と比べて、同じ特徴を見出す。	付ける さまざまな意味がある。抽象的な意味は身につけにくい。	「あがる」のような自動詞が難しい。意味はたくさんある。意味間の関連性ははっきりと分からない。
CS57	4年2ヶ月、N1	難しい 場面によって意味が変わるので、それぞれの文脈での意味が判断しにくい。	他の語との組み合わせで覚える。	付ける 意味が多すぎる。	複合動詞
CS58	6年2ヶ月、N1	難しい 意味間の区別と運用が難しい。	辞書で調べ、複数の意味を整理し、各意味に対応する典型的な例文を覚える。	上がる 意味が多く、派生義は覚えにくい。	「打ち立てる」、「食い合う」などの複合動詞が難しい。
CS59	5年3ヶ月、N1	難しい 意味が多すぎて、使うのも理解するのも難しい。 （中国語の“打”の例を挙げ、日本語に対応する表現との違いを示す）	使う場面、言葉の位相などに注意しなければならない。	これらの多義語の漢字通りの基本的な意味は身につけやすい。別義はたいへん使いにくい。（「上がる」の例を挙げた）	複合動詞
CS60	4年2ヶ月、N1	難しい 語の意味が多くて覚えにくい	大学時代では試験問題集のような本を使って、多義語を勉強してきた。	上がる、取る、付ける この3語はさまざま	「商う」、「占う」、「敬う」などの読みにくい動詞や、意味

		い。 多くの場合、主な1つか2つの意味しか分からないから、意味の多い多義語はよく理解できない。	難しい単語は辞書で調べる。	まな名詞と組み合わせることができるので、覚えにくい。	の多すぎる動詞が難しい。
CS61	4年2ヶ月、N1	難しい	例文で覚える。	取る	複合動詞
		意味が曖昧なので、ほかの単語と使い分けにくい。		意味が多すぎる。	
CS62	4年2ヶ月、N1	難しい	一生懸命に意味間の関連性を見つけて勉強する。	上がる	上がる、打つ 意味が多くて、しかも意味間には微妙な差、または大きな差のある動詞が難しい。
		意味間の関連性を把握するのが難しい。		意味が多いので、難しい。	
CS63	4年2ヶ月、N1	難しい	辞書で調べ、異なる意味をまとめる。	取る	自他動詞
		複合動詞は、実際に行われる1つの動作を異なる動作を表わす2つの要素(動詞)を用いて表わすので、用法が複雑である。それに、理解より、運用の方がもっと難しい。 (※多義語ではなく、複合動詞の難しいところを書いた)		意味が多いので、うまく理解できない。 「取り付ける」、「取り消す」のような複合動詞も多いので、意味はなかなか理解しがたい。	
CS64	4年2ヶ月、N1	難しい	コロケーションで覚える。 (※「打つ」の例を挙げた)	取る	持続動詞と瞬間動詞
		意味が多い。		名詞との組み合わせが非常に多いから、覚えにくい。	
CS65	4年2ヶ月、N1	ちょっと難しい	何回も目を通して、頭の中に何らかの印象を残す。そして、箇条書きにして、意味を明らかにする。	上がる	複合動詞
		多義語の中に、多くの漢字語彙がある。漢語の中国語の意味との違いがあるなら、ちょっと難しい。		意味が多数あり、使い方も複雑である。	
CS66	5年1ヶ月、N1	最初は難しかったが、慣れてくると、だんだん難しくないと感じてきた。	多義語の問題集を使って練習する。 間違ったところをメモする。 繰り返して練習する。 できるだけ多くの多義語を覚える。	上がる、付ける、込む	付属動詞
		しかし、実際に聞いたり、書いたりするときはよほど悩んでいる。例えば、「かく」はいくつかの表記があるので、使い分けるのに苦労する。		「もう上がっている?」のような表現は辞書などに書いていない。 「付ける」、「込む」は意味が多い。それに、複合動詞の後項にもなれる。	
CS67	5年1ヶ月、N1	難しい	主に辞書を通して勉強してきた。 辞書にある意味を文脈と一緒に考えて、理解したうえで運用する。	上がる	近い意味をたくさん持っている動詞が難しい。
		使い方が難しい。		意味が多すぎる。 そして、近い意味を持っている。(意味同士が似ている)	
CS68	5年、N1	難しい	基本義を覚える。 基本義を覚えただけで、例文をよく理解して勉強する。	上がる、付ける、切る	「上がる」、「つける」、「切る」のような動詞が難しい。 簡単であるが、意味が多い。
		意味が多いので、覚えにくい。 使われる場面などは外国人学習者にとってちょっと難しい。		意味が多く、使われる場面も把握しにくい。	
CS69	6年5ヶ月、N1	難しい	はじめは何も考えずに、暗記した。 うちに、多く使ったら、知らず知らずのうちに上手に使えるようになった。	上がる、ある、走る	多義動詞、複合動詞
		意味はなかなか覚えられない。 意味間に関連性がないようで、身につけられない。		「上がる」：意味が多い。複合動詞の一部にもなる。 「ある」：敬語、状態・存在をあらわす場合があり、勉強上は難しい。 「走る」：一見易いと思うが、その前に来る助詞はよ	

				く分からない。	
CS70	4年、N1	難しい 基本的な意味と関連のない意味を覚える部分が難しい	単語の意味を分類して、基本的な意味をまず覚え、その他の意味が基本的な意味とはどんな関連があるかを考えて、そして例文によって覚える。	付ける 「付ける」にかかわる複合動詞が多いから、いろいろな意味があるので、難しい。	複合動詞
CS71	4年2ヶ月、N1	難しい どのような場面に使うかよく混乱する。 語の使い方を区別するのが難しい。	まず、どのような意味があるかを調べて、典型的な例文を覚える。	付ける、込む 動詞そのものは意味がたくさんある。それに、接尾辞としても使い、複合語の一部になる。	動詞そのものはいくつかの意味があると同時に、その動詞が接尾辞などとしての使い方もある動詞が特に難しい。
CS72	4年2ヶ月、N1	難しい 表の意味から推測しにくい意味が含まれたとき、勉強しにくいし、忘れやすい。 (※「表の意味」は漢字から分かる意味、抽象的な意味に対して言うようである)	よく使われた意味を覚えてから、多くの文章を読んで、他の意味を学習する。 読めば読むほど、多義語に対する理解が深くなる。	上がる 意味の一部として、①高いところへ移る②仕上がる③まかなえる、の3つがある。この3つの意味には関係があまりないので、覚えにくい。	1 形では一段動詞に似ている五段動詞が難しい。「覚える」、「考える」はその語例である。 2 複合動詞。複合動詞の前項にも後項にもなれる動詞がたくさんあって、難しい。
CS73	4年、N1	あまり簡単ではない。 意味が多い場合、すべての意味を覚えるのがあまり簡単ではない。 例えば、「はく」の表記には「履く」、「掃く」、「吐く」、「刷く」、「帶く」などがある。	できるだけ多くの意味を覚える。 また、ほかの単語と一緒に覚える。 (※ローケーションのことを指す)	上がる、付ける、取る、切る これらの単語は読み方の同じ語が多い。(※漢字表記が多数ある語を指す) そして、「取る」は意味も多い。	意味が多い語。 読み方が多い語。
CS74	5年、N1	難しい 意味間の区別と用法は難しい。 例えば、同じ「はく」には「履く」、「掃く」、「吐く」、「刷く」、「帶く」と書ける。同じ「はし」は「端」、「橋」、「箸」と書ける。	1つの例文を覚える方法で勉強してきた。 例えば、「箸でご飯を食べる」、「橋を渡る」、「道の端を歩く」。 (※例文ではなく、ローケーションの例を挙げた)	上がる、付ける、取る 意味はたいへん多いから難しい。	複合動詞 語の数が多いので、覚えにくい。
CS75	4年1ヶ月、N1	難しい 発音が同じだから、聞き取れない可能性がある。	語を1つ1つまじめに暗記したうえで、文脈によって、適切な意味を抽出して運用する。	付ける 使い方がたくさんある。間違えたら、不自然な日本語になる。	複合動詞 「にじり込む」、「踏み出す」といった複合動詞が難しい。
CS76	4年2ヶ月、N1	難しい どのような場面で何の意味を表すかを覚えるのが難しい。	ただ意味を覚えるだけである。	上がる さまざまな場面で使われる。 慣用表現もたくさんある。 意味も多数ある。	用法が簡単である一方、意味が複雑な動詞が難しい。
CS77	3年6ヶ月、N1	難しい たくさんの意味を暗記するのが難しい。	1つずつ暗記する。	上がる、取る、付ける、込む、切る 意味がたくさんある。	複合動詞
CS78	6年2ヶ月、N1	難しい 具体的にどのような意味があるか分からない。	無理矢理に暗記する。	込む、切る よくほかの単語と一緒に使う。(※複合動詞の一部になることを指す)	形容動詞
CS79	5年1ヶ月、N1	難しい 多義語はいくつかの意味があるから、うまく使えない。	文章では多義語に出会ったら、この語の意味を調べて、文脈に適応する意味を抽出する。	ある 特にどういうときに、「～ている」、「どういうときに「～である」を使うかに迷っている	複合動詞
CS80	4年1ヶ月、	難しい	辞書を参考にして、会話	取る、付ける	かける、かかる

	N1	その語の意味をすべて覚えるのが難しい。	の場面により、適当な意味を抽出する。	印象的には、この2つの語の意味がとりわけ多い。	
CS81	4年1ヶ月、N1	難しい たくさん意味を持っているので、覚えるのが難しい。	意味を1つ1つ調べて、どんどん覚えていく。	ある 意味が多い。	意味は多いのが一番難しい。
CS82	4年3ヶ月、N1	難しい さまざまな意味がある。	その語の意味を覚える。	付ける (未記入)	自動詞、他動詞
CS83	5年、N1	難しい 動詞の勉強が難しい。	いろいろな例文を探して比較して勉強してきた。	付ける、切る 2つとも関連する複合動詞が多いから、覚えにくい。	多義動詞、複合動詞
CS84	4年2ヶ月、N1	難しい 意味が多いから、場面によって、訳し方も異なる。	文をたくさん読み、ニュースを聞き、新聞を読むことで勉強する。つまり、語のニュアンスを身につける。	ある 自他動詞が「～ている」と「～である」の前に来る場合、どれを使うのがいいかよく分からない。	自他動詞の用法
CS85	4年3ヶ月、N1	難しい 意味がたくさんあるのに、日常に全然使われない意味もあって、覚えにくい。	辞書で調べる	付ける 意味が複数ある。	動作動詞
CS86	4年2ヶ月、N1	難しい 異なるコンテキストの中で意味を区別するのが難しい。	辞書ですべての意味を調べ、例文を覚えておく。	上がる 抽象的な意味が多くて覚えにくい。	複合動詞
CS87	5年2ヶ月、N1	難しい 多義語の複数の意味を覚えるのが難しい。	多義語の多数の意味を1つ1つ覚えて勉強してきた。	上がる 意味の種類が多すぎる。	多義動詞
CS88	4年、N1	難しい 意味がたくさんあるから、覚えにくい。 使い方はもっとも難しい。間違しやすい。	繰り返して覚える。	上がる、付ける 意味がたくさんあるので、覚えるのが難しい。	理解しにくい動詞が難しい。
CS89	5年2ヶ月、N1	別義間の区別が難しい 「ところ」や「もの」のそれぞれの事例を具体的に解釈することができない。	具体例を用いて覚える。 または、「対義語」、「上位語」などを利用して覚える。 (※「明るい」を例として挙げた)	上がる、付ける 基本義がなかなか分からなくて、そして、別義が多すぎるので、いつも混乱する。	抽象動詞が難しい 「付ける」、「かける」、「上がる」など

資料 3 授業記録

一学期 (2014. 9～2015. 1)

2014 年 9 月 15 日

調査協力者のクラスの日本語の授業が開始する。この教室では、日本語を学習する学生が 39 名いる。何名かの学習者はアニメやドラマなどを通して少し日本語に触れたことがある。しかし、系統的に日本語を学んだことのある学習者はいない。

2014 年 12 月 9 日

「つける」の用法を学習する。「ゴーグルをつける」、「気をつける」、「電気をつける」(第一冊 第九課 (pp. 132, 134)) の 3 つのコロケーションが同じ課に出た。学習者が教科書を通してこれらの用法を学習するのは初めてである。

「眼鏡」という言葉を知っている学生がいる可能性があり、「眼鏡をかける」という連語もかなり重要であるので、「眼鏡をかける」を「ゴーグルをつける」と同時に学生に教えた。そのとき、「つける」と「かける」の区別の説明が要求された。両語のプロトタイプ義とスキーマを説明したうえで、この場合の「つける」と「かける」の用法をわかりやすく説明できた。学生が納得にいったような反応だった。

また、同じ課では「開ける」も出た。「問題用紙を開ける」、「ドアを開ける」のような用法である。「電気をつける」を「電気を開ける」と間違えないように、「つける」「かける」と同じく、「あける」のプロトタイプ義とスキーマを学習者に教えた。

2014 年 12 月 11 日

クラス全員 (39 名) を対象として、単語テストを行った。教師が中国語の“开灯”を言って、日本語の連語「電気をつける」を書かせた。正しく書けたのは 21 名いた。間違えて回答した 18 名には、「電気をあける」と書いた人が 5 名いる。授業をよく聞いていない可能性もあり、また、母語の負の転移が生じた可能性もある。中国語の“开灯”の“开”をそのまま訳すと、「開ける」となるからである。

2014 年 12 月 11 日～18 日

授業で動詞テ形、ナイ形が導入され、「～てもいい」、「～てはいけません」、「～てください」、「～ないでください」などの文型を学習した。数回にわたって、口頭で「つける」の連語を用いて文型の練習をさせた。「気を付けてください」、「テレビ (電気) をつけてもいいですか」、などの表現である。その結果、間違えたり、思い出せなかったりする学生がいた。既習の「つける」の用法のインプットを与えることで、関連する用法を思い出させ、反復練習で学習者の長期記憶に残すようにするのが目的である。

2014年12月18日

翻訳の練習を行い、中国語で“可以打开电视吗？（テレビをつけてもいいですか）”“可以开灯吗？（電気をつけてもいいですか）”を言って、学生全員に日本語で答えさせた。「～でもいいですか」の文型の練習をさせると同時に、「テレビをつける」と「電気をつける」を用いて、「起動」の「つける」の用法を復習させた。

（2015年1、2月は冬休み期間）

二学期（2015.3～2015.7）

2015年3月2日

「つく」の用法を初めて学習する。「味がつく」というコロケーションである。まず、学習者に「味がつく」における「つく」の意味を説明したうえで、自他動詞について紹介する。また、「つく」が自動詞で、「つける」が他動詞であり、両語の関係を説明した。さらに、学習者は「つける」の新しい意味を自力で正確に推測できるかどうかをチェックするために、学生に「味を付ける」の意味を推測させた。調査協力者の6名の回答は下記のようなものである。

調査協力者	回答
A	散味（何らかの方法で匂いを除く）
B	散味（同上）
C	無回答
D	無回答
E	調味（調味する）
F	無回答

授業後の振り返り

既習の「つける」の用法と自動詞「つく」の用法から、新しい「つける」の用法への推測はやはり困難である。その理由には、学習した「つける」の用法に対する記憶が薄いこと、自動詞「つく」の意味をしっかりと身につけていないこと、自他動詞の意味上用法上の関連性が明確に理解できていないことなどが考えられる。また、現段階の学習者にとって、基本的な用法から新出用法へ関係付けることや関連語の自動詞の意味から他動詞の意味へ推測することなどには無理があり、教科書に提示しなかった用例の意味を理解するのがまだ難しい。

2015年3月3日

「醤油を付ける」の用法を学習する。教科書においては、このときの「つける」の意味を中国語の動詞“蘸”で説明されている。学習者に「餃子を箸で動かして、醤油に近づかせ、餃子と醤油が接触するようにする」というプロセスを描いていると説明した。これは既習の「ゴーグルをつける」と類似していることと、この「つける」と既習用法との関連性を説明した。また、日本語では同じ「つける」を用いて表現するものの、中国語ではそれぞれ異なる動詞で言うことを強調した。学習者が納得していたようである。

2015 年 3 月 5 日

単語テストを実施した。教師が中国語の“蘸酱油”を言って、クラス全員に翻訳してもらったところ、調査協力者の 6 名はみんな正しく書けた。ちなみに、テストを受けた 36 名の学習者のうち、29 名が正しく書けた。それに、間違えた 7 名のうち、1 名が「しょうゆがつける」と書いた。残った 6 名が動詞「つける」を産出できなかった。

授業後の振り返り

「醤油をつける」の「つける」は単語表には明確に例示した単語であり、2 日前習ったばかりのものであるので、比較的いい学習効果を見せたわけだと考える。とはいえ、長期記憶に残すことができるかどうか、また、「醤油」ではなくて、「香水を付ける」のようなヲ格共起名詞を他の語に変えても理解できるかどうかは更なるテストが必要とされる。

2015 年 3 月 13 日

教科書では「めがねをかける」の用法が出た。学生に「コンタクトレンズを_____」といった空所補充の質問を出した。「つける」と「かける」の区別を問い求めた。調査協力者の回答は次のようである。

調査協力者	回答
A	つける
B	つける
C	つける
D	無回答
E	つける
F	つける

また、「かける」用法について、漢字表記の「掛」を紹介した。そして、「壁に絵をかける」、「窓にカーテンをかける」の意味を推測させて、中国語に訳させた。全員正しい中国語に訳すことができた。これらのコロケーションの場合、ニ格名詞とヲ格名詞がヒントになっていることと、表記の「掛」をそのまま中国語に訳して使える実例であるので、容易に理解はできたと考える。

2015 年 3 月 30 日

文作成テストで、「電気をつける」といった用法を覚えているかどうかをチェックした。中国語の“因为有点黑，想打开灯（暗いから、電気をつけたいです）”を言って、学生に日本語で表現してもらった。その結果、6 人のうち、5 人が正解だった。「電気をつける」という用法はすでに学習者の長期記憶になったと考えられる。しかし、E がまた「あける」を使った。これはやはり母語の負の転移であろうと考える。

調査協力者	回答
A	正解
B	正解
C	正解
D	正解
E	電気をあけたい
F	正解

2015 年 4 月 9 日

「開く」が新出単語として出てきたので、「開ける」の練習もさせた。「ドア／カーテン／かばん／荷物・・・を開ける」などの連語の翻訳練習を行った。その次に、中国語の“打开收音机”、“打开空调”を日本語に訳してもらったところ、6 名の調査協力者は全員正しく答えた。電気器具を起動するときに、「つける」を使用するといったインプットもかなり多く、習得はできたと考える。

2015 年 4 月 21 日

二学期の中間テストで中国語を日本語に訳す問題を出した。“没蘸醋也没蘸酱油吃的，但是也很好吃（お酢も醤油もつけないで食べましたが、おいしかったです）” のという文を出題し、日本語に訳させた。

調査協力者	回答
A	お酢も醤油もつけませんが、おいしいです。
B	お酢もつけないで、醤油も付けないで、おいしかったです。
C	お酢も醤油もつけなくても、おいしいです。
D	酢を蘸しなくて、醤油を蘸しなくて、なかなかおいしいです。
E	お酢も醤油もなくても、おいしいです。
F	お酢も醤油もつけないで食べましたが、おいしいですよ。

授業後の振り返り

6 名の調査協力者のうち、「つける」といった動詞を意識的に使ったのは 4 名であった。文自体は完璧に書けなかったものの、この 4 名の学習者は「つける」のこの用法を身に付けたと言えよう。誤りをおかした 2 人の回答を見ると、D は自分で作った言葉で表現するストラテジーを用い、E は動詞を回避するストラテジーを用いた。

2015 年 4 月 23 日

新出単語には「つける」（点燃；打开（电源））の用法が出現した。応用会話には「ストーブをつけたまま、寝てはいけませんよ」といった文がある。その直後に、「身に付ける」といった連語が出てきた。テキストにおける例文は「まず、教科書を 1 冊買って、基礎知識を身に付けます」である。これらを教える際に、既習の用法をもう一度まとめて復習し、語義間の関連性を重点に置き、説明を行った。

2015年5月12日

教科書の「関連語彙」には「日記をつける」の連語が出た。基本的には、「関連語彙」の部分は教室で教授しない。学習者が独学して学ぶ内容である。授業中では、とりあえず「日記をつける」を1つのまとまりとして覚えておこうと指導した。

2015年5月25日

「てある」と「ておく」という文型を導入する際に、「テレビをつける」、「電気をつける」を用いて文型の練習をさせた。

2015年6月1日

「日記をつける」が新出単語として出た。ここでの「つける」はそのプロトタイプ的な意味、そして既習の用法とはどのようなつながりがあるのかを学習者に考えさせた。しかし、適切な回答は得られなかった。6名の調査協力者は全員「特に関連性がない」という答えを出した。教師が「つける」のプロトタイプ義とスキーマを用いて、「日記をつける」用法との関連性を示した。

授業後の振り返り

「日記をつける」における「つける」はそのプロトタイプ的な意味から少し離れた用法である。このレベルの学習者が自力ではこの「つける」と既習の語義間の関連性を見出すのがまだ困難である。

2015年6月2日

単語テストで前日習った「日記をつける」の中国語訳“记日记”を言って、学習者に日本語で連語を書かせた。

調査協力者	回答
A	正解
B	正解
C	正解
D	正解
E	日記を書く
F	正解

Eの「日記を書く」は間違いではない。しかし、既習の「日記をつける」という表現が求められる。こういった回答からやはり中国語の影響が見られた。中国語では、“写日记(日記を書く)”はごく自然な言い方であり、中国語母語話者学習者の産出しやすい表現である。

2015年6月8日

新出単語には「くれぐれも」があり、実例として「くれぐれも体に気をつけてください」を挙

げ、「体に気を付ける」のインプットを与えた。同じ課の禁止を表わす表現「～な」の例文として、「電気をつけるな」を挙げた。

三学期（2015.8～2016.1）

2015 年 9 月 21 日

「～ところです」という文型を復習し、“我正在记日记（「私は日記をつけているところです」）の中国語を言って、学生に日本語で訳文を書かせた。調査協力者の 6 名はみんな正しく書けた。このように、「日記をつける」の連語が長期記憶に残り、習得できたと言えよう。

調査協力者	回答
A	ぼくは日記をつけているところです。
B	私は日記をつけているところです。
C	私は日記をつけているところだ。
D	私は日記をつけているところです。
E	私は日記をつけているところです。
F	わたしは日記をつけているところです。

2015 年 9 月 24 日

新出単語にネックレスという語が出た。「ゴーグルをつける」は既習であるので、“带项链”の中国語を言って、「ネックレスをつける」という「つける」の「着用」の用法を復習する。中国語で言って、それに当てはまる動詞を推測させた。その結果、「つける」への推測がみんな成功できなかった。「ゴーグルをつける」と「ネックレスをつける」両行為の共通点は学習者には把握できていない。

2015 年 10 月 12 日

テキストに「私のコンビニの店員は身だしなみに気をつけているので、きれいに见えます」（第二冊第九課）という文がある。これをクラス全員に中国語に訳す練習をさせ、既習用法の「気をつける」を身に付けているかどうかをチェックした。

2015 年 10 月 13 日

新出単語の「気がつく」（第二冊第十課）を導入する際に、「気をつける」をもう一度提示して、復習をさせた。また、自他動詞の用法を中心に、「気がつく」と「気をつける」の区別を説明した。

2015 年 10 月 15 日

小テストでは、「気をつける」と「気がつく」を用いて、文作成の練習をさせた。自他動詞の用法、そして連語の意味は身に付けているかどうかをチェックした。中国語の訳文を言って、学

生に日本語を書かせた。その結果は次のとおりである。

調査協力者	文 1: 天气冷, 请注意身体。 (寒いから、体に気をつけてください。)	文 2: 意识到朋友的重要性。 (友達大切に気がついた。)
A	寒いだから、体に気をつけてください。	友達大切に気がついた。
B	寒いですから、体に気をつけてください。	大事に思っている友達を気がつく。
C	寒いから、体に気をつけてください。	友達重要性が気がつきます。
D	寒い	友達重要性を感じる
E	寒いから体を気をつけてください。	友達重要性を感じ
F	寒いから、気をつけてください。	友達重要が気がつきます。

授業後の振り返り

学習者の回答を見て分かるように、間違った回答もあれば、中途半端な回答もある。「気をつける」と「気がつく」は、単独動詞「つける」「つく」のプロトタイプ的な意味とは関連性があるものの、学習者はそれを考えずに、1つのまとまりとして覚えている。この学習段階の学習者にとって連語を覚えるのはあまり困難ではない。しかし、いざ連語を文脈に入れたら、うまく使えない場合がある。今回の文では、二格の要素が要求される。うまく産出できた学習者とそうでない調査協力者がいる。特に、「気がつく」の場合、二格を正しく表現できたのは一人もいない。ヲ格連語より、二格も含め、さらに大きい単位の文においての使用がこれからの指導を重点に置くべきだと思う。

2015年10月20日

A: ちょっと暑いですね。

B: 暑いなら、クーラーをつけましょうか。(第二冊第十課)

会話文に出た文を学習者に中国語に訳させた。既習の用法であるし、前後の文脈がヒントもあり、容易に正確に訳せた。

授業後の振り返り

起動を表わす「つける」の用法はインプットが多いので、学生に習得されたと考える。しかし、「部屋にクーラーをつける」の用法も正しく受け止められるかどうかが疑問である。文法情報が加わると、学習者が混乱してしまう可能性があると思定する。後日の調査では、この用法をテストする予定である。

2015年10月27日

テキストでは自動詞「つく」の用法が2ヶ所(「このボタンを押すと電気がつきました」、「お金を入れたら、「売り切れ」の表示がつきました」)出て、「つける」の用法との関連性についての説明を行った。また、これらの用法を「つく」と「つける」のプロトタイプ義に関連付けて説明を加えた。

授業後の振り返り

学習者の反応から、「表示がつく」より、「電気がつく」の方が分かりやすいと見られた。「表示をつける」が理解されていないのではないかと考え、この用法についてはこれからの調査では、チェックしてみる。

2015年10月29日

中間テストを実施し、連語の翻訳を出題した。「つける」以外の動詞に関わる連語もいくつか入れて、学習者に翻訳させた。使役表現を習う前に、二格が含まれている「つける」の連語を正しく訳すことができるかどうかチェックした。その調査用紙は添付資料4、結果と考察は4.5.2.1に示す。

2015年11月11日

動詞の使役文の学習が始まった。新出単語として、「つける」の“増加，附上「添加、付着」”の意味、連語「体力をつける」を学習した。単語帳に出た「つける」の語釈はこの課の内容に関わる用法の中国語訳であるので、「つける」のすべての意味に当てはまることができない。この点については、改めて学習者に強調した。今回の授業では、「つける」に含まれている使役性はまだ学習者に説明していない。

2015年11月18日

会話文には、「それから、基礎体力をつけるために、選手を走らせましょう」という文が出た。その中国語訳として、“然后，为了提高体能，让队员们跑步吧”が考えられる。ここの「つける」には使役性が含まれているので、いままで学習した用法とは全く異なる性質を持っている。学習者にうまく理解させるように詳細な説明を行った。前後の文脈を理解したうえで、「体力をつける」という連語の意味合いは6名の調査協力者を含め、クラス全員が理解できたような反応であった。

2015年11月30日

使役・授受表現の練習をする際、「エアコンをつける」という連語を用いて、インプットを与えた。

暑いから、エアコンをつけてもらった。

暑いから、エアコンをつけさせてもらった。

暑いから、エアコンをつけさせてくれた。

暑いから、エアコンをつけてあげた。

暑いから、エアコンをつけさせてあげよう。

などの文を学習者に中国語に訳させた。

授業後の振り返り

今回の授業の中心内容は授受表現と使役表現である。練習させるときに、できるだけ学習者の馴染んでいる連語を用いた。そうしたら、文型の習得の邪魔にならず、学習者に苦勞をかけずに文型の習得へ導くことができると思う。「エアコンをつける」は学習者の既習の用法であり、身近な事例でもあるので、授受表現と使役表現の練習に使うのが適切だと思える。

2015 年 12 月 1 日

使役・授受表現の練習をさせる際に、「子供にいい習慣を身に付けさせてあげましょう」という文の翻訳練習をさせた。回答からは習得の差が見られた。

調査協力者	回答
A	让孩子掌握好习惯！
B	孩子养成了好的习惯。
C	使孩子养成好习惯吧！
D	给孩子好的习惯。
E	孩子养成好习惯。
F	是孩子掌握好的习惯。

A と C の訳文は正確であった。D の訳文からも使役の意味合いが見られたが、少し自然さに欠けている。残った 3 名の調査者協力者の訳文はいずれも子供を動作主に行っている、間違った翻訳である。

2015 年 12 月 22 日

敬語についての練習問題には、「では、当日お気をつけて、お越しくださいませ」という文がある。教科書にだけでも、「気をつける」という用法のインプットが多い。学習者にとっても馴染んでいる表現である。敬語の文型に変更されても、「気をつける」の意味に対する理解は難しくない。6 名の学習者はこの用法に対する理解と産出は両方でき、習得はできたと想定する。

四学期（2016.2～2016.6）

2016 年 3 月 3 日

教科書には、「そんな練習の中でリム先生が気づいたことは、「外国語教育はコミュニケーションの練習の役割を果たす」こと、そしてもう 1 つ、「一生懸命コミュニケーションしようとするうちに、相手に対して優しい気持ちになる」ということでした」、という長文がある。「気づく」という単語は新出したが、「気がつく」は既習であるので、「気づく」の習得は難しなかった。

そのついでに、「気をつける」の用法をもう一度提示した。自他動詞の用法に関わるので、復習させた。調査協力者が「健康の大切さが気がついた」、「体に気をつけてください」のような文は正確に理解できた。

2016 年 3 月 8 日

「つける」の「電気器具などを起動する」という意味はインプットが多かったので、この用法はすでに習得できたと考える。「こたつ」という名詞を習った後の単語テストでは、“打开被炉(「こたつをつける」)”の中国語を言って、学生に翻訳させた。その結果、D は「かける」を用いて表現した。「つける」と「かける」をはっきりと区別できないようである。

調査協力者	回答
A	正解
B	正解
C	正解
D	こたつをかける
E	正解
F	正解

また、受験者 35 名（上記の 6 名も含まれる）の回答を見て結果をまとめた。正確に書けたのは 20 名、「こたつをかける」と答えたのは 5 名、「こたつを開ける」と答えたのは 2 名である。残った 7 名は記入しなかった。未記入の 7 名は「こたつ」という語を覚えていないので、連語を書けなかった可能性もある。

2016 年 3 月 10 日

日本語能力試験 N2 文法指導の授業では、「いろいろ難癖をつけたあげくの果てに、何も買わずに帰った」という例文が出た。「難癖をつける」は反論や苦情などを添え加える意味である。場合によって、物事の順調な流れを妨げるような状況を作り出すことも意味できる。授業では、この意味を紹介し、類似した例もいくつか挙げた。例えば、「けち／クレーム／文句／注文をつける」などである。これらの表現は慣用句であるものの、「つける」の基本義から連想できないわけではないと考える。学習者に自分で考えさせ、その関連性を見つけてもらうことにした。「材料にいちいち細かく注文をつける」、「納入された品にクレームをつける」、「演技にけちを付ける」などの例文を挙げ、理解を深めさせた。

また、「英語の勉強を楽しむ人にとっては消費である一方、仕事や、教養、趣味などの道具として身に付けたい人にとっては投資である」の例文がある。「身に付ける」は既習の用法であるので、まだ覚えているかどうかをチェックした。「～を身に付ける」が習得できたら、「アクセサリーをつける」のようなコロケーションに対する理解も難しくなくなると考える。

2016 年 3 月 18 日

練習冊には

ビジネス文章に対する苦手意識を克服し、必要に応じてすぐ作成できるスキルを身につけます。
(P.13)

あのさあ、友だちに借りた CD にうっかり傷をつけちゃったんだ。(P.14)

ライトをつけないで自転車に乗っていたので、警官に注意されてしまった。(P.20)

の3つの文があった。「身につける」と「ライトをつける」についての用法はインプットが多く、学生は容易に理解できた。「傷をつける」はこれまでの授業では習ったことがないので、少し時間をかけて説明を行った。「傷をつける」の意味だけではなく、この用法に含まれている「つける」の非意志性についても説明したが、学習者の反応から、一部の学生は少し納得にいかないようである。

授業の振り返り

時間の都合で、学習者は今日出会った「つける」の用法の習得状況はチェックできなかった。特に、常用のコロケーション「傷をつける」を習得できたかどうかについて後の調査で考察しなければならない。

2016年3月31日

練習帳には、「コートのボタンが外れていたので、母につけてもらった」という「外れる」の用法を出題した文がある。ここでは「外れる」ではなく、「取れる」の方が自然である。学習者は「ボタンをつける」についての用法が理解できたかどうかを確認したところ、正しく翻訳できた。前後の文脈があるので、学習者はそれに対する理解は難しくはなかった。「ボタンをつける」は「つける」のプロトタイプ義の用法であり、四学期になって初めて教科書に出現したのがかなり遅れていると考える。

2016年4月6日

N2 文法指導では、「彼はタバコが好きで、1本吸い終わったか終わらないかのうちに、2本目に火をつけた」の文を学習する。そして、「火をつける」を調査協力者に訳させた。

調査協力者	回答
A	点火
B	点火
C	点火
D	点着烟
E	点火
F	点火

その後、母語の正の転移を活かすために、この場合の「つける」の「点」という漢字表記を示した。というのは、中国語の“点火”とは同じ動詞を用いるからである。

授業後の振り返り

「火をつける」は「ラジオをつける」とは類似した用法であるので、習得はそれほど難しくなかった。学生の反応を見たら、その意味を理解できたようである。例文の「二本目（のたばこ）に火をつける」には、二格情報も現れている。これを中国語に訳すと、“点着第二支烟”あるいは“给第二支烟点上（火）”のような訳文が考えられる。「火をつける」というコロケーションは理解されやすいが、二格情報が出てくると、少し複雑となる。このようなヲ格と二格両方有する「つける」の文型は学習者には困難であるかどうかは後日の調査でなければならない。

2016年4月14日

複合動詞「売りつける」を学習した。「練習問題」には、「高級化粧品を売りつけられる」が出た。「売りつける」はかなり難しい複合動詞であり、前後の文脈からのヒントも少なく、学習者が自力で意味を推測することができなかった。

2016年4月15日

単語テストを行った。「コートのボタンをつける」と「身につける」、この2つのコロケーションの中国語訳、“掌握”の日本語訳を求めた。

調査協力者	コートのボタンをつける	身につける	掌握
A	给衣服装上扣	掌握	身につける
B	为大衣钉扣	掌握	身につける
C	给大衣缝上扣子	掌握	身につける
D	系大衣的扣子	掌握	身につける
E	缝大衣扣子	掌握	身につける
F	扣衣服扣子	掌握	身に付ける

授業後の振り返り

上記の結果から見られたように、学習者は連語「身につける」を習得できた。「コートのボタンをつける」の「つける」はプロトタイプ的な意味であるものの、表記の「付」から見ると、中国語のその動詞とは全く異なる性質を持つ意味である。しかも、この用法には使役の意味合いがあり、中国語母語話者学習者には習得しがたい用法と言えよう。BとCの2人だけ、正確な答えを出した。Eの回答は間違えたとは言えないが、訳文の自然さに少し欠けている。既習の用法であるが、学習効果はよくない。「つける」のプロトタイプ義の強化をすべきである。

2016年4月28日

本日の授業では、「つける」に関する用法が3ヶ所、「つく」の用法が1ヶ所出た。

問題八：旅行中、何か気をつけることはありますか。

問題十：天才の多かった日本人の心の中に、物事をすぐ忘れすぐ諦めるという癖を付けてしまったように見える。

……その場その場で安易な一時しのぎの対策を講じて、これで済ませてしまうという一種の無責任さが植え付けてしまったようである。

小テストⅡ いったんこの癖がつくとなかなか抜けない。

この中には自他動詞の用法であるので、それについての説明を加えた。また、学習者は複合動詞に馴染んでいないので、意味推測が困難であると想定し、問題十の文を調査協力者に訳させた。その結果、「癖を付ける」という連語の「つける」に対する理解には不十分なところがあると見られた。また、調査協力者の訳文から、文全体の意味を考えて中国語に翻訳するストラテジーをとる傾向が見られ、「つける」の意味を無視したようである。

他動詞の「植え付ける」に対する理解は文脈によるものだと思われる。それを中国語に正しく訳すには、「植え付ける」その語だけでなく、文章全体の内容を考えなければならない。A と E の訳文からは「植え付ける」の意味合いが正確に理解できたと見られた。

調査協力者	癖を付ける	一種の無責任さが植え付ける
A	在常遭遇自然灾害的日本人心目，好像都 <u>形成了快速忘事干脆放弃的习惯</u> 。	…的一种不负责任，没有责任感想法深深地 <u>烙入心中</u> 。
B	多灾多难的日本人心目，对事物有马上忘记和放弃的 <u>习惯</u> 。	…这种不负责任就过去的想法一直被 <u>灌输</u> 。
C	在天灾很多的日本人心目，可以看出很快将事物忘记与放弃是日本人的 <u>习惯</u> 。	… <u>生成</u> 了这样就能过去的一种 <u>无责任的心理</u> 。
D	因为天灾多，可以看出在日本人心中 <u>养成了</u> 马上忘记事物的 <u>习惯</u> 。	…就 <u>灌输</u> 了一种那样无态度就过去的了的感觉。
E	在天灾中日本人在心中 <u>养成了</u> 忘得快，放弃快的毛病。	这才有了随便了事的 <u>无责任感根深蒂固</u> 。
F	多天灾的日本人心目， <u>形成了</u> 快速忘记事物的 <u>习惯</u> 。	…就 <u>灌输</u> 了一种无作为就过去的了 <u>态度</u> 。

2016 年 5 月 10 日

教科書では、コロケーションの「身につける」が出現した。「語学を学習する上で大切なことは、基礎的な事項をしっかりと身につけることである」という文である。この用法に関するインプットが多いので、学習者はすでに習得はできた。

2015 年 5 月 20 日

テキストでは、「怪談は…。ハーン自身の解釈を加え、内容を付け加えたり削ったりして創作した文学作品である」という文が出た。複合動詞の用法であるものの、新出単語としては挙げられなかった。学習者が自力でその意味合いを正確に推測することができるかどうかチェックした。「付け加える」は複合動詞ではあるが、中国語の“附加(付加する)”と同じ漢字を使っているし、前後の文脈もヒントとなっているので、中国語母語話者学習者には容易に意味を理解することができた。

また、「甘いものはついつい食べ過ぎてしまいがちなので、ダイエット中は気をつけましょう」の文もあった。「気をつける」はすでに既習であるし、インプットもアウトプットも多いため、

理解も産出も問題はなかった。

授業の最後に、教科書の「付け加える」の文を学習者全員に訳させ、正しく理解できるかどうかを確かめた。調査協力者 6 名の回答だけを抽出した。

調査協力者	原文：ハーン自身の解釈を加え、 <u>内容を付け加えたり削ったり</u> して創作した文学作品である。
A	但是，ハーンの怪談是基于日本民间相传的故事，自己重著的，加入自己的解释， <u>对内容进行增减</u> 而形成的文学作品。
B	然而汉的作品，集合了日本民众的故事，根据事实编写的东西，加上汉自身的理解， <u>增减内容</u> 。
C	但是ハーンの怪談是依据民间传说故事而写，经过了他的改编，加上自己的解释， <u>增加与删减</u> 而成的文学作品。
D	但是赫恩的怪谈，不但有着民众之间的传说，实际上有着赫恩自己的改做。加上了赫恩自己的解释， <u>是把内容添加和删减</u> 所创作出的文学作品。
E	然而，瀚的作品不光是日本民众们代代相传的故事，甚至有被他 <u>删减重著，增加解释</u> 。
F	但是，ハーン的这个著作，是以日本民众所流传的传言为基础，实际又被ハーン修改的著作。加上ハーン自己的解释， <u>对内容进行增减</u> 所创作的文学作品。

2016 年 6 月 1 日

「つける」に関わる用法を 1 つ、「つく」に関わる慣用句を 1 つ学習した。

「祖父母に花束と大好物のお餅を贈ったの。それに「おじいちゃん、おばあちゃん、いつもありがとう。」って手作りのタイの絵カードも付けたよ」。また、「以心伝心なんて思っていると、勘違いして取り返しがつかないようなことになることもあるかもよ。」

「カードをつける」と「取り返しがつかない」の 2 つの連語である。「取り返しがつかない」の意味は単語帳に提示されている。

授業後の振り返り

「会話文」に出ている用法であるので、授業中確認したところ、クラス全員理解できたという反応が見られた。「贈り物にカードをつける」とは、「つける」の常用度の高い用法であるし、既習の用法と関連付けられるので、学習者は無理なく習得できる想定した。「カードをつける」を産出できるかどうかは、後日でチェックする。

2016 年 6 月 17 日

文型「ごとに」の説明をするとき、“每隔三厘米画一个圈”の中国語を言って、日本語に訳させた。

調査協力者	回答
A	3 センチごとに、丸を付ける
B	3 センチごとに、円をかく
C	3 センチごとに、丸を付ける
D	3 センチごとに、丸を描く

E	3センチごとに、丸をかく
F	3センチごとに、円をかく

調査協力者の回答には、「つける」「かく」「描く」の3つの動詞が用いられている。

2016年6月21日

複合動詞の「据え付ける」を正確に理解できるかどうかをチェックし、訳文を書かせた。

調査協力者	原文：ある日、わたしは、とうとう父の八ミリ撮影機を持ち出して、縁側に <u>すえ付け</u> 、アニメーションの制作にとりかかった。
A	某一天，终于我拿出了父亲的8毫米摄影机，安装在外廊上，开始着手进行动画的制作。
B	有一天，我终于把爸爸8毫米的摄影机拿了出来了。安装在走廊上，着手于制作动画片。
C	有一天，我拿出父亲的八毫米照相机。将它安在走廊，开始着手于制作动画。
D	有一天，我终于把父亲的摄影机拿了出来。安装在外廊上，并开始着手制作动画片。
E	有一天，拿出父亲的八毫米摄影机按装在走廊开始录制动画片。
F	某一天，我终于拿出了爸爸的八毫米摄像机，安装在走廊上，着手制作漫画。

以上は調査者協力者が教科書の原文を見ながら、翻訳したものである。原文の横のページに新出単語の語釈がついているので、「すえ付ける」を正しく翻訳できるのが当然である。しかし、この語に対しては、どこまで理解しているかは分からない。自由産出できるかどうかをチェックするのも今後の調査に譲る。

また、「想像がつく」を1つの連語として学習者に覚えさせた。この「つく」とその基本義との関連性を授業で説明した。否定形の「想像がつかない」も理解できたと学習者の反応から見られた。しかし、文脈に入れると、学習者が文全体の意味をよく把握できず、「想像がつかない」を正確に訳せなかった。

調査協力者	原文：わたしは、がっかりしたが、アニメーションには <u>想像もつかない</u> ほどたいへんな数の絵と手間が必要なのだということを、子ども心に悟ったのだった。
A	我很失望，童心也领悟到动画需要数目难以估计的画和功夫。
B	我虽然很失望，但是在我幼小的内心里明白了做一个动画片需要数量大到难以想象的画以及下很多功夫的。
C	我虽然感到失落，但是我幼小的心却明白了，制作动画要超出我想象的困难，需要许许多多的画，下许多的工夫。
D	我有点失落，对动画片的想像一定要伴随着大量的画和工夫，这是童心理解出来的。
E	我很失望，但是制作动画需要的大量手绘与工夫铭记在了孩子的我心中。
F	我很失望，但是从小的时候就知道，对于制作动画需要想象不到的大量的画画和大量的工夫。

長文を翻訳するには、個々の語に対する正確な理解が要求される一方、文全体の意味を明確に把握しないと訳せないのである。

2016年6月24日

授業中、「つける」の用法をコロケーションの形でいくつか提示し、中国語に翻訳させた。ほかの動詞の用法も出題した。テスト用紙は添付資料5を参照する。

資料4 小テスト（Ⅰ）のテスト用紙

2015 年 11 月 29 日実施

次の連語を中国語に訳してください。

ドアに鍵をかける	
テレビに出る	
部屋にクーラーをつける	
肉に味をつける	
気がつく	
シャツにボタンをつける	
成績があがる	
商品に値段をつける	
通りがかりの人に話をかける	
休みを取る	
学生に元気をつける	
学校をやめる	
火をつける	
店をひらく	
名前をつける	
部屋に電気をつける	
葉がきく	
車に気をつける	

短语日译汉

- 1 現実にはありえない世界
- 2 想像がつく
- 3 気が強い
- 4 心をとらえる
- 5 天下をとる
- 6 流水に覆われている
- 7 よろしく伝えてください
- 8 レンタルで済ませる
- 9 むやみに捨てる
- 10 傷をつける
- 11 障子を取り付ける
- 12 気にする
- 13 気がつく
- 14 影響をもたらす
- 15 夢をかきたてる

短语汉译日

- 1 热衷于漫画
- 2 大学毕业
- 3 挥手
- 4 添加内容
- 5 背负行李
- 6 便宜卖
- 7 有限
- 8 通风差
- 9 地基易腐烂
- 10 请朋友客
- 11 起作用，发挥作用
- 12 添麻烦
- 13 打破常识
- 14 掌握知识
- 15 惜别

資料6 総合テスト（Ⅰ）の調査用紙

名前 _____ 2015年6月9日実施

1 名詞、形容詞、形容動詞、動詞、副詞、接続詞、連体詞などの中で、どれが難しいですか。
なぜですか。

2 どのように言葉の意味用法を覚えていますか。

3 多義語の存在を意識しながら、勉強していますか。どのように勉強していますか。

4 「だす」 の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？

5 「つける」 の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？

6 「かける」 の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？

7 「とる」 の意味用法（連語と中国語訳で書いてください）
中心義（中心的な用法）は？用法間のつながりは？

2015年6月9日実施

このインタビューは調査協力者の日本語レベルに配慮し、中国語で行った。以下はインタビューの内容を日本語に訳したものである。訳文は筆者による。

調査者：アニメとドラマを見ていますね。字幕付きですか。

C：はい、速いから見ないと分かりません。

A：日本語と中国語両方あるのが一番いいです。

C：そう、それが一番いいです。

D：歌を聴くのも勉強になります。中国語と日本語両方付いています。

調査者：なるほど。じゃ、一人ずつ質問しますね。まず、Aに質問します。「つける」の中心義を“附着连接”と書きましたね。しかし、ここに挙げた3つの連語には“附着连接”を表わす用法はありませんね。

A：これらの用法にはすべて“附着连接”の意味があると想像できます。

調査者：確かに先生は授業で話したことがありますね。「つける」には“附着连接”という中心的な意味合があるって。ここに書いたほかの答えを見て、例えば、Aさんは「出す」の中心義を“拿出”だと思えますね。挙げた連語には「本を出す」があります。「かける」は“挂”と書いていて、実例を挙げませんでした。が、“挂”というのはその意味の1つですね。「取る」は“抓、取”の意味を挙げているが、その中心義はどれですか。

A：「荷物をとる」が中心義の実例です。

調査者：じゃ、“附着连接”の「つける」の例を挙げてくれませんか。

A：すべて“附着连接”が含まれています。「日記をつける」とか。

調査者：「つける」の中心義を“粘上”と書きましたね。でも、“粘上”の実例は書いていませんね。

E：「めがねをつける」は“粘上”ですよ。汗、汗で眼鏡を人につけました。

調査者：うん？人？

E：こんな時もあるでしょう。なんか貼り付けたような感じ。

調査者：うん、とにかく、“粘上、黏上、连上”の意味があるということですね。

E：はい、そうです。

調査者：あ、そうですか。それから、漢字の“戴”を表わす動詞に似ていると書きましたね。

E：“戴帽子（「帽子をかぶる」）”はこういう動作でしょう。（身振り手振りをしながら）このようにかぶって。

調査者：つまり、「つける」は中国語の動詞“戴”と関連性があるということですね。

じゃ、「つける」を覚えるとき、“戴”に連想しながら覚えているんですか。

E: はい、そうです。

調査者: 「かける」は“书写”ではありませんよ。

D: 「書く」

調査者: あ、「書く」の可能形ですか。それが正しいですが、実はこれは「眼鏡をかける」の「かける」ですよ。

D: 「かける」には“挂”の意味がありますね。「つける」のところに書いてしまいました。

調査者: 「つける」に書いてしまったか。そうですか。じゃ、「つける」の中心義って“打开、附着（「開ける、付着」）”ですか。“打开（「開ける」）”ってどういう意味ですか。

D: “开关儿（「スイッチ」）”などのような…

調査者: “开电视、开灯（「テレビをつける」、「電気をつける」）”とか、ですか。

D: そうです。

調査者: 「電気をつける」の「つける」ですね。分かりました。

調査者: “电源的连接「電源の連結」”が「つける」の中心義だと思いますね。

F: はい。

調査者: ここに書いてある「電気をつける」は“电源的连接”の実例ですね。

F: はい。

調査者: じゃ、この意味の他のコロケーションを挙げることができますか。「電気をつける」と同じようなコロケーション。

F: ラジオ

調査者: 「ラジオをつける」、はい、ほかは？

F: 電気

調査者: 「電気」は書きましたね。ほかは？

F: 電源

調査者: 「電源」は「つける」ではなくて、「電源」は「入れる」ですね。

F: “插入「入れる」”

調査者: そうです。つまり、電気器具には全部使えますね。この場合、これは“开启「起動」”という意味ですね。

調査者: 「つける」の中心義を“把…附着在…上（～を～に付着させる）”と書きましたね。これはAの答えと同じですね。

C: はい。

調査者: 「つける」には“把…附着在…上”という意味があるというわけではなくて、「つける」の意味の共通点として“把…附着在…上”を挙げたということですね。

C：はい。

調査者：「かける」の中心用法を“使两者连到一起（2つのものをつなぐ）”と書きましたが、どういう意味ですか。

B：「つける」と「かける」の区別が分かりません。

調査者：うん、区別が分からないのですね。

B：はい。「かける」の連語はその3つしか書けません。

調査者：どこが区別しにくいですか。どこが似ていますか。

B：「かける」は“戴眼镜（「めがねをかける」）”、「つける」は“戴泳镜、戴隐形眼镜「ゴーグルをつける」、「コンタクトレンズをつける」”ですね。

調査者：「かける」は、例えば、「服をかける」、「架上去、挂上去」という意味ですね。また、“把画挂在墙上「壁に絵をかける」”は「かける」を使いますね。一方、「つける」は2つのものを接触させて、つなげることを意味しますよ。

B：“开锁”はどういうことですか。

調査者：うん？「鍵をかける」は“开锁”ではなくて、“锁门”ですよ。

B：じゃ、結果的には“锁门”はドアと鍵がつながりましたね。

調査者：うーん、違いますね。

資料 8 総合テスト（Ⅱ）の調査用紙

名前_____ 2015 年 12 月 25 日実施

まず、既習の意味用法を確認してから、□の中の連語の意味を考えてください。それから、関連する用法を抽出して、グループ分けをしてください。その後、分けた根拠とグループ間の関係も述べてみてください。

出す

- ① ごみを出す、②宿題を出す、③声を出す、④意見を出す、⑤元気を出す

a 客にお茶を出す、b 手紙を出す、c 台所から火を出す、d 新製品を出す、e 指示を出す、f スピードを出す、g 駅前に新しいレストランを出す、h 新聞に広告を出す

つける

- ① 気をつける、②日記をつける、③テレビをつける、④醤油をつける、
⑤ ストープをつける、⑥知識を身につける、⑦体力をつける、⑧ゴーグルをつける

a 地面に足をつける、b 火をつける、c 元気をつける、d 子供に名前をつける、e 味をつける、f 成績をつける、g 値段をつける、h 胸にブローチをつける、i 傷口に薬をつける、
j 文句をつける、k 漢語に振り仮名をつける、l 知恵をつける、m 目をつける

かける

- ① 眼鏡をかける、②ドアに鍵をかける、③電話をかける、④声をかける、⑤椅子に腰をかける、⑥ 時間をかける、⑦心配をかける、

a 布団をかけて寝る、b お湯をかけて体を洗う、c お金をかける、d 迷惑をかける、
e 焼き餃子に醤油をかける、f 壁に絵をかける、

とる

- ① 写真をとる、②資格をとる、③休みをとる、④年をとる、⑤出席をとる、
⑥ 眼鏡をとる、⑦席をとる

a 予約をとる、b 連絡をとる、c メモをとる、d 注文をとる、e 帽子をとる、f 財布をとる、g 学位をとる h 食事をとる、i 睡眠をとる

解答用紙

だす

つける

かける

とる

資料9 総合テスト（Ⅱ）の結果（「だす」、「かける」、「とる」）

調査協力者	「だす」	「かける」	「とる」
A	④eg 提出自己对他人进行某动作 ⑤f 打起精神，提高速度，激出拿出人的动力等 ③lh 发出，从无到有 ①b 寄出 ②a 交出，把自己的某物交给别人	①②f 挂上 ③④ 搭话，声音的连结 ⑤abe 覆盖 ⑥c 抽象事物 ⑦d 非意志，使他人做…	①c 写，印 ②g 得到 ③i 休息（「とる」本身无法翻译？） ④ ⑤h ⑥e 摘下 ⑦a 提前做某事 b d
B	①②③④b 由里向外的一个过程 acdfgh 从无到有 e 下达 ⑤ 不明白什么意思	①④⑤abef 附加 ⑥⑦cd 花费，添加 ②③ 启动	①②③④⑤abefghi 获取 ⑥⑦cd 附着
C	① ②b 交出去，给…（有动作性） ③④⑤cef 由内向外发出 dgh 提出…（从无到有） a	①②⑤abef 把…附着在…上 ④⑦d 给他人带来… ⑥c 花费 ③	①②cg 取得后能留住 ③⑤⑦abdhi 取得… ⑥ef 拿 ④
D	①a 物体向外移出或移入，强调物体的移动 ②bf 提交东西 ③ecd 表示发出什么，从无到有的变化 ④h 本身已经存在的东西公布出来 ⑤	①⑤f 把一个东西挂在另一个物体上 ② ③④ 发出动作 ⑥c 花费出去，消耗出去 ⑦d 造成的结果 eb 附着	① ②③bg 表示取得了 ④ 变化 cdefhi 发生的行为动作
E	把东西从一个里面释放（放出来） 里面有（物质） → 里面没有（物质） 里面有（精神） → 里面没有（精神） [用语言表达出来] ①②ab ④ef → cd ③⑤ g 不认识	①②abcef ③④⑥⑦d ⑤	得到，到手里 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> 物质 ⑥ ef ⑦ </div> <div style="text-align: center;"> 抽象 ① ② ③ ④ ⑤ abcdghi </div> </div>
F	①②ab 表示动作 ③④e 抽象的 dhcfg 东西从无到有 ⑤	①②⑤abfe 架在上面，具体的动作，附着，沾在上面 ③④声音的传递 ⑥⑦cd 精神方面多加注意，比较抽象	① 表示拍照 ②③ghi 表示获得 ④ ⑥e 去除掉，摘掉 ⑤ab 联结，予定 ⑦f 抢占 cd 标记

名前 _____ 2016 年 6 月 9 日実施

1 空所補充

- ①あの眼鏡を _____ た人は誰だか知ってる？
- ②——暑いから、窓を _____ ましょうか。
——ええ、そうしよう。
- ③今日の 3 時までにレポートを _____ てください。
- ④引っ越しの時、うっかりして家具に傷を _____ てしまった。
- ⑤来週旅行に行くので、今日中にホテルの予約を _____ なければならない。
- ⑥母の誕生日に手作りのケーキを贈りました。そして、感謝のカードも _____ ました。
- ⑦急がなくてもいいです。時間を _____ てゆっくりやりなさい。
- ⑧母が入院したので、三日の休暇を _____ て看病した。
- ⑨——田中さんのところ、男の子が生まれたそうですね。名前を _____ ましたか。
——うん、健太っていうの。
- ⑩父は自分の気持ちを口に _____ て言う人ではない。
- ⑪先輩はいつも励ましてくれて、元気を _____ てくれました。
- ⑫今朝出かけたとき、鍵を _____ のを忘れた。
- ⑬顔を窓ガラスに _____ て覗き込む（窺視）。
- ⑭今、時計の針は 9 時 20 分を _____ している。
- ⑮手を _____ て、握手を求めた。
- ⑯道を渡るとき、車に気を _____ てください。
- ⑰いつも迷惑を _____ てすみません。
- ⑱やはり決心を _____ のが難しい。
- ⑲料理を小皿に _____ て食べる。
- ⑳ひどい怪我をしたみたいですね。傷口にすこし薬を _____ てあげましょうか。
- ㉑山本、お客さんにお茶を _____ てください。
- ㉒調理師の資格を _____ ていますか。
- ㉓うわさでは、この映画では新人女優を主役の座に _____ たそうだ。
- ㉔たまっていた仕事に手を _____ 。
- ㉕日本語の長文をどのように _____ て読むのかわからない。

2 反義語

- ①テレビを消す _____
- ②目を閉じる _____
- ③教室に入る _____
- ④癖をとる _____
- ⑤上着のボタンをかける _____
- ⑥上着のボタンをつける _____
- ⑦物価が上がる _____
- ⑧人数が増える _____
- ⑨ふすまを取り外して一つの部屋にする。 _____
- ⑩扉を引く _____

3 翻訳

- ①重要事項は書き付けておいたほうがいい。
- ②スマホで撮影した写真をパソコンに取り込む方法は知らない。
- ③会社に対する不満を並べ立てる。
- ④人の弱みに付け入るようなやり方。
- ⑤銀行からお金を引き出す。
- ⑥庭の木が実を付けている。
- ⑦点数が 60 点以下の人を切る。
- ⑧病院へ駆けつけた。
- ⑨日持ちのいいお菓子を買う。
- ⑩当てつけるように自分の恋人を友達に見せる。
- ⑪他社から優秀な人材を引き抜く。
- ⑫彼はいつも格好をつけた態度をとる。
- ⑬人参を細かく切る。
- ⑭この議論の火付け役は部長だった。
- ⑮この部屋にエアコンが付けてあります。

資料 11 総合テスト（Ⅲ）の結果

1 空所補充の回答

質問番号	A	B	C	D	E	F
1	かけ	かけ	かけ	かけ	つけ	かけ
2	開け	あけ	開け	開け	開い	開け
3	出し	出し	出し	出し	出し	出し
4	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	し
5	入れ	し	し	し	し	し
6	贈り	つけ	つけ	つけ	書い	つけ
7	そ	捨て	利用し	とっ	かかっ	持っ
8	かか	とっ	取っ	得	取っ	持っ
9	決め	つけ	つけ	つけ	つけ	取り
10	出し	つけ	出さないっ	出	つけ	出っ
11	入れ	つけないおし	もたらし	つけ	出し	上げ
12	かける	かける	かかる	かける	つける	かける
13	だまっ	通じ	隠し	(空白)	通っ	通し
14	指	移動	直	渡	指	さし
15	出し	伸び	出し	伸べ	出し	出し
16	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ	つけ
17	かけ	かけ	かけ	かけ	かけ	かけ
18	(空白)	決める	定める	かける	つける	つけ
19	乗せ	おい	置い	(空白)	つけ	あっ
20	ぬっ	つけ	つけ	つけ	(空白)	つけ
21	出し	入れ	入れ	つけ	作っ	つけ
22	持っ	とっ	持っ	とっ	取っ	取っ
23	座っ	取っ	決め	なっ	やっ	つけ
24	ひいた	離れた	出す	かける	出す	手伝う
25	分け	通じ	落ち着い	(空白)	み	つけ

2 反義語

質問番号	A	B	C	D	E	F
1	つける	つける	つける	開ける	つける	つける
2	開ける	開ける	開ける	開ける	開ける	開く
3	出る	出る	出る	出る	出る	出る
4	抜く	捨てる	やめる	あきらめる	なおす	(空白)
5	はずる	開ける	とる	(空白)	消す	(空白)
6	取る	取る	外す	(空白)	抜ぐ	(空白)
7	下がる	下がる	下がる	下がる	下調する	下がる
8	減る	減る	減る	減す	減る	減る
9	(空白)	つける	折りる	(空白)	つける	取り入る
10	押す	押す	押す	(空白)	閉める	押す

3 翻訳

質問番号	A	B	C	D	E	F
1	重要事項还是写下来比较好。	重要的事情事先写好为好。	事先把重要事項记下来更好。	把重要事項附着写上的话更好。	重要事項事先写出来比较好。	重要的事情最好事先记下来。
2	不知道把手机拍的照片传到电脑里的方法。	不知道怎么把手机拍的照片导到电脑上。	我不知道用电脑将手机拍的照片取出的方法。	用手机照相后用笔记本电脑洗出(照片的)方法我不知道。	不知道如何在笔记本电脑中取出智能机拍的照片。	不知道怎样把手机照下的照片传到电脑里。
3	有太多对公司的不满。	对社会的的不满与日俱增。	列出对公司的不满。	(空白)	列出对社会的不满。	对公司有很多不满。
4	针对他人弱点的做法。	切中人要害的做法。	切入人的弱点的做法。	人类是不把弱点展示给他们的人。	抓住人弱点的作法。	像这样乘人之危的方法。
5	从银行取钱。	从银行取钱。	从银行取钱。	从银行取钱出来。	从银行取钱。	从银行取点钱。
6	院子里的树结果了。	院子里的树结果了。	院子里的树结果了。	庭院里种着树。	院子里的树结果了。	庭院里的树木都长实了。
7	60 分以下的人不要。	不要 60 分以下的人。	淘汰 60 分以下的人。	分数在 60 分以下的人(被淘汰)裁掉。	淘汰 60 分以下的人。	分数在 60 以下的人淘汰。
8	狂奔到医院。	快速的去医院。	奔向医院。	到医院治病。	赶去医院。	跑去医院。
9	买了可以长久保存的点心。	买了卖相好的点心。	买了日期好的点心。	每天习惯买好的点心。	买点当日现作的好吃点心。	买了能存放一段时间的点心。
10	就像附赠品一般把自己的恋人给朋友看。	处的差不多的恋人给朋友看看。	为了安心把自己的恋人给朋友看。	(空白)	把恋人带给朋友评价看看。	把自己的朋友当恋人。
11	从其它公司挖角优秀的人才。	从别的公司翘优秀的人才。	从其他公司引入优秀的人材。	从其它公司选拔引来的优秀的人材。	从别的公司挖优秀人材。	从别的公司挖来优秀的人材。
12	他的态度总是附和穿着。	他总是很任性。	他总是那种耍帅的态度。	他总是态度上做老好人。	他一直采取以貌取人的态度。	他总是能得到好印象。
13	胡萝卜切成小块。	把胡萝卜切碎。	切碎胡萝卜。	把胡萝卜细细地切断。	把胡萝卜切成小块。	切碎胡萝卜。
14	部长是这个讨论的发起人。	这场争吵的导火索是部长。	这个争论的导火索是部长。	这个议论的矛头指向的是部长。	争论的源点是部长。	这次议论的引发人是部长。
15	这个房间有空调。	有人在这个屋子里装了空调。	这个房间配有空调。	这个房间附着空调。	这个房间有空调。	这个房间的空调开着呢。

『日本語基本動詞用法辞典』

付ける

[意味文型]

(1) 2つのものを合わせて離れない状態にする。

＜＜文型＞＞人・生き物 が/は 物・所に物・身体（部分）を付ける

例 父は壁に棚をつけた・犬が水たまりの水に鼻をつけた・足を大地に付ける・傷口に薬を付ける・廊下に足跡を付ける・窓にカーテンを付ける・シャツにボタンを付ける

(2) ある物・事に別の物・事を（新たに）加える。

＜＜文型 A＞＞人・組織 が/は 力を付ける

例 選手たちは実力を付けている・元気（力/体力/学力/自信）を付ける

＜＜文型 A＞＞人・組織 が/は 物・事に 物・事を付ける

例 子供がレコードに傷を付けた・肉に味を付ける・商品に値段（番号）を付ける・借金に利子を付ける・家を貸すことに条件を付ける・手に職を付ける

(3) 人をある人のそばを離れないようにさせる。

＜＜文型 A＞＞人 が/は 人・集団に 役割者を付ける

例 医者はその病人に看護婦を付けた・重要人物に護衛を付ける・息子に家庭教師を付ける・団体客に案内人を付ける

＜＜文型 B＞＞人 が/は 人・集団に 人を 役割として付ける

例 父は子供に大学生を家庭教師として付けた・首相に頑健な男たちを護衛として付ける

(4) 事柄をある状態に落ち着かせる。

＜＜文型 A＞＞人・組織 が/は 事を付ける

例 警察は犯人の居場所の見当を付けている・察し（当り/めぼし/ねらい）を付ける・勝負を付ける

＜＜文型 B＞＞人・組織 が/は 事に 事を付ける

例 夫婦は 10 年越しの離婚訴訟に決着をつけた・もめ事にけり（決まり/かた/黒白/始末）を付ける/男女の交際にけじめを付ける・仕事に目鼻（めど/見切り）を付ける

(5) ノートなどに書き込む

＜＜文型＞＞人 が/は 記録を付ける

例 私は日記を付けている・家計簿（帳簿）を付ける

(6) 人・動物・車などの後をひそかに追う。

＜＜文型＞＞人・乗り物 が/は 人・生き物・乗り物（の後）を付ける

例 刑事は犯人を付けた・パトカーが不審な車の後を付けている

(7) 名前を与える。

＜＜文型＞＞人・組織 が/は 人・生き物・物に 名称と（いう）名を付ける

例 彼らは生まれた子供に「弘」と名前を付けた・会社は新製品に「白クマ」という名を付けた・犬に「コロ」という名前を付ける

[文法情報]省略

[語形]省略

[複合動詞]

付け上がる：いい気になって無作法なことをしたり、勝手なことをしたりする。

例 彼はこちらが何も言わないとすぐ調子に乗って付け上がる。

付け入る（付け込む）：相手の油断や弱点を利用する。

例 彼は人の弱みに付け入るのが上手だ。

付け回す：しつこくどこまでも後を追う。

例 別れた夫が順子を付け回しているという話だ

[慣用句]

色を付ける[～に]：サービスとしてさらに金品を付け加えたり、値引きしたりする。

例 この金額にもう 500 円ほど色をつけてくれませんか。

因縁を付ける[～に]：言いがかりや文句を言う。

例 やくざが店の客に因縁をつけている。

尾ひれを付ける[～に]：話を誇張する。

例 話に尾ひれをつけておもしろくした。

折り紙を付ける[～に]：人物や物事が確かであると保証する。

例 多くの評論家がその映画に折り紙を付けた。

気をつける[～に]：注意を働かせる。

例 水たまりに気をつけなさい。

景気を付ける：物事の勢いや威勢を盛んにする。

例 お酒でも飲んで景気をつけよう。

けち[難癖]を付ける[～に]：欠点をあげてけなす。

例 妻がとかく息子の嫁にけちを付けるので困る。

注文を付ける[～に]：自分の希望や条件を出す。

例 彼は私たちの計画に難しい注文を付けた。

都合を付ける：時間をやりくりして相手の希望に添うようにする。

例 何とか 1 時間だけ都合をつけてくれませんか。

手を付ける[～に]：(1) 物事を始める。例 洋子はようやく最後の問題に手を付けた。

(2) 金や物を使い始める。例 隊員たちはついに最後の人袋になった食料に手を付けた。

(3) 勝手に使ってはならない金を使ってしまう。例 その女子職員は会社の金に手を付けて捕まった。

(4) 目上の男が自分の勢力下の女と関係を結ぶ。例 主人は使用人の女房に手を付けた。

はしを付ける[～に]：出された料理を食べ始める。

例 真由美は出された料理にはしを付けなかった。

道を付ける[～に]：(1) それまで通じてなかった所に新しく道を作る。例 この村にバスの通れる道を付けるには数年かかる。

(2) 未開拓の領域に入っていくための手がかりを作る。例 彼はこの分野で初めて後進に道を付けた人だ。

目を付ける[～に]：人や物事の様子をよく観察する。例 彼は初めから優子に目を付けていた。

もったいを付ける：わざと重々しく見せる。

例 弘はいつももったいを付けて話す癖がある。

文句を付ける[～に]：苦情を言う。例 私は駅員に文句をつけた。

[類語]付着させる、くっつける、尾行する

着ける

[意味文型]

(1) 衣服・装身具などを装う。

文型 人が／は 衣服・装身具を 生き物・身体（部分）に着ける

例 機長は制服を身に付けた・バッジを襟につける・猫が首に鈴をつけている・犬に首輪を着ける・（剣道の）面を着ける

(2) 乗り物のある場所に止めて、降りられるようにする。

文型 人が／は 乗り物を 所に 着ける

例 運転手は車を駅の正面に着けた・船頭は舟を岸に着けた

(3) ある場所を占めさせる。

文型 人が／は 人を位置に着ける

例 先生は生徒たちを席に着けた・父は子供たちを食卓に着けた。

(4) 手・足・頭などのある場所に触れさせる。

文型 人が／は 身体部分を 所につける

例 私はプールの底に足をつけて立った。

[文法情報]省略

[語形]省略

[慣用句]

先鞭を点ける[～の]：人よりも先に物事に着手する。例 彼がこの研究の先鞭をつけた。

[類語]まとう、装う、着る、到着させる、届かせる、座らせる

点ける

[意味文型]

(1) 火を燃やし始める。

文型 A 人が・は 火・燃焼物をつける

例 弘が火をつけた・マッチ（ライター）をつける

文型 B 人が・は 物・所に （燃焼物で）火をつける

例 弘はタバコに火をつけた・ろうそく（ガス／たきぎ／新聞紙）にマッチで火をつける・
学校に火をつける

用法 1 文型 B の「～に」と「～を」を入れ換えると不自然になる。

用法 2 ろうそく・ガスなど、本来燃えることに役に立つ物の場合は「ろうそくをつける」
のように言う場合がある。

(2) 電気器具・点火器具・燃焼器具のスイッチを入れて働かせる。

文型 A 人が・は 機器をつける

例 順子は電気をつけた・クーラー（テレビ／ストーブ／こたつ）をつける・明かり（懐
中電灯）をつける

文型 B 人が・は 所に 明かりをつける

例 恵子は部屋に明かり（電灯／ろうそく）をつけた

用法 文型 B の「～に」と「～を」を入れ換えると不自然になる。

【文法情報】 省略

【語形】 省略

【類語】 点火する、燃やす、ともす

注：『日本語基本動詞用法事典』は他の国語辞典とは異なり、言葉をすべて収録しているわけ
ではない。動詞でさえ、その一部だけ取り扱っている。この辞典においては、「つける」に関して、
3 つに分けて記述しているが、それは「つける」のすべての用法である証拠にはなれないことに
心がけて検討していくべきである。

『明鏡国語辞典』第二版

つける【付ける（附ける）】（動下一）

一（他）

- ① ぴたりとくっつけて離れない状態にする。付着させる。[意図的な行為にもそうでないもの
にもいう]「贈答品にのしを～」「服にボタンを～」「薬を～」「シャツに口紅をつけてしまう」
「改革に手を～」

表記 着色・付着・着手・装着などの意では「着ける」とも書くが、「付ける」が一般的。

- ② 付着した状態であるものを生じさせる。「クリの木が実を～」
- ③ 追ったり押したり焼いたりしてしるしができるようにする。印す。[意図的な行為にもそうで
ないものにもいう]「家具に傷を～」「蛍光ペンでしるしを～」「ノブに指紋を～」
- ④ 主となるものに添え加える。特に、付加的に設置する。「商品におまけを～」「基本給に営
業手当を～」「玄関にインターホンに～」「据え～」「飾り～」

- ⑤ (本体に付加する形で) そのものや状態・性質・能力などを新たに生じさせる。また、増強させた状態で生じさせる。「巻末に索引を～」 「スカートにひだを～」 「条件を～」 「踊りに振りを～」 「スタミナ[格好・勢い]を～」
語法 ～ヲに<結果>をとる。
- ⑥ 反論や苦情を添え加えることによって、物事の順調な流れをさまたげるような状況を作り出す。「演技にけちを～」 「注文を～」
- ⑦ 「自動詞のように使って」 みずからをその位置においてしがたい続く。「好位置に～」
- ⑧ ある立場に心を寄せさせて味方させる。与させる。「味方に～」
- ⑨ そばにいさせて護衛や監視に当たらせたり世話をさせたりする。付き添わせる。「会長に護衛を～」 「通訳を～」
- ⑩ 行動を探ることを目的として、相手のあとを追う。尾行する。「容疑者を～」
表記「追ける」「(尾行)る」「尾ける」などとも当てるが、かな書きが多い。
- ⑪ 植物が土に根を下ろす。「挿し木が根を～」
- ⑫ 燃焼現象が起こるようにする。また、灯火をともしたりテレビなどの電源を入れたりする。
「たばこに火を～」 「電気を～」 「テレビ(ラジオ)を～」
表記 灯火をともし意では「点ける」とも書く。
- ⑬ <「…に目を～」の形で>…に特別の注意や関心を向ける。着目する。「優良株にいち早く目を～」 表記 かな書きが一般的。漢字で書く場合は、「着ける」とも書くが、「付ける」が一般的。
- ⑭ <「…に気を～」の形で>…に注意を払う。配慮する。「健康に気を～」
- ⑮ 名前や値段などをそれと定める。また、株価などが自然にそれと定まる。「孫に名前を～」
「商品に値段を～」 「鉄鋼株が高値を～」
- ⑯ 意志を固める。「決心を～」
- ⑰ 割り増しなどの特別料金を課する。「プレミアムを～」
- ⑱ ある状態に落ち着かせる。解決させる。決着させる。「決着(けじめ・けり)を～」 「才能に見切りを～」
- ⑲ 関係づけてつながりを生じさせる。「両者に因果関係を～けて説明する」「向こう岸と連絡を～」
- ⑳ あいまいな事柄に推察を加えてそれと定める。「見当を～」 「犯人は彼だと目星を～」
- ㉑ 他と区別して評価をそれと定める。「優劣[点]を～」
- ㉒ ある物事を成立させる。また、理屈による説明などを成立させる。「都合を付けて出席する」「折り合いを～」 「理屈はいかようにも～ことができる」
- ㉓ ノートなどに書き記す。また、そのようにして日記などの記録文書を作り出す。「会議の日時を手帳に～」 「日記を～」
- ㉔ <「…につけ(て)の形で>…に関連して。…に伴って。…に応じて。「何かにつけて文句を言う」「思い出すにつけても無念やるかたない。 表記「就ける」とも書くが、かな書きが

一般的。

二 <動詞の連用形に付いて複合動詞を作る>

- ① それをすることが習慣になっている。いつも…する。…しなれる。「行きつけている店」「し
つけないことをすると疲れる」
- ② 動作・作用が相手に確実に及ぶ意を表わす。しっかりと…する。また、激しく及ぶ意を表す。
強い勢いで…する。「お金を貸しつける」「挑戦状を送りつける」「真っ先に駆けつける」
「どなり～・にらみ～」 「照り～太陽」

表記 二はかな書きが多い。一については、「付く」を参照。

三 (自) [「付く」の可能形]付くことができる。「急進派にはつけない」

■「着ける」「就ける」と同語源。

つける[点ける] (他下一)

同「付ける」⑫ 「電灯を～」

つける[就ける]

一 (他下一)

- ① ある場所に位置させる。「子らを床に～」 「屈強の若者を守りに～」
表記 「着ける」とも
 - ② ある地位や仕事などに据える。特に、即位させる。「部下を要職に～」 「嫡男を皇位に即け
る」表記 即位させる意では、「即ける」とも。
 - ③ つき従って教えを受けるようにさせる。「有名コーチにつけて選手を鍛える」「子供を家庭
教師につけて勉強させる
 - ④ <「…につけ(て)」の形で>同「付ける」24、
- 二 (自下一)「就く」の可能形、就くことができる。「希望の職に～」

つける[着ける]

一 (他下一)

- ① 衣服などを着る。また、装身具などを身に帯びる。着用する。「衣服を身に～」 「袴(首飾
り)を～」
- ② 乗り物のある場所に寄せて止める。「船を棧橋に～」表記「付ける」とも。
- ③ 同「就ける」①、「席(持ち場)に～」

二 (自下一)「着く」の可能形

到着することができる。

『三省堂国語辞典』第六版

つける〔（付ける）・（附ける）〕（他下一）

- ① ぴたりとあわせる。「壁に耳を～・のりで～」
- ② 表面にくわえ・る（て、はなれなくする）ごはんつぶを～・おしろいを～・色を～・しみを～」
- ③ くわえる。「元気を～・条件を～」
- ④ あとを残す。「きずを～」
- ⑤ したがわせる。仲間にする。「味方に～」
- ⑥ 書く。「帳面に～」
- ⑦ つくる。「名を～・道を～」
- ⑧ あとを追う。追跡する。
- ⑨ 値段を言って決める。相場の値が決まる。「値を～・円相場が一ドル百二十円を～」
- ⑩ 巢などにこもらせる。
- ⑪ 注意を向ける。「気を～」
- ⑫ 火を、移（して、もや）す。「紙に火を～・タバコを（一服）～」
- ⑬ おえる。決める。「方を～・思案を～」
- ⑭ そばにつきそわせる。「家庭教師を～」
- ⑮ 酒をあたためる。また、酒をあたためて出す。「お燗を～・一本～」
- ⑯ [連歌・連句などで]あとをよみ続ける。
- ⑰ [動詞の後について]①いつも…する。なれる。「読みつけている」②強い勢いで…する。「しかり～・なぐり～」

表記⑰は、ふつう仮名書きにする。

つける〔（点ける）〕（他下一）

- ① あかりをともし。「電灯を～」
- ② 電気器具のスイッチを入れる。「ラジオを～・テレビを～」

つける〔着ける〕

- 一（他下一）①[ある場所に]行きつかせる。「船を岸に～」②身にまとう。着る。はく。「はかまを～・お面を～」③[ある場所に]身を置かせる。「子供を席に～」
- 二（自下一）①[ある場所に]身を置く。位置する。「四位に～」②着くことができる。

つける〔（即ける）〕（他下一）

帝位につかせる。「位に～」

つける〔就ける〕（他下一）①仕事に身を置かせる。「役に～」②その人のもとで、学ばせる。「い

い先生に～」

注：三省堂ではこの5つの語を同音異義語扱いされている。この5語は読みが同じで書き分けに注意する語であるという。

『新明解国語辞典』第七版

つける ①②[付ける] (他下一)

- ① <なに・どこになにヲ～>何かを他から移してきたり生じさせたりして、そこに存在させる。
「胸にブローチを～／レンズにフィルターを～／手袋を～／屋根の上に覆いを～／元気(力)を～薬／作法(早起きの習慣)を身に～／ウメが花(実)を～／家計簿を～」
 - ② <だれにだれを～>その人を助ける役割を担うものとして身近に置く。「病人に付き添いを～／被告人に国選弁護人を～／部下を付けて海外に出張させる」
 - ③ <なにになにヲ～>そのものの一部としてそこに加える。「住宅手当(予算)を～／巻末に索引を～」
 - ④ <(なにデなに・だれに) なにヲ～>必要な操作をすることによって、意図した通りの状態にする。「マッチでストーブに火を～／電気(ガス・クーラー・テレビ)を～／電話で彼に連絡を～」
 - ⑤ <なに・だれになにヲ～>数値や名称などとの間に対応関係が認められる状態にする。「値段(成績)を～／生まれた子供に名前を～」
 - ⑥ <なににだれヲ～>責任のある地位や立場に、ふさわしい人を置く。「新人女優を主役に～／民間人を大臣の座に～／三着に付けてゴールインする」
 - ⑦ <なに・だれヲ～>見失わないようにあとを追う。「あとを付けたが、うまくまかれた／犯人を～」
 - ⑧ [連歌・俳諧で]前の句に不即不離の関係を持つ句を詠う。
表記①の「手袋をつける」は「着ける」とも書く。④の一部は「点ける」とも書く。⑥は、「地位につける」は「就ける」、「王位につける」は「即ける」とも書く。
- ②[①②③は「動詞連用形+～」の形で、接尾語的に]①いつもしていて、それに慣れる。「やりつけない仕事／見せられつけている」②強い勢いでそれをする。「しかり～」③感覚器官でとらえて、それを探り出す。「聞き～／見～／嗅ぎ～」
- ③ を与える。「意義～／位置～／秩序～／特徴～」

『大辞林』第三版

つける [付ける]

(動カ下一) [文] カ下二 つ・く

- ① 接触・接合・付着させる。
- ① 二つの物が触れたまま離れないようにする。接合する。くっつける。「二本のコードをはん

だでー・ける」 「折れた骨をもと通りにー・ける」

② ある物と他の物を接近させていって、表面がぴたりと触れるようにする。 「顔を窓ガラスにー・けてのぞきこむ」

③ ある物に異質な物を付着・浸透させる。 「顔に墨をー・ける」 「傷口に薬をー・ける」 「シャツにしみをー・ける」

④ ある物に、付随的な物を添える。

㍀ (多く「着ける」と書く) 着物や装身具をからだの一部に装う。 「下着をー・ける」 「はかまをー・ける」

㍁ 付属品をとりつける。 「ドアに鍵をー・ける」

㍂ (「附ける」とも書く) ある物を付随させる。 「条件をー・ける」 「利息をー・ける」

㍃ 草木に花や実が生じる。 「ツバキが赤い花をー・ける」 「梅が実をー・ける」

⑤ あとを残す。

㍄ 力を加えたりしてあとを残す。 「テーブルに傷をー・ける」 「紙に折り目をー・ける」

㍅ 印 (しるし) を記す。 「該当する項目に○をー・ける」

㍆ 帳簿などに記入する。 「家計簿をー・ける」 「日記をー・ける」

⑥ 栄養・体力・知識などを備えさせる。 「実力をー・ける」 「教養を身にー・ける」 「手に職をー・ける」 「変な癖をー・けないように」 「[身にー・ける]は「着ける」とも書く」

⑦ 連歌・俳諧で、前の句に後の句を、うまくつながるように続ける。

㉑ そばに寄せる。

① 人をそばに置く。

㍇ つき添わせる。 「要人に護衛をー・ける」

㍈ あとに寄り添う。 「先頭にぴたりとー・けている」

㍉ 対立するものの一方にある人を組み入れる。 「近隣諸国を味方にー・ける」

② ある物を近くに寄せる。

㍊ (多く「着ける」と書く) 乗り物を移動させて、ある場所に横付けにする。 「車を正面玄関にー・ける」 「船を岸壁にー・ける」

㍋ 他に対して苦情を寄せる。 「納入された品にクレームをー・ける」 「文句をー・ける」

㉒ (「跟ける」とも書く) 他の人のあとをこっそり追う。 「捜査員が容疑者をー・けていく」 「だれかにー・けられている」

㍌ あるものを加え、新しい状態にする。

① 新たに設ける。設置する。 「防犯カメラをー・ける」 「道をー・ける」

② (「点ける」とも書く) ある現象・活動などがあらわれるようにする。

㍍ 点火する。 「火をー・ける」 「ストーブをー・ける」

㍎ あかりをともし。また、電気などで動く器具を働かせる。 「ランプをー・ける」 「あかりをー・ける」 「テレビをー・ける」

③ ある物に名称・評点などを与える。

- ㊦命名する。「生まれた子に名を一・ける」
- ①予算を割りあてる。「予算を一・ける」
- ㊧評点・値段を与える。「合格点を一・ける」「せり市で一千万の値を一・ける」
- ⑤説明を加える。「もっともらしい理由を一・けて会社を休む」
- ⑥実現・決着の望まれていたことを実現・決着させる。「問題に決着を一・ける」「円満に話を一・ける」「渡りを一・ける」「けりを一・ける」
- ⑦区分をはっきりさせる。差が出るようにする。「けじめを一・ける」「一馬身の差を一・ける」
- ⑧判断・予想を行う。「見当を一・ける」「完成の目処を一・ける」
- ⑨感覚・意識を働かせる。
- ①（「…に気をつける」の形で）注意力・警戒心をそこに注ぐ。「車に気を一・ける」
- ②（「…に目をつける」の形で）関心を寄せる。特別な注意を向ける。「それまで捨てられていたカンのからに目を一・けた」
- ⑩「…につけ（て）」の形で用いる。
- ①（「…につけ、…につけ」の形で）それぞれの状況において、の意を表す。「暑いに一・け、寒いに一・け、苦労は絶えない」
- ②（「…につけ」「…につけて（も）」の形で）それに伴って、関連して、の意を表す。「それに一・けても思い出されるのは…」「何かに一・けていやみを言う」
- ⑪関係をもたせる。
- ① ことづける。託す。「京に、その人の御もとにとて文書きて一・く／伊勢 9」
- ② それをきっかけとする。かこつける。「心に思ふことを見る物、聞く物に一・けて言ひいだせるなり／古今 仮名序」
- ⑫動詞の連用形に付ける。
- ① その動作の激しいことを表す。「どなり一・ける」「にらみ一・ける」「しかり一・ける」
- ② その動作に慣れていることを表す。「やり一・けない仕事」「この子はしかられ一・けている」「〔付く〕に対する他動詞」

つける〔就ける〕

（動カ下一）〔文〕カ下二 つ・く

〔「付ける」と同源〕

- ①人をある地位に置く。
- ㊦（「即ける」とも書く）国王の位に置く。即位させる。「王位に一・ける」
- ①人をある役職に置く。就任させる。「社長のポストに一・ける」
- ②ある人から教えを受けるためにその弟子とさせる。「一流のピアノの先生に一・ける」

『大辞泉』増補・新装版

つ・ける【付ける／▽附ける／着ける／▽点ける】

〔動カ下一〕〔文〕つ・く〔カ下二〕

1 あるものが他のものから離れない状態にする。

㊦表面に密着させる。くっつける。付着させる。「おしろいをー・ける」「マニキュアをー・ける」
「扉に金具をー・ける」

㊧主となるものに他のものを加える。何かに添えたり、付属させたりする。「利息をー・ける」「振り仮名をー・ける」「部屋にクーラーをー・ける」

㊨あとを残す。あとに残るように書きとめる。しるす。印する。「しみをー・ける」「日記をー・ける」

㊩ある性質・能力などがそなわるようにする。「悪知恵をー・ける」「技術を身にー・ける」

㊪ある物事・状態・作用などを新たに生じさせたり、増し加えたりする。「雪をかいて道をー・ける」「丸みをー・ける」

2 (着ける)

㊫からだにまとわせたり、帯びたりする。衣服などを着る。着用する。「はかまをー・ける」「犬に首輪をー・ける」

㊬乗り物がある場所に寄せ止める。「船を岸にー・ける」「車寄せにー・ける」

㊭からだのある部分を何かに届かせる。近寄せて触れさせる。「頭を地にー・ける」「頬と頬をー・ける」

㊮ある場所に位置させる。命じて一定の所にいさせる。「走者をスタートラインにー・ける」

3

㊯あとに続き従わせる。「好位置にー・けている」

㊰ある立場に心を寄せさせて従わせる。「味方にー・ける」

㊱人をそばに置く。そばにいさせて世話をさせる。「ボディガードをー・ける」「付き添いをー・ける」

㊲あとを追う。尾行する。「少し離れてー・けて行く」

4 ある働きを発動させる。活動を開始させる。

㊳働きを盛んにする。「食欲をー・ける」「元気をー・ける」

㊴(点ける)燃えるようにする。また、あかりをともし。スイッチなどを入れて器具を作動させる。「枯れ草に火をー・ける」「電灯をー・ける」

㊵五感でとらえる。感覚器官を働かせる。注意を向ける。「気をー・ける」「目をー・ける」

5 ある定まった状態をつくり出す。

㊶解決させる。落着させる。まとめる。「話をー・ける」「けりをー・ける」

㊷ある名前や値段にする。「題名をー・ける」「時価で値をー・ける」

㊸意志を固める。「決心をー・ける」「死ぬ覚悟をー・ける」

6 連歌・俳諧で、前の句にうまくつながらせて、あとに句をつづける。

7 器に盛ったり爛(かん)をしたりして、飲食物を用意する。「御飯を一・ける」「一本一・けてくれ」

8 (「...につけ」「...につけて」の形で) ...に関連して。...に伴って。...の場合も。「何事に一・け相談してください」「よきに一・け悪しきに一・け」「暑さ寒さに一・けて故郷を思う」

9 (動詞の連用形に付いて)

㊦それをすることが習慣になっている、しなれている意を表す。「履(は)き一・けている靴」「行き一・けない場所」

㊧相手に対してなされる行為の勢いが激しい意を表す。「たたき一・ける」「しかり一・ける」

㊨その行為が、ある対象に向けられる意を表す。「言い一・ける」

㊩到着する、または来させる意を表す。「駆け一・ける」「呼び一・ける」

㊪しっかりととどめる意を表す。「心に刻み一・ける」

㊫鼻や目で感じとって、何かを探り当てる意を表す。「嗅(か)ぎ一・ける」